
ぎすきすサバイバルゲーム

キョウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぎすきすサバイバルゲーム

【Nコード】

N0769H

【作者名】

キヨウジ

【あらすじ】

謎の組織に誘拐され監禁された西園エリカは、サバイバルテストに強制参加させられる。その舞台となる廃城は、上位テスト生間で生還率ゼロパーセントと噂されているらしい。そこで彼女は黒澤恭司という上位テスト生と出会い、自分の兄が『拳銃男』という蔑称でテスト生から忌み嫌われていたことを知る。

序章 檻の中の少女（前書き）

本作は、『ぬるゆるサバイバルゲーム』の続編です。

この物語単体でも成立しているとは思いますが、前作を読んでいた
だけると、より楽しむことができますと思います。

本編を楽しんでいただければ幸いです。

それでは、また。

序章 檻の中の少女

目を覚ますと、そこは酷く狭い個室の中だった。

左右上下が味気ないコンクリート。背後も灰色の壁。そして、目の前には、動物園で見えるような鉄格子。

どう見ても私の部屋じゃない……。

私、寝ぼけてるのかな……。そう思っただけ目を擦り、頭を振って眠気を振り払う。

なぜこんなに頭がクラクラするのだろう。

まるで脳味噌が船酔いしてるみたいだ。

意識を集中しようとしても頭の中心で炭酸飲料がしゅわーっと泡立つみたいに拡散してしまう。

もしかすると、昨日の夜、お父さんに無理やりお酒を飲まされた？

だから、酔っ払ってる？

これが二日酔いってやつ？

そんな馬鹿なことを考えつつ、昨夜の記憶を呼び起こす。

「……………」

確か……。昨日は、放課後、友達のを誘いを断ってさっさと家に帰り、ざっとシャワーを浴びた後、両親と一緒に神社へ行って、お兄ちゃんが無事に帰ってきましたようにとお祈りをしてから……。お祈りをしてから……。その後、どうしたんだっけ？

記憶が定かじゃない。

黒いスーツを着てサングラスを掛けた男の人が何人も出てきて……

……私たちを取り囲んで……。そして……。どうした？

漫画とかで出てきそうな感じの悪者の手下だなあ、とか思った記憶がある。

そいつらがお父さんと何か話をして……。

お母さんが急に悲鳴を上げて泣き出して……。

誰かが私の手を引っ張って……。

お父さんが何か叫びながら神社の森の中へ駆け込んでいったような、いかなかったような……。

なんだか記憶がおぼろげで、よく思い出せない。

あれは全部夢だったのだろうか？

そして、今も私は夢を見続けているのだろうか？

わからない。

頭がぼーっとして意識がはっきりしない。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

頭の奥に直接響いてくるような重い鐘の音が遠くの方で鳴った。

咄嗟に耳を塞いで、脳味噌への攻撃を遮断する。あと三秒長く聞いているなら、気絶していたかもしれない。それくらいの重低音。

これ、何の合図？

時間を知らせる鐘の音だろうか？

お昼ご飯の時間を知らせる鐘の音だったらいいなあ、とか思う空きっ腹の私。

こらこら、何考えてるんだ、私は！

今はそんな状況じゃない。

私は体の上に掛けられていた毛布を払いのけて、鉄格子の前まで行こうとした。

そこで初めて自分の格好を知り、愕然とした。

何も身に着けてなかったのだ。

「ちょ……何、これ！？」

思わず声に出してしまう。それくらいの衝撃。

私は、パジャマを着ずに寝たことなんかないし、裸で寝るなど言語道断だ。まして、見ず知らずの場所でなどあり得ない。

どう考えてもおかしい。

つまり……これって……私、誘拐されて監禁されちゃってる？

はい、完全に監禁されちゃってますね。

乙女的にピンチな感じ？

いえ、完璧にアウトです。誘拐されて監禁されて裸に剥かれちゃってるんだから、もう凌辱確定です。

こらこら、自ら断定してどうするー！

……という悲しき一人ボケー人突っ込み。

「はあっ……」

諦めに近い溜め息を吐きつつも、自分の状態を省みて小さく苦笑する。

私、この状況でも結構落ち着いちゃってるよ。

きつと現実感がゼロなので、冷静さを保っていられるんだろう。

普通なら、泣き喚いて助けを求めるか、鉄格子をこじ開けようと無駄な体力を使っているところだ。

とにかく全裸は不安なので、毛布を拾って体を包んで隠し、鉄格子の前まで行つて檻の外の様子を窺った。

牢屋の外は薄暗い廊下がズーッと続いている。照明の暗さも影響しているのだろうけど、左右どちらの廊下も突き当りが見えないくらい長い。そして、廊下を含むこの空間全体が水を打ったように静まり返っていた。

「誰かいますかー？」

悪者に聞かれたら何をされるかわからないので、遠慮がちに呼びかけてみる。

「……………」

返事はなかった。

もう一度、今度は少し声を張って呼びかけてみる。

「誰かー！ いませんかー？」

すると、少し離れたところから返事がした。

「しっ！ 静かに！」

それは囁くような小声だったけど、空耳なんかじゃなくて、ちゃんとした人間の声だった。

しかも、それはたぶん、私を誘拐した悪者のものじゃない。

「あの、ここ、どこですか？　なんで私、誘拐されちゃったんですか？」

同じように声のボリウムを落として訊く。
しかし、どれだけ待っても返事はなかった。

自分以外にも監禁されている人がいると判明した上での沈黙、それが生み出す静寂と苦痛。

じわじわと私の心を苛んでいく。

「誰か……返事して下さい！」

重い空気に我慢できず、押し潰されそうな心を開放するつもりで私は大声を発した。

すると今度は、遠くの方から返事が来た。

「はいはい、今行くよ」

そして、コツコツという足音が近づいてきて、真っ白い衣服を着た男の人が姿を現した。

年齢は五十代半ばだろうか。肩まである長髪には白い物が混じり、顔にはシワが目立っている。銀縁の眼鏡を掛けていて、それなりに整った顔立ちをしているが、その口元を飾るゆるんだ笑みが好印象を逆転させる効果を担っていた。

「ようやく目覚めたようだね」

放たれた声も、体に貼りついてくるような響きであり、私を不愉快にすると共に酷く不安にさせた。

「なんで私をこんなところに閉じ込めるんですか！　ここから出して下さい！」

恐怖と不安を絶望に変えず、怒りに変換して相手を怒鳴りつけてやった。

「ほうほう、目覚めたと思ったら、元気に噛みついてくるのかい。気丈なお嬢ちゃんだねえ」

嘲笑うように言う男。

一瞬でも怯んだら負けだと思い、私は心にムチ打って自分を奮い立たせる。

「貴方は何者ですか！　なんで私を誘拐したんですか！」

「私かい？　私は遠藤という者だよ。コードネームはDβ0000 P1。プロフェッサーの称号を持っているんだ。とは言っても、おまえさんにはチンプンカンプンかな？　まあ、要するに、私は遠藤だよ。遠藤教授だ。そう呼べばいい」

そう言ってニコニコ笑うが、その表情の中に優しさは皆無だった。っていうか、コードネームとか称号とか言ってる時点で普通じゃない。

この人、頭が壊れちゃってる？　何か変な妄想に取り憑かれてて、私を誘拐監禁した？

「おやおや、私を狂人と勘違いしているようだね」

私の心を読んだかのような言葉。

遠藤教授は、くくくつと喉を鳴らすようにして笑った。

「なぜおまえさんを誘拐したか、知りたいのかい？」

「……私には知る権利があると思います」

どうやら相手は最低限の理性だけはある人間のようなのだ。少なくとも、野獣のように襲いかかってくるタイプじゃない。

そう判断した私は、絶望一步手前の心を踏み止まらせ、意識して強がって見せて相手を睨みつけた。

「そうだねえ。おまえさんの『飼育係』である私には、おまえさんが置かれている現状を説明する義務があり、おまえさんはそれを要求する権利を持っているね」

「飼育係って何ですか！　私におかしなこと、しようってんですか？！」

「おかしいこと？　くくくつ……面白い表現だねえ。しかし、私に幼女嗜好はないよ。その点だけは安心してくれていい」

犯罪者の保証に何の意味があるのだろう。

それに、下着を含む衣服を奪っておいて言っているセリフじゃないと思う。

「じゃあ、なんで裸にしたんですか！」

「身体検査の為だよ。あとは、おまえさんに最低ランクの『テスト生』であることを認識させる為でもあるんだよ」

「身体検査って……やっぱり変態だったんですね！」

「はいはい、私は変態だ。それで構わないよ。だから、そんなに吠えなさんな。少し冷静になって、今自分が置かれている状況と、私の言葉を理解するよう努めなさい。そうしないと、悲惨だよ。来週の頭には『サバイバルテスト』に参加させられるんだからね」

「サバイバルテスト？」

禍々しい響きである。

不吉を告げる悪魔の翼が私の頭上でバサバサと羽ばたいたような気がした。

遠藤教授はニヤニヤといやらしく笑う。

「言葉通りの意味だよ。要は、生き抜く能力の試験さ。おまえさんは、テスト生として、最悪のサバイバルゲームに参加させられるんだよ。そして、同じ境遇にあるテスト生と、殺し合い、奪い合い、騙し合い、競い合うのさ。ぞっとしないだろう？」

「そんなの絶対に嫌ですよ！」

現役の女子中学生を裸に剥いた拳句、そんな危険な目に遭わせようなんて正気の沙汰じゃない。

狂ってる。

っていうか、なんで私がそんな目に遭わなきゃなんないの？

「可哀想だが、おまえさんの意思は意味をなさない。せめて今のうちに、思う存分、生きている喜びを満喫しておくんだね。こんな牢獄の中だけど、あの地獄よりは何千倍もマシだろうからさ」

遠藤教授は私の反応を見て面白がっているようだ。

口ほどに憐みの情はない。

「……………」

「おまえさんは、あのレディ」の推薦で選定された特例だ。期待させてもらうよ、K3001号さん」

「私は西園エリカです！ Kなんとか号なんかじゃありません！」

「ほうほうほう、なんとも威勢の良いお嬢ちゃんだ。そのエネルギー、今のうちに蓄えておくことだよ」

嘲笑う遠藤教授。

私は無言で彼を睨みつけた。

第一章 生還率ゼロのフィールド【1・西園エリカ】

ゆっくりとしたスピードで螺旋を滑り降りると、夢の泡が弾けて現実という名の地獄に浸された。

「……………」

どうやら、夕食に混ぜられていた睡眠薬の効果が切れたようだ。

私はうつ伏せ状態から寝返りをうつて、しょぼしょぼする目を擦り、脳味噌が目覚めるのを待ってから、大の字になって天井を見上げた。

ああ……とうとうサバイバルテストが始まっちゃったんだ……。そう内心で呟き、吐息を零す。

このまま瞼を閉ざして現実逃避をしたい。

永遠に夢を見続けていたい。

でも、目覚めてしまった以上、起きないわけにはいかないだろう。遠藤教授曰く、『有能な犯罪者を育成する為の最も効率的な方法』が、このサバイバルテストなのだそう。ここは凶悪犯罪者の苗床。そんな所で暢気に眠ってたら、百パーセント確実に殺されてしまう。たとえ殺されなくとも、相手が男だった場合は、犯される可能性が百二十パーセント超えた。

目を覚ましたら、即、生還に向かって行動するべきだ。という遠藤教授の助言を思い起こしながら、私は右手でお腹をさすった。今が何時かはわからないが、空腹具合から察するに、何十時間も眠っていたわけではなさそう。

とにかく、まずは着る物と身を守る武器を探す必要があるだろう。テスト生同士の遭遇が回避不可能であれば、大切なのは相手を挑発しないことだ。怒らせず、苛立たせず、興奮させない。その為には、乙女の肌を覆う服が必要不可欠である。

武器は強力なのが欲しいけど……簡単に持ち歩いてしかもコンパクトなのがいいなあ。できれば手の平サイズ。スタンガンなんか

落ちてると最高ですねー。という寝言まがいの独り言を心の中で呟きつつ、私はベッドに肘をついて上半身を起こした。

睡眠薬の副作用なのか、粘質の高い泥がべっとりと体に纏わりついていてようで、起きるのが億劫だ。

天井に向けて両手を伸ばし、うーんと背伸びをして大欠伸。

冷たい水を一杯飲みたいなあ……、という思いを胸にベッドを降りようとして――

「おはよう、お嬢さん」

突然、部屋の隅から声を掛けられた。

「！」

完全に無防備を晒していたので、飛び上がりそうになるくらい驚いた。危うく心停止で御臨終するところだ。危ない危ない。開始早々にリタイアなんて泣くに泣けない。

私は、驚かせて下さった相手を、きゅつと睨みつけた。

部屋の隅には何も入っていない本棚があり、そこに背の高い男がもたれかかって、こっちを見ていた。

その男は二十歳前後だろう。無造作に纏め上げられている栗色の髪。鋭く切れあがった目。引き締まった唇。すらつとした体から伸びる長い手足。どこの学校の物か知れない真っ白い学生服に身を包み、右腕の服の袖を肘の辺りで結んでいる。

文句なしの美男子だ。

しかし、ここにいる以上、犯罪者予備軍であることは確実なので、私は怒声を放った。

「何すんですか！ いきなり声を掛けるなんて、反則ですよ！ ビツクリするでしょ！」

「……………」

白い学生服の男は、呆れ顔を作った。

どうやら罵声の選択を誤ったようだ。

全裸で眠っているのを見られていたわけだから、「きゃー」と可愛らしく悲鳴を上げるのが常識的なヒロインの行動だろう。

でも、やり直すのは無理っぽいので、このまま押し切る。

「何でここにいるんですか！　ここ、私の部屋でしょ！　なんで勝手に入ってきたんですか！」

口に出してから、このセリフもおかしいなあ、と気付く。

相手の男は呆れ顔を引き締め、能面のような無表情を作った。

「……お嬢さん、ここはおまえの私室ではない。勿論、俺の部屋でもない。俺が訪れた部屋で偶然、おまえが目覚めたというだけだ。苦情があるなら、生還後に、組織の人間に訴えてくれ」

想定していたものよりも三倍以上冷たい口調だった。

もしかして、怒らせちゃった？

一瞬、心が挫けそうになる。でも、弱さをみせたら何をされるかわかったもんじゃないので、虚勢を張る。

もうこうなったら逆に怒らせてやれ、と自爆覚悟で罵る。

「私のこと、じつと見てたでしょ！　エロエロ男爵！」

「変な蔑称で呼ぶのは止める。俺は、おまえのような貧弱な裸身を鑑賞する趣味などない。単に、おまえが起き出したから声を掛けただけだ。もし裸を見られて憤っているのであれば、目覚めの悪い自分自身を責めるべきだ」

男の無表情に刹那の苦笑が浮かんだ。そんな気がした。でも、今は澄まし顔を保っている。

この人、冷静さを売りにしてるから平静を装ってる？

無感情が格好良いと思ってる？

心の中は煮えくりかえってるけど、懸命に我慢してる？

だったら、私が襲われる心配はないのだけど……油断は禁物だ。

「私に変なことしたら、怒りますよ！」

「……俺はおまえに何もするつもりはないが、怒りたければ好きなだけ怒っていい。しかし、怒る前に、その貧弱な体を隠すことだな。見ているこっちが恥ずかしくなる」

彼は溜め息混じりに言うと、真っ白い上着を脱いで、私に放った。
「え？」

ちよつとビツクリした。

想定外の展開である。

遠藤教授の助言は、「男子テスト生は全員禁欲生活を強いられて女に飢えてるから、可愛い子だろうとそうでない子だろうと見境なく襲いかかるんだよ。例外はまずない」ってものだったけど……。それに当てはまらない例外もあるようだ。何にせよ、襲われないのであれば、それに越したことはない。

「あ、ありがとう」

私は目の前に落ちた服を拾い上げると、礼を述べて身に着けた。丈が長いだけにワンピースと言えなくもない。

ただ、下から覗かれたらアウトだ。

服を身に着けると少しだけ冷静になれた。

ちよこつとだけ錯乱してたかも、と反省し、酷い暴言を連発してしまったことを彼に謝罪する。心の中で。

私は服の裾を引っ張って、膝上三十センチ以上の際どいラインをカバーしつつ、彼に改めて声を掛けた。

「えつと……お兄さんて、ベテランのテスト生？」

「ベテランとは言えないが、それなりに経験を積んでいるつもりだ」

「その右腕、ないの？」

「ああ。何回か前のサバイバルテストで切断されたんだ」

「……………」

切断された、とか怖い事実をアツサリと告げられた。

今更ながらにサバイバルテストが何であるかを思い知る。

生還とか考える以前に、死なない努力を全力でしなきゃ駄目みたいだ。

その点に関しては、彼から何かしらの助言を聞き出せるかもしれない。

そう思ったのだけど……。

「えつと……切られた時、痛かった？」

何か言わなきゃと思つて搾り出した言葉が、これだった。

腕が切り落とされれば痛いに決まつて。「痛かった」という冷たい言葉が返されるだけだ。

もつと気の利いた会話を引き出せば、生き抜くコツなんかを聞き出せるかもしれないのに……。自分の未熟さ、不器用さ、お馬鹿さに腹が立ち、泣きたくなった。

彼の方が年上で先輩なんだから、もつと会話しやすい空気を作り出して欲しいものである。しかし彼は、逆に、全身を会話拒否のバリアで包んでいるのだからどうしようもない。取りつく島も斬り込む隙もない。気やすい会話など不可能だ。

そう落胆しかけた私に、彼は意外な返事をした。

「おまえは、どことなく俺の知り合いの女性を思い起こさせる」

「え、えーっと……それって……」

誘拐監禁される前に付き合つてた恋人さんのことだろうか？

それとも、このサバイバルテストで知り合つた女性テスト生のことだろうか？

何にせよ、悪い記憶を呼び起こしていいことを祈りたい。

男子テスト生のマイナス感情は、私の死に直結する危険性があるのだ。

「おまえの名は何だ？」

唐突に訊かれた。

「俺はV8739号の黒澤恭司だ。おまえは？ 全裸で目覚めたところから察するに、Kナンバーだな？」

「あ、はい。私は、西園エリカ。K3001号ですよ」

テスト生に名前を訊かれた場合、ナンバーまで告げるのが礼儀だと遠藤教授が言っていたので、私はその教えを守って名乗った。

すると、黒澤が驚きの表情を浮かべて、私の顔を覗き込んできた。

「西園？ 西園という苗字なのか？」

「え？ はい、西園ですよ。それがどうかしたんですか？」

息が匂つくくらいの間近から格好良い男の人に見つめられ、私は軽

く動揺した。

顔が熱くなっていくのを自覚。

そんな私を見据えつつ、彼は僅かに首を傾げた。

「西園か……少々記憶に引つ掛かる苗字だな」

「恋人さんの苗字と同じとか？」

「いや……」

「じゃあ、悪者の親玉の苗字とか？」

「……………」

黒澤は答えずに、苦々しい笑みを浮かべた。

黒澤恭司という名のテスト生は、苗字についてのやり取りを終えると、私という存在に対する興味を完全に失ってしまったようで、まるで室内の家具を値踏みするかのように部屋の中を調べ始めた。

その様子は真剣そのものであり、声を掛けて良い空気感はずゼロだ。でも、私はサバイバルテスト初心者 of 強みを発揮して、遠慮がちにはあつたけど、彼に声を掛けた。

「ねえ、恭司さん」

「何か用か？ 見ての通り俺は忙しい。質問は手短に済ませろ」

冷たい口調だけど、許可が貰えた。

無視されているわけじゃないとわかって嬉しくなった。

「サバイバルテストのこと、色々教えて下さい」

「……俺の言葉を聞いていなかったのか？」

「今忙しいなら、後でもいいですよ」

「……まだ脳が目覚めていないようだ。立ったまま寝言を言っているぞ。もう少し横になっていたらどうだ？」

彼はベッドの下を覗き込みながら言う。

酷い言い種だ。でも、負けずに押しまくる。

「恭司さんと一緒に行つていい？ 乙女を危険地帯に放置するのは死刑同然の犯罪行為、つていうコトワザもあることですし」

「……そんな諺はない」

「可愛いテスト生を救済すると無条件で生還できる、っていう噂を聞いたような聞かなかったような」

「……空耳だ」

「うー」

無視されているわけじゃないけど、会話は一方通行で、しかも返事がかんばしくない。

完全に拒絶されている。

黒澤は空の本棚をずらして、その裏側を調べつつ、横目でチラッと私を見た。

「知っていると思うが、サバイバルテストには時間制限があるのだ。無能者と行動を共にする余裕はない」

「じゃあ、この服、貰っていい？」

「……冗談は下着を穿いてから言え」

「エロエロ侯爵！」

「俺は陰険であつて、エロくはない。それだけはちゃんと認識しろ」この人、自分のことを陰険で認めちゃってるし……。

「私、勝手についていきますから！」

私は大きな声で宣言した。言つた者勝ちである。そして、彼をどれだけ怒らせても絶対に殴られない、という確信があつた。彼は女の子に手を上げるような人じゃない。

「迷惑だ」

黒澤の冷徹な返事。

でも、怯まず攻める。

「コバンザメみたぐびつたりと寄り添って歩いちゃいますから！」

「……………」

私と彼は無言で睨みあつた。

短い沈黙。

泣きそうになるくらいのプレッシャーが私の足を震わせる。でも、負けない。ここで引いたら、私はこのサバイバルテストを生き抜くことなどできないに違いない。この部屋を出た瞬間、死へのカウン

トダウンが始まってしまっただろう。初心者の中には彼のサポートが必要不可欠なのだ。

その思いを込めて相手を睨む。

そんな私を見て、黒澤はフツと鼻を鳴らした。

「……仕方がない。おまえが身に着ける物を発見するまで一緒に行動してやろう」

感情のない声だったけど、まるで恋人の囁く愛の言葉に聞こえた。ちなみに、中高一貫の女子校に通っていた私は、恋愛経験ゼロである。

「ありがとうございますっ！」

感謝の意を声の大きさに変えて抱きつく。

彼は僅かに目を細めた。

「ただし、俺の役に立ってもらっぞ」

「はい！ 頑張ります！ 何でもします！ エロエロなこと以外は！」

「では……まずは口を閉じている。それが今、おまえのできる最善の行いだ」

「はい！」

私が元氣一杯に返事をして口を両手で塞ぐと、彼は呆れとも諦めともつかない笑みを浮かべた。

【2・古城篇也】

ハーレムちつくな夢から覚めると、そこはゴミ溜めの中だった。

……という最悪の目覚めをプレゼントして下さったレディに、真心を込めた苦情と憤怒を想像上の携帯電話からメールしておいて、俺は身を起こした。そして、全身を綺麗に飾っている生ゴミやら残飯やら何やらかんやらを手で払い落しつつ、周囲を見回す。

正面には巨大な食器棚とその中に整然と並べられた食器類、ロッカーなどがある。

右手には流し台と調理台が並んでいて、その奥に巨大な冷蔵庫が鎮座している。

左手には頑丈そうなドアがあり、その傍にはインターフォンらしき受話器が備わっている。

背後は、壁だ。

ここは、どう見てもキッチン。ホテルか料理店の厨房だろう。

悲しいかな、俺は山積みになれたゴミ袋の上に寝かされていたのだ。

「くそっ！ あの女……俺をゴミ扱いしやがって……」

出会った直後から、俺って嫌われているんじゃないか、とは思っていたが、まさかここまでとは……。

あの女にとって俺というテスト生はゴミ同然だったのだろう。それを、こういう形で思い知らせてくれたわけだ。

嬉しくて涙も出ないぞ、ちくしょう！

せめてゴミ袋の口をしつかりと閉じとけ！

まあ、臭いゴミがクッションになって、寝心地は悪くなかったが……。

俺はゴミのベッドから起き上がると、流し台目がけて直進してシンクに乗り上がって入り、蛇口を全開にして全身を洗い清めた。肌

を傷めても構うもんかと食器用の洗剤を用いて、ごしごしとタワシで擦る。

銭湯にすら通えない貧乏人になったような気分させられて落ち込んだが、よくよく考えてみると、今の俺は経済的に不自由を強いられている奴らよりも悲惨な状況にあると言っている。

何をすればいいのかすら知らないのだ。

一寸先は闇、ではなく地獄。一週間後は、死が確定。「死にたくなければ、鐘の音を響かせなさい」とかレディは言ってたけど、どういう意味なのかわからない。

まあいいか。

どうせ俺みたいな駄目人間は生還できっこないのだ。他のテスト生になぶり殺しにされるのか、罠に掛かって即死するのか、飢え死にするのか、はたまた時間切れで抹殺されるのかは定かじゃないが、死ぬことはわかりきっている。

でも、臭いまま死ぬのはゴメンなので、全身を隈なく洗った。特に、股間を重点的に。

そうしておけば、女に出会った時、「臭い！」とか言われて萎えることもない。

俺は、自分なりの最善を尽くして全身に纏わりついた悪臭を流し落とすと、キッチン内を歩き回って身に着ける物がないかどうかを調べた。

だが、備え付けのロッカーの中はおろか、食器棚の中にも冷蔵庫の中にも目ばしい物は入っていなかった。

ここはキッチンなんだから、エプロンの一枚も落ちていて良さそうなものだ。

俺を辱める周到な罠なのか？

身に着けられそうな物は、どこにも見当たらない。

あるのは、食材と調理道具とゴミだけだ。

「こりゃ、服を着ている奴を襲って奪った方が早いな」

俺は、流し台横に置かれていたナイフフォルダーから『出刃包丁』を引き抜いて一人ごちた。

こいつを装備して奇声を発しながら襲いかかれば、服なんか何枚でもゲットできるだろう。要は、獲物の選別を的確に行うことである。最高の条件は、『俺と背格好の似通った、弱そうな外見のテスト生』だ。もし、それが女だったら、服だけじゃなくて体もいただけ。強姦は俺の嗜好にないが、ここはルールなしの地獄なので、襲って奪って犯して殺しても罪にはならない。むしろ優秀なテスト生として評価されるかもしれない。

「どうせ死ぬんなら、めちやくちや暴れ回ってやるか」

そう口に出して自分を焚きつける。

そこで、ふっと思いついた。「人類最後の日が来たら、見境なしに女を襲いまくって死に花を咲かせてやる」とか「不治の病に侵されたら、誰かれ構わず道ずれにして死んでやる」とか妄言していた馬鹿なクラスメイトのことを。俺は、あの力ス野郎と同類なんだないや、妄想を現実に行おうとしている時点で、あいつよりも数倍性質の悪い下司だ。最低人間だ。死んで当然のクズなんだ。

そう自分を貶めて、邪悪な意思を増幅させる。

そうしておけば、ことに及んだ時に幾らか罪悪感を軽減できるだろう。

俺は鬼畜と化してみつともない最期を遂げてみせる。不幸を分け合い、負の感情を産み育んで、このサバイバルテストを混沌とさせてやるのだ。

よし！ 服をゲットしたら、美少女テスト生を狩りまくって食いまくって、それ以外のテスト生を殺しまくって、最悪のテスト生として名を刻んでやるぞ！

意を決した俺は、全裸に出刃包丁という最低の性犯罪者ファッションでキッチンから出た。

キッチンの外は幅の広い廊下になっていて、左右に長く伸びてい

た。

右手の先には十字路があり、その手前にドアが向かい合っている。照明の質の悪さもあり、十字路の先に何があるかは見通せないが、人間の気配は皆無だ。

左手の先にはＴ字路の突き当たりになっていて、そこにある鉄格子のドアは開いた状態になっていた。こっちはテスト生の臭いがプンプンする。人影がチラついたり物音や話し声が聞こえてくるわけじゃないが、剥き出し状態の俺の肌にビビシと伝わってくる。俺を呼ぶ声が聞こえる気がする。

くくくつ、いい感じに壊れてきた俺。

まずは鉄格子のドアをくぐり抜けて、その先にいるであろうテスト生を脅しつけ、男なら衣服を奪って命も奪い、女なら体を貪って命も貪ってやろう。

俺は足音を立てないように左手の廊下を爪先立ちになって進み、Ｔ字路の一手手前で立ち止まった。

そして、息を殺して耳を澄ませる。

「……………」

気のせいだろうか？　Ｔ字路を左に曲がった先からコツコツという足音が聞こえたような気がしたのだが……。

俺にとってテスト生との突発的な遭遇は、すなわち死を意味する。相手が男であれ女であれ鉢合わせれば戦闘の経験値が高い方が勝つに決まっているのだ。襲われる側に立った俺など二秒で死体に変身してしまっただろう。それどころか、もし同じＫナンバーであっても、相手がひ弱な女であっても、互角に闘えない自信がある。咄嗟に凶器を振るって人を斬り殺す自分の姿が想像できない。むしろ、殺人を躊躇して逆に殺されてしまう自分の姿をありありと思い浮かべることが出来る。俺の右手に輝く凶器は、強襲用であって、迎撃用ではないのだ。

俺は聴覚と皮膚感覚に意識を集中して、周囲の様子を探った。

「……………」

足音は止んだが、人の気配は確かにある。

相手もこちらの様子を窺っているのだろう。

そうであるなら、向こうが俺を察知する前に、こちらから先制攻撃を仕掛けなければならぬ。

受け身になったら、俺の負けは必至だ。

せめて相手の位置がわかれば、対処のしようもあるのだが……。

俺は右手の凶器を握り直した。

ここは一か八か、思いきって廊下を飛び出し、奇声を発しつつ相手の姿を探して、発見次第がむしやに斬りつけてやろうか？ それとも追われるのを覚悟で逃げるか？ だが、どこへ逃げる？ 無暗に動き回るのは、更なるテスト生との遭遇を誘発する愚行じゃないのか？

そんな風に逡巡していると、何の前触れもなく、開いていた鉄格子のドアの部屋から人が出てきた。

「！」

鉄格子の部屋から出てきたのは、いかつい男子テスト生ではなく俺と同じ年くらいの女だった。しかもかなりの美少女だ。すらっとしていて色白でお嬢様っぽい顔立ち。長い髪の毛を側頭部で団子にしている。気の強そうな目つきはマイナスポイントだが、文句なしのストライクゾーン。タンクトップにスリムジーンズという格好も体の線を強調していて素晴らしい。

そんな女が目の前に突然現れたのだ、普通は神様に感謝して然るべきだろう。襲って犯して殺しても咎められないフィールドに立っている今の俺は、悪魔にこそ感謝するべきかもしれない。ただ、しかし、それは相手が素人テスト生であった場合である。

どう見ても彼女はKナンバーじゃない。

そして、最悪なのは、彼女が俺の真ん前に立っていることだった。彼女の視線は、当然のごとく俺の裸体に突き刺さる。股間へと注がれる。

「……………」

彼女は無言のまま全裸の俺を見て、軽く目を見開いた。
ちよつと驚いたのだろつ。

だが、それは刹那の変化。

すぐに表情を消し、すーっと左腕を肩の高さまで上げ、左手に持つ何かを俺に向けた。

「！」

彼女の手握られていたのは、銀色の小さな銃だった。

それが俺に真っ直ぐ向けられている。

俺は両手を上げて降伏を宣言するしかない。

だが、銃口は俺の上に固定されなかった。

彼女は左腕を水平に九十度右へと動かし、何の躊躇もせずに連続で発砲した。

パン、パンという二回の銃声が鳴り響く。

何を狙ったのかは考えるまでもなかった。

「……さすがソフィアさん。この至近距離からの銃撃を回避するなんて、やっぱり尊敬しちゃいます」

彼女は銃を構えたまま苦笑のような笑みを湛えて、向こう側にいるテスト生に声を掛けた。

返事はなかった。ただ、クスクスという笑い声が聞こえただけ。そして、コツコツという足音が物凄い速さで遠ざかって行く。

「初日からソフィアさんと遭遇しちゃうなんて、幸先悪いなあ……」
彼女は足音を追うように遠くを見つめながら、一人ごちた。

今がチャンスだ！

彼女の視線は俺に向けられていない。

彼女の意識も俺に向けられていない。

彼女の持つ銃の銃口は床へと向けられている。

これは最高にして最後の攻撃ターンだろう。今を逃せば、俺のターンは回ってこない。銃を向けられていない今しか、襲いかかる隙

はない。

俺は凶器を持つ手に力を込めて、大きく息を吸った。しゃにむに抱きついて銃を持つ手を押さえこんでしまえば、相手は非力な女である。そこからは、どう料理するも俺の自由だろう。すなわち、凌辱タイム開始である。

俺は、さり気なく彼女に近づいた。

全裸の俺を初心者と侮って注意を向けておかなかった、おまえが悪いんだぜ。

そう心の中で忠告した俺は、彼女に飛びかかって抱きつき、銃を持つ腕を両手を掴んだ。

よっしゃ！ 銃を押さえこんだぞ！ これで犯すも殺すも俺の思うがまま――

え？

勝利を確信した俺は、次の瞬間、宙に浮いていた。

そして、後頭部に衝撃が走り、激痛と共に意識がぐにやりと歪んだ。

「な？！」

何が起こったのか理解できず、ずきずきと痛む頭を抱えて、呆然とする俺。

どうやら柔道技をかけられたようだが……何の技だ？ 出足払い？ 軸足を払って浮いた俺の体を、体当たりの要領で壁にぶつけた？ でも、それ、柔道じゃねえだろ。反則だ。俺の攻撃ターンから、やり直してくれ。

そんな負け犬的な思考を働かせる俺の胸の中央に銃口が押しつけられた。

気付かぬ間に銃を左手から右手に持ち替えたらしい。

「死にたいの？」

「……いえ、死にたくありません」

冷たい口調で訊かれ、俺は即座に答えた。敬語を用いて。

相手は銃を何の躊躇いもなくパンパン撃つような女なのである。

ここで強がるのは、自殺行為に等しい愚行だ。敗者は大人しく勝者に従い、卑屈の表装で命乞いをし、反撃の機会を窺うべきであろう。「なら、その手を離しなさい。そんなにギュツと掴んだら痛いですよ」

「わ、わかったから、銃を撃たないでくれよ！」

俺が手を離すと、彼女は銃口を俺の胸から離し、今度は額に押し当てた。

「次、あたしを襲おうとしたら容赦なく殺すわよ。いいわね？」

「はいはい、わかりましたよ」

ふてくされ調子で返事をする。

彼女は口の端をほんの少しだけ微笑ませた。

俺に気を許したのではなく、蔑み侮ったのだろう。

しかし、それは良い変化だ。つけ込む隙が僅かながら生じたことを意味しているのだから。

「投げやりな返事ね」

「こんなふざけたゲームに参加させられりゃ、誰だってヤケになるさ。そうだろう？」

共感を求めるように、多少馴れ馴れしい口調を用いる。

彼女は冷やかさを保ったまま笑みを深めた。

「殺されるのを覚悟で襲いかかったの？ それとも、どうせ死ぬんだから、あたしみたいな魅力的な女をレイプして、性欲だけでも満足させようとしたのかしら？ どちらにせよ、何の体術にも精通していないのに上位ナンバーのテスト生に組みつくなんて、完全な自殺行為よ。反省しなさい」

「……おまえ、俺と同じくらいの年なのに上位ナンバーなのかよ？

MとかXじゃなく？」

「Jよ」

彼女は短く答え、銃を下ろしてから、改めて名乗った。

「あたしはJ9011号の響千鈴よ。あんたは？」

「俺は古城篤也。見ての通りKナンバーさ」

相手が四ランク上のテスト生と知り、俺は驚きを表情にした。

この女、見かけと違って相当に優秀らしい。この若さでJナンバーであるからには、最初のサバイバルテストから現在に至るまで、連続で生還し、そのつど昇格していると見ていいだろう。いったい、どういう経歴の持ち主なのだろうか。

「驚いてないで、その粗末なモノを隠しなさい。目のやり場に困るでしょ。恥ずかしくないの？」

言われて思い出した。

俺って全裸だったんだ。

「こりゃ失礼」

俺は慌てて股間を押さえ、卑屈っぽい笑顔を作って見せた。

意外にも、千鈴の顔は、この薄暗い廊下の下で判別できるくらい、真っ赤に染まっていた。

【3・西園エリカ】

黒澤恭司という男子テスト生は、私の通っていた学校の数学教師のように冷酷で陰険だったけど、落ちこぼれの生徒に宿題の山を押しつけるような冷血行為とは無縁であり、予習をし忘れた生徒に小言の集中砲火を浴びせる陰湿さとも無縁だった。

彼はサバイバルテストの知識に乏しい私に、さり気ない形で生還の為にイロハを教えてくれたし、初心者テスト生の心構えとか上位テスト生との接し方を、自分の意見を交えながら聞かせてくれた。それは私に対する優しさであり、たとえ私が強引に引き出した解答であっても、そこにある親切心は紛れもない本物で、彼の本質ではないかとも思えた。なぜなら、私の質問に答える義務など彼にはないし、私のお守をして得られる利など何もないからだ。あるとすれば、肉体に対する情念の発散くらいだろう。しかし、彼はサバイバルテストの攻略を中断してまで私を押し倒す意思はないようだ。

だから、彼は私にとって、当面、必要不可欠な存在と言えるのだ。

私の部屋（私が目覚めた部屋と表現するべきかな？）を訪れた黒澤は、何か大切なモノを探すような深刻さで、埃カスすら見逃さぬ真剣さをもって、室内の隅から隅までを一寸刻み五分刻みに調べていった。

その様子がちょっと可笑しかったので、からかいを込めて訊いてみた。

「恭司さん、何探してるの？ 本の妖精とか小人さんを捜してるんじゃないよね？」

「……特定の何かを探しているわけではない。口を閉ざしたまま、その場で大人しく立っている。あと、俺を奇人変人扱いするのは止める。いいな？」

「はい」

冷たくあしらわれ、ちよつとムツとした。けれど、邪魔をしないと約束しているので素直な返事をしておく。叱られるのはいいけど、怒らせるのはマズイ。ある程度の絆を結ぶまでは、馴れ馴れしくし過ぎちゃ駄目である。

でも、彼がゴミ箱の中を漁り出すのを見たら、黙ってなどいられなかった。

「ゴミ箱の中なんか見て面白い？」

「……面白くはない。だが、中に入っているのがゴミとは限らないだろう。『メダル』や『鍵』が隠されている可能性もある。ゴミ箱だけでなく、トイレの便器の中も、下水の底も、全て自らの手で調べるのが当然だ。もし調べずに他者の手に渡ってしまったら、目も当てられない」

「んー。確かに他のテスト生に取られちゃうのは悔しいですねー。でも、便器の中に手を入れて調べるのは、ちよつと嫌だなあ……」

「誰よりも早く生還する為だ。そう思えば、悪臭も気にならない」

「そりゃ、そうかもしれないけどさ……。汚いのは、なるべく避けて生還したいなあ」

「ここは、そんな甘い考えが通用する世界ではない。どれほど無様を晒そうとも、生還した者が正義で、失敗した者は悪だ。そして、悪は死ぬ定めにある。俺は、汚物に塗れてでも生還するつもりだ」

黒澤はそう豪語しつつ、何が捨てられているかもわからないゴミ箱の中を、掻き混ぜるように調べる。

しかし、何も発見できなかったようで、ふつと小さく息を吐いてから窓の横に纏められているカーテンの前へと移動した。

「ほーら、何にもなかったじゃん」

「……………」

私に馬鹿にされた黒澤は、しかし全く表情を変えずに、こつちをチラッと見て一本だけしかない腕を私の方へと伸ばした。そして、手の平を上にして開いた。

そこには、現代ではあり得ないくらい旧式の『鍵』とクシャクシ

ヤになった『紙』が乗せられていた。

「えっと……それ、ゴミ箱の中に入ってたの？」

「そうだ。腐ったバナナの皮の下にあった」

「うそ……マジで？　ほんとに隠してあったんだ……」

でも、アイテムを発見したのに何のリアクションもしないのは良くない。私だったら、部屋中を跳ね回って歓声を上げていただろう。彼だって嬉しくないわけじゃないんだだろうから、それなりのアクションを見せて欲しいものである。

「これからはゴミ箱の中もしつかりと調べることだな」

彼は自分の正しさを証明してみせたのに、得意げになるわけでもなく、私を嘲ることもせず、僅かに唇を歪めただけで、手に入れた鍵をズボンのポケットに落とし込んだ。そして、クシャクシャに丸められている紙を私に手渡した。

「この紙はおまえに渡しておこう。俺が持っても意味はない」

「ありがとー」

紙を受け取った私は、何が書いてあるんだろうという期待を胸に、紙のシワを綺麗に伸ばして平らにした。

そして、声に出して読んでみた。

「えーっと……『井の中の蛙、メダルを飲んで引つ繰り返る。この鍵で蘇らせて開けてね。遠藤Pより愛を込めて』って書いてあるけど……どういう意味かな？」

「……その文章の意味をそのまま受け止めればいい」

「わかんないから訊いてるんでしょ！」

私が憤慨してみせると、彼は雄弁な溜め息を吐いてから、さっきの鍵をポケットから出して私の鼻先に突きつけた。

「この建物のどこかに『井戸』があり、その中に蛙の形をした『宝箱』が沈められているのだろう。そして、その宝箱を開くには、この鍵が必要というわけだ」

あー、なるほどー。

お馬鹿な私の為に、遠藤教授が気を利かせてくれたんだねー。

でも、鍵は恭司さんに取りられちゃったから、もう私がゲットするのは無理だね！。

って、こら！

「ってことは、その鍵、私でしょ！」

遠藤教授が私の為に用意してくれた鍵なのだ。彼がゲットするのはおかしい。

そう主張したのだけど、一言の下に切り捨てられた。

「調べなかったおまえが悪い。この鍵の所有権は俺にある」

「うー」

やっぱ、この人、陰険です。鬼です。ひとでなしです。

神様、天罰をお願いします。ううん、こうなったら悪魔でもOKだから、彼を呪って下さい。

そういう内心の思いを込めて、半泣き顔で彼を睨みつけてやった。

「……泣いても無駄だ。メダルの重要性はおまえも知っているだろう。それに通じる鍵は、たとえ仲間であっても受け渡しして良い物ではない。いや、仲間だからこそ、メダルや鍵を含むアイテムの受け渡しは自重するべきだろう」

「そんなの知らないもん！」

力一杯叫ぶ。

「……おまえ、メダルや鍵の重要性を理解していないわけじゃないだろうな？」

「知るわけないじゃん、そんなの。私、初心者なんだから！」

「……自慢げに言うな。命に関わることなんだぞ」

黒澤が嫌そうな顔をして耳を押さえたので、私は少し声のトーンを落とした。

「そうなの？ 『鍵』はドアとか宝箱を開けるのに必要だから重要なのはわかるけど、『メダル』なんか持っても意味ないじゃん。集めると、何かいいことあるの？」

「……………」

黒澤は急に眩暈を覚えたのか、額を手で押さえて顔をしかめた。

「どしたの？ 大丈夫？ 頭痛かったら、ここにベッドがあるから、少し横になつ……」

「エリカ、ちょっと黙れ」

「はい」

「……やれやれ」

彼は眉間に手を当てたまま、深い溜め息を吐いた。

「……『メダル』を集める意味を知らないだと？ ふざけているのではなく、真面目に言っているのだろうな？」

「真面目ですよ。これっぽっちもフザケてないしー」

「……プロフェッサー遠藤は何を考えているのやら……。鍵を用意してメダルのありかを記すよりも、まずメダルの重要性を教える必要があるだろうに……」

「あの人は結構良い人ですよ。監禁中に、こっそりとジュースとか差し入れしてくれたし。最初は変態ロリコン中年かと思って警戒してたんですけどねー。話してて楽しいから、ちょこっと仲良しな感じなんです」

「……………」

黒澤は口の中で何かを呟いた。

あまりにも小声だったので、何を言ったのかは聞こえなかったけど、遠藤教授を褒める言葉じゃないのは確かだ。

もしかしたら、私を罵ったのかもしれない。

しばらく額を押さえたまま無言で俯いていた彼は、徐に顔を上げると手にしていた鍵を私に向けて差し出した。

「エリカ、もし井戸の中にある『蛙の宝箱』から『銅メダル』以外のメダルが出てきたら、無条件で俺に譲渡すると約束できるか？

約束できるなら、この鍵をおまえに預けよう」

「え？ いいの？」

「ああ。もし『銅メダル』が入っていたなら、それは俺には不必要なアイテムだ。おまえが手にして、生還に一步近づけばいい。だが、

それ以外のメダルが入っていたら、それはおまえが持っていて何の役にも立たない物だから、俺がいただくことにする。いいな？」

「うん、全然OKだよ！」

彼が何を言っているのか、あまり意味を理解できてなかったけど、鍵を返してくれると言っただから、笑顔で頷いておいた。

「なくさないように気をつけることだ」

「ありがとー。恭司さんて、見かけによらず優しいですね！」

「……それは褒め言葉ではない。そして、優しさはテスト生にとって欠点でしかない」

じゃあ、彼は欠点だらけ？

頼りになりそうな感じなのに、実は最弱のテスト生？

ううん、そんなわけない。

「そうかなあ？ 私は全力で褒めてるんですよ。あ！もしかして、陰険って罵った方が嬉しかった？」

「……それも褒め言葉ではない。せめて狡猾と言って欲しいものだ」

「こーかつ……？ 難しい言葉ですね。それ、どういう意味？」

「……もういい。口を閉ざして大人しく立っている」

「はい」

鍵を受け取った私は、彼の優しさに心の中で感謝を述べ、絶対なくさないぞという思いを込めてギュッと握りしめた。

その後、ベッドのクッションの中まで切り開いて調べた黒澤は、結局『鍵』以外のアイテムを発見できなかったのに落胆した様子もなく、部屋の隅っこでじっと立っていた私を促して、ドアの前まで移動した。

「この部屋を出たら、おまえにとつてのサバイバルテストが開始する。いつまで俺と一緒にいられるかわからない以上、おまえは常に緊張感を持って行動し、俺からテスト生として必要なことを少しでも多く学ぶことだ。それが生還へと繋がるだろう。俺の苦勞も軽減されるに違いない」

「はいっ！ 肝に刻んどきます！」

「……肝を刻んでどうする。肝には銘じておけ。刻む場所は、記憶だ」

「むむー」

真面目な顔で突っ込まれ、しかも訂正までされて、反撃不可能。ふくれっ面で口先を尖らせて、睨むくらいしかできない。

そんな私へ、黒澤は一瞬の苦笑を見せておいて、ドアのノブに手を掛けた。

「では、行くぞ」

「よし、頑張るぞっ！」

私たちは部屋の外へと出た。

【4・西園エリカ】

部屋の外は薄暗い廊下だった。

壁にランプが備わっていて廊下を照らしているのだけど、その一つが離れすぎているだけじゃなく、照明の性能自体が悪くて、この建物の隅々までを浮かび上がらせるまでには至ってなかった。さながら、お化け屋敷だ。っていうか、完全なホラースポット。気の弱い子なら悲鳴を上げて、部屋に逆戻りしているだろう。私も結構な怖がりなので、黒澤と一緒にやなかったら部屋で震えてたかもしれない。彼は「数メートル先の足場が照らし出されているだけマシだ」と言うのだけど……。か弱い乙女に対する心のケアを、ちょっとだけでいいから心掛けて欲しいなあ、と思った。

ともあれ、心強い同行者の先導があるので、不安は殆どない。私たちは部屋を出ると、左手に見える十字路へは向かわず、右手に見えるし字の曲がり角に向かって歩き出した。

なんだが、わざと照明の暗い方を選んで進んでいるような気がしたので、多少の不安を覚え、勝手知ったる我が家って感じでズンズンと歩いて行く黒澤の背中に声を掛けた。まあ、何の会話もしないで行動するのが嫌だった、という理由の方が声を掛けた主な動機だったのだけど。

「あのー、恭司さん。もしかして、私を暗がりとかに連れ込んで、エロエロなことしようとしてる？」

「……そのつもりがあれば、さっきの部屋で事に及んでいる」

黒澤は首だけ捻って後ろを向き、呆れ顔を作った。

「そうだよー。んじゃ、なんで十字路の方に行かなかったの？」

「あっちの方が明るいから怖くないのに」

「怖くない？ 勘違いするな。視界の良し悪しがフィールドの難度を示しているわけではない。テスト生同士が鉢合わせしやすいとい

う点で言えば、あえて見通しの悪い場所を選んで行動する方が危険度が低い。そう考えれば、恐怖感も軽減できるだろう」

「あ、そっかー。言われてみると、その通りですね。ってことは、意外と恭司さんも怖がりだったりするの？」

本当はGとかSナンバーの上位テスト生と会わないように心の中で祈っちゃってる？

今まで影に隠れてコソコソつと生還してきた忍者タイプ？

それはそれで親近感が湧くけど、頼もしさは一割減である。

「何を想像しているのかは、あえて聞かないが……。怖がりではなく、用心深いと言って欲しいものだ」

「どっちも臆病つてことには変わりないじゃん」

「……おまえ、学校できちんと勉強をしていたのか？ それとも実は、言葉の意味を理解していて、俺を故意に貶めているわけではないだろうな？」

「こらーっ！ 何言ってるんですか！ 私、恋になんて落ちてませんからっ！」

いつの間にか恋に落とされちゃ敵わないので、拳を振り上げて怒って見せると、彼は眉間に手を当てて嫌そうな表情を浮かべた。

「……そういう意味ではない。故意に貶めると、恋に落ちるは、似ても似つかぬ全く別の言葉だ」

「言い訳ですか？ やっぱ、恭司さんて、エロエロ公爵？」

「おい。いい加減、俺をエロ呼ばわりするのは止める。やれやれ……。しかし……。エロの階級がどんどん上がっているのは気のせいかな？ 次はエロエロ皇帝と言うのではないだろうな？」

言い当てられちゃいました。

もしかして、彼って……。

「エスパーですか？！ 私の心が読めちゃう？」

「……………」

褒めたつもりなのに、なぜか黒澤はウンザリした顔を作って、私のおでこをペチンと叩いた。

「少しは緊張感を持って行動しろ」

「あう」

そんなの言われなくてもわかってる。

ただ、不安とか恐怖とか、諸々の負の感情を暴走させない為には、仲間との適度な会話が必要不可欠だと思うのだ。彼のようにブスーッと深刻そうな顔をして黙々と行動してたら、私のような繊細な乙女の心は一日持たずにペシヤンと潰れてしまうだろう。私の心を読めるのなら、それくらい察してもよさそうなものだ。

「緊張ばっかしてたら、私みたいな初心者テスト生は、すぐに心がボキッと折れちゃうんですよ」

「その程度の負荷で心が折れるのなら、このテストを生き抜くことなど不可能だ」

「ちよつとは優しい言葉の一つも掛けて下さいよ!」

「この世界に優しさなど不必要だ。優しさは甘えに通じる」

「陰険大王!」

「今は俺と一緒にいるが、いつまでも行動を共にできるわけではない。そうなれば、サバイバルテストの厳しさを全く理解していないおまえなど、ネギを啜えたカモも同然だろう。俺の厳しさは、おまえの為を思えばこそだ。そう思え」

「え?」

ちよつと耳を疑った。

私の為を思つて、アドバイスしてくれてる?

陰険大王なのにな?

「……また言葉の意味を誤解して変な想像をしているのではないだろうな?」

じろりと睨まれた。

私はそれへ笑顔を返した。

「恭司さんは私のことを大切な仲間だと思つて、って意味でしょ?」

「……………」

黒澤は大袈裟なくらいの溜息を吐いて、歩くペースを速めた。

「L字の廊下を曲がった先には、分岐点があった。

真っ直ぐに進む道と、右に曲がる道の二つだ。

真っ直ぐ進むと通路の右に赤色っぽいドアがあり、その先はL字の曲がり角がある。

右に曲がるとすぐに十字路があり、その先にも十字路があるようだ。

「どっちに行きます？」

「直進だ」

短い答え。

私も一応仲間なんだから、なぜ十字路を避けるのか、その理由を説明して欲しい。

そんな私の思いを読心したのだろう。黒澤が色々と説明してくれた。

「このフロアは、漢字で言う『曲』という文字状に廊下が作られていて、廊下に囲まれた内側の六か所が部屋になっている。今、俺たちがいる場所は、五画目の終点だ」

ゴカクメとか言われても、意味不明だった。

でも、このフロアの構造は何となく頭の中に思い描くことができた。

「廊下に囲まれた所に部屋があるなんて変な造りですねー。そんなんじゃ、窓から外が見えないじゃないですか。廊下にも窓が全然ないし。すんごく息苦しいですよ、ここ」

「ここは、この建物の地下部分だから、どの部屋にも廊下のどこにも窓など備わっていない」

「ここって地下なんですか？ だから、ジメジメしてるの？」

「換気設備がないからな」

「まるで水泳の授業が終わった後の更衣室みたいですよ」

「ふむ。それはあながち間違った見解ではない。このフロアには」

『地下道』に通じるドアがあるのだ。そのドアには特殊な鍵が掛け
あり、中を覗くことはできないが、どこからか地下道へと大量の水
が流れ込んでいるような水の音を聞くことができる」

「もしかして、そこに重要なアイテムが隠されてるとか？」

「その可能性は高いだろう。だが、今は専用の鍵がないから放つて
おくしかない」

黒澤は、そう話を結んで分岐点を直進した。

赤く塗られたドアの前で私たちは止まった。

「この部屋に入るの？」

「ああ。ここを避ける理由がない以上、調べるのは当然だ」

「真っ先に『井戸』を探しに行くんじゃないんですか？　ぐずぐず
してると『蛙の宝箱』、取られちゃいますよ」

「闇雲に歩き回っても、残忍なテスト生との遭遇率を高めるだけで、
生還には近づけない。建物内の調査は順を踏んで計画的に粛々と進
めていくべきだ」

「それ、私の性格には合わないなあ……」

「死にたくなければ、その性格をサバイバルテスト仕様に改善する
必要があるな」

黒澤は素っ気ない感じに言って、何の前置きもなく、真横に立つ
ている私の胸を押した。

「ちょ、何すんですか！　エロエロ皇帝！」

服越しにであれ、胸を触られて、思わず悲鳴を上げそうになった。
「うるさい。今からこのドアを調べるから、少し下がって黙ってい
る。気が散ると即、死に繋がる」

怖い顔で睨まれ、私の怒りは矛先を失った。

どうやら意識して胸を揉もうとしたわけじゃなさそうだ。でも、
わざとじゃないからと言って、乙女の胸を触った罪が許されて良い
わけがない。もし彼がクラスメイトの男子だったら、土下座レベル
の刑罰を与えていただろう。もしくは、変態男のレッテルをはって、

泣くまで罵ってやったに違いない。痴漢行為は断固として断罪するべきである。しかし、このサバイバルテストにおいては、痴漢行為への断罪など寝言も同然の泣き言になってしまふのだ。殺されないだけマシ。レイプされないだけマシ。そう思っただけ諦めるしかない。私は命じられるままに三步下がり、無形の怒りを視線に宿して彼の横顔に突き刺した。

一言、彼が「ごめんね」とか「すまない」って謝罪してくれれば、こんな怒りのモヤモヤなんか霧散するんだけど……。

そんな愚痴の種を心の苗床に植えながら、じーっと睨む。

すると黒澤は、ドアに耳を当てた格好で、ドアノブの周囲を手の平で撫で回すようにしながら、独り言を始めた。

「どんな罠が仕掛けられているともわからない以上、素人がドアの前に立つのは危険過ぎる。おまえがドアを開ける場合は、壁に身を預け、利き手を用いてドアノブを捻り、ドアを引いたら即座に手を引っ込めることだ。いいな？」

それは独り言じゃなく、安全なドアの開け方のアドバイスだった。胸を触られたことに意識を取られていたので、ちよっと吃驚した。

「え？ あ、うん……覚えとく」

穴の開いた風船のように、私の内の怒りがしぼんでいく。

「幸いにして、このドアには罠が仕掛けられていなかったが、くれぐれも注意を怠るなよ。心を許していない者が罠の有無を判定したドアは、絶対に開けてはいけない。たとえ仲間が安全を保証してもだ。それを忘れるな」

「わかりましたーっ！」

大きな声で返事をしながら、彼ってやっぱり良い人だなあ、と実感した。

【5・古城篤也】

響千鈴という女の反応は、ちょっと意外なものだった。

裸を見て顔を赤らめるなんて、どういうレベルのお子さまだ？

奥手な中学生並みにウブなのか？

テスト生としての経験ほど、男性経験は積んでいないってことか？
しかし、この地獄で貞操を守ることなど常識的に考えて不可能だろう。今はベテラン然として俺を見下しているが、彼女も最初は完全なド素人だったわけであり、当然のことながら全裸だったはずだ。それに、この抜群の容姿である。どうぞ襲って下さいと自己アピールしていたも同然だろう。男性テスト生と一度も遭遇せずに生還したとは考えにくいから、レイプされなかったとは思えない。むしろ、体を武器にして苦難を乗り越えてきたと見るべきである。

そこで俺は気付いた。

ああ、なるほど。この女が抜き身のナイフみたいに鋭くて冷たいのは、過去の辛い体験が原因なのだ。よってたかってレイプされた所為で男性に嫌悪をいだくようになったんだな。そうに違いない。

でも、それじゃ、俺の下半身を見て恥ずかしがるのは、なぜだ？
恥ずかしがってるってのは俺の錯覚で、男性器を直視したくないだけか？

俺のモノが貧相すぎて見るに堪えない、って理由だったら悲しいぞ……。

「何よ？ あたしのことジロジロ見て。まだ襲おうとか考えてるのかしら？」

俺の視線が気に入らなかったらしい。千鈴が形の良い眉をきゅつと吊り上げて睨んできた。

「い、いや、襲おうなんてこれっぽっちも計画してねえよ。そうじゃなくて、おまえが群を抜くくらい的美少女だから、思わず見とれ

てたんだ」

おだてて良い気にさせて、油断を誘う。

だが、彼女は喜ぶどころか、冷凍光線並みの視線を返してきた。

「ありきたりのお世辞なんて聞きたくないわよ」

「いやいや、マジで。おまえ、自分の顔を鏡で見たことあるんだろ？」

「そりゃ、あたしも二年前までは普通に学校行つてたんだから鏡くらい見たことあるわよ」

二年前まで、ね……。

つまり、たった二年で四ランクも昇格したって意味だ。

サバイバルテストは数か月に一回しか開催されないという話だから、この女、一度もミスらずにKナンバーからJナンバーまで昇格し続けたってことになる。

おいおい……… どういうエリートだよ、マジで。サバイバルの天才ってか？

この華奢な肢体の、どこにその能力が隠されてるんだ？ 服をひん剥いて調べてみてえぞ。

「……あたしをジロジロ見るのは勝手だけど、死にたくなかったら、あたしじゃなくて周囲に注意を払いなさい。あと、このサバイバルテストに参加してる女性は魅力的な人ばっかだけど、見た目で判断すると痛い目を見るわよ。さっき、あんたを暗殺しようとしてたソフィアさんも、ね。もし出会っても、襲おうなんて思わないで、逃げなさい」

「はいはい、わかりましたよ」

「また、その気のない返事！ せっかくアドバイスしてあげてるのに、何なの？」

「だってよ、もう俺、おまえに痛い目に遭わされてるし……」

俺は後頭部にできたデカイ瘤をこれ見よがしに触りながら、彼女に恨みがましい目を向けた。

「ちょこつと投げただけじゃないの」

涼しい顔での素っ気ない返事。

「それに、襲いかかってきたあんたが悪いのよ」

「そりゃそうだけだよ……」

そう言われちゃ何も言い返せない。全ての非は、襲った俺の側にある。撃ち殺されずに済んだことを彼女に感謝するべきだろう。でも、頭に銃を突き付けられたままってのは嫌だぞ。指が痙攣して銃を誤射したら、俺、即死だし。そんな死に方は悲しすぎる。

「そろそろ、銃を下ろして欲しいな。いつ撃ち殺されるかビクビクして笑顔が浮かべらんねえよ」

「……このサバイバルテストに笑顔なんて要らないのよ。……でも、まあいいわ。あんた程度の男なら組みつかれても返り討ちにできるだろうから、銃は収めてあげる。感謝なさい」

「はいはい、心から感謝しますです」

「……あんた、そんな風だと、ここじゃ長生きできないわよ」

「俺もそう思う」

「肯定してどうするのよ!」

叱りつけるように叫んでおいて、千鈴は呆れ顔に苦笑のスパイスを加えた。

千鈴が銃を下ろしてジーンズのポケットに差し込むのを見て、俺はホッと安堵の吐息をした。

これで俺の命は、最低でも数分間保障されたことになるだろう。

とにもかくにも、こんな物騒な女とは早々におさらばである。俺に必要なのは、暴力至上主義のベテラン美少女テスト生じゃなくて、包丁を突き付けたら自分から服を脱ぎ出すくらい脆弱な美少女テスト生なのだ。

「そんじゃ、さいなら」

俺は軽く手を振って別れを告げ、彼女に背を向けた。

来た道を引き返すのは性に合わないが、このT字路はどっちを選んでも危険が待っていきそうな気がする。千鈴が出てきた部屋は、彼

女が調べ尽くしているだろうから、入る意味はない。やはり、ここはキツチンの前まで戻って最初からやり直すのがベストだろう。

しかし、俺は三步進んだところで呼び止められた。

「待ちなさい、篤也」

呼び捨てだった。

俺の方が確実に年上なのに……という苛立ちが針の先くらいの大さきで心をチクツと刺した。でも、ここは年齢など無意味な場所である。どんなガキであれ、ランクが上であれば尊敬に値するし、要は生き残った者が正義なのだ。呼び捨てられても仕方ない。名前を覚えてもらえただけ光栄なのかもしれない。

「何だよ？」

本当は無視したかったけど、怒らせたら銃殺もあり得るので、俺は一瞬の間も開けずに振り向いて返事をした。

「まだ俺に何か用か？」

「あんた、ちよつと手を貸しなさい」

そう言っ、おいでおいでと手招きする千鈴。

ハッキリ言っ迷惑だった。

でも、嫌だとは言えない。言っても、銃で脅されて言っことを聞かされそんな気がする。

無理矢理従わされるくらいなら、自分から手伝いを買って出、こいつに恩を売っておいた方が、後々の為になるだろう。情性での先行投資は、強制労働よりも数百倍マシなのだ。

「わかった。手を貸してやるよ」

「へえ……意外と前向きね。あんたって見た目からして駄目人間だから、ぐだぐだと下らない言い訳を吐いて逃げ出すかと思ったわよ」
「後ろから撃たれるより、前から抱きつくのが俺の信条な……ぐはあ！」

モーションすら見せない前蹴りで股間を攻撃された。

もし手で局部を隠してなければ、俺のモノは蹴り潰されていただろう。それくらい容赦ゼロ、手加減ゼロの蹴りだった。

「この女、鬼か?!

「下品な男は嫌いじゃないけど、テスト生としての実力が伴わない馬鹿男が下品なのは我慢できないのよ」

千鈴の顔には罪悪感の欠片も浮かんでいない。

「おまえ……狙いどころが酷えぞ……」

「PKよ。知らないの?」

ペナルティキックくらい知っている。しかし……。

「PKって……サッカーじゃねえんだから……」

「他にも、FKとかMKってのがあるけど、試してみる?」

FKはフリーキックだ。でも、MKって何だ? ミドルキックの略か?

俺は疑問をそのまま口にした。

「MKって何だよ?」

「マシンガンキックよ。知らないの?」

「!」

知るわけないし、洒落じゃ済まない略だった。

俺の表情を見て、千鈴は初めて可笑しそうに笑った。

「食らいたい?」

「いえ、遠慮します」

「そう、残念ね。じゃあ、あたしに対して下品な冗談を言うのは止めなさい。いいわね?」

「はい」

答えはしたものの、俺の性格上、その約束を何分間守れるか不安だった。

「んで、俺は何をやらされるんだ?」

奴隷まがいの肉体労働をさせられるのは勘弁だと思いながら訊いてみると、彼女は意外な答えを返してきた。

「この部屋の中にある暗号を解いて欲しいのよ」

「暗号? おまえみたいな上位テスト生が解けない暗号を、俺が解

けるわけねえじゃん」

この女、四流大学に通ってた俺に何を期待してるのやら……。お勉強ができたなら東大とか姫城大学に進学してるっての。

そんな思いを言葉に変えて文句をつける。

「あんま酷え無茶を要求すんなよな」

「あ、あたしは暗号の解読が苦手なのよ！ 悪い？」

あっさりとキレられた。しかも、連続PKのオマケ付き。っていうか、MKですか？！

俺は股間をガードしつつ言葉を紡ぐ。

「悪くありません……でも、そんなんで、今までよく生き残ってこれたな、おまえ」

「あたしは『デスマスク』との闘いが専門なのよ。アイテム収集とか暗号解読は、今までずーっと他人任せ」

千鈴は言い訳っぽく言った。

「……デスマスク？ 何だそりゃ？ すんげえ不吉な名前だな」

「組織が用意した人間型のトラップよ」

「……人間型の？」

「テスト生を狩ることだけを目的とした殺人鬼よ。その蔑称の通り、鬼の仮面を被っているわ」

「おいおい、そんな奴がいるってのかよ。冗談じゃないぜ！」

「ええ。冗談じゃないのよ。彼は人間として壊れてしまっているけれど、殺人鬼としては最強なの。彼に対抗できるテスト生は、たぶん、リッ君と風守さんくらいよ」

彼女は、意図してか否か、さらっと優秀なテスト生の名前を告げた。

「おう！ なんだよ、同じくらい強い奴がいるのか！ そんなじゃ、そいつらを仲間にできりゃ、デスマスクって奴に会っても問題ないってこったな」

リッ君と風守。その二人の名前を、俺は脳味噌にザクザクと刻み込んだ。

しかし、彼女の言葉は俺の心胆を冷たくした。

「彼らが身を捨てて、あんたを守ってくれるなら逃げることは不可能じゃないわね」

「……………」

嫌な表現だった。

この女は、リッ君と風守っていうテスト生が、俺の命を守る為に死を覚悟して盾にならなきゃ、その殺人鬼から逃げるのは不可能だ、と言っているのだ。

でも、そうすると、彼女の発言に矛盾が生じる。

「おまえは、そのデスマスクって奴を専門としてるのに対抗できないのか？」

俺が嫌味の含み針を吹きかけると、彼女は薄っすらと微笑んだ。

「……あたしは特別なもの」

「特別？　どういう意味だ？　デスマスクの弱点とかを知ってるのか？」

「……いえ、違うわ」

彼女は否定して、そしてニッコリと満面の笑顔を作った。

「あたしが、彼の弱点そのもののなのよ」

「はあ？　意味わかんねえし」

「そうね。今日までの経緯を知らないKナンバー君には意味不明よね」

千鈴は、くすくすと短く笑い、きゅつと表情を改めた。

「ここで立ち話をしている時間が惜しいわ。すぐに行動に移りましょ」

「へーい」

俺は彼女に随って、鉄格子のドアの部屋に入った。

【6・古城篤也】

俺は、響千鈴という鬼女の尻を追っかけて、鉄格子のドアの部屋に入った。

室内は、それほど広くなかったが、家具が置いてない為、パツと見た感じは酷くガランとしていた。内装に飾りつけは一切なく、天井と壁は剥き出しのコンクリートだ。その中で唯一、床が碁盤状のマス目になっている点が、お洒落と言えなくもない。そして、室内で最も目を引くのは、そのマス目の一つ一つに数字が描かれていることだった。

「どういう嫌がらせだ、こりゃ。床を見ると眩暈を起こしそうだぞ」
部屋に入るや否や、床一面を覆い尽くす大量の数字にあてられ、俺は回れ右をして逃げ出したい衝動に駆られた。

「どうか、我知らず、部屋から出ようとしていたらしい。」

千鈴は無言で俺の腕を掴み、ぐいぐいと引っ張って、部屋の中央まで進んだ。

「どう？」

床を指さして俺に作り笑顔を見せる千鈴。

意識して作っている表情とはいえ文句なく可愛い……、と思わず答えそうになって声帯に急ブレーキを掛ける。

「ヤバイヤバイ。危うく、口が滑って彼女を怒らせるところだったぞ。」

軽口の代償は容赦ゼロのキックだから、発言内容に注意しなければなるまい。

とにかく彼女と別れるまでは口にチャックだ。また股間を蹴りまくられちゃ敵わない。

しかし……「どう？」とか訊かれても困る。俺が言えるのは……。

「ルーレットがありゃ、ビンゴゲームができそうな部屋だな」

「……………」

冷たい目で睨まれた。部屋の感想を求めていたわけじゃないようだ。

ここでフザケたらMKされること確実なので、俺は真面目な表情を返した。

「この床に描かれてる数字が、暗号ってわけか」

「あんだ、これが無意味な落書きに見えるの？」

千鈴は足の裏で床をガシガシと蹴りつけながら言った。

ちよつと苛立った反応だ。

俺の真摯な応対に不満があるのか？ これでも真面目に答えてるんだぞ。

「んで、どういう暗号なんだ？」

俺が訊くと、彼女は柳眉を八の字にして下を向いた。

答えられないらしい。

「何が問題なのかもわからねえってか！ そんなんで俺にどうしろって言うんだよ」

「うつさいわね！ 何とかしなさい！」

「何とかって……。おまえ、俺の頭の悪さを知ってて言ってるのか？」

「あんだのことなんて、知るわけないわよ。でも、あたしよりも馬鹿ってことはないでしょ？」

「おいおい……」

自分の頭の悪さを自慢げに言い放つ女つてのも珍しい。

きつと、相当に馬鹿なのだろう。学校の成績も下から数えた方が早かったに違いない。

今までのサバイバルテストも、俺みたいな素人テスト生を脅して暗号を解かせ、それによって得たアイテムで生還してきたと察せられる。まあ、卑怯ではあるが、それはそれで一つの手段だから、否定することはできない。俺もエロい意味で似たようなことをしようとしているのだ。

「ほら、さっさと暗号を解きなさいよ」

不機嫌面で急かされて、俺は慌てた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。何をどう解けばいいのかもわからないのに、せつつかれても困るぞ。少し考える時間をくれよ。じゃねえと、無理だ。あと、銃で脅して無理やりに暗号を解かせようとするのも止めてくれよ」

これ以上不愉快にさせて銃を抜かれでもしたら堪らない。頭に銃を突きつけられた状態での暗号解読など不可能だ。だから、前もって釘を刺しておいた。

千鈴は、俺の言い種が可笑しかったのか、手の平で口元を隠すようにしながらクスクスと笑った。

「じゃあ、銃で脅さないであげるから、早くしなさい。五分くらいなら待つてあげるわ」

「たった五分かよ！ そんなの、カップラーメンを食う時間しかねえじゃんよ。せめて、一時間くらい待つてくれよな。そうすりゃ、チーズケーキくらい焼いてやるぜ」

「文句言つてないで、さっさと暗号と向き合いなさい！」

「へいへい、わかりましたよ」

つい、投げやりな返事をしてしまった。

「何なの、その返事は！ もっと気合いを入れなさい！」

叱られると同時に、突っ込みを入れられた。

剥き出しの尻を蹴っ飛ばされたのだ。

その激痛に、俺は数字の描かれた床へと気持ち良いくらい無様にダイブし、顔面から着地した。

さてさて、しかたないから暗号を解読してやろうかね。

俺はズキズキと痛む尻をさすりながら、室内の床を見回した。

等間隔に仕切られた床は、全部で二十五マスあり、その一マス一マスに描かれている数字は全て異なっている。

俺の足下には、『18』と描かれた床板。

冗談抜きで、これって、ビンゴ盤だろ。もしかしたら部屋の中に

ルーレットが隠されてるんじゃないのか？

そう思っただけで室内を歩き回ったが、それらしき物体は見当たらない。
何をすりゃいいのかすら理解できない。

こりゃ完全にお手上げだぞ……。

「どう、解けそう？」

「無理だ。おまえのプレッシャーで脳味噌が融けそうだぞ」

「解けないなら、生還を諦めて、生涯最後のチーズケーキでも焼く？
確か、近くの部屋にキッチンがあつたでしょ？ もし望むなら、あたしが味見してあげるわよ」

可笑しそうに千鈴が言った。初めて見せる砕けた表情だ。

しかし、今の俺に話しかけるのは止めて欲しい。

「……ちよつと黙っててくれねえか？ 暗号の解読に集中したいんだ」

「悪かったわね。ケーキが焼ける男の子って珍しいから、ちよつと冗談を言ってみたのよ」

「そうか？ 今日日、ケーキくらい焼けなきゃ、女にやモテねえよ」

「へえ……あたしの知らない間に、変な世の中になったものね」

驚きとも呆れともつかない表情を浮かべる千鈴。

彼女が誘拐監禁されてから今日に至るまで劇的に世情が変化したわけじゃねえんだから、女の持つ男性観は似たようなものであるはずだ。それを知らねえってんなら、彼女は箱入りのお嬢様だったか、もしくは友達ゼロの引き籠もり人間だったのだろう。そこら辺を突っ込んで訊いてみてもよかつたのだが、下らない会話は俺に与えられた時間を無駄に消費するだけだし、彼女を怒らせる鍵にもなりかねないので、俺はあえて彼女を無視し、床板のある一部分に視線を固定した。

そこに描かれている数字の色が、他のものと異なっていることに気づいたのだ。

俺は小走りで、部屋の右隅奥まで移動した。

「ここだけ文字が赤いな」

そう言って床の数字を指し示すと、彼女が駆け寄ってきて床板を凝視した。

「ほんとだ！　ここだけ他のと違うわね！」

「数字は『24』だ」

「ってことは、この床板の下に『2』と『4』の鍵を使う宝箱が隠されてる、って意味かしら？」

俺の横に膝をつき、マス目をなぞるように指を這わせながら自問する千鈴。

この床板の数字を、どう解釈すれば、その結論に至るのか理解できなかったので、それについて訊いてみる。

「なんで、そうなるんだよ？　床板に描かれてる『24』って数字に意味があるわけで、『鍵』は無関係だろ」

「過去に、そういう前例があったのよ」

彼女はムツとして、言い訳っぽく呟いた。

「へえ……。そりゃ、まあ、当てになる情報だよな」

経験値では、俺は彼女に遠く及ばない。前例があるのであれば、それに期待して、試してみるのも悪くないだろう。

「じゃあ、床板を引っぺがしてみろよ」

「そうね。あたしは万が一の為にドアの前で見てるから、あんた、床板を剥がしなさい」

無茶苦茶な命令をされた。

「ちよ、おい！　なんで俺がやらされるんだよ！　そんな危ねえこと、素人の俺が……ぐはあっ！」

容赦なしの股間蹴り。しかも、真下から足を突き上げられたので、衝撃を逃がすことができず、もろにダメージを食らってしまったから堪らない。

あまりの痛みに、俺はもんどりうって床に蹲り、ゴロゴロと転がり回った。

「あら、痛かったかしら？　ごめんなさい」

口先だけの謝罪であり、その言葉は水素よりも軽かった。それど

ころか、悶え苦しむ俺を可笑しそうに観察している。

ほんと、血も涙もない鬼女だ。

シヨック死しなかっただけ奇跡だぞ。

回復の為に五分くらいのインターバルを置いた後、大丈夫だろうかと恐る恐る下半身を覗き込んでみる。

「……………」

心なしか腫れている感じだが、どうやら壊れちゃいないようだ。

この年で機能不全に陥らなくて良かった。

ほっと一安心である。

「酷えことすんなよな！ 使いものにならなくなったら、どう責任取ってくれるんだ！」

「責任？ おかしなことを言うわね」

彼女はせせら笑った。

「か弱い乙女に危険な役を押し付けようとするから蹴られるのよ」
「どこがか弱い乙女だ！ 男の股間をゲシゲシ蹴りやがって！ どう考えても俺よりおまえの方が強いだろ！」

「何か言ったかしら？」

千鈴が右手を俺の股間の前に突き出し、手の平を開いたり閉じたりして見せながら、怖い顔を作った。

それは、どう見ても、俺の大切な部分を握り潰すぞ、という威嚇ポーズである。

「いえ、言ってます！ だから、アソコを攻撃するのは勘弁して！」

「これ以上文句を言つと、ぐちゅっと潰しちゃうわよ」

「お情けを！」

「ふん。だったら、さっさと床板を剥がして下を確認しなさい」

「へいへい、わかりましたよ、姫様」

「よろしい」

俺は嫌々という思いを顔全体で表現してから、『24』の床板の

前で腰を下ろし、胡坐を掻いた。そして、床板のマス目に爪を立てるようにして持ち上げる。

意外に重いな……。

そう思っ指先に更なる力を込めた瞬間、ピシッという嫌な音がした。

それと同時に鋭い痛みが脳を焼く。

「うがあああつ！ すんげー痛つてえ！」

「篤也、大丈夫？！ どうしたの？ 何かの罫が作動したの？」

彼女は大袈裟に慌てて、俺の手元を覗き込んだ。本気で心配しているらしく、彼女の全身を包んでいた冷酷なオーラが薄まり、年相応の女性を思わせる無垢な優しさが濃くなる。

今が襲いかかるチャンス！ なのだけど……指先から生じる痛み
の所為で性欲など欠片も湧かなかった。

しかし、怪我の具合を確認した彼女の反応は――

「なーんだ、爪が剥がれただけか。ビックリさせないでよね」

鼻先で笑い飛ばされた。

「マジで痛いんだよ。ちつとは同情しろよ。おまえがムチャをさせた所為でもあるんだぞ！」

「そんな程度で同情なんてできないわね。せめて銃で撃たれるくらいしなきゃ」

「あほか！ 銃で撃たれたら死んじゃうだろ！」

「あたしは両足を銃で撃ち抜かれたことがあるわよ」

「……マジで？」

「ええ」

冷たい微笑みと共に頷く千鈴。

冗談を言っている顔ではなかった。

【7・古城篤也】

俺は剥がれ落ちそうになっている右手の中指の爪を押さえつつ、相手を睨みつけた。

この女、タンクトップにジーンズというラフな服装をしているが、外見は清楚な女子高生って感じた。制服に身を包めば、その手のマニアがカメラを持って殺到し、頭の悪い大人が垂涎しながら札束を積み上げそうなレベルの容姿。大人に成りきれていない幼さを、ほんの少しだけ醸し出しているところが、男心をぐつとさせるのだ。

しかし、そんな美少女が、銃で足を撃たれて尚、平気な顔でサバイバルテストに参加してるとか……。どう考えても異常だろ。強制参加であつたとしても、否、そうであればこそ、銃で撃たれたことがトラウマになって、他のテスト生に対して恐怖を覚えて然るべきなんじゃないか？ それとも、そんな軟弱な精神の持ち主は生き残れない、と自らを叱咤して心身の傷を克服したのか？ こんな二十歳にも満たないであろう女が？ あり得ねえぞ。

まあいい。

この女がどんな過去を経て今に至つたかなんて、俺には関係ない。今、重要なのは、俺の爪が剥がれたということである。

「指がこんなじゃ、もう俺には持ち上げらんねえよ」

「あんた、脳味噌あるの？ ちよつと力を込めてみて持ち上げられないんなら、この床板は外れないのよ。それくらい気付きなさい」

千鈴は腰に手を当て怒り顔を作ったが、フツと溜め息を吐き、仕方なさそうに微笑んだ。

「ほら、手を出しなさい。指、痛いんでしょ？」

そう言つて彼女はジーンズの尻ポケットから何かを取り出して、差し出した俺の手の平に乗せた。

それは一枚の絆創膏だった。

「応急手当しかできないけど、ないよりはマシでしょ？」

「あ、ああ。さんきゅー」

意外な優しさに戸惑いつつも、俺は礼を述べて、剥がれそうな爪を固定するように絆創膏を巻きつけた。

痛みはあるが、我慢できないレベルじゃない。指先をペンチでぎゅつと潰され続けている感覚だ。足の小指を机の角にぶつけた時に比べれば、蚊に刺されたようなもんだろう。ただ、問題なのは、しばらくは指先を用いる作業に苦戦するだろうということ。その辺は彼女にフォローしてもらえないのだが……。

俺は絆創膏のフィット感を確かめるべく、手を数回開閉しながら声を掛けた。

「さすがJナンバー、便利なもん持ってるな」

「バンドエイドくらいで感心されてもね……。あたしのランクじゃ、前回のテストから持ち越せるアイテムは、その程度なのよ」

「持ち越してきた？ そんなシステムがあるのか……」

初めて聞く情報である。

サバイバルテストの基礎知識はレディJからみっちりと教わってきたつもりなのに、なかなかどうして、奥が深い。秘密結社オズとかいう胡散臭い名称で呼ばれてるだけはある。

「ランクが上がれば、持ち越せるアイテムの質も上がるのか？」

「そうよ。基本的に、低いランクのテスト生は消耗品しか持ち越せないわ。しかも、数が制限されるの」

「だから、バンドエイド一枚だけ？」

「いいえ、あと九枚持つてるわよ。他にも、包帯とか針と糸とか持つてるけど……。見たい？」

「いや、いい」

そんなもん見せられても困る。

「他に何か持つてるのか？ あの銀の銃はどうなんだ？」

「これ？」

彼女は口元だけを微笑ませ、銃を抜き出して俺の前にチラつかせた。

「おっと！ 俺に向けるなよ！ 暴発でもしたら洒落にならん」

「今は弾切れ状態だから安心なさい」

そう言って銃の引き金を引いてカチカチと音を鳴らし、くすくすと意地悪く笑う千鈴。

弾切れ？！ なんてこった！

さっき頭に突き付けられた時は既に弾なし状態だったのかい！
ビビって損したぞ。

とはいえ、この女は銃がなくても十分に物騒なのだが……。

「この銃も持ち越した物よ。ただ、銃弾の持ち越しは厳しく制限されているわ。あたしのランクだと、六発が限度ね」

ってことは、さっき撃った二発を差し引くと、少なくとも、あと四発も撃てるかもしれないのか。

嫌な事実である。

しかし、逆に考えると、あと四発しか撃てないということでもある。

それはつまり、どう上手く撃っても四人しか殺せないことを意味しているのだ。

俺は、その情報をしっかりと脳味噌に刻み込んでおき、更なる質問を投げかけた。

「どれくらい上のランクになれば、消耗品以外のアイテムが持ち越せるようになるんだ？」

「衣服は、Mナンバーに昇格さえすれば、それ以降没収される心配はないわよ。でも、組織が支給してくれるわけじゃないから、サバイバルテスト中に探し出す必要があるわね」

「おまえのその服もテスト中にゲットしたのか？」

「ええ。今までに何種類かの服を持ち越したけど、これをあえて選んでるわ。動きやすくて脱がせにくい服だから」

言われてみると、確かにスリムジーンズは脱がせにくそうだ。彼女なりの、襲われない為の知恵なのだろう。

俺なら手持ちの包丁でジーンズを切り裂いちまうが……。それを

口にすると、和んだ空気が改悪されるところか、股間を握り潰される危険性大なので、口を噤んでおいた。

「剣とか斧は何ナンバーになれば持ち越せるんだ？」

「刀剣類はNナンバー以上よ」

「セランクも上かよ……。すんげー遠い話だな……。俺がNまで昇格するのに何年かかるのやら……」

「あんたは、昇格どころか生還すら危ういでしょ。もっとシャンとしなきゃ、一時間後に生きていないわよ」

「……………」

痛い所を突いてくれる。

しかし、俺自身、一時間後まで生きてる自信がないだけに返す言葉はない。

「ほら、篤也、いつまで無駄な会話をするつもり？ 時間は有限なのよ。指が痛くても脳味噌は機能するでしょ。さつさと暗号を解きなさい」

姫君の顔に陰が戻った。

確かに時間は有限だ。こんな女と行動を共にして時間を消費するより、従順な女を襲って鬼畜タイムを満喫することに時間を有効活用するべきだ。とつとと暗号を解いて、こいつとお別れしよう。

「おう、わかった」

俺は改めて床の数字に意識を集中した。

俺は部屋の中央に戻り、床全体を見回した。

部屋の一番奥のマスを手前から右へ順に数字を読むと、『1、8、12、20、24』である。その下のマスの列は『17、25、4、6、13』であり、中央の列は『9、11、18、22、5』だ。そして、四列目のマスは『23、2、10、14、16』となっていて、ドアの前の列は『15、19、21、3、7』となっている。この二十五のマス目に描かれている数字が何かしらの意味を示しているのは確かだ。

そして、唯一の赤文字で描かれている『24』が暗号を解くポイントであるはずだ。

そうでなければ、俺の頭じゃどうしようもない。

「数字の並びに法則性でもありやいいんだが……」

そう呟きつつ、千鈴に目をやる。

彼女はランダムにマス目を指差し、何かを納得するようにウンウンと首を上下させている。だが、脳味噌を使っている様子は皆無だった。どの角度から見ても、考えているフリをしているだけだ。

と思いきや、彼女が意外な発言をした。

「数字を全部足すと、どこかの部屋にある金庫の暗証番号になってるとか、かな？」

「……………」

なるほど、そういう考え方もあるのか。

暗号は、この部屋で完結しているわけじゃなくて、別の部屋と繋がって一つのクエストになっている場合もあり得るらしい。

ん？

つてことは……この部屋を出た後も、この暴力女と一緒にいなきゃなんねえのか？

おいおい、勘弁してくれよ……。

もしかしたら、俺、この女に扱き使われて過労死する運命かもしれないよ。

嗚呼、神様仏様、助けて下さい。

そう心の中で救済を求める。

すると、その刹那、俺の脳味噌がまばゆい輝きを放った。

「マスの数字を横に足していくと、どの列も六十五になるぞ！」

いわゆる、天才的な閃きってやつが、俺の頭の中で発生しやがった。

きっと、最初で最後の奇跡が起きたのだろつ。

その瞬間、俺は、この二十五個の数字が何を意味しているのかを理解した。

「これ、魔方陣だぞ」

俺が正解を告げると、彼女はきょとした顔で首を傾げた。

「へ？ 魔法陣？ 魔女とかが儀式に使うやつ？」

そんなオカルトちつくな暗号であるわけがない。

「……おまえ、学校で魔方陣を習わなかったのか？ 算数の時間にやったる」

「そ、そうなの？ 全然記憶にないわよ、あたし……」

頼りなさそうな顔で聞き返す千鈴。

さすが馬鹿を自認するだけのレベルだ。

「自分で計算してみろよ。上下の列を足しても左右の列を足しても、対角線上のマスをも足しても、全て同じ答えになるだろ？ そういうのを魔方陣って言うんだ」

「あ！ ほんとだ、縦に足しても横に足しても全部六十五になる！」
手を叩く千鈴。しかし、すぐに冷めた表情になり、俺を睨んだ。

「で、だから何なの？」

「……だから、この暗号の答えは『65』だ。きっと、他の部屋に『24』に関する宝箱があつて、そこで『65』っていう数字が意味を持つてくるんだぜ」

「……………」

疑惑の目で刺された。

「あんた、適当な答えを言つて、あたしから逃げようとか思つてるんじゃないでしょうね？」

「思つてねえよ！」

即、否定したが、凶星だった。

この女、何気に勘が鋭い。

「これが魔方陣だつてのはマジだぞ。絶対に『65』と『24』つていう二つの数字は、覚えといて損はない」

「……PKを賭ける？」

さらつと酷い提案をする鬼女。

超ドSつてやつですか？

でも、今回は引かねえぞ。

「おう、賭けてやろうじゃねえの」

俺は、どう考えても割に合わない勝負を、真っ向から受けて立つた。

自分の出した答えに自信があつたのだ。

千鈴は目を丸くして俺の顔を見つめた。

「へえ、賭けに乗るんだ？ 意外だなあ……。あんたみたいな男は、負けるかもしれない勝負には絶対に乗ってこないと思つたわよ」

「おいおい、どういふ目で俺を見てるんだ、おまえは？」

「駄目人間」

漢字四文字で切り捨てられました。

「……俺のこと、まだ何も知らねえくせに、酷え評価するなよな」

「あーら、ごめんなさい。傷ついちゃった？ でも、あたしつて男を見る目は確かなのよ」

男を見る目は確か？ 寝言は目を閉じて言え、馬鹿女！ という罵声を、発声寸前でストップさせて自爆回避。

「じゃあ、逆に聞くが、おまえの男性観はどんなもんだ？ どんな男なら付き合つていいと思うんだ？」

そう質問すると、彼女は何か答えようとして口ごもった。

「あたしには……」

何度か口を開閉させて言い澀む。

そして、その美貌が物悲しげに歪んだ。

一瞬、泣き出すんじゃないかと心配したほどだ。

しかし、彼女は涙を浮かべはしたものの、泣きはしなかった。

「あたしの理想は、本当に困った時に自分を犠牲にしても助けてくれる男の子よ」

彼女はそう答えて微笑んだ。

俺でなくとも思わず抱き締めたくなる。そんな表情だった。

【8・西園エリカ】

周囲を警戒しながら目の前にあるドアに意識を集中し、尚且つ畏の発動に備えて逃げる態勢も整えておかねばならない。そんな状況で、呑気に話しかけてくる馬鹿者が隣にいたら、忍耐の限界を極めて怒りの導火線に火がつき、無意識のうちに怒鳴り散らしてもおかしくない。私なら三秒と我慢できずに、そいつの頭をひっぱたくだろう。そういう馬鹿者は、口の中に汚泥でも詰め込んで、唇を縫い付けられても文句は言えな……って！ それ、私のことじゃない！ お邪魔虫じゃん！ いちゃいけない人じゃん！ と今更ながらに自覚しました。

はいはい、わかってます。気づくの遅いですよ、遅すぎですよ。でも、こんな状況で自分の行動を省みることなんて、普通できる？ 頼りになる人が目の前にいるのに、何の接触も持たずに遠目で見てるだけなんて無理でしょ？ 色々と話題を振って、自分と相手の関係を繋ぎ止めようと努力するよ、絶対に。

実際、私は今、黒澤のこと、思いつきり邪魔しちゃってます。きつと、怒らせちゃってます。彼は、口では何も言わないけど、内心の憤りがヒシヒシと伝わってきます。駆除される寸前、という可能性も……。

そんな不安感も持ちつつ、私は黒澤の肩越しに赤く塗られたドアを見た。

「開けないの？」

彼は赤く塗られたドアのドアノブに手を掛けたポーズのまま、じつと動かない。

「もしかして、中に誰がいる？」

「……………」

黒澤はチラッと私に目をやり、少しだけ首を上下させた。

どうやらドアの向こうに人の気配を感じるらしい。

「物音から判断して複数ではないが、この部屋の中には確実に生き物がいる」

テスト生じゃなくて、生き物と表現しているところが不安だ。

もし蛇とか蜘蛛がいたら嫌だ。でも、ライオンとかトラとかの猛獣よりはマシだろう。私としては、チワワとかテリアの小型犬が尻尾を振って迎えてくれるのを期待したい。あり得ないだろうけど……。

「じゃあ、入るの止めとく？」

未知の危険に立ち向かう勇気なんてない。

だから、それを回避するっていう結論に至らないかなあ、と一縷の望みを胸に訊いてみた。

返答は、思った通りのノー。

「いや、目に見える危険ならいざ知らず、正体不明の存在を避ける意味はない。まして生き物が相手であれば、避けるのは敗北と同義死と同等の愚行だ。だが、相手が何かわからぬ以上、問答無用で襲われる危険もある。だから、おまえは一応、逃げる態勢を整えておけ」

「はい」

私は彼の邪魔をしないように、更に三步身を離れた。

「よし、開けるぞ」

「うん、いいよー」

黒澤はゆっくりとドアノブを捻り、ドアを押し開けた。

室内は剥き出しのコンクリートに包まれていた。何も入っていない倉庫という感じだ。高い天井から吊るされた裸電球しか光源がないので、薄暗くて肌寒い。そして、心なしかジメジメしていた。

「あれ？」

黒澤と共に室内へと踏み込んだ私は、首を傾げて彼を見た。

「誰もいませんよ」

室内にあるのは、二メートルくらいありそうな銀色の人形と、同

じくらい大きなロッカーだけで、それ以外は何もない。

「俺たちが入ってくるのを察して、ロッカーの中へと身を隠したのだろっ」

「それくらい臆病な人ってことですね！」

相手がテスト生とわかり、私はホッと胸を撫で下ろした。

猛獣や魔獣ならいざ知らず、同じテスト生であれば、黒澤が何とかしてくれるに違いない。

しかし、彼は厳しい表情で、鋭い視線をロッカーに向けた。

すんごく警戒しているみたいだ。

「臆病者？ そうだったら何の問題もないのだが……。ロッカーの中に隠れた奴が我々に殺意を持ち、何らかの罠もしくは武器を使用する為に身を隠したのだとしたら厄介だぞ」

そんな風に気難しげに呟く黒澤。

すると突然、ロッカーの中から声が響いてきた。

「そこにいるのは黒澤か？」

重々しい男性の声だ。

しかも、黒澤を名指しして呼びかけている。

もしかしてお友達？

「……………」

黒澤は返事をせずにロッカーの裏側へと移動して、ズボンのポケットに手を入れた。そして、何かを取り出した。

一瞬、髭剃りマシンかと思ったが、よく見るとスタンガンだった。しかも、持つ所が不自然に膨らんでいて、そこにテープが巻きつけられている。

それって、改造スタンガン？ それで相手が出てきたところをビリビリと攻撃するつもり？

そう思ったのだけど、どうやら彼には違う思惑があるようだ。

黒澤はスタンガンを手にした状態で片足を振り上げ、ロッカーを足の裏で押さえるようにした。

ベコッという異音を発するロッカー。

「何をしている？ もう一度尋ねるが、そこにいるのは黒澤恭司か？」

ちよつと慌てた感じの声がロッカーの中から聞こえた。

「……おまえこそ誰だ？ まず、そっちが名乗れ。名乗らなければロッカーを蹴り倒して、おまえを中に閉じ込めるぞ」

黒澤が脅すと、相手はすぐさま名乗った。

「我が名は風守涼貴。X1458号だ」

堂々とした名乗りだった。中の人、相当に自信家だ。っていうか、口調がすんごくふてぶてしい。きつと、周囲の迷惑を省みずに威張り散らすタイプの人間だ。私との愛称は最悪と言つていい。できれば、顔を合わせたくない。

しかし、名を聞いた黒澤の反応は意外なものだった。慌ててロッカーから足を離し、スタンガンをポケットの中にしまい、ロッカーの正面まで駆け足で移動して、顔も見えない相手にぺこつと頭を下げたのだ。

「お久しぶりです、風守さん」

しかも、敬語を使用しちゃってます。

中の人の反応はと言うと、これまた変なもので、ロッカーに入つたまま「うむ、久しぶりだ」と答えた。

そんな狭い所にずっと入ってないで、さっさと出てこればいいのに……。

「確か……一年ぶりですか？」

「うむ。秘密結社オズのロシア支部に移動させられてな。あちらのサバイバルテストに参加しておったのだよ。ふふふ、可笑しいだろ？」

ロッカーの中で喋ってるアンタの方が何倍も可笑しいと思うよ、という突っ込みをグツと我慢する。

「宇治川蘭子の死後、強者は各国の支部に分散される傾向にありますからね」

ロッカーと会話する黒澤。

シユールな画だ……。

よく吹き出さずに会話してられるものである。

「うむ。そのお陰もあり、随分と難儀した。サバイバルテストという戦場での言葉の壁は、乗り越えられねば致命的なハンデとなる。それを身をもって実感させられたぞ。リックやソフィアの苦勞が察せられるぞ」

「よく日本に戻って来ることができましたね」

「あちらのテスト生を皆殺しにしてやったら、面倒を見切れぬとばかりに追い返されたのだ」

「……相変わらずですね」

「テスト生と言えども、所詮は人間だ。《拳銃男》の首を素手で抉り飛ばした《デスマスク》とは比較し得ぬよ。そして、あれくらいのレベルでなくては、我を傷つけることなど不可能。まして屠るなど論外と言えよう」

「……そうでしょうね」

黒澤は、フーツと鼻から息を吹き、ロッカーのトビラを手の甲でノックした。

「風守さん、そろそろ出てきてもいいのでは？」

「うむ」

返事と同時にロッカーのトビラが開いた。

そして、中の人が姿を現した。

「むっふーっ。素晴らしい解放感だ。やはりロッカーの中などには率先して入るものではないな」

そう言っただけでボリボリと首筋を掻きながら悠然とロッカーから出てきたのは、針金のように痩せ細っているザンバラ頭の侍だった。着物をだらしなく着崩している様は、時代劇に出てくる不良侍っぽい雰囲気がある。それが美男子であれば何の違和感もないのだけど、この人はどう見てもオジサンだ。まあ、ダンディと言えなくもない容姿の持ち主だが……私の趣味じゃなかった。

うわぁ……濃いキャラだなあ、というのが第一印象である。

どの角度から見ても色物。

実に暑苦しい。

あのままロッカーを蹴り倒して、中に閉じ込めちゃえば良かったのに。

そんな私の心の声が聞こえたのか、風守涼貴は切れ長の目でじろりと私を睨み、W型の口ひげをくいつと上に歪めた。

「この小娘は黒澤のアレか？」

アレって何？ 恋人の代名詞かな？

「……いえ、断じて違います」

苦々しい顔で否定する黒澤。どうやら《アレ》の意味が不本意なものであつたらしい。

「うむ、そうか。ならば単なる仲間ということだな。よかるう」

何を納得したのか、風守は腕組みをして、偉そうに大きく頷いた。

「小娘、名乗るがよい」

その態度の大きさと命令形の口調にカチンと来たが、黒澤が敬語を用いる相手なので、私は素直に名乗った。

「K3001号の西園エリカですよ」

それを聞いた風守は、目を丸くして黒澤を睨んだ。

「西園……エリカだと？ この小娘、あ奴の血縁者なのか？」

「確認したわけではないので」

「……………」

風守涼貴は腰の帯に差している刀の柄に手を掛けて、私を真っ直ぐに見た。

そして、重々しい口調で訊いてきた。

「小娘、貴様は西園祐樹の血縁者か？」

「そうですよー」

お気楽に答えておいてハッと気付いた。なぜこの人は私の兄の名前を知っているのだろうか、と……。

【9・西園エリカ】

なぜ私の兄を知っているのだろうか？

その疑問をストレートにぶつけてみた。

「なんで私のお兄ちゃんを知ってるんですか？」

「ほう、兄か……。なるほど、どこかしら面影がある」

風守涼貴は私の顔をじろじろと凝視しながら、納得気に頷いた。
そして、ムフフーツと鼻を鳴らした。

「なぜ我らが貴様の兄を存じておるのか、想像できぬのか？　ちょっと脳味噌をひねれば答えなど易々と導き出せるはずだぞ」

彼は偉そうに言っつて、W型のヒゲを摘む。

「わからないから聞いてるんですよっ！」

私が叫ぶと、彼は笑いを堪えるように唇を歪め、目尻にシワを刻んだ。

「小娘……貴様の脳は何のために存在しているのだ。無駄に体重を増やすただけか？」

「ち、違いますよ！　それに、私は太ってません！　理想的体重のスマートさんです！」

「むっふー。確かに、ギスギスホネ女のように痩せているわけでもブクブク河豚女のように太っているわけでもなさそうだ……が！

では、その脳は何の機能を有しておるのだ？　兄が謎の組織に誘拐されたことと、貴様が誘拐されたこと、それを結びつける程度の知能もないのか？」

「！」

指摘されて初めて気付いた。

そう、彼が言うように、全く同じシチュエーションだ。私と兄は、何の前触れもなく、突然、黒服の男たちに誘拐されたのだ。ってことは……つまり、どういうこと？

まさか、兄も組織に監禁されてて、《サバイバルテスト》に参加

してる？

もしかすると、この建物のどこかにいる？

そんな期待と希望が胸の中で大きく膨張していく。

しかし、それは二秒も経たずに粉碎された。

「前もって言うておくが、このサバイバルテストに貴様の兄は参加しておらぬぞ」

「……どうしてですか？ 私たちと同じ組織に誘拐されて監禁されてるなら、サバイバルテストに参加させられてるはずでしょ？ それとも、今回のテストには参加してない、っていう意味ですか？」
「そうではないぞ、小娘。貴様の兄が誘拐されたのは、かなり以前のことだろう？ 違うか？」

「……違わないです。もう八年くらい経ちます……」

「ふむ。八年か……長い年月だ。この地獄を生き抜くには、あまりにも長すぎる」

ヒゲのオッサンは重々しい口調で不吉な独り言を零す。

「我のごとき剣術の天才や、宇治川のごとく殺人の天才や、藤森のごとき鬼の極みや、柳原のごとき憎悪の極みや、ジョーのごときサバイバルの達人であれば、地獄ですらも悠々と生き抜くことができるが、貴様の兄は残念ながら何にも達していなかった」

「それ、どういう意味ですか！ それって、まるで、お兄ちゃんが死んじゃってる、みたいに聞こえますよ！」

堪らず私は叫んだ。

すると、黒澤が一本しかない手を私の頭に乗せて、風守を睨みつけていた私の頭をぐりっと回して、自分の方に向けた。

怖いくらい真剣な表情だ。

「エリカ、よく聞くんだ」

「な、何ですか？」

ちよつと怯んでしまう私。

彼は一度目を閉ざし、祈るように小声で何かを呟いてから、私の目を真っ直ぐに見た。

「おまえの兄は死んだ」

「え？」

死という予想だになかった言葉に、私は動揺を隠せなかった。頭の中が真っ白けに染まり、ハテナマークだけが鮮やかに点灯している感じがした。

そんな私を見て黒澤は僅かに微笑んだ。

「いや、それは正確な表現ではないな……。実際に俺の目で見たわけでもないし、あいつの死体を確認したわけでもないのだから。しかし、西園祐樹は数年前のサバイバルテストで致命的な傷を負い、テスト生から除外されたのは確かだ」

「嘘！ そんな……。じゃあ、兄は今、テスト生じゃないっていうことですか？」

「そうではない。さっきも言った通り、おまえの兄は死んだのだ。死んだも同然、というべきか」

「それ、どういう意味ですか？」

「テスト生から除外された西園祐樹は、組織の人間に人体を改造され、殺人マシンと化したのだ。そして、テスト生を殺す役割を与えられた」

テスト生を殺す役割？

っていうか、改造って、どういう意味？

黒澤は尚も続ける。

「殺人マシンと化した西園祐樹は、テスト生たちから《拳銃男》と呼ばれ、忌諱される存在となった。あいつが殺したテスト生の数は軽く五百を超えるだろう。その中には、俺の仲間も含まれている」

その淡々とした言葉を聞いた風守は、嫌らしい流し目を送った。

「我は直接見ておらぬが、あやつ、ジョーや宇治川を道連れにしたそうだな。リックとソフィアは不幸中の幸いで、その修羅場に居合わせなかったらしいが……。むふふーっ。我も、その祭りに参加したかったぞ」

「……風守さん、軽口は控えて下さい」

「ふむ。すまぬな」

「……………」

黒澤は小さく溜め息を吐き、改めて私を真っ直ぐに見た。

その目は冬の寒空のように澄んでいて、私を酷く不安にさせた。

【10・西園エリカ】

黒澤が何を言ったのかは定かじゃない。

きつと脳みそが、彼の言葉を理解しなくて、拒絶したのだから。

だから、『拳銃男』についての会話は一時棚上げということにした。っていうか、私が強引に切り上げた。これ以上、兄が死んでいくという絶望的な言葉が鼓膜を刺激すると、負の感情が暴発して泣き出してしまうそうだったから。

兄は死んでない。

死んでないはずだ。

もしそれが事実だとしても、決定的な証拠でも突き付けられない限り、私は信じたくない。

そう心で強く念じる。

そうすれば、彼らの発言が覆るかもしれない。

「……………」

私は数回深呼吸をして、無理やりに気持ちを入れ替えた。

余計な慰めの言葉とか変な気遣いをされたら癇癪を起してしまっただろうけど、その辺は大人の対応というやつで、二人とも何も言わずに口を噤んでいてくれた。

さて、改めてサバイバルテストに挑むぞっ！

と気合いを入れてる私に、風守が呆れ顔を向けた。

「貴様の体を包んでいた負の感情が霧散しおった。何とも気持ちのよい性格だな。少々感心したぞ」

「お兄ちゃんのことは気になるけど、それよりも今はサバイバルテストを生き抜いて生還するのが第一でしょ？」

「ほう！ これは頼もしい。その細腕をもってして生還するとはざくか」

可笑しそうに目を細める風守。

このヒゲ、私を小馬鹿にしていますよ、完全に。

「頑張る心は大切なんです！　どんな困難に遭っても笑顔で突進すれば女神さまが助けてくれる、っていうコトワザがあるくらいです」

「そんな諺はない」

黒澤がボソツと否定した。

風守は、むっふーっと鼻息を吹いた。

「何にしろ、キーキー喚かぬ小娘というのは貴重な存在であるな。我との同行も許可してやろう。感謝するがよい」

「……………」

このヒゲ、偉そうに許可を出してるけど、ほんとには一人じゃ不安だから私たちについてくるつもりなのだろう。

すんごく迷惑ですね。

一応、戦力になりそうなので追い出したりしないけど。

「風守さん、一つ質問があるのですが」

徐に、黒澤がヒゲおやじに声を掛けた。

風守は腕組みをしてアゴを持ち上げ、学校の先生みたいに質問を促す。

「かまわぬよ。何でも訊くがよい」

「なぜロッカーの中に隠れていたのですか？」

それは私も不思議に思ったことだ。

ロッカーの中に入っていた理由が知りたい。

「おまえたちが部屋に入ってきたからだ」

風守は当然のことのように答えた。

まるで私たちの所為でロッカーに入らざるを得なかったと言っているみたいだ。

「私たちが入ってきたから？　意味がわかんないんですけど」

「わからぬか、小娘？」

彼は口ひげを摘んでひねりながら、嫌味ったらしく言った。

ものすごく馬鹿にされている感じだ……。

そのWの形をしたヒゲを筆ってやりたい。

「全然わかんないですっ！」

私が叫ぶと、風守はちらつと横目で黒澤を見やり、ふんと鼻を鳴らした。

「黒澤は、どうやら察したようだぞ」

「え！？　ほんとに？」

確認するまでもなかった。

黒澤は私たちの会話に耳を貸さず、床に手について何かを探るような仕種をしている。もう理由を聞く必要はありません、と全身で答えているも同然だ。

「ん、もう！　私はまだわかんないのに！　もったいぶらずに教えてくれてもいいじゃないか！」

私が足を踏み鳴らして訴えると、風守は小馬鹿にするような表情を改め、真剣顔を作った。

「畏だ、小娘。この部屋には、能無しなテスト生を即死させる子供騙しの畏が仕掛けられておるのだ」

「え……うそ……」

畏という言葉が聞かされ、思わず足下を見回してしまった。

黒澤の行動から察するに、きっと畏は床に仕掛けられているのだ。うかつに歩き回ると危険だ。畏が解除されるまで、大人しくしているべきである。

畏を解除できない、という仮定はしない。

「ど、どんな畏なんですか？　どっかに落とし穴があるとか？」

「そんな単純な畏ではないぞ、小娘」

風守は可笑しそうに答え、床を指さした。

「この部屋の床を見る。一面が水浸しになっているだろう？」

「はい」

言われて気付いた。

水溜りこそできていないけど、ホースで水撒きをしたみたいに床

一面が濡れている。

どうりで室内がジメジメしているわけだ。

「この部屋は中央に向かって床が微妙に傾斜していてな、四隅に口を開いている小さな穴から水がしみ出して部屋の中央へと流れる仕組みになつておるのだ」

「それが罨なの？」

「……………」

呆れ顔で閉口する風守。

「エリカ、水と相性の良い罨は何かわかるか？」

床を調べていた黒澤が、いきなり問題を出してきた。

私は咄嗟に頭をひねる。

「えっと……………あ、油？　じゃなくて火とか？」

あんまり自信がなかったけど、それらしい答えを出してみた。

それを聞くや、啞然呆然として額を押さえる黒澤さん。

どうやらの外れだったらしい。

「……………おまえは本当に義務教育を受けたのか？」

「ちゃんと受けました！　そんなの、いきなしクイズを出す方が悪いんです！」

「……………これはクイズではない。正解ありきの問いだ。それなのに、おまえは……………」

彼の深刻そうな溜め息が私の心をサクツと傷つけてくれた。

更に、追い打ちをかけるように、風守がお腹を抱えて大笑い。

「うはは！　これは先が思いやられるわ！」

なんて失礼なヒゲだろう。

もし私のポケットにハサミが入っていたら、その変なヒゲをチョッキンしてやるのに！

「聞くがよい、小娘。この部屋には轟雷の罨が仕掛けられておるのだ」

「……らい？」

意味不明である。

「強力な力ミナリのことだ。ドアが開くと同時に、床一面に雷が流れる仕組みなのだ」

「ビリビリ電気な感じ？」

「まあ、そう言って良いが……。言うほど優しいものではないぞ。なにせ、床に足をつけていれば、確実に感電死するのだからな」

「え、うそ！ そんなじゃ、どうやって罠から身を守るんですか？」

ドアを開けたら死んじやうじゃないですか！ あ！ よく考えたら私たちって、この部屋から出られないんじゃない？！ ドアを開けたら電気でビリビリなんですよ？」

自分たちが置かれている死と隣り合わせの状況に、今更ながらに気付いた私は、ちよつとパニックになって叫んだ。

ドアを開けたら罠が発動するってことは、この部屋から出ようと思ってもドアが開けられないわけで……。もし今、誰かが部屋の外からドアを開けたら、私たちは三人とも感電死なのだ。

つまり、絶体絶命。っていうか、チェックメイト。

「ど、どうするんですか！」

「落ち着け、小娘」

「お、落ち着いてたら死んじやいますよ！ 今、ドアが開いたらアウトです！」

「いいから気を静めて心の熱を排気するのだ」

風守は低い声で言って、私の首に手を当てた。

冷んやりとした手の感触。

すると、不思議なことに、全身を駆け巡っていた熱いものがスー

ッと抜けていくではないか。

どんな魔法を使ったのだろう。

もしかして、このヒゲ、結構すごい人？

「落ち着いたか？」

「うん……」

風守は手を離して薄らと微笑んだ。

優しい感じだ。

きつと、私を安心させるために意識して作った表情だろう。

「それでは解決法を教えてやろう」

彼はアゴをつんと持ち上げて、ヒゲを摘んだ。

「我が入っていたロッカーは、内部が絶縁体で覆われていて、雷を通さぬのだよ」

「あー、なるほどねー。だから、ヒゲ……じゃなくて風守さんは、私たちが部屋に入ってきた時、ロッカーの中に入ってたんですね」
「うむ」

一気に疑問が全て解けて、なんだか妙に嬉しい気分になった。

【11・西園エリカ】

風守涼貴がロッカーに入っていた理由はわかった。

私たちがドアを開けた所為で部屋の床に電気が走ったからだ。

つまり、逆に言えば、ロッカーに入らないとドアを開けちゃダメ
ってこと。

でも、ロッカーの中は大人一人分くらいの広さしかない。私と黒
澤なら、無理やりに体を密着させれば入れないこともないけれど、
風守が加わると絶対に無理。三人一緒には入れない。

それって……。

「この部屋から出るには、誰かが感電しなきゃ駄目ってことですか
？」

嫌な予感と共に質問する。

「ん？ 何を言っておるのだ？」

風守が首を傾げた。

ちよっと、とぼけている感じだ。

いや、当たり前前の質問をするな、という表情なのかもしれない。

「どうやってドアを開けて外に出るんですか？」

繰り返し質問しておいて、ハッと気付いた。

このサバイバルテストは、弱者の犠牲で成り立つ最悪のゲームで
ある。馬鹿者や無能者といった足手纏いは、早々に切り捨てられる
定めだ。こういう状況に追い込まれた場合も、当然ながら役立たず
が死ぬことになるだろう。そして、三人の中で一番不必要なテスト
生が私である。一秒も悩むことなく即選定できるくらいに、ぶっち
ぎりで要らない存在だ。

あー、なるほどー。問題を解決するのは簡単ですねー。

死を前提としてドアを開く役目を担うのは、私だよ。あははー。

……って、こらー！

私を犠牲にするなんて酷いです。あんまりです！

「か、可憐な乙女を犠牲にして生き残ろうとするのは強姦に匹敵する大罪だ、っていうコトワザを知らないんですか！ 私は断固として、ドア開けの任務を辞退しますからね！」

「ドア開けの任務？ 何を喚いているのだ、小娘よ。意味がわからぬぞ」

「風守さん、彼女の相手をする必要はありませんよ。エリカは時折、自分の妄想だけで勝手にパニックを起こして泣き喚くクセがあるんです」

黒澤がボソツと忠告した。

さもあらん、という顔の風守。

「ほほう……重度の被害妄想か。兄妹して心を病んでおるといふことだな」

「病んでません！ 勝手に決めつけないください！」

変な属性をつけられちゃ堪らないので、早いうちに強く否定しておいた。

そして、絶対にドアを開けませんオーラを全開にして二人を睨みつける。

そこでフツと目に入ったモノ。

それは、二メートルくらいありそうな銀色の人形だった。

今更だけど、ロッカーと並んで目を引く、いや、ロッカー以上に目立つ代物だ。

その時、私の脳味噌内で裸電球がピカーンと輝いた。

「そっか！」

まるで神様の贈り物のように、私も死なない方法が思い浮かんだ。あの人形によじ登ってれば、床下に電流が流れても死なないんじゃないだろうか。

そう思い、人形に駆け寄って手の平でペシペシと叩いて見せた。

「これに肩車してもらってれば、室内が電気地獄になっても助かるんじゃないですか？」

「小娘よ……脳味噌は備わっておるのか？ やはり、その頭は見栄

えだけ良い飾り物か？」

「ち、違いますよ！　ちゃんとして脳味噌あります！　超高性能です！」

「超高性能？　いや、中古性能と聞き間違えたか？」

「誰が中古ですか！　私は新品です！　ピッカピカのスベスベです！」

「ほう、ピカピカでスベスベの脳味噌なのか。それは頼もしいな。むははは！」

何が可笑しいのか、風守はお腹を抱えて大笑いしだした。

私が笑われてる感じなので、物凄く不愉快だったけど、何を笑われているのかわからないので何も言えない。

黒澤はというと、私たちのことなど放ったらかしにして室内を調べている。

なんという仲間思いの男なんだろう。薄情者の称号を、ノシをつけてプレゼントしたい。

「小娘、この西洋甲冑は何でできていると思う？」

「せーよーかつちゅー……って何ですか？　この人形のことですか？」

「……………」

啞然とする風守。彼は、憐れむような顔で、いい子いい子するみたいに、私の頭を撫でた。

私の無知さを嘆いているようだ。

ちよつとムカツとしたけど、普通の女の子は《せーよーかつちゅー》とかいう人形なんて知らないはずなので、怒りが爆発することはなかった。

「これ、ごつつい人形ですよ。このせーよーかつちゅーって人、何かのアニメのキャラですか？」

「……完全にアニメと無関係ではないが、キャラクターではないぞ」「じゃあ、何ですか、これ」

「昔、西洋の戦争で用いられていた全身鎧だ。一見、人形が剣を持

っているようだが、実は中身はない。空っぽだ」

「あー、鎧なんですか。どうりで中身がスカスカなわけですねー。でも、素材が鉄っぽいですから、これ着てれば、無敵なんじゃないですか？」

これを着れば、銃で撃たれても安全な気がする。

そう思ったのだけど……。

「小娘よ、言っておくが、この甲冑は最低でも三十キロはある。装備しようなどとは思わないことだぞ」

「三十キロ……」

装備するどころか、着ることすら無理じゃん、これ。何の役に立つの？ これって、着て動ける人、いるの？

っていうか……。

「これ着てたら、電気でビリビリじゃないですか！ 鉄は電気を思いつきし通しちやいます！」

「ほほう、ようやく気付いたか。全くの馬鹿者ではないようだ。本来なら無能者と罵るべきなのだが、小娘の場合は良くぞ気付いたと誉めてやるべきなのだろう。感謝するがよいぞ。むはははは！」

そんな風に馬鹿笑いして、私の頭を撫でる風守。

なんて失礼なヒゲだろう。完全に私を見下して、面白がつちゃつて。いつか見てなさいよ、みんなの役に立って、絶対に見返してやるんだから！

そう心の中で誓う。

でも、宣言はしない。

できなかったら、あとで絶対にからかわれるから。

「風守さん、これ以上ここに留まるのは時間の無駄以外の何ものでもないの、さっさと部屋を出ましょう」

黒澤が話の流れを修正した。

「うむ」

風守は重々しく頷いて、ロッカーに歩み寄った。そして、それを両手で抱え上げるようにして持ち上げた。

「むっふー！　なかなか重いが……持てない物ではないな。もし小娘だったら、持ち上げた瞬間にバランスを崩して倒れ、下敷きになって即死しておっただろうな。むふふ！」

あんな重そうな物を持ち上げて無駄口を叩く余裕があるんだから凄いい。このヒゲ、口だけの男じゃない。

黒澤は手伝う気がないのか、腕力に自信がないのか、彼の肉体労働を眺めているだけで何の行動も起こそうとしなかった。

ロッカーをドアの前に運ぶと、風守は何を思ったのか、大きな掛け声と共にロッカーを横倒しにした。

その意図を訊いてみる。

「どうして倒しちゃうんですか？　これじゃ入れないですよ」

「小娘よ、少しは察せねばならぬぞ。僅かずつでも、そのスベスベツルツルの脳味噌にシワを刻んでいかねば、後々に地獄の苦悩を味わうはめになる。が……まあ良い。教えてやろう」

耳に痛いお言葉。

でも、教えてくれるなら問題なしです。

「さつき、これの内部が絶縁体で覆われておる、と説明しただろう？」

「うん」

「そして、雷は床の上にしか走らない。つまり、ロッカーを横倒しにし、その上に乗っていれば死なぬということだ」

「そうなんですか？　電気の破片とかが飛んでこないんですか？」

「放電しない保証はないが、直接感電するよりはダメージが少なくて済む。何より、仲間を失わずに済むのであれば、多少の電撃など我慢できるというものだろう」

「我慢するんですか……」

「うむ。我慢だ」

「うー。怖いなあ」

ちよつと痺れるだけなら我慢できそうだけど、痛いのは嫌だ。

そんな不安が表情に出ていたようだ。風守はニヤリと笑い、私の

頭に手を乗せた。

「小娘は我と黒澤が守ってやるから安心するがいい」

そう言って彼は私の脇の下に手を差し込み、赤ちゃんに高い高いをするみたいにフワツと持ち上げた。そのまま横倒しのロッカーの中に下ろされる。

黒澤は何の言葉もなくロッカーの中に入ってきた。

風守も着物の裾を捌いて入ってくる。

二人で私を挟むようなポジションだった。

「よし、黒澤、ドアを開けるがよい」

命じておいて、風守は私の頭を抱えた。

なんだか、お父さんに抱きしめられてる感じがして、嫌な気はしなかった。

黒澤が無言でドアノブに手を掛ける。

ガチャ。

ドアノブが捻られた。

その瞬間――

バチン！

野太いゴムが弾けるような音と共に、目の前でフラッシュが焚かれたような、まばゆい閃光が走った。

「今だ、廊下に飛び出せ！」

黒澤の怒鳴り声がした。

でも、私は何もする必要がなくて。風守に抱きかかえられて廊下へと運び出された。

「……………」

何はともあれ、無事に出られて良かった……。

そうホツとしたのも束の間――

「ぎゃあああああ！」

すぐ近くで物凄い悲鳴が上がり、私の心臓を大きく跳ね上げさせた。

【12・古城篤也】

《魔方陣の部屋》を出た後、千鈴の後をついて歩きながら、そのツンツンした冷たい心を何とか解凍しようと冗談を飛ばしているとある言葉で彼女の表情が変わった。

それは、「おまえ、レディ」と同じくらい良い女だぜ」という下品な言葉である。

股間を強打されるかと思い、咄嗟に身構えたが、彼女は攻撃してこなかった。

「あんたの飼育係ってレディ」だったんだ？」

「おう」

「それは……珍しいわね。あれ以来、飼育係にはならないって言っていたのに……。何か心境の変化でもあったのかしら……」

千鈴は怪訝そうに独り言を呟いた。

どうやら、レディ」が飼育係をするのはレアケースのようだ。

それって、俺が特別なテスト生って意味か？　と思ったのだけど、どうやら違うらしい。

「きつと、あんたの無様な姿を觀賞して気晴らしがしたいんでしょうね、あの人は」

「俺は気晴らし要員かよ！」

彼女の口ぶりだと、レディ」は何かしらの事件がきっかけで飼育係になるのを止めた、ということだろう。そして俺は、壊して遊ぶ安物のオモチャってわけだ。なんとも迷惑な話である。

よくよく思い返してみると、あの女は俺を誰かと比較して馬鹿にしてばかりだった。《彼は素直で真面目なテスト生だったのに、君ときたら……》とか《彼は予想レベルを上回る優秀なテスト生だったけど、君は……》とか、ほんとに頭に來るぜ、マジでよ。もし生還して、あの女と顔を合わせる機会があったら、絶対に唾を吐きかけてやるぞ。

苛立ちが俺の腹の中を熱くする。

「あの女、結構な美人なのに、あの口調だから、すんげーム力つくんだよね」

「それについては同感ね。彼女は性格がキツパリしてるから、嫌いな人間にはどこまでも冷酷になれるのよ」

「その対象が俺ってか？ 迷惑の極みだぞ。もっとM属性の強い奴を選んでくれってんだ、まったく！」

俺はぶつぶつと文句を零す。

それを見て千鈴は可笑しそうに鼻を鳴らした。

「ふふっ、きつと、レディ」はあんたのことをドMだと見抜いたのよ」

「断じて俺はドMじゃねえ！」

全力で否定しておいた。

変なキャラが定着しちゃ困る。

そこで、ふつと、いつかのレディ」との会話を思い出した。

「そういえば、あの女、誰よりも早く《鐘を鳴らせ》とか言ってたっけ。あれ、どういう意味だったんだろうな」

「《鐘》？ 何よ、それ。詳しく話さない」

意外にも千鈴が俺の独り言に食いついてきた。

俺はその時のことを思い出しながら答える。

「このサバイバルテストの話をしてる時に、あの女が言った言葉だ」

「じゃあ、その言葉には何かしら重要な意味があるわね。あの人、意味のない発言をするほど口数は多くないから」

あの女の口数が少ない？

そうだろうか。俺を罵る口の数が多かったぞ。

「……おまえ、あの女と知り合いなのか？」

「何回か顔を合わせたことがあるのよ。でも、親しい間柄じゃないわね」

「そつだろつな。美人同士がプライベートで仲良しになることなんざーありえねえよ。大抵の場合、不細工とコンビを組んで自分を際

立たせるんだ」

「……随分な偏見ね。何に基づいて言っているのかしら」

「一般論に決まってんだろ」

「……………」

千鈴は微妙な表情で俺を睨み、話を元に戻した。

「レデイ」は他に何かヒントとかアドバイスをしてくれなかったの？」

「ヒント？ あー……そう言えば、あの女、銅メダルがどうか言ってたっけ」

「ああ、銅メダルね。それはあんたが生還する為に必要なアイテムよ。Kナンバーは、銅メダルを三枚だけ手に入れば生還条件をクリアできるわ。簡単なものよ」

さらっと言う千鈴。

おいおい、それは超重要な情報だろ。もっと勿体ぶって教えてくれよ。そう思ったが、それを声に出す前に彼女が俺に背を向けたので、会話は打ち切られてしまった。

どうやら鐘というキーワードが彼女の心を捉えたようだ。

「鐘かあ……。もしかして、あの鐘かしら……」

そんな風にぶつぶつ呟きながら、千鈴は大腿で歩き出した。

どこをどう通ってきたのかは覚えてない。

いや、記憶しようという意思が皆無だった、と言うべきか。

ただ俺は、すたすたと先を行く千鈴のケツを追いかけていただけで、周囲の様子だとかライバルテスト生の行動だとかを意識することとはしなかった。そんなことしても、どうせ役に立たないし、この女と別れた瞬間に俺の命運も尽きるのだろうから、情報の収集なんか無意味なのだ。彼女が俺を不必要と判断して別行動をとったら、当初の予定通り、鬼畜ちつくな強姦魔に変身する予定である。

だが、彼女がどこを目指して歩いているのかは知っておくべきなのかもしれない。畏だらけの地獄部屋に連れていかれて、畏の種類

を見極める生贄にでもされちゃ堪らない。弱者は、できるだけ危険から身を遠ざけるべきであって、強者こそ死ぬべきなのだ。

とは言え、迂闊に話しかけたりすると、この女は俺の股間に容赦のない攻撃を加えやがる。

さつき、ちよつと馬鹿話を振っただけで膝蹴りが飛んできやがった。「ここは最悪の戦場で、一瞬の気の緩みが死に直結するから、無駄口は止めなさい」っていう忠告は、俺の股間が激痛で悲鳴を上げた後のことである。口より先に足が出る女なのだ。だから、話しかけにくい。っていうか、「話しかけるな！」というオーラで全身を包み込んでいるみたいに、その背中が会話を拒否している。

俺が許されているのは、彼女の形の良いケツを觀賞しながら歩くことくらいだろう。

はあ……情けない。

小さな自己嫌悪に浸りながら彼女の尻と睨めっこしていると、不意に視界がまばゆい光に包まれた。

「おっ、外に出たのか？」

網膜が焼かれそうな気がして、俺は顔の前で手の平をかざす。

「日の光なんて浴びるの久しぶりだな」

俺は込み上がる感慨を言葉に乗せて言った。

実際、太陽の光を拝んだのは何日ぶりだろう？ 相当に久方ぶりだ。でも、このまぶしさは不快じゃない。ずっと浴びていたい光だ。

「そうよね。Kナンバーのあんたが外出の許可なんかもらえるわけないし」

千鈴が可笑しそうに言った。

「外出？！ ランクが上がると、そんな特典があるのか！」

「あ、ううん、普通は無理よ。特別に優秀なテスト生だけが許される例外中の例外特典なの」

「ふーん……。つまり、おまえはすんげー優秀なテスト生、ってこ

とか」

馬鹿を自認する暴力女が、優秀だと評価される世界。

その常人ならざる格闘能力が高く評価されているというわけか。裏を返せば、何か一芸に秀でていれば評価される、ということだ。勿論、サバイバルに関する能力でなければならぬが、一般常識は無視される。つまり、犯罪行為であつても、それがずば抜けた才能であれば的確に評価してもらえるわけだ。例えば、強盗、暗殺、破壊など……いや、そういう能力こそが高く評価される世界なのである。

だとすれば、こんな俺でも評価される可能性がゼロじゃない。

俺が連れてこられたのは、石造りの暖炉が備わった豪勢な部屋だった。

残念ながら外じゃない。室内のカーテンが全部開けられていて、そこから日の光が差し込んでいるだけだ。でも、久しぶりに太陽を拝めたのでガツカリはしなかった。

「ぱつと見た感じ、金持ち様の別荘にあるリビングルームだな、ここは。ごつつい暖炉が成金的な雰囲気醸し出して嫌な感じだぜ。敷いてある絨毯の分厚さも、嫌味のレベルがすんげー高いし」

俺は見たままの感想を述べた。

千鈴はクスツと笑いを零す。

「そうね。見た目はお金持ちの別荘にある部屋って感じよね」

そう答えておいて、彼女はつかつかと何の迷いもなく室内に入っていく。

それへ、思わず声をかけた。

「おいおい、部屋の中に罠が仕掛けてあるかどうか確かめないのか？ 物陰に鬼畜なテスト生が隠れてて、俺たちを襲おうとしているかもしれないぞ。ドアが開けっ放しってのは、どう考えても怪しいだろ」

不用意な行動は死に直結する。そう口を酸っぱくして言っていた

のは、彼女自身だ。

それを忘れたかのように行動しているのだから、突っ込まずには
いられない。

「安心なさい。ここは平気。確実に安全よ。保証するわ」

「なんでだ？」

「この部屋は、あたしが目覚めたところなの。それに、テスト生が
隠れる場所もないわ」

千鈴は部屋の奥にあるソファアを差して言った。

クッションが柔らかそうで、仮眠するには最適のソファだ。俺
が捨てられてたゴミの山とは大違いである。この待遇の差は何だ？

これがランクの差ってやつか？ チクショウ！

しかし、なるほど、彼女が目覚めた場所であるなら、ブービート
ラップは仕掛けられていないだろう。

「でも、隠れられそうな場所ならあるじゃねえか。あの暖炉の中と
か」

「あれは雰囲気を出す為だけの飾り物よ。実用できる物じゃないわ。
だから、隠れるのも無理なの」

「へえ……」

俺は暖炉の中を覗き込んだ。

確かに隠れる場所なんてなかった。中には煙突へ抜ける穴すらな
いのだ。ここで薪を燃やしたら部屋の中が煙と煤で台無しになっ
てしまう。下手をすると、火事になりかねない。

「んで、俺をここに連れてきて、どうしようってんだ？」

自分の待遇の良さを自慢しに来たわけじゃないだろう。

その辺を問うてみると、彼女は天井を指差して軽い笑みを閃かせ
た。

「あんたが言ってた、《鐘》よ」

「あるのか、ここに？」

「いえ、ここじゃないわ。ベランダから上を見ると、建物の最上部
に見えるの」

「マジか?!」

俺は窓に駆け寄って、ガラスに顔をへばり付け、上方を見上げた。もしかすると、鐘を鳴らすことで《銅メダル》が一枚ゲットできるかもしれない。

「くそつ、見えねえぞ! どうやったらベランダに出られる?」

左右を見回して外に出られそうな場所を探す。

ベランダに出るには……、どうやら部屋の左奥にあるスライド式のドアをくぐればよいようだ。

「ちよつと、篤也! 見る前に、カーテンを使ってその粗末なモノを隠しなさいよ。いつまで裸でいるつもり?」

「お、おう、そうだな」

指摘されて思い至った。すっかり馴染んでいたが、俺はまだ全裸だったのだ。

言われるままにカーテンを引きちぎり、適当に体を包み込んで、カーテン止めのチェーンを帯の代わりにした。

見栄えは良くないが、全裸で歩き回るよりは数倍マシと言えるだろう。見ようによつては、古代のギリシャ人ぽい衣装だから。

「ちよつとはマシになったわね。あと、下品な発言をなくしてもらえるとありがたいんだけど」

「そんなことしたら俺のアイデンティティがなくなっちゃうだろ」

「あいでんていてい? 何それ。どこかの男性服のメーカー?」

「おいおい……」

さすがは馬鹿を自認するだけのことはある。間違え具合がすごい。

「俺が俺らしくある為に、みたいなことだ」

「あー、そういう意味ね……」

うんうんと頷いておいてから、千鈴は前置きなしでPKをしやがった。

「あんた、今、心の中であたしのこと馬鹿にしたでしょ!」

「おまえ……エスパーかよ……」

俺の股間が絶望の悲鳴を上げたけど、彼女はそれを無視してベラ

ンダに出ていく。

ほんと、鬼だ。男の痛みつてのを理解してない。

俺は潰れかけの股間を押さえつつ、内股で後を追った。

俺がベランダに出ると、千鈴は上を見上げるように手振りで示した。

「あそこ、見てみなさいよ」

「どれどれ」

俺は落下防止用の鉄柵にもたれかかるようにして上を見た。

そして、絶句。

俺たちがいるの何年も前に戦争で壊されたって感じの、ボロボロな城だった。

しかも、かなりデカイ。

自分がいる場所から周囲を見た感じだと、六階建ての大型デパートに匹敵する大きさだ。

その天辺に《鐘》が備えられた塔みたいなのがそびえていた。

「おお、あれか。確かに鐘だ」

「でしょ。あれを誰よりも早く鳴らせば、何かアイテムが手に入るのよ、きつと！」

千鈴は俺の肩をばしばし叩きながら言った。

なんかテンションが高い。

おのずと俺のテンションも上がってくる。

「よし！ そんじゃ、急いで行こうぜ」

「ええ」

俺たちは塔へと続く階段を探すべく駆け出した。

第二章 ペテン師と陰険コオロギとデスマスク 【1・古城篇也】

少しずつ状況が飲み込めてきた。

俺が今いるのは、ヨーロッパにあるような古い城の内部で、三階にある螺旋階段の前だ。千鈴が言うには、俺が目覚めたキッチンの一つ下の階らしいから、いつの間にか階段を上がっていたようだ。まあ、彼女のケツばっか見てて階段を上がってるのに気付かなかっただけだが……。まあ、それはそれってことで。現状さえ把握できりゃ、俺だって無能じゃない……。はずだ。一秒でも早く彼女の役に立って汚名を返上し、信頼度を増して、親密度も増していつて、いつか俺が彼女を利用する立場になってやるぞ。そうすりゃ、彼女を食えるだけでなく、生還することも容易いだろ。くつくつく。こりゃ、最初に彼女と遭遇してラッキーだったかもしれねえな。神様に感謝だぜ。

とにもかくにも、まずは《鐘》だ。

この城の天辺にある鐘をぶっ叩いて鳴らせば、《銅メダル》をゲットできるに違いない。千鈴は銅メダルなんか必要ないらしいから、メダルの奪い合いにもならねえ。良いことづくめだぜ、ほんと。

ただ、多少の不安もある。

なぜ彼女が《鐘》を鳴らすのを手伝ってくれてるのか、という疑問だ。はっきり言って時間の無駄だ。無意味な行動だろう。「ナンバーが何が必要としているのか知らねえが、銅メダルが要らないなら、俺と一緒に行動して、尚且つ俺の生還条件を満たしている場合じゃねえ。そんな余裕なんてねえはずだ。

それとも何か？ 鐘を鳴らして得られるのは銅メダルじゃなくて、他のアイテムだと予想してるのか？ 重火器とか刀剣の類だったら、横取りしようっていう魂胆なのか？ だから、協力してるのか？ もしそうだったら、俺、やべえぞ。さんざん利用された拳句にぶち殺される危険性が大だ。

そうならないように用心しておくか。

「……ここには損得勘定なしで協力してくれるような善人なんているわきゃねえし」

俺は自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「何？ 何か言った？」

どうやら呟き声が聞こえてしまったようだ。階段を二段ほど上がって上の階の様子をさぐっていた千鈴が、首だけ後ろに捻って眉を寄せた。でも、俺が何を考えていたかは察してないだろう。もし読心されてたら、この場でぶっ殺されちまうだろうし。

「おまえの用心深さに感心してたんだよ」

無難な答えを返しておく。

彼女は一瞬、不審げな顔をしたが、俺の心の内など興味ないようで、階段に視線を戻した。

「本当は、このフロアと下のフロアを調べつくしてから移動したいけど……まあ、仕方ないわね。他のテスト生に先を越されたら悔やんでも悔やみきれないもの」

「そりゃそうだ」

横取りされたら、と考えるだけでムカつく。鐘を鳴らして得られるアイテムは、俺の物だ。他の奴には絶対に渡さねえ。勿論、この女にもだ。

「なんで上に行かねえんだ？ 誰かに先を越されちまうぞ。さっさと行こうぜ」

なかなか階段を上がろうとしない千鈴に焦れた俺は、強い口調で促して先に行こうとした。

それを、腕を掴まれて止められた。

「待ちなさい、篤也」

「なんだよ」

「そんな無警戒に歩き回ってたら命が幾つあっても足りないのよ。あんたが勝手に死ぬのは構わないけど、あたしまで道連れにされちゃ堪らないわ」

「おいおい、酷えこと言うなよ」

「どんな凄いアイテムが目の前にあっても、手に入れる前に死んだら元も子もないわ。違う？」

「違わねえよ。だけど、過剰に警戒するのもどうかと思うぞ、俺は一步の差が命取りになる可能性だってあるし、アイテムの有無が生還の成否に大きく関わることもあるだろ？」

「……………」

千鈴は俺を睨みながら唇を噛んだ。

でも、反対意見を言われてイラついたんじゃないだろう。どうやら、俺の意見も一理あると認めてくれたようだ。

「……仕方ないわね。なるべく足音を殺してついてきなさい」

「へいへい」

俺たちは泥棒よろしく、こそこそと階段を上り始めた。

十五段ほど螺旋階段が上がった所で千鈴が足を止めた。

急だったのでブレーキが利かず、俺は顔面を彼女のケツにぶつけてしまった。ジーンズ越しに感じる弾力。一瞬の癒し。思った通り、いいケツだ。

彼女が振り返って俺を睨む。

怒鳴られた時の言い訳を咄嗟に考えたが、彼女はケツについて何も言わず、唇に人差し指を当てて「しーっ」と言った。

静かにしろ、という意味だろう。

俺は頷いて了解を示す。

「誰かが階段を下りてくるわ」

彼女が顔を寄せてきて、俺の耳に囁いた。

「おいおい、そりゃヤバイだろ」

今さっき黙ってると言われたばかりだが、俺は思わず声を出してしまった。

下りてくる奴がKナンバーなら何の問題もない。でも、残忍な上位ナンバーであった場合は俺の命が終わってしまう可能性大だ。千

鈴は殺すには惜しい美人だから一発犯るまで殺されないだろうが、俺なんか何の利用価値もないからサクッと殺されちまう。

「どうすんだよ？」

「しーっ！ 大きな声を出さないで」

「でも、もし襲われたりしたら、こんな狭い所じゃ身動きできねえぞ」

「いいから、黙ってなさい。全部あたしに任せて、あんたは余計な口を挟まないように。いいわね？」

「お、おう……おまえに任せた」

テスト生と遭遇した場合の上手い対処方法なんか知るわけねえ。とてもじゃねえが、自分をフレンドリーな性格だとは評価できない。あいてが馬鹿なテスト生だった場合、俺なんかがしゃしゃり出たら百パーセント喧嘩になる。いや、喧嘩ではなく一方的に殺されるだろう。ここは場数を踏んでいる彼女に任せるべきだ。

「足音を盛大に立ててるところからして上位ナンバーじゃないとは思うけど……」

そんな呟きを零しつつ、千鈴はジーンズのポケットから銀色の拳銃を取り出した。

武器のあるなしは精神的な影響力も大きい。銃ってやつは、武器の中でも最高レベルに心強いアイテムだ。

俺は、いざという時に全力で逃げ出す心構えをした。

こつこつという足音が一つ、確かに誰かが階段を下りてくる。

「……………」

こういうのは嫌なものだ。それがたった数秒であっても、息を殺して時を待つのは性に合わない。焦れて、ドジを踏んじまいそうだ。ホラー映画とかでよくある、息を潜める場面で物音を立ててしまうカス野郎みたいに。

足音がすぐ傍まで近づいた。

相手は、もう目と鼻の先だ。

そして、そいつが姿を現した。

残念ながら美女じゃない。美少女でもない。女ですらなかった。どの角度から見ても男。しかも、ブ男だ。背が低くて手足が短く、顔が饅頭みたくデカイ。なんか、昔、薬局の前に置いてあったような、緑のカエル人形みたいな男だ。中身が何かはわからねえが、背中に重そうな荷物を背負っている。

「おやおや、これはこれはお久しぶりですね、デスマスクの花嫁さん」

カエル男が日本語を喋りやがった。

地底人かと思ったが、どうやら日本人らしい。その、ねっとり絡みつくような声が俺の神経を逆撫でした。俺ですら嫌悪感をいだくんだから、千鈴が味わってる感情は相当なマイナスだろう。よくも我慢していられるものだ。

「その呼び方、止めてって言ってるでしょ」

千鈴は押し殺した声で不快感を訴えた。

カエル男はへらへらと笑う。

「これは失礼をば。しかし、それ以外に貴女を呼ぶ言葉を僕は知りませんからねえ。宜しければ、この場で名乗り合いませんか？ その後は、手に手を携えてスイートルームへと……夢のような話ですよ。キヒヒヒッ」

「お断りよ。あたしに用がないなら、さっさと消えなさい。あたしはあんたなんかには用はないから！」

千鈴が威嚇するように言うと、カエル男は気味の悪い笑い声を發した。

「キヒヒッ、それは残念ですねえ。今回も良質のアイテムを数多く揃えているですよ。なんなら今ここで、選りすぐりのアイテムをお見せしましょうか？ さっき手に入れた《ドクロ模様のカードキ―》など、レア物ですよ。きっと、この廃城を攻略する上で必要なアイテムでしょう。どうです？ 他のテスト生の手に渡ってしまう前に、僕から買いませんか？ 今ならお安くしておきますよ、ウヒヒヒッ」

背中 of 荷物を親指で示して、そんなことを言いやがった。

アイテムを売る？

ここで商売でもしてやがるのか？

こいつ、いったい何者だ？

少なくとも物理的な害はない奴らしいが……。

「押し売りは結構よ。それに、あたしにはあんたからアイテムを
買えるような情報とかアイテムを持ってないから」

「……そうは思いませんがねえ。クヒヒヒッ。貴女は自分の持つ魅
力や能力を正しく評価しておられない」

カエル男は、ねつとりとした視線を千鈴に絡みつかせながら、意
味ありげな笑みを浮かべた。

体で払え、と言いたいらしい。実に低レベルのカス野郎だ。……

まあ、俺と同類と言えなくもないか。

「うるさいわね！ その口に銃口を突っ込まれなくては、とつ
と消えなさい！」

「おお、怖い。それでは虐待される前に失礼しましうかねえ、ク
ヒヒヒヒッ」

千鈴に怒鳴りつけられたカエル男は、わざとらしく震えて見せ、
気味の悪い笑い声を響かせておいて、荷物を背負い直した。そして、
彼女に興味を失ったかのように視線を逸らして階段を下り始める。

だが、俺とすれ違う際に声を掛けた。

俺ではなく、千鈴に。

「こちらの男性は新しいお供ですか？ それとも、使い捨ての駒で
すか？」

酷え言われようだった。

あながち的外れじゃねえところが腹立たしい。

「あんたには関係ないわよ」

取りつく島もない口ぶりで返す千鈴。

カエル男は横目で俺に嫌らしい視線を送り、口の端をくいつと吊
りあげた。

「そうですねえ。関係ないですねえ。フヒヒヒっ。でも、これだけは言わせていただきたい。貴方、このまま彼女と行動を共にしていると、デスマスクの二の舞になりますよ。気をつけることですね」
「なんだよ、そりゃ」

最後まで黙ってようと思ったのだが、《デスマスク》というフレーズがカエル男の口から飛び出したことで、つい禁を破ってしまった。

「俺がデスマスク並みの殺人鬼にレベルアップするっていう予言か？」

「へ？ デスマスク並みの殺人鬼？！ ウヒヒヒ、ウヒヒヒヒ、グヒヒヒっ！ こりゃ傑作だ！ なんて面白い冗談なのだろう！ 腹が擦れて狂い死にしまいそうですよ！ グヒヒヒっ！」

腹を抱えて奇怪な笑い声を上げるカエル男。

ぶん殴って床に這いつくばらせて、その不細工なカエル面を蹴りまくりたいくらいにム力つくぞ、おい。

「何だよ！ 何笑ってんだ！」

「クツクツ……失礼失礼。久しぶりに大笑いさせてもらいました。ありがとう、とお礼を述べておきましょうかね。そして、次に会うまで壮健であって下さいよ、是非ともね。ウヒヒっ」

そう言い残し、善人にすら瞬時に殺意をいだかせるであろう笑顔を残して、カエル男は下の階へと下りていった。

あいつが後々に俺の生還を邪魔立てする敵になるとは、この時はまだ想像すらしてなかった。

【2・古城篇也】

カエル男の姿が見えなくなった。

足音の感じからして、どうやら奴は三階を探索するようだ。

カエル人間がどこで何をしようと知ったこっちゃないが……。あいつ、異様に印象深い奴だったな。容姿だけじゃなく、醸し出している雰囲気も異常だった。猟奇的犯罪者タイプというか、性的変質者タイプというか。上手く表現できねえが、奴の脳味噌が狂気で満たされていることは間違いないだろう。千鈴を見ている時のあいつの目はヤバすぎる。それこそ爬虫類がエサを捕食する時の目だ。

「何なんだ、あいつ？ すんげー気味の悪い奴だったな」

「ええ。実際に、すんごく気持ち悪い男よ。会話を交わしただけで鳥肌もの。そう感じたなら、あんたの感性はマトモね」

一応誉められてるみたいだが、あまり嬉しくなかった。

「……知り合いみたいだったけど、どういう奴だ？」

「知り合いってほど、彼について知ってるわけじゃないわよ。これまでのテストで何回か顔を合わせてるだけ。組んだことはないし、組むつもりもないわ。っていうか、彼が誰かと一緒に行動しているのを見たことないわよ」

「一匹オオカミってか？」

「そんな格好良いもんじゃないわよ。ああいう性格だもの、誰も仲間になんかしないのよ」

そりゃそうだ。

あれと四六時中行動を共にする、と想像しただけで気分が悪くなる。三十分と持たずに殴り殺しちまいそうだ。あのカエル面を見ただけで蹴りをブチ込みたくなるから。

あいつが今まで無事に生き残ってこれたのは、奇跡としか思えない。

「彼は、みんなから《アイテム屋》とか《えせ商人》って呼ばれて

るわ。名前は確か……鈴元とかいったかしら。結構上位のテスト生よ。ランクはあたしよりも確実に上ね」

「カエル人間が、おまえよりも上位ってか？ マジかよ……。俺の小指の先でも捻り殺せそうなチビだったじゃねえか」

「止めときなさい。あんたじゃ返り討ちにされるのが関の山よ」

「返り討ち？ 俺がカエル野郎に負けるっていうのか？ 腕力も体力も格闘能力も俺の方が上だろ」

「デカイ荷物を背負ってる時点で動きが制限されるのに、身体面でハンデがありすぎる。俺の楽勝だ。負けるなんて到底あり得ないだろ。」

そう思ったのだけど、それは思慮の足りない初心者の妄想だったようだ。

千鈴は大袈裟な溜め息を吐いた。

「考えてもみなさいよ。あれだけ大きな荷物を背負って、しかもアイテム屋を自称してるのよ。みんなが喉から手が出るくらい欲しいアイテムをたくさん持ち歩いているの。そんな奴が今まで一度も襲われなかったと思う？」

「……そりゃ、思わねえよ」

あのデカイ袋にはレアなアイテムがたんまり詰まってるのだろう。いわば、ネギを背負ったカモ……否、クリスマスプレゼントを背負ったカエルだ。それを知って、横取りしようと考えない奴はいない。脅してアイテムを袋ごとゲットするのは、赤子から飴を奪うより簡単だろう。……簡単じゃないのか？

千鈴の美貌に冷笑が浮かんだ。

「彼を襲ったテスト生は全員、例外なく死んだわ。それも、発狂死」
「……………」

「どんな反撃を受けたのかはわからないけど、狂い死にするくらい悲惨な目に遭ったのじゃないか」

「狂い死に……。マジかよ……」

「ええ、マジよ。彼に殺されたテスト生の死体を何体も見ているか

ら、断言できるわ。でも、あんな奴の話題はここまでにしでしょ。
先を急がなきゃ」

「お、おう。そうだな」

今は、カエル男なんかより、鐘を鳴らすことを考えるべきだろう。
あいつのことは忘れよう。いや、あいつに関わるのは止めた方がいい。
そう思いつつ、俺は四階まで階段を上がった。

螺旋階段は四階までしか続いていなかった。

この建造物は六階建てくらいの大きさだったから、まだまだ上があるはずだ。しかし、ここからは上がれない。更に上の階へと進むには、四階のフロアを探索して別の階段を見つけるしかないようだ。
「まったく……面倒な作りになってやがるな。誰が設計したか知らねえが、階段は一階から屋上まで直通にしとけてんだ。移動する人間の身にもなつて欲しいぜ、まったくよ」

出来損ないの階段に向かって愚痴を吐くと、千鈴が冷たい視線を突き刺してきた。

「うるさいわよ。口を動かす前に足を動かしなさい」

「わかってるつて。でもよ、無駄口を叩けば、それで結構なストレス解消になるんだぜ。ちよつとは俺のメンタルケアも考慮して欲しいもんだ」

「はあ？　なんであんななんかの心に配慮しなきゃなんないのよ」

「一応、俺たち仲間だろ」

「一応ね。でも、一秒後には敵になるかも」

冗談の欠片も含まれていない冷酷な表情で言う千鈴。

「おいおい……」

「一秒でも長くあたしの仲間でいたかったら、お馬鹿な発言は慎むことね。いい？」

「お、おう。善処するぜ」

俺が頷くと、彼女は怖い顔を急に緩ませ、クスツと笑った。

「どう？　無駄口に付き合っただけだけど、ストレス解消になった

かしら？」

「逆にストレスが溜まったぞ、おい……」

この女、思った以上に性格悪いぞ。からかいかたが酷え。サバイバルテスト初心者の身になれってんだ。

「もつと優しい言葉を掛けてくれよ。そうすりゃ、俺も気分良くサバイバルできるから」

「気分良くサバイバルって……あんた、本当に馬鹿なの？ このテストの趣旨をわかってる？」

サバイバルテストの趣旨？

素っ裸で犯罪者の巣窟に放り込まれてるんだ。理解しない方がおかしいだろ。

馬鹿は死ぬ。無知も死ぬ。弱者も死ぬ。そして、生還した奴は、例外なく犯罪者および準犯罪者となる。それは避けられない、逃られない、偽れない事実だ。自分の生還は、すなわち他者の死に直結するのだから。

「ちゃんとして理解してるぜ」

俺は親指を立て、ニヤリと笑って答えた。

「どうかしらね……」

疑わしげな目で睨まれた。

俺って信用も信頼もされてねえよな。

「死ぬ直前に後悔しても遅いんだから、気を抜かずについてきなさいよ」

そっけない言葉を残して千鈴は四階のフロアに入っていった。

俺も慌てて後を追った。

階段から真っ直ぐ伸びている廊下は、十メートルくらいで左に折れ曲がり、その少し先で行き止まりになっていた。

曲がり角と廊下の突き当たりについて一つずつドアがあり、どちらも閉まっている。

俺は曲がり角にあるドアの前で腕組みをし、どっちのドアを先に

開けるか千鈴の判断を待った。

彼女は廊下の突き当たりにあるドアの前でしゃがみ込み、ドアノブやらドアの外枠を調べている。

爆弾が仕掛けてあるわけじゃないし、そこまで慎重に調べる意味があるのか？ そう思っただけで見てみると、彼女が難しい顔をして戻ってきた。

「あのドアは危ないわね……」

「危ないって何だよ、どう危ないんだ？ 爆弾が仕掛けてあるとかか？」

完全な冗談だったのに、彼女はクスリともせず簡単に肯定した。

「そうね。爆弾が仕掛けてあるかもしれないわ。大爆発するような爆弾はあり得ないけど、至近距離にいる人間に致命傷を負わせるくらいの爆弾ならあり得るから」

「おいおい……マジかよ」

「ええ。でも、あのドアに仕掛けてあるのは爆弾じゃないわよ。調べた感じだと、『警報系』か『電流系』の罠ね」

「電流はわかるが……警報系？ ドアを開けると非常ベルが鳴るってことか？」

「そう。ドアの外枠とドアノブに配線らしき物が見えるから、たぶん、ノブを回すと配線が繋がって作動する罠よ」

「おまえ、罠を解除できねえのか？」

「あたしの技術じゃ無理。そんな技能なんてないわよ」

「俺も無理だぜ」

「あんたなんか期待してないし」

完全に役立たず扱いだった。

でも、何も言い返せない。俺は、実際に役立たずなのだ。

「ってことで、まずは罠の仕掛けられてない曲がり角のドアから開けるわね。それで、そっちに何もなかったら、突きあたりにあるドアを開くことにするわ。いい？」

「おう」

どうせ俺は傍で見てるだけだ。どっちが先だろうが好きにしてくれていい。そう思っただけで生返事すると、千鈴が想定外の台詞を吐いた。「じゃあ、ドア、開けなさい」

「へ？」

「へ、じゃなくて。あんたがドアを開けるのよ。さっさとなさい」俺の腕を掴んで引つ張って行き、ドアの真ん前に立たせて、ドアノブを指で指示す千鈴。

「……おいおい、冗談はよせって。こっちのドアだって罠が仕掛けられてるかもしれねえだろーがよ」

「ええ、そうね。単に、あたしが罠を見落としてるのかもしれないわ。でも、これがあたしの探知能力の限界だからしょうがないわよ。あつちのドアよりは死ぬ確率が低いから、安心して開けなさい」

彼女はニツコリと笑顔を作って言う。そして、ドアを開けると言うようにアゴをしゃくった。

拒否は許されないらしい。

俺は嫌々ながらにドアノブを握り、そっと回した。

【3・西園エリカ】

ほっと安堵の吐息をした直後の不意打ちだった。

「ぎゃあああああ！」

鼓膜が破れるんじゃないかと思うくらいの絶叫が、すぐ傍で発せられ、私の心臓をきゅっと縮こまらせた。

ホラー映画とかの悲鳴じゃなくて、文字通りの絶鳴って感じであり、余程酷い目に遭ったのだろうと思わせる声音だった。声を聞いただけで行動意欲が萎えそうだった。聞かなかったことにして、声とは逆方向へと駆け出したい。

だけど、黒澤が叫び声に興味を持ってしまったようだ。

「テスト生が何かしらの罠に引っ掛かったようだ」

何の感情もない淡々とした言葉。

あの悲鳴を聞いて平気な顔をしている。ドキリとしなかったのだろうか？ 何が起こったのか、と不安にならないのだろうか？ 声の主を案じる心優しさはないのだろうか？ きつと、どれも無いのだろう。人間らしさは皆無。それって悲しいよね。

「放っておけば良からう。罠にかかって絶命するような愚かなテスト生は犬死にして当然。救助など不要だ」

風守がひとでなし発言をした。

でも、その意見には賛成である。君主は危うきに近づいちゃダメだし、乙女が命懸けで冒険をするのはもっとダメだ。あんな悲鳴を上げちゃうような罠が仕掛けられてるかもしれないのに、のこのこ近づいていたら、それこそミイラ取りがミイラになってしまう。

私は、絶対に行きません、という思いを眼光に宿して黒澤を睨んだ。

だけど、彼ははなから私の意見など聞くつもりがないようで、風守しか見ていない。

「罠とアイテムはセットで置いてあるはずですよ。悲鳴の主が何らか

の罨にかかったのであれば、そこには相応のアイテムが用意されているはずです。それを見過ごす手はありません」

「ふむ。その言には一理あるな。良かるう。どんな馬鹿者が罨にかかったか、見物しに行ってみるとするか」

さしたる口論もなく話は終わった。

結論は、悲鳴が聞こえてきた方に進む、というもの。

私は、もし血だらけの死体を見たりしたら、気絶する自信満々である。

ちよつとは乙女的心情に配慮して欲しい。

「どうした、エリカ。先を急ぐぞ」

「うん……」

私たちは赤いドアの部屋を後にし、廊下を更に奥へと進んだ。

し字の曲がり角に沿って歩いて行くと、またもや分岐点に行きついた。黒澤の説明を元にすると、今、私たちがいるのは、《曲》という字の一番下の棒の部分に当たる廊下の右角だろう。薄暗くて奥まで見通せないが、確かに廊下の先には分岐点が二つ見える。そして、その一つ目の分岐点でテスト生と思しき男が倒れていた。

「なるほど、あの男が悲鳴の主か」

「むっふー。実に愚かしい。テスト生の恥だな。もし生きておったら、そつ首をはねてくれよう」

風守は腰に下げている刀の柄に手をかけて言った。

冗談だと思いたいが、このヒゲは本当に斬りそうで怖い。攻撃されたならまだしも、無防備の相手に攻撃を仕掛けるのは止めて欲しい。その点、一言注意しておくべきだろうか。

私たちが近づいても男はピクリとも動かなかった。でも、死んでいるのではないようだ。胸が微かに上下していて、呼吸していることを示している。ただ、仰向けになって白目を剥いて倒れているので、ちよつと気持ち悪い。

「ふむ。気絶しているだけのようだな。怪我を負っているようには

見えぬ」

風守は、むっふーっと勢い良く鼻息を吹き、小馬鹿にする口調で言った。

「この状態から考えるに、何かしらの罠に掛って弾き飛ばされ、壁に激突したのか……。あるいは、テスト生に襲われて気絶させられたのだろうな」

黒澤が倒れている男をしげしげと観察しながら考察した。

私は恐る恐る男に近づき、その顔を覗き見た。

白目なので、お世辞にも美男子とは言えない。大学生くらいの年齢だろう。中肉中背で、耳に掛るくらいの短髪。身に着けているものも、ごくありきたりのＴシャツにジーンズであり、さしたる特徴もない。どこにでもいそうな普通の日本人男性という感じた。

ぱっと見、危険な要素はゼロである。たぶん、私と同じ初心者テスト生だろう。

しかし、黒澤の見解は違うようだ。

「見ない顔だが、この男、Ｋナンバーではないな」

彼は険しい目つきで断言した。

頷いて同意を表す風守。

「うむ。身の丈に合った服を着ている時点で、Ｍナンバーよりも上位であることは確かだな。だが、そのナンバーに見合った実力は持ち合わせておらぬようだ。おそらく、他者の力を借りて生還したのであろう。唾棄すべき輩と見て間違いない」

好意の欠片もない評価だった。

まあ、こんな所で白目を剥いて倒れてるようなテスト生は、どんな酷い言葉で罵られても文句を言えないだろう。身ぐるみ剥がされて殺されないだけマシなのだ。

黒澤も風守も、この男の服を探って持っている物を奪おうとはしなかった。その点は彼らの優しさだ。いや、こんな男が重要なアイテムなど持っているはずない、と見切ってしまったのかもしれない。

「さて、この男に何が起きたのか知りたくはあるが……。起こして介抱してやるほどの情報を持っているかどうか怪しいところだな。畏の存在も確認できない点から考えるに、何者かに不意を突かれたと見た方がいいたろう」

黒澤は倒れている男から目を離し、壁やら床やらをジロジロと見回して言った。

もう男には興味ありませんという様子の彼を見て、私はちょっとビククリした。

「え？ この人、起こさないんですか？」

「なぜ起こす必要がある？ 無意味だろう」

「すっごいアイテムのありかを知ってるかもしれないですよ」

「それはあり得ない。もしこの男が重要なアイテムのありかを知るほど優秀なのであれば、不意を突かれて気絶することはない。ここであつて倒れているのは、無能の証明だ。であれば、この男を起こすことは、我々にとってマイナス要因にしかない」

「でも……」

倒れてる人を放っておくなんて、人として間違つてる。

「ここでこの人に恩を売っておけば、後で恩返ししてくれるかもしれない」

何とかして二人を説得しようと思つただけど、私の意見は即却下された。

「このサバイバルテストでは、恩など何の意味もなさない。そういう思考を働かせるテスト生は、大抵の場合、仲間と思つていたテスト生に裏切られて死ぬ。もしくは、恩を返さないテスト生に怒りを覚え、仲間割れを起こす原因となる。俺は何度もそんな輩を目の当たりにしてきた」

「そんな人ばつかにゃないと思います！」

私が否定すると、黒澤は一瞬、口元に笑みを浮かべた。

「そうだな。そういう輩ばかりではない。ごく稀に、常識ではあり得ないくらいお人好しの新人がサバイバルテストに参加させられる

ことがある。そして、そういうテスト生に限って、優秀な成績を収めたりする。あのコンビは例外中の例外だった……。この俺ですら、我知らず命懸けの闘いに身を投じていたのだから」

過去に組んだ仲間のことを思い出しているのだろうか、彼は遠くを見るような目をして、懐かしそうに呟いた。その表情の中に微細な苦々しさが混じっているように見えたのは私の気のせいだろうか？　しかし、彼は一転して表情を消し、眼光を鋭くした。

「だが、それはKナンバーに限った例だ。一度でも生還を果たしたテスト生が、何の打算もなく情のみで他のテスト生を救おうとすることはない」

彼は強い口調で断言した。

「どうして言い切れちゃうんですか？　中には優しい人だっていると思います」

「優しさ？　本当に優しい人間性を持っているテスト生であれば、Kナンバーの時点で生還するのは不可能だ」

「どうしてですか？」

「このサバイバルテストで生き残れるKナンバーは、ただの一名だけだ。残りは全員死ぬ。他のKナンバー全員を見殺しにしなければ、生還できない。つまり、どう自分を正当化しようとも、一度でも生還したテスト生は、人殺しの罪を背負うことになるのだ」

「え……うそ……」

自分以外を見殺し？

本当の意味での生存競争？

もしも自分以外のKナンバーが生還しそうだったら、その人を殺してでも前にでなきゃダメなの？

そんなの初耳だ。

動揺する私を見て風守が皮肉っぽく笑った。

「驚いておるところを見ると、知らなかったようだな。しかし、嘘ではないぞ、小娘。私も、黒澤も、こうして生き残っているのは、何十何百というテスト生の命を糧としてきたからだ。それ以外に、

サバイバルテストをクリアする術はない。小娘も心して行動するとだな」

「……………」

「それを肝に銘じておかねば、後々に酷く後悔するぞ」

「うん……………」

他のKナンバーを見殺しにするなんて到底受け入れられないけど、そうしなければ自分が死ぬことになる。

それは嫌だ。

でも、人を殺すなんて絶対にできないと思うし…………。どうしよう…………。

すると、風守が私の顔を覗き込むように腰をかがめて、目線を合わせた。

「小娘よ、なぜ惑う？ まだ自分が生還できると確定しているわけでもなく、誰かを殺害せねばならぬ状況でもない。殺人の罪を後悔するのは、無事に生還してからで良いのだ。今ここで何かを決断せねばならぬ理由などない。嫌な悩みは一先ず棚上げしておけ」

諭すような口調で言われた。

確かに彼の言う通りだ。今ここで悩んでいてもしかたがない。私が生還できる保証なんてどこにもないのだ。今は、ただ真っ直ぐに生還を目指すべきだろう。

それにしても…………意外とヒゲ侍って良い人だったりする？ さっきから私のことを気にかけてくれてるし。素っ気ない応対しかしてくれない黒澤とは大違いだ。

「それでは先へ進むでしょう」

話の終了を待っていたかのように黒澤が促した。

「約五分ほど無駄な会話をして回復を待ったが、目を覚まさなかった。それだけの重症を負っているのか、単に愚鈍なだけか、どちらにしる、もう待つ必要はない」

なんだ、一応この人が起きるのを待つてあげてたのか…………。何だかんだ言って、黒澤も優しいんだよね。

「うむ。これだけの至近距離で我々の会話を聞かされながら目を覚まさぬのであれば、この者は生還するに相応しいテスト生とは言えぬ。見捨てられて当然だ」

「でも、ちよつと可哀想かなーとか思いませんか？」

「全く思わぬな。むしろ無能者の首を今すぐに叩き斬つてやりたいぞ」

「あ、それは駄目です。血がどばーとか内臓びろーんとかは、私が見てない所でこっそりとやって下さい」

「こっそり？ ふむ。風守の剣に暗殺の文字はない。だが、小娘の願いとあれば善処してやらんこともないぞ。感謝するがよい」

「はい。ありがとうございます」

私たちは丁字路を曲がらず、真っ直ぐ七歩ほど奥へと進んだ。すると、このタイミングを計っていたかのように、背後から声が響いてきた。

「動くな！ 動くとな撃つぞ！」

振り向いて見ると、さっきまで倒れていたはずの男が、映画とかゲームで見るようなショットガンを構えて立っていた。

【4・西園エリカ】

まず最初に浮かんだのは、この人はどこからショットガンを取り出したのだろう、という疑問だった。あんな大きな物を隠しておく場所なんてなかったし、隠し持てるような格好もしていない。それに、私ならともかく、風守と黒澤が相手の武器を見過ごすなんてあり得ないだろう。ということは……どういうこと？ 手品とか使って武器を隠してた？

ともかく、撃たれるのは嫌だから、私は万歳をして無抵抗であることを示した。

だけど、黒澤と風守はショットガンの銃口を向けられてるのに平気な顔で相手を見返している。

「見ない顔だが……やり口が手慣れているな。黒澤、貴様はやつを知っておるか？」

「いえ、初めて顔を合わせる奴です」

「そうか。では、Kナンバーと断定しても良いな」

ちよつと侮蔑する口調で風守が決めつけると、黒澤が首を横に振った。

「風守さんと同様に、他国の支部から移送されてきたテスト生かもしれません。初心者と決めつけるのは危険です」

「ふむ」

風守は嫌そうな顔でヒゲの端っこを摘み、ひねり回した。

ヒゲをいじるのが彼の癖みたいだ。

それを挑発と受け取ったのか、ショットガンの男が怒鳴った。

「勝手に喋るな！ 黙って両手を上げ、持ってる武器を床に捨てる！」

そう言われても、私は武器なんか持ってないから捨てようがない。黒澤はスタンガンを持っているけど、捨てる気はさらさらな様子だ。

風守は、はなから相手の言葉に聞く耳を持っていないし……。

「むふふーっ。若造よ、両手を上げていては武器を捨てられぬぞ。まずは武器を捨てさせてから、両手を上げさせるのが物の順番である。我らは超能力者ではないゆえ、手を用いねば武装解除できぬぞ」

彼はヒゲをいじりながら半笑いで言った。

その発言は明らかに挑発行為である。

ドーン！

物凄い轟音が廊下全域に反響した。

相手がショットガンを撃ったのだ。

しかし、銃口は壁に向けられていて、誰にも被害は及ばなかった。「そのジジイ、次、勝手に喋ったら即、射殺するからな。そのつもりでいろよ」

「ジジイ？ それは我のことを指しているのか？」

風守が私に訊いた。

不本意そうな顔をしている。ジジイ発言でちょっと傷ついたのかもしれない。

風守さんはジジイと言うよりオッサンですよ、ね、と思わず答えそうになったけど、口から飛び出す前に飲み込んで、危険を回避した。せっかく優しくしてくれてるのに、怒らせるようなことを言っちゃマズイ。

私は余計な返事をせずに、にこにこ顔を向けて首を傾げてみせた。それをどう受け取ったのか、風守は嫌そうな顔で、むふーっという勢い良く鼻息を吹いた。そして、相手の男を睨む。

「若造、我はジジイではないぞ。まだまだ青年と呼ばれるべき年齢だ」

「そんなの知るかよ、ジジイ！ おら、クソども、とつとと武器を捨てて両手を上げろ！」

男は威嚇するようにショットガンの銃口を上下させ、甲高い声で怒鳴った。

でも、黒澤も風守も相手の命令を聞く気ゼロだ。
それどころか、風守が物騒な提案をした。

「……黒澤よ、あの道化者の首を叩き落としてしまつて構わぬのだらう?」

「いえ、もう少し待つて下さい。もしあいつがKナンバーであつた場合、身の丈に見合つた服を着用し、強力な武器を所持しているということは、天才的な能力の持ち主である証拠です。風守さんがあいつより劣るとは思いませんが、どんな隠し玉を持っているか知れないので、ギリギリまで様子を見た方が無難です」

さすが黒澤。常識的な見解だ。

あんな危険極まりない武器を持っている相手に刀で切りかかるうなんて、正気の沙汰じゃない。風守がどれほどの腕前か知らないけど、無茶をして私まで巻き込むのは止めて欲しい。

「ふむむ……。怠惰を内包した待機は、私の性格に合わぬぞ」

「俺に少し時間を下さい。あいつが何者なのか見極めたい」

黒澤が重ねて自重を求めると、風守は渋々といった感じで折れた。

「……よからう。五分程度なら待つてやろう」

「何をこそこそ喋っている! 俺様の命令に従わないってんなら、容赦なく撃ち殺すぞ、こら!」

ショットガン男の怒声が反響する。私たちが命令に従わないもんだから、相当に苛立っているようだ。なんか、今にも撃ち放ちそうで怖い。怒りが頂点に達して、思わずショットガンの引き金を引いちやつたら、ちゃんと両手を上げている私まで死んでしまうだろう。

ここは相手の命令に従うのが賢明だと思っただけど……。

おもむろに、黒澤が一步前に進み出て、あいての男に問いかけた。

「おまえは何ナンバーだ? それを聞きたい」

「はあ?! そんなもん、知つてどうすんだ、てめーは! お互い名乗り合つて仲良しグループでも結成しようつてか? うははは! ばっかじゃねーの!」

ショットガン男は、喉の奥まで見えるくらいに大口を開けて馬鹿

笑いした。

普通なら逆上しちやいそうな言われようだ。私なら確実に頭に来て、言い返している。しかし、黒澤は澄まし顔のまま、ぴくりとも表情を動かさず、冷静極まりない声で再び問いかけた。

「おまえの名は？ 俺はV8739号の黒澤だ。そして、後ろにいる二人は、一緒に行動している仲間だ」

その静かな声音が功を奏したのか、相手の男が質問に答えた。

「どうしても俺様が何者か知りたいのか？ しかたねえなあ……。そんなに知りたきゃ教えてやるぜ。俺様は、あの伝説のテスト生と名高いジョーの意志を継ぐ者、M2031号のダンだ。忘れねえように、そのスラスカな脳味噌に刻み込んでよ、カスども！」

それを聞いた黒澤が小さく呟いた。

「Mナンバーの2000番代ということは、ジョーと直接面識があるわけではないのだな……。それなのに彼の威を借るとは……。許せん奴だ」

ダンを睨む黒澤の目に仄かな怒りが宿った。きつと、彼にとってジョーって人は特別な存在なのだろう。もしかしたら、仲の良いテスト生だったのかもしれない。しかし、それでも彼は怒りの断片すら感じさせない冷静な声で、更なる質問を投げかけた。

「さっきの悲鳴はおまえのものか？」

「おうよ、俺様が発した声だぜ」

ダンは唇の左端を吊り上げてニヤリと嫌らしく笑った。

「ああして悲鳴を上げてやれば、てめーらみたいな警戒心ゼロの馬鹿どもがふらふら寄ってくるからな。そこを騙し討ちにして、身ぐるみ剥がそうって作戦よ。賢いだろ？」

「……………」

「俺様はEUの支部から来たんだけどよ、あっちのテスト生もこっちのテスト生も似たようなもんだな。どいつもこいつも、まんまと俺様の策に引っ掛かってくれるぜ、うはは！」

「……………」

「特に、サバイバルの意味を理解してねえド素人のカスどもは、狙い撃ちされて当然だぜ。笑いが止まらねえな、うははは！ おら、何ぼさつとしてんだ！ さつさと武器を捨てて両手を上げやがれ！ ブチ殺されてえのか！？」

「……そのショットガンはどこに隠していた？ 倒れている時は持つていなかったはずだ」

あくまでも命令を無視して質問し続ける黒澤。

ダンは眉間に深いシワを刻んで苛立ちの大きさを示した。だが、怒りを爆発させず、逆に得意気な顔をして、ショットガンの銃口で天井を指し示した。

「俺様の上を見てみるよ。穴が開いてやがるだろ？」

言われて見ると、確かに天井に穴が開いている。

マンホールくらいの大きさだろうか。

「あれは上の階まで繋がってるんだぜ。そこで、そこには俺様の仲間がいるって寸法さ。わかるだろ？」

起きるのに合わせて、上の階からショットガンを投げ入れてもらったようだ。

「でもよ、下りるのに失敗して頭打ったんだよな！ そんだもんで、気絶してるフリをするつもりがマジに気絶しちゃって、ちよいびびったぞ。くはははははは！」

忌々しそうに失敗談を語るダン。

笑って言ってるけど、あれは本当に気絶してたらしい。まあ、実際に気絶していたからこそ黒澤や風守も彼をさして危険視しなかったのだろうが……。上の階から落ちてても気絶するだけで済むなんて見かけによらず頑丈な男である。

「おら！ 質問に答えてやったんだから、さつさと命令に従いやがれ！ あと五秒だけ待ってやる！」

ダンがドスの利いた声で叫んだ。

すると、風守がゆっくりと腰帯の刀に手を伸ばした。

ようやく刀を捨てるのかな、と思いきや――

「天魔覆滅！」

叫びざまに鞘走らせた刀。それが完全に抜き終わる頃には、既に彼はダンの真ん前まで間合いを詰めていた。

物凄い早さである。目で追えないくらいのスピード。っていうか人間技じゃないし……。いったい、どういう脚力をしてるんだろう。オリンピック選手が涙目で逃げ出しそうなダツシュだ。

ダンも彼の接近を目視することができなかったようだ。咄嗟に対処できず、ただ啞然とした顔で凍りついている。

いや、風守が急接近して抜刀し、返す一閃でダンに攻撃を仕掛け、そのまま流れるような剣さばきで刀を鞘に戻す……。という一連の行動を終えた後に、何が起きたのかを何となく理解したのであって、実際に彼の動きを捕捉できたわけじゃない。

まさに瞬く間の出来事だった。

「我は風守流剣術の正当伝承者だ。一秒あれば、形勢を逆転することも容易い」

くるりと相手に背を向け、失笑気味に呟く。

そんなヒゲを見て、時代劇の主役みたいでちょっと格好良いかも

……とか思った。

「何だと……そ、そんな馬鹿な……」

驚愕の表情を貼りつけたダンの手からショットガンが落ちた。

それが床に叩きつけられて、真つ二つに割れる。

ショットガンの銃身は、竹を割ったかのように、縦にスッパリ割れていた。しかも、それを持っているダンの手にかすり傷一つつけずに。

「若造よ、気絶の演技は見事だったが、それ以外は平均点にも及んでおらぬぞ。ジョーの真似をする前に、まず己の心身を研ぎ、技を究める努力をすることだ。でなくば、自らを貶めるだけだと思え。よいな？」

風守は相手を見もせず、こっちに歩きながら忠告をした。

齒軋りするダン。

「……この……ヒゲジジイが！」

「今回は見逃してやるゆえ、早々に立ち去るがよい」

「見逃してやる、だと……。この俺様を馬鹿にするのも――」

「それとも、今すぐ斬られたいか？」

「……………」

ダンはチラツと天井の穴に目をやった。

きつと、仲間の手助けを期待したのだろう。でも、上の穴からは何の音沙汰もない。誰も助けに下りてこない。

「……くっ！　ちくしょうめ！　この、クソ侍が！　次に会った時は、ためーのヒゲ面をぐちゃぐちゃのズタズタに引き裂いて、便所に突っ込んでやるからな！　そっちの陰気なクソ野郎と小生意気なクソガキも、覚えてやがれ！　ぜってーに後悔させてやるぞ、マジで！」

そう捨て台詞を残すと、ダンは私たちが来た通路を逆走するよう
に、一目散に逃げ出した。

「ふん、逃げたか」

鼻先で笑う黒澤。

風守は自らの功を誇るでもなく、私の頭に手を置いて薄らと微笑
んだ。

「下らぬ茶々が入ってしまったな」

「風守さんて見かけによらず、すごいんですね」

「ふむむ？！　それは誉めておるのか？」

不本意そうなヒゲ。

私は笑顔を作って頷いてみせた。

「勿論、超誉めてます」

「むっふーっ。なぜか素直に喜べぬぞ」

「え、どうして？　せつかく誉めてあげてるのに。もしかして、風
守さんて謙虚な人なんですか？」

「……小娘よ、日本語の用法を正しく学ぶべきだぞ」

「私、国語は成績良かったですよー」

「……………」

なぜか風守は閉口してしまった。

何か変なこと言っちゃったのだろうか？

んー………わかりません。

でも、まあ、誰も傷つかずに済んだってことで、おっけーでしょ。

「悪は滅びたってことで、善は急ごう！」

「……………」

私が号令を掛けると、黒澤は大袈裟に溜め息を吐き、風守はふふんと鼻を鳴らした。

【5・西園エリカ】

ダンというテスト生には、ちょこつとだけビックリさせられた。気絶してるフリをしてテスト生を待ち、隙をついて襲いかかるのは物凄く卑怯だと思うのだけど、黒澤曰く、「無能なテスト生の常套手段」だそうで、そういう騙し討ち的な策を用いるテスト生が結構な数いるらしい。まあ、そんな策に引っ掛かるテスト生は少ないので、大抵の場合は失敗に終わるそうだが……。狡賢い大人の女性とか時間的に追い詰められた美人のテスト生は、自分の肉体を餌にして馬鹿な男性テスト生を狩るのだそうだ。救われない例だと、生還の道を断たれたKナンバーが一人でも多くのテスト生を道連れにしようとして、そういう手段を用いるのだという。

怖い話だ。

もし私が生還の道を断たれてしまったら……、と考えてみたが、その状況を上手く想像できなかった。

二つ目の分岐点も素通りし、廊下を突きあたりまで進むと、そのすぐ右側に錆だらけの古めかしいドアがあった。

そして、ドアには金色のプレートが貼り付けられていて、《9》という数字が刻まれていた。

「ここ、9号室なのかな？」

数字を指差して訊いてみると、黒澤が事務的な口調でぼそつと答えた。

「ドアに記されている数字は部屋番号ではない」

「じゃあ、どういう意味？」

「これまでの経験を基にして答えると、《9》の鍵で開くドアか、それで解除できる罫もしくは室内に《9》の鍵で開けられる宝箱の類があるのだろう」

「へえー、《9》の鍵か……。私は《カエルの鍵》しか持ってな

いよ」

「おまえは何も持っていないだろう。あの鍵は俺の物だ。それに、その服も俺が貸しているだけの物だ。その点、忘れてもらっては困るぞ」

そんなのわかってるのに、黒澤がいちいち確認してきた。なぜか力チンと来たので言い返す。

「それはそうだけどさ……。そんな細かいことを気にしてばかりいると、器が小さな男になっちゃいますよ！ 男は、もっと大らかにならないと！」

「小さくなつて結構。俺の物は俺の物だ。それを都合良く忘れて、自分の物にされては敵わない」

「ケチっ！」

「誉め言葉として受けつつっておこっ」

「むーっ……」

私は口の先を尖らせて不服を訴えてみせたが、もう会話は終了とばかりに黒澤はドアへと向き直ってしまった。

ドアを調べるようだ。

少し感情が消化不良だけど、ここは黙って見守るべきだろう。

「黒澤よ、鍵は持っておるのか？」

しゃがみ込んでドアノブを凝視する黒澤に風守が問いかけた。それに対する返事はなし。

集中しすぎて聞こえていない様子だ。いかにも罨が仕掛けられてそんな汚らしいドアなので、彼も真剣なのだろう。

「ドアが開かれた形跡があるので、先客がいたと思われます」

一通り調べ終えた黒澤は、私たちに結果を報告した。

「罨はどうなのだ？」

風守がドアノブの上にある鍵穴を覗き込みながら訊いた。

「仕掛けられていたようですが、先客が解除したようですな」

「ふむ、先客か……。しかし、室内から人間の気配はせぬな。完全に無人の部屋だ」

ヒゲは、ドアの向こう側が透けて見えているかのように断定した。剣の達人が持つてるといふ、心眼つてやつたろうか？ それとも、聴覚が異様に優れてて、室内の物音が聞こえちゃってるのか？ 何であれ、その技を私にも伝授して欲しいものである。

「風守さんがそう言うのであれば、確かなのでしよう。そうすると、入室したテスト生は、室内にあるアイテムもしくは情報を首尾よく手にして立ち去ったか、あるいは……」

「うむ。あるいは、室内で無様な屍を晒しているか。その、どちらかだな」

怖い予想をする風守。

死体のある部屋なんて入りたくありません。そう前もって言うっておこうと思っただけど……。

黒澤は彼の言葉を確認するかのようにドアに耳を当てて室内の様子を探りながら、ズボンのポケットに手を入れて鍵っぽいものを幾つか取り出した。

「エリカ、この中から《9》の鍵を探し出してくれ」

「え？ あ、うん」

手渡されたのは三つの鍵だった。それぞれ《1》、《2》、《9》という数字が刻まれていて、そのどれもが銀色に輝いている。

私は、その中から《9》と刻まれているものを選んで彼に返した。

「はい、これ、《9》の鍵だよ」

「よし」

受け取った黒澤は、慎重に鍵を鍵穴に差し込み、ゆっくりと回した。

しかし、何の変化もない。

カチャともガチャンとも鳴らない。

彼はドアのあちこちを調べながら何度も鍵を回し、小さく頷く。

「このドアにはロック機能自体が備わっていないようだ。ということとは、鍵を使用するのは室内なのだろう」

そう呟いて、何の躊躇もなくドアノブを握って回し、ドアを開い

た。

室内は小汚い洋間だった。

広さは八畳くらいだろう。でも、雑然と置かれている調度品のせいで、室内は酷く狭く見えた。

一番奥にベッドがあり、その手前にテーブルが置かれ、右壁にはタンスが、左壁にはオーディオ機器の残骸が散らばっている。室内を照らし出している蛍光灯が、今まさに切れそうな感じに点滅していて怖い。タンスの陰からゾンビとかがぬうつと現れそうな雰囲気だ。ホラー映画なら、間違いなく、犠牲者がでる場面だろう。

死体は……ない。その点はホッと一安心である。

「誰もいないみたいですねー」

「先客は室内を一通り荒らして、何も収穫を得られずに立ち去ったようだな」

黒澤は両肩から緊張感を放出しながらテーブルの前までゆつくりと進み、一度室内をぐるりと見回しておいて、私たちに入ってくるよう手招きした。

「どうやら《ロッカーの部屋》にあったような危険な罠は仕掛けられていないようだ。

私は小走りで彼のところまで行った。

風守は悠々とした足取りで入ってきて、何の警戒心もない感じにタンスの一番上の引き出しを開けて中を覗き込んだ。

「タンスの中を物色した形跡があるな。先客は一応なりとも室内の物を風潰しにしたようだぞ」

「ええ。ベッドもテーブルも動かされた跡があります。ただ、成果が得られなかったからオーディオ機器に八つ当たりした、ということでしょうね」

「うむ」

重々しく頷いた風守は、足下をじろじろ見ながらベッドの前まで移動した。

そして、むっふーっと勢い良く鼻息を吹いた。

「ふん！　どうやら予想していたよりも多くのテスト生がこの部屋を訪れたようだぞ。残されている足跡の形や靴跡の形状、その数から見ても、ざっと五名。それだけの人数が室内を調べたというわけだな」

五人も調べたのに何も発見できなかったってこと？　それとも、最初に調べた人が首尾よくアイテムをゲットしちゃったから、その後の人たちは何も得られなかったってことかな？　どちらにせよ、何もない部屋には用がない。さっさと次の部屋に移動するべきだろう。

そう思ったのだけど……黒澤の見解は違っていた。

「五人以上のテスト生が風漬しにしても発見できないアイテムか……。それは探しがいいがそうだな」

探す気満々という様子で、そんなことを言う。

「え？　なんでそうなるの？　アイテムなんて、五人のうちの誰かに発見されちゃってるかもしれないじゃん」

「その可能性は低い」

「なんで？」

「室内に《9》を冠した金庫か宝箱、それに類する物が見当たらない」

「金庫とか宝箱だったら、それごと持っていていっちゃったのかもしれないよ」

「そんな物を持ち歩く意味はない」

そう決めつけておいて、黒澤はベッド横に置かれていた小さなゴミ箱を手を取った。

私の部屋がそうであったように、ゴミ箱の中にアイテムが隠されていないか確認するためだろう。

しかし彼は、すぐにゴミ箱を元の場所に戻してしまった。

中に何も入ってなかったようだ。

「もし《9》の鍵がアイテムとして置かれている部屋だったとすれ

ば、完全な徒労だが……。部屋のドアに金色のプレートが貼りつけられているところから考えても、そうそう単純な仕掛けではないだろう」

「金のプレートは特別なの？」

「ああ。今回のサバイバルテストがどんな法則によって成り立っているかは、まだわからない。しかし、部屋のドアに貼りつけられているプレートが何かしらの意味を持っているのは確実だ。そして、それは何かを警告している」

「警告……って何を？」

「何を警告しているかは、幾つかの部屋を当たって、プレートに関する情報を精査してからでないとわからない」

黒澤は、私と会話を交わしながら室内を調べていく。ベッドを調べ、オーディオの残骸をあさり、テーブルをひっくり返して裏側を見て、タンスの引き出しも全部外して、一つ一つ丹念に調べ上げていく。それこそ、虱潰しに。

風守の方はというと、もう探す行為に飽きてしまった様子で、壁に背中を預けた状態で目を閉ざしている。手伝う気はゼロ。完全に無関心だ。

「私も探すの手伝いますね」

私は手を上げて、進んで申し出た。

黒澤だけに探させるのは可哀想だし、自分も役に立つ人間であることをちよつとでもアピールしたい。

そう意気込んだのだけど……。彼の人睨みで自重させられました。ちよつとムツとした。

でも、邪魔者になるのはマズイから、風守の隣に移動して大人しく待つ。

五、六分ほど待っただろうか。

ベッドを強引に異動させ、その下の床を調べていた黒澤が、急に立ち上がって私たちに注意を促した。

「どうやら床に仕掛けがしてあるようだ。二人とも気をつけてくれ」
「どんな仕掛け？」

訊いてみると、彼は難しい顔をして床を指差した。

「この部屋の隅に位置する床板の一部が折り畳めるようになってい
るのだ。何がどうなる仕掛けなのかは、床板を捲り返して仕掛けを
作動させてみないとわからない」

「床を捲り返すって……そんなの家具が邪魔で無理だよ」

「室内にある物を全て廊下に出してしまえば、問題なく床板を折り
畳むことができる」

「……………」

そんな重労働、したくないなあ。

その思いを表情にして彼を睨む。

だが、彼が家具を一つずつ運び始め、それを風守が手伝うのを見
ると、さすがに部屋の隅で突っ立っているわけにもいかず、私も渋
々ながらに手伝った。

私が空っぽのゴミ箱を廊下に放り出して、作業は終了。

室内は空っぽになった。

「今から俺が床板を捲り返します。風守さんは、室内に何か異変が
起こったら、すぐに教えて下さい」

そう言い、黒澤は部屋の右奥にしゃがみ込んで、床板の角に手を
掛けた。

「よかるう」

風守は鷹揚に頷いて、部屋の中央で腕組みをした。

「エリカは廊下で待っている。およそ、危険な罠が仕掛けられてい
るだろうからな」

「うん、わかった」

言われるまでもなく、私は危険地帯から脱出である。死の罠が発
動する可能性のある部屋などに留まるなんて、正気の沙汰じゃない。
瞬間的な罠だったら、二人とも即死だ。床板を捲る役の黒澤が室内

に留まるのは仕方ないとしても、風守は残る必要なんてない。私と一緒に廊下で待機するべきである。

それとも、他に何かしらの意図があつて残つたのだろうか？

罨が発動したら黒澤を助け出すために、あえて部屋に残つたとか？そんなことを考えている間に、黒澤が床板を捲り返していた。

なんと、この部屋の床板は、ちょうどベッドの下に位置する部分だけが二重になっていたのだ。

「面倒な仕掛けだが、物を隠す場所としては悪くないな」

黒澤は微かに微笑んで、ほんの少しだけ自慢げな口調を用いた。脱帽である。

そんなの、普通の人間じゃ発見できるわけない。大抵の人は、ベツドの下を探すことはしても、床自体を調べるようなマネはしないだろう。室内の家具を運び出すなど、一般人の思考外だ。

「それで、床板の下には何があつた？」

風守はしかし、これほど大掛かりな仕掛けにも、さして興味を示した様子もなく、ヒゲの端を摘みながら、どうでもいいような声で訊いた。

「ここに、鍵穴付きのケースが埋め込まれています」

「罨は？」

「確実に仕掛けられていますね」

「どんな罨かわかるか？」

「……ざつと見たところ、ケースの蓋を開けた瞬間に発動する罨のようです。罨の種類はわかりませんが……、およそ毒針や毒刃の類でしょう。最悪の場合、毒ガスが噴出することもあり得ます」

「ふむ。それは物騒な話だな」

その言葉とは裏腹に、風守は可笑しそうにくくくつと喉で笑う。

「それで、その罨は解除できそうか？」

「いえ、この手の罨は使い捨てのもののなので、解除は想定外として作られていると思います」

そのケースを開かなきゃアイテムは得られないけど、ケースを開

くと罫が発動する？ そんな無茶苦茶な仕掛け、どうしろっていうのだろう。まさか、誰かを犠牲にしろ、というメッセージ？ 一番必要な仲間を生贄にして手に入れなきゃならないレアアイテム？ もしそうだとしたら、そのケースの中身は諦めて、部屋を出るベキだろう。生還に必要なアイテムじゃなければ、無理をしてゲットする意味なんてないのだから。

「そうか。よくわかった」

風守は一つ大きく頷くと、腕組みを解いて黒澤に歩み寄った。

そして、一言。

「黒澤は下がっているがよい。我がケースの中身を取り出すゆえ」

彼は、引き出しから靴下を出してやる、とでも言うような気軽さで、その役目を買って出た。

【6・西園エリカ】

突然の申し出にもかかわらず、黒澤は戸惑った様子も見せずに、持っていた鍵を手渡した。

「この《9》の鍵で開けられるはずです」

「うむ。あいわかった」

風守は鍵を受け取ると、鎖骨の辺りをぼりぼりと掻き毟りながらケースの前まで移動して、そこで胡坐を掻いた。

そこには緊張感の欠片もなく、畏への警戒心もなく、死に対する恐怖も生に対する執着もなく、アイテムを得ようという意気込みもなかった。単に、ケースの鍵穴に鍵を差し込んで回し、中の物を取り出そうとしているだけだ。その飄々とした立ち振る舞いからは、自分が何をしようとしているのかちゃんと理解しているとは思えなかった。

「あの人、大丈夫なのかな……？　なんか気合いゼロな感じだけど……」

部屋から出てきた黒澤に不安をぶつけてみた。

彼は額ににじみ出ている汗を手の甲でぐいつと拭き取り、薄らと笑みを浮かべた。

「風守さんが心配か？」

「そりゃ心配だよ。畏が仕掛けられてるってわかってるのに、ケースを開けようとしてるんだもん」

「そうだな。しかし、彼を心配する必要はない。その心情に惑わされる意味などない。俺たちは、ただ、彼がケースの中身を取り出す様を見物しているだけでいいのだ」

まるで成功を確信しているかのような言いようだった。

っていつか、風守涼貴というテスト生をすんごく信頼して、信用している。私とは真逆の扱いだ。

「あの人、そんなに凄いテスト生なんですか？」

「ああ。テスト生として優秀だけでなく、人間としての能力が抜群に優れているのだ。いわば、オリンピック選手並みの身体能力の持ち主だな」

「あんなヒョロヒョロの体なの？」

「ちゃんとご飯を食べてない人みたいに肋骨が浮き出て、手足も細くて筋肉の盛り上がりもない。重い物を持ったらポキッと折れてしまいかもしれない。あ、だけど、さっきダンというお馬鹿さんをやっつけた時は、確かにオリンピック選手並みの脚力を見せていたな、と思い出した。それに、剣の技も普通じゃなかったし。」

「外見から測っても無意味だ。彼の凄さは別にある」

「別？」

「いわば、彼の体に流れる血と、彼が背負っている運命が、彼という存在を強くしているのだろうな」

「……意味不明なんですけど」

「言っている俺ですら理解できていないのだ。おまえの脳味噌で理解できるはずもない」

「あー、それ、酷い言い方だなあー」

「純然たる事実だ」

黒澤は言葉のナイフで私の心をサクッと傷つけておいて、室内に目をやった。

私も釣られて視線を移した。

風守が右手に持った鍵を床に差し込んだようだ。

そして、そのままクルッと鍵を回転させた。

カチツと小さな音が鳴った。

「ふふつ、あそこまで無警戒で解錠することができるテスト生は、彼とソフィアくらいだろうな。発動する罠が何であれ、全て回避できるという自信があるからだろうが……。俺には到底あんなマネはできない」

苦笑する黒澤。

もし黒澤たちと出会ってなければ私も無警戒で鍵を開けちゃって

るよ、と思ったけど、絶対に馬鹿にされるので何も言わないでおい
た。

「ふむ。どうやら、罨が仕掛けられているのは、鍵穴ではないよう
だな」

風守は大きな声で独り言を呟き、ケースに手を掛けた。

罨の暴発を防ごうという意思は、その姿からは一切感じられない。
無防備で無警戒。しかも作業を淡々とこなしていく。

「鬼が出るか蛇が出るか、楽しみだ」

彼はフザケ半分としか思えない調子で、ケースの蓋をゆっくりと
持ち上げた。

その途端、バイーン！というバネが弾ける音がして、彼の体を
大きく吹っ飛ばした。物凄い勢いだったので、彼の体が後ろの壁に
衝突するのではないかと思ったくらいだ。

しかし、彼は生きていた。

っていうか、壁の前で平然と立っている。

左手には、縁がノコギリみたいにギザギザになっているDVDみ
たいな円盤状の物が、親指と人差し指の間で挟むように固定されて
いた。

どうやら、飛んできたギザギザの円盤を素手で受け止めたらしい。

「風守さん、大丈夫ですか？」

「うむ。何のダメージも受けておらぬ」

黒澤の呼び掛けに答えるヒゲおやじ。

動揺を微塵も感じさせない声音だ。

「あんなに吹っ飛んだのに？」

「吹っ飛んだのではないぞ、小娘。衝撃を後方へと逃がすために、
我自ら飛んだのだ。罨を食らったわけではない」

自ら飛んだ、って……こらこらオッサン。

胡坐を掻いた状態から、何の反動もつけずに何メートルも後ろ飛
びするなんて、オリンピック選手の身体能力を超えてますよ。お尻
の下にバネでも仕込んでるんですか？ それとも下半身全体を改造

してる？ ロボット？ 生身の人間には不可能な動きですよ、今は！

そう私は全力で叫んだ。心の中で、だけど。

「丸ノコギリの刃が高速で射出される仕組みの罠だったようだな。普通の人間であれば、即死しておったぞ」

風守は、手に持っていた円盤状の物を黒澤に見せながら、淡々と告げた。

もし黒澤が開けていたら、彼は即死してたと言いたいらしい。嫌な報告である。

でも、私の内では、丸いノコギリなんてあったんだ、という驚きの方が勝っていた。

この手の罠は、一度発動してしまえば後は安全であり、もう警戒しなくていいそうなので、私と黒澤も室内に戻った。

ケースの前まで行って、改めて室内を見回した黒澤は、呻くとも唸るともつかない声を発した。

「これは……想像していた以上に危険な罠だったようだな……。部屋の壁を見ってみろ」

黒澤が指し示した壁に、私は顔を近づけて見た。

「あー！」

そこには、風守が手で止めた物と同じ丸ノコギリが、ざっくりと刺さっていた。

「室内の壁のいたる所に丸ノコの刃が刺さっているだろう？」

「うん。天井にも何枚か刺さってるみたいだよ」

数えてみると、十六枚の丸ノコギリの刃が、ケースを中心として扇状に射出されていた。

つまり、どう身を隠していても、ケースの前にはいた場合は丸ノコギリの餌食になっていたということ。

風守のような超人でなければ、死が約束された罠だったらしい。

「恭司さんが開けてたらヤバかったよね」

「いや、俺であれば、捲り返した床板を盾にしていた。そうすれば、丸ノコを食らわずに済んだだろう」

「あー、なるほど！ 恭司さんて頭良いですね」

「それくらいの知恵が働かなければ、今まで生還できていなかった」
誉めてあげたのに、無表情で返す黒澤。

ちよつとくらい得意気な顔をしてくれれば可愛げもあるだろうに、この男ときたら……。

まあ、いいや。

こういう男に、雰囲気盛り上げるための友好的コミュニケーションンってやつを求めても無駄だ。

「それで、ケースの中には何が入ってたんですか？」

「そう焦るな、小娘。今、確かめるところだ」

その場でどかりと胡坐を掻いた風守は、ケースの中を覗き込んで、無造作に手をつ込んだ。

そして、何かを掴み出した。

「ふむ……。こんな物が入っておったぞ」

そう言っただけに私たちに見せた物は、一辺が二センチくらいのプラスチック製の板だった。

それが幾つもある。

その一つ一つは透明で、全て似て非なる物だ。どれとして同じ形の物がない。

「これって、ジグソーパズル？」

私が見たままズバリを言うと、黒澤はパズルのピースを一つ取って、それをジロジロ見ながら頷いた。

「それ以外には見えないな」

「これが生還に必要なアイテム？ 全然役に立たなそうなんですけど」

てつきり、物凄い強力な武器とか、すんごく可愛い服とかを期待していただけに、声に落胆が滲み出てしまった。

「役に立たないアイテムなど、このサバイバルテストにはない。も

しかすると、これを所有していることが、上位ランクの生還条件なのかもしれないのだ」

「あー、なるほどねー」

物としては役立たずだけど、生還条件を満たす意味で有用なアイテムかもしれないわけだ。

「持っていて損はない。小娘よ、ポケットにしまっておくが良いぞ」「え？ 私が貰っていいの？」

「これを得たのは我。そして、我には不必要な物だ」

「でも、恭司さんの鍵を使って取ったアイテムだし……。何もしてない私が貰っちゃったら、なんか申し訳ない感じがするんですけど……」

「むははっ！ 可愛いことを言う。だが、遠慮は要らぬぞ。取っておくが良い」

私の頭を撫でながら大笑いする風守。

何十という数のジグゾーピースが、ざらざらざらーっと差し出した手の平に乗せられる。

それをポケットの中にしまい、私は黒澤の方を見た。

「貰っていい？」

「風守さんが体を張って得たアイテムだ。その所有権は彼にある。そして、その所有権をおまえに譲ると言うのであれば、俺に異存はないし、それに文句を言う権利もない。大切にすることだな」

「ありがとう！」

私は心からのお礼を述べて、二人に対してぺこりと頭を下げた。

部屋を出る際、ふと気付いたことがあったので、二人に訊いてみた。

「罨が仕掛けられてる部屋って、絶対にアイテムがあるんですよね？」

「ああ。例外なく、テスト生に有益なモノが隠されている」

黒澤は、廊下に散乱しているベッドやタンスを押しつけて通り道

を作りながらも、嫌な顔をせずに答えてくれた。

「そんじゃあ、さっきの部屋にも何かアイテムがあつたんじゃないですか？」

「さっきの部屋？ 我らが出会った部屋のことか？」

壁に背を預けて腕組みをし、黒澤の作業を眺めていた風守が、今更何を言い出すのだという顔で首を傾げた。

「はい、そうです。あの部屋、何もアイテムが置いてなかったんですか？」

危険極まりない罠の所為もあつて逃げ出して来たけど、実は部屋のどこかにアイテムが隠されていたのではないだろうか。

あの《セーヨーかちゅー》の中なんか、実に怪しいと思う。

その点を確認すると、ヒゲ侍は目尻にシワを寄せて笑みを浮かべた。

「ふむ。小娘にしては良く気付いたな。確かに、あのレベルの罠が仕掛けてある部屋には、何かしらのアイテムが置いてあるはずだ」

「それじゃあ！」

「聞くのだ、小娘よ。しかし、それは一人だけの特権だ。後から来た者に与えられるのは、罠を回避したという満足感と、生き延びたという安堵感のみ。我があの部屋を訪れた時には、既にアイテムは持ち去られた後だった」

「あー……」

私たちは罠に掛っただけの、運のないテスト生ってこと。

「何事も、早い者勝ちってことですね」

「うむ。時は万人に平等だ。無駄にすれば、それだけ不利になる」

「そうならないように、先を急ぐとしよう」

黒澤が話を引き取り、先を促した。

【7・古城篇也】

こっちは罨が仕掛けてある可能性が低いから、という謎の理由で俺がドアを開くハメになった。

死ぬ可能性もあるから代わりに開ける、と言っているのだ。

そんなの嫌だが、俺の立場上、それを拒否できない。

回れ右をして逃げ出したいが、そうすると後ろから撃たれそうな気がする。

ここは運を天に任せて危険に立ち向かうしかない。

「よし、開けるぞ」

「ええ」

千鈴は万が一を考えてか、俺の体を盾にする位置に立った。

自分だけ助かるうなんて、酷え女だ。優しさの欠片もねえぞ。きつと、俺が罨で死んでも、平然として先へ進むのだろう。一粒の涙も流してくれりゃ、可愛げがあるんだが……。そんな女じゃねえのは、短い付き合いの中でわかってるし、天変地異的な奇跡が起こって彼女が泣いたとしても、俺は死んじまっているので、それを見て感動に浸ることはできない。

俺は諦めにも似た感情を胸に、ドアノブを握り、そっと回した。

カチャっという音。

そんな小さな音でさえ、心臓に悪い。何かしらの罨が発動した音なんじゃないか、とビクビクしちまっている。俺って、こんなに臆病な人間だったっけ？ いや、こういう反応が普通だろ。常識的に考えて、この状況で平静でいられる人間の方がどうかしてる。

俺はゆっくりとドアを押し開けた。

「……罨は掛ってなかったみたいだぜ」

「ご苦労様」

千鈴は笑顔で言い、俺の肩をポンポンと叩いて労った。

そんな安っぽい言葉じゃなくて、その魅力的な体で応えて欲しい

ぞ。例えば、キスとか。この程度でセックスさせるとは言わねえけど、チュツと唇を合わせるくらいのご褒美はありだろ。そうすりゃ俺のテンションも跳ね上がって、この先の危険にも立ち向かえるってもんだ。

しかし、下心を言葉に変換すると、俺の下半身が潰される危険性大なので、妄想するだけに留めておいた。

室内は真っ暗だった。

廊下から差し込む明かりによって、かろうじて中の様子が窺えるが、奥の方までは見通せない。部屋の中央付近に、何か巨大な物体が異様な存在感を示しており、見る者に不吉な予感を覚えさせるのは、俺の勘違いじゃないだろう。この部屋は危険だ、という理由もない直感。まるで、目に見えない文字で《初心者お断り》と書かれているようだ。俺みたいなKナンバーがほいほい入ったら、その瞬間にあの世へと旅立ちちゃうこと間違いなしだ。

そんな俺の思いも知らず、千鈴は後ろからグイグイと俺の背中を押して、部屋に入ろうとした。

「何ぼさーっと突っ立ってんのよ。ほら、さっさと入りなさい」

「おいおい、押すんじゃないよ。足下に罠とか仕掛けられてたら、どうすんだよ。危ないだろ」

「罠？ 廊下の明かりが照らしてる辺りまでなら、警戒しなくても大丈夫よ」

いつ確認したのか知れないが、千鈴は確信を持った口調で言った。この明度で安全を確認するなんて、さすがJナンバーだ。俺なんざ、自分の足元すら見えていない状態なのによ。まさか、RPGみたく、ランクが上がる毎にテスト生能力が上昇して、特殊な技能が身につくってことはないよな？

「篤也」

いきなり名を呼ばれ、俺はビクとした。

「何だよ？」

「手、出しなさい」

「手？」

俺が手を伸ばすと、手首を鷲掴みにされ、ぐいっと上に引っ張られた。

ちょうど彼女の胸辺りの高さだ。もしかして……ジーンズの中に手を差し込ませてエロい悪戯でもさせてくれるのか、と期待したが、どうやら違うようだ。

「ここにスイッチがあるの、わかる？」

そう言われて誘導されたのは、彼女のふくよかな胸じゃなく、冷たくて硬い壁だった。

ほんのちよつと期待しただけに、ガツカリ度合いも大きい。

しかし、確かに彼女が言う通り、その場所にはスイッチらしき突起物があった。

「おう、わかるぜ。これで電気をつけるってことか？」

「違うわよ！ そのスイッチは、あたしがOKを出すまで絶対に押しちゃダメ！ いいわね？」

何の気なしに俺がスイッチをオンにしようとすると、千鈴が悲鳴じみた声で怒鳴った。

「お、おう、わかったぜ。でも、そんなに怒鳴ることねえだろ」

「そりゃ怒鳴るわよ。もし、そのスイッチが罠に連動してたら、あたしたち即死なの。考えなしに押されちゃ敵わないわ」

「ああ……罠のスイッチっていう可能性もあるのか……。そりゃ危ねえよな」

壁にあるスイッチを罠かもしれないと勘繰るなんて、初心者には無理だ。普通は、電灯のスイッチだと思うだろ。部屋が暗いなら、尚更に、自然と壁のスイッチを押してしまうものだ。そもそも、そんな細かなところまで気を回してたら、半日も経たないで神経が焼き切れちまうぞ。

「あたしが一通り室内を調べて回るから、あんたは少しの間、そこで大人しく立ってなさい。いいわね？」

「おう」

「他のテスト生が来そうだったら、すぐに知らせなさいよ」

「おう、わかってるって」

俺だって、こいつの言動を見て、それなりに学習しているのだ。言われなくなつて、他のテスト生が近づいて来やがったら、合図するくらい心得ている。ただ、敵の接近を察知できるかどうかが問題だが……。

千鈴は体重がないのかと思わせるくらい静かな身のこなしで部屋の中央まで進み、そこに存在感を示している巨大な物体の前に立った。

「これ、何かしら」

小さな囁き声。

俺の意見を聞いているのではなく、自問しているようだ。

「硬くて大きくて冷たくて……すんごく重いわね。動かせる物じゃないわ。つまり、これはアイテムじゃなくて、罨そのものか、もしくはアイテムに通じるクエストね」

ブツブツと呟きながら、それを叩いたり擦ったりしている。

そうして一通り調べると、彼女は部屋の入口まで戻ってきて、あつさりと言った。

「篤也、スイッチを入れても良いわよ」

「いいのか？」

「ええ。そのスイッチは、室内の蛍光灯をつけるための物よ。あたしの勘は良く当たるから、安心しなさい」

「勘かよ……」

いったい、どんな勘が働いたのやら。女の勘ってやつだろうか？でも、この若さで「ナンバー」を誇っている点から考えれば、彼女の勘は頼りになると言っていいただろう。

俺は若干の不安を胸に、壁のスイッチをオンにした。

蛍光灯に光が入り、室内が明るく照らし出された。

部屋の隅々にまで光りが行き届き、今まで闇によって隠されていた部分を浮き彫りにする。

「ほら見なさい。畏じゃなかったでしょ？」

誇らしげに言う千鈴。

俺は適当な相槌を打っておいて、室内に意識を集中した。

部屋自体はそれほど広くない。目算で十二畳くらいだろう。幾つかの置物と、小道具らしき物体があちこちに並べられている。窓やドアの類はなく、テーブルや机や家具の類もなかった。あるのは、用途不明の置物だけだ。

その中でも、まず目を引くのが、部屋の中央にどーんと置かれている巨大な物体だ。

青磁器だろうか。高さが一メートルくらいあり、器の直径が二メートルくらいある。被災地とかで用いられる炊き出し用の鍋くらい大きい。まるで巨人用のお椀だ。そして、その中には、いかにも猛毒ですよと言わんばかりに毒々しい、暗緑色の液体が七分目くらいまで注がれていた。

千鈴は器に顔を近づけて、くんくんと臭いを嗅いだ。だが、想像したよりも臭かったらしい。おえつと舌を出して、その美貌を歪めた。

「ひどい臭いね」

「これ、飲んだら確実に死ぬよな？」

俺も顔を近づけて匂いを嗅いでみたが、とても耐えられる代物じやなかったので、二秒で顔を離れた。

「どうかしら。死にはしないけど、死んだ方がマシっていうくらい苦しみかね」

「逆に、苦しいから殺してくれーって感じか……。それはそれで嫌だな」

「でも、この大きな器に何か意味があるのは確かよ」

そう言って千鈴は部屋の奥を指し示した。

彼女が指差した場所。そこには、学校で使う黒板の縮小版みたい

な物が壁に掛けられていて、何やら文字が殴り書きされていた。

俺は駆け足で奥まで行き、黒板に書かれている文字を声に出して呼んだ。

「なにになに……《泉の底に眠る獣を呼び覚ませ》か……。これ、どういう意味だ？」

「文字通りの意味でしょ」

文字通りの意味って言われても、まったく見当がつかない。

「この建物の中にや、泉なんてねえだろ。それとも、この建物の周辺に泉があるってか？」

「あんた、馬鹿なの？　ちよつとは考えなさいよ」

おまえに言われたくない、という言葉がグツと堪えて、彼女の解説を待つ。

「泉の底っていうのは、つまり、この器の底のことよ。この器の底に《獣》が描かれてる、っていう意味なの。わかったかしら？」

「……おう」

その程度の意味なら、いちいち説明してくれなくても、誰でも推察できるだろ。そうじゃなく、もっと難しい意味が込められているのかと思つて、彼女の意見を聞いたんだ。それなのに、この女ときたら……。

俺は軽い苛立ちを覚えたが、それを表情にせず、愛想笑いで応じておいて、彼女の隣まで移動した。

「んで、どうやって器の底を見るんだ？　まさか、俺に全部飲み干せとか言わねえよな？」

「言わないわよ。どう考えても一人や二人で飲み干せる量じゃないでしょ」

「じゃあ、どうすんだよ。この器を横倒しにして中身を流し出しちまえば早いけど、こんなの十人がかりでなきゃピクリとも動かねえぞ」

「うーん……どうしょっか？」

「おいおい……」

俺と千鈴は腕組みをして睨めっこをしながら考える。

飲まずに器の中身をゼロにする方法が何かあるはずだ。

そこで、ふと気付いた。

部屋のあちこちに置かれている小物。

それを用いて器の中身を掻き出せないか？

「なあ。部屋の隅に並べてある小さな器で液体を掬い出すつてのはどうだ？」

俺は部屋の左奥に置いてある小さな小皿を手にとって、彼女に見せながら案を出した。

しかし、帰ってきたのは呆れ顔とウンザリ声だった。

「あんた、どういうレベルの馬鹿なのよ？ そんな手間暇かけてる時間があると思う？　せめてラーメン用のドンブリくらい大きな器があれば、そう時間もかけず、苦勞せずに液体を掬いだせるだろうけど……。そんな小さな皿じゃ、どうしようもないわよ。それなら、むしろ手で掬いだした方が早いでしょ」

「ああ……確かに……」

俺は納得して、持っていた皿を放りだした。

壁に当たって砕け落ちる皿。

「何か良い方法があるはずよ……何か……」

俺たちは、ない知恵を絞り出そうと、懸命に頭を働かせた。

だが、一分も経たず、彼女はギブアップした。

「むーりー！　こんなの、あたしたちが考えてもムリよ！　やめた！　やーめたっ！　考えても無駄なだけ！　時間の無駄遣いよ！」

大声で喚き散らしながら、どすどすと足音を鳴らして部屋を出ていってしまう。

なんとという堪え性のない女だろう。腰を据えてじっくりと考えることができない性格なのか？　そんなんで、よくも今まで生き残ってこれたな、こいつ。

そう心の中で批判しつつ、俺は慌てて後を追った。

「おいおい、やめって何だよ？　もうギブってことか？」

「言葉通りよ。あたしには、あんな暗号を解くのは無理なの。だから、あれを放置して次の部屋に行こう、っていうことよ！ 文句ある？」

千鈴は格好悪い台詞を大声で言い切って、キツと俺を睨んだ。

文句はない。

ないが……。

「もし次に来たテスト生が、サクッと暗号を解いて、お宝をゲットしちまったらどうすんだよ？ それが銅メダルだったら、俺、悔やんでも悔やみきれねえぞ」

「その時は、そいつから銅メダルを貰えばいいのよ。レアなアイテムや有益な情報と交換することもできるし。仲間になったフリをして、隙を見て盗むって手もあるわね。別に、あたしたちが時間を掛けてゲットする必要はないのよ」

「ああ、そうだな。そういう手もあるか……」

最悪の場合、そいつを殺して奪えばいい。

千鈴の手を借りれば簡単なことだ。

【8・古城篤也】

一度物事が上手くいかなくなると、その後は連鎖的に足踏み状態が続く、果ては行き止まりに至ってしまい、回れ右をして来た道を引き返さざるを得なくなる…… ってことは少なくない。

今、俺たちがブチ当たっているのが、まさにそんな状況だ。

このフロアには、他の通路へ繋がる分岐がなく、目視で確認できるドアも二つしかない。その一つは調べ終えたが、何の成果も得られず、何も解決しなかった。時間を浪費した挙げ句に、謎を謎のまま放置して終了。消化不良に似た嫌なモヤモヤ感が胃の辺りにわだかまって、気分を悪くしただけだ。

そして、俺たちに残された選択肢は、ただ一つ。あの、『電流系』もしくは『警報系』の罠が仕掛けられているドアだ。来た道に戻りたくなければ、確実に罠が仕掛けられているドアを、危険を覚悟でブチ開けるしかない。

「もし即死レベルの罠だったら…… って考えると、ここはスルーして一旦下の階に戻った方が良くねえか？ さっきの部屋の謎と同じ要領で、誰かが危険を冒してから部屋に入ればいいだろ。果報は寝て待ってっていうし」

俺は誰もが考えつくであろう一番の安全策を勧めた。

しかし、千鈴は良い顔をしなかった。

「あの程度の罠を避けていたら、最初から最後まで何もできないで終わるわよ。あれは凶悪な罠じゃなさそうだから、当たって砕ける覚悟で挑むべきね」

「人間、命は一つっきゃねえんだ。当たって砕けちゃマズイだろ。危ない橋を渡るのは、ギリギリまで避けていこうぜ」

「何言ってるの、篤也は！ このサバイバルテストで安全を優先してたら、生還不可能になっちゃうでしょ！」

彼女は憤慨気味に俺の安全志向を一蹴し、眉間にシワを寄せ、可

愛らしい怒り顔を近づけてきた。

「なんでだ？ 優秀なテスト生様にや、さつさと先に生還していただいて、俺らは後から攻めりゃいいだろ。そうすれば、大抵の罠は全部解かれてるだろうし、意味不明の謎も解いてあるに違いないぜ。サバイバルテストの期限が一週間だから、ラスト二日くらいから活動すりゃ、良い感じにクリアできるんじゃないか？」

俺は秘めていた名案を披露して、その是非を問うた。

だが、返ってきたのは、憐れみを含んだ呆れ顔と、諦めにも似た深い溜め息だった。

「……あんた、ほんとーに、どうしようもない馬鹿ね」

「なんでだよ。良い案だと思うぞ」

「あんたの言う通り、四日目を過ぎる頃には優秀なテスト生は全員生還しているだろうから、競争相手としての脅威はなくなるでしようね。建物の各所に仕掛けられている罠も、ほとんどが解除されていると思うわ」

彼女は明らかな作り笑顔を浮かべて言い、一転、怒り顔に変じさせた。

「でも、その頃には、ほぼ全ての有効なアイテムが失われているわよ。当然、生還に必要なアイテムもなくなっているでしょうね。そんな中で、何をしようって言うの？」

「あ、そうか……」

言われて気付いた。

生還するには各ランクに応じたアイテムが必要であり、次のランクに昇格するには相応のアイテムを得る必要があるのだ。

俺に必要なのは、三枚の銅メダルだ。この建物の中に何枚の銅メダルが隠されてるか知れねえが、その数に限りがあるのは確かで、しかもKナンバーが生還を許されるのは一名だけなのだ。最悪、銅メダルは三枚しか用意されていない可能性もある。それはつまり……。

「早い者が勝つってことかよ」

「その通りよ」

千鈴は小さく頷き、俺を促して目的のドアへと近づいて行く。

俺も彼女の後を追ってドアの前へと移動した。

「テストの期限は、あってないようなもの。実際は、三日くらいで生還の定員数を満たしてしまうわ。そして、そうなってしまうたら、どれだけ優秀なテスト生であつたとしても、生還することは許されない。たとえGナンバーであっても、死を約束されてしまうの。それが現実よ」

「嫌な現実だな」

「だから、自分の能力に見合う程度の危険であれば、それが死の罠であつても冒さなければならぬのよ」

「……要は、このドアを開けなきゃなんねえ、ってことかよ」
「そういうこと」

しかし、そう結論が出たところで、目の前にある危険を無条件で受け入れて、レッツゴーと前進できるわけもなく、俺は全ての作業を千鈴に任せて、一步離れた場所から見守っていることにした。

ドアの前にしゃがみ込んだ千鈴は、真剣な顔をドアノブに近づけ、改めて鍵穴を調べ始めた。

その作業にどんな意味があるのかはわからないが、彼女はジーンズのポケットから縫い針みたいに鋭く尖った細長い金属を取り出し、鍵穴に差し込んでこちょこちょといじくり回している。

「鍵自体は掛かってないから、ドアを開けることに支障はないんだけどなあ……」

こっちにケツを向けて、ぼやいている姿は可愛いんだけど、彼女が触れているのは死を呼ぶかもしれないドアなのだ。並みの度胸ではない。この女も最初は、誰かの助けを借りて、それでもビクビクしながら生還に至つたのだろうか。そんな姿は簡単に想像できてしまう。逆に、外見が抜群の美少女だけに、その内側に秘めているものを見抜くのは難しい。その格闘能力を知っていてさえ、背後か

ら抱きつければ押さえこめるんじゃないか、と思わせるのだから。

「警報とか電流なら死にやしねえんだから、思い切って開けちまえ
ばいいんじゃないか？」

「そうね。そっちの方が手っ取り早いわね」

俺が適当な意見を言つと、彼女はあつさりど調査を止めた。

そして、俺の肩をぽんと叩き、男なら誰でも脳味噌がとろけ落ち
そうなくらいの全開笑顔を作った。

「じゃ、よろしく」

「おう！」

かるーく応じておいて、頭の中に《？》マークが点灯した。

「え？」

一瞬、何がよろしくなのか理解できなかった。

しかし、すぐに意味がわかった。脳味噌に燃料を注ぐまでもなく、
明解すぎるくらいにわかりやすいことだ。

でも、それを受け入れたくないのど、理解していないフリをする。
「おい！ まさかとは思うけど、俺にドアを開けるとか言うんじゃない
だろうな？」

「言ってるわよ」

デビューしたての糞アイドルよろしく、媚びを売るような営業ス
マイルで顔をコーティングする千鈴。

「ほら、頑張つて。ね？」

斜め四十五度に傾けられた顔が極悪レベルに可愛すぎて、正直、
理性を失いかけた。並みの男なら百パーセント籠絡されて、率先し
てドアノブに手を掛けただろう。これがサバイバルテストでなければ、
俺も喜んでドアを開けたに違いない。

だが、俺は負けねえよ！ そんな表面上の幻惑効果で心を支配し
ようなど、ちゃんちゃら可らしいぜ！

俺は、下っ腹にド太い芯を通して正気を保ち、頷いてしまいそう
な首を想像上の有刺鉄線で雁字搦めにして、彼女の攻撃を受けきつ
た。

「ね？　じゃねえよ！　まったく……。なんで俺がドアを開けなきゃなんねえんだ！」

「いいから、開けなさい！」

媚びが効かないと見るや、彼女は即座に攻撃方法を変えた。

その手には、銀色の拳銃が……。

「もし凶悪なテスト生が姿を見せても、これで撃退してあげるから。はやく開けなさい！」

その拳銃は、襲撃に対するためのものというだけでなく、俺に対する脅しも兼ねている。

いや、むしろ脅しの意味合いが強い。

「はいはい、わかりましたよ、チクショウ！」

俺は嫌々という内心を全力でアピールしながら、ドアの真ん前に立ち、ドアノブに手を掛けた。

千鈴は例によって、危険から身を遠ざけるように、ドアから数歩距離をとる。

「いいか？　開けるぞ」

「いつでもいいわよ」

俺はドアノブを回し、ドアを押し開けた。

その瞬間――

ぱっぱぱっぱぱっぱー、ぱっぱぱっぱぱっぱー。

物凄い下手糞なトランペットの演奏が部屋の中から流れ出し、それが終わると同時に、獣じみた咆哮が部屋の奥の方から放たれた。

そして、静寂が全てを支配し――
すぐに破られた。

「呼んでる……」

小さな囁きだった。

しかし、その声はこの空間に対して圧倒的な支配権を有していて、容赦なく俺の耳に入ってくる。

「か、彼女が……僕をよ、呼んでる……。呼んでるんだ……」
まるで声の主が息絶えてしまうのではないかと思うほど、弱々しく儚げな声音。

でも、その声はあらゆる音を殺して俺の耳を犯す。

「僕が行か……行かないや……か、彼女を守れないんだ……」
その囁きは、声の主の感情を食らって成長するかのごとく、徐々に強く大きく鋭く禍々しくなっていく。

「僕……だけが……彼女を………救えるんだ！」
囁きが絶叫に変化した。

何かがヤバイ。そう察するに十分なシチュエーションだ。けれど、それに対処する能力なんか俺にはなくて。

室内から飛び出してきたモノを回避することができずに、思いっきり吹っ飛ばされた。

「篤也、逃げて！」

そんな千鈴の叫び声を聞いたような聞かなかったような。

最後に聞いたのは彼女の泣きそうな声。

「和成……また会えたね」

誰だよ、その和成って！ まさか恋人か！？ という突っ込みを入れる間もなく、俺は気絶していた。

【9・西園エリカ】

今、私たちは上の階へ移動するべく、階段を目指して歩いている。なぜかと言えば、このフロアにある入室可能な部屋を全て調べ尽くしてしまったからであり、『地下道』へと通じるドアの鍵を持っていない以上、下の階へは進めないのです、上の階へと進むしかなかったのである。それに、新しい情報を仕入れるためにも、一階に設置されているという『掲示板』を見る必要があるそうだ。

「『掲示板』って何ですか？」

私は、誰もが思い浮かべるであろう疑問を、風守に訊いた。

黒澤の方が知識は豊富でサバイバルテストの経験値も高いのだろうけど、彼は寡黙であることが美德と信じているのか、たとえば私が相手でも情報をタダで与えることをよしとしないのか、会話を成立させる努力を怠ること甚だしいので、質問を投げかける意味がないのだ。こっちが十の質問をして、やっと一つ答えてくれるかどうか、ってところなのである。出会った当初は色々と教えてくれたのに……。何か心の変化があったのだろうか？ 私のこと嫌いになっちゃった、っていうのはナシの方向でよろしく願いますよ。

風守は打てば音高く響く鐘なので、私の質問を無視したりせず、ちゃんと答えてくれる。

「『掲示板』とは、このサバイバルフィールドの要所に設置されているマジックボードのことだ。その用途に制限はない。自分の得た情報を書き込むもよし、アイテムの交換を求めるメッセージを記すもよし、ライバルの動向を探るべく対象テスト生の人相を記すもよし。そこに何を書くかは、用いる者の自由だ」

「へえ。便利ですね」

私を感じすると、黙然と歩いていた黒澤が徐に口を開いた。

「ただ、『掲示板』に書き込まれる情報が全て正しいとは限らない。あえて二セの情報を流してテスト生を罠に掛け、労せずライバルを

抹殺しようと企む者も少なくないからな。その点は注意することだ」
「え、嘘が書いてあるかもしれないんじゃあ、ぜんぜん役に立たないじゃないですか！」

サバイバルテストの初心者が、どれが正しい情報かを判別するなんて無理である。

「書き込まれている情報を精査すれば、自ずと虚報は省かれる」

黒澤は澄まし顔で言うけど、情報を精査するだけの知識がゼロなんだから、どうしようもない。

「嘘の情報を見分けるコツとかないんですか？」

「コツ？ 甘い言葉に騙されないことだな。対等の立場で同等の価値を持つアイテムの交換を求める書き込みであれば、信用してもいいだろう。ただし、無用なトラブルを回避するためにも、交渉には必ず第三者に立ち会ってもらうことだ。万が一、襲われた時に、手助けしてもらえる可能性が高い」

「なるほどー」

万が一の用心も怠らないなんて、さすが黒澤。細かいところまでアフターケアが行きとどいてますね。その調子で、これからもどんどんアドバースして下さい。

通路は相変わらず薄暗くて見通しが悪く、肌に水滴が浮かびそうなくらいジメジメしていた。

通路の半ばに右へと曲がる分岐路があり、そこを曲がった先には、いかにも怪しげな白塗りのドアが私たちをオイデオイデと手招きしていたが、黒澤が無視を宣言したので私たちは通路を直進した。

あの白いドアには特殊な仕掛けが施されているらしく、黒澤でも解除できなかったそうだ。鍵の役目を果たす特別なアイテムと、それを用いる情報が必要不可欠らしい。私たちは、そのどちらも持っていないから、無視するしかなかったわけだ。

五分ほど歩いただろうか。

私たちは上へと続く階段の前に到着した。

ここは《曲》という字の三画目の一番上に当たる場所らしい。

耳を澄ますと、水が流れ落ちる音が聞こえる。右の壁を隔てた向こう側の通路に大きな滝があるように感じる。出会った頃に黒澤が言っていた、水が流れ込んでいる地下道だろうか。何にしろ、小声で会話するのが困難なくらいウルサイし、ジメジメな不快指数も天井知らずだ。

「ドバババーっていう水の音、すんごく鬱陶しいですね」

私は両手で耳を塞いでおいて叫んだ。

「どこかに水の流れを制御する装置があるかもしれないが、今それを探す意味はない。とっとと上へ行こう」

「はい」

黒澤が先頭に立ち、風守がしんがりを務める形で、私たちは階段を上がった。

その途中、風守が何度か背後を振り返り、刀の柄に手を掛けた状態で下を警戒したのは……なぜだろうか？ 誰かが私たちの後を、そこそと追いかけていたのだろうか？ それとも単に、彼の思い過ぎだろうか？

結局は、何事もなく階段を上がりきり、地上一階のフロアに足を踏み入れた。

【10・古城篇也】

目が覚めた。

どうやら頭を打って気絶していたようだ。

俺はうつ伏せだった体を反転させ、肘を立てて上半身を起こした。そして、顔に手をやる。

何かヒリヒリすると思ったら、唇と額を切っちゃったようだ。鼻血も出ている。どうやら、倒れる際に、顔面から行ったらしい。でも、大怪我ってわけじゃないから一安心だ。身体的なダメージは、後頭部と背中 of 打撲、それくらいだろう。

「何が起こったか知れねえが……酷え交通事故だな、こりゃ……」
俺は愚痴を零しつつ身を起こし、身に着けているカーテン製の口―ブで顔の汚れを拭った。

どれくらい気絶していたのかはわからないが、床に飛び散っている血がまだ固まっていなくて、何十分も呑気に眠っていたわけじゃなさそうだ。

ズキズキと痛む後頭部を押さえながら、自分の置かれている状況を確認する。

この通路には、俺以外いない。

無人の通路。

響千鈴の可憐な姿もない。

「千鈴？」

俺は頼れる相棒の名を呼んだ。

「おい、どこだ？」

俺を放ったらかしにして部屋の中を調べてるのか？

それとも、まさか――

「……………」

ふっと湧き上がった不吉な予感を無理にねじ伏せ、俺は自分を落ち着かせるべく大きく深呼吸した。

大丈夫だ。千鈴の身を案じる必要はない。あいつは歴戦のテスト生だから、自分の身は自分で守るだろうし、強襲されて死んじまうようなタマじゃない。俺が変な義務感に駆られて、あいつの安否を確かめるべく右往左往するのは、一番やってはいけないことだろう。今、俺がするべきは、とにかく何が起こったのかを調べ、それに対処することである。単独での行動には多少の不安はあるが、彼女から学んだサバイバルテストのイロハを基にして進めば、三步進んで即ゲームオーバーってことにならないだろう。

まず俺は、何が起こったのかを確かめるべく、開け放たれたドアに歩み寄った。

ありや、何だったんだろう？

ドアを開けたら、下手糞なラッパの音が鳴り響いて……。

部屋の中から物凄いスピードで何かが飛び出してきやがって……。

そいつが俺を壁に吹っ飛ばして……

それで……どうした？ どうなった？ 何が起こったっていうんだ？

部屋の中にいたイノシシ的な獣が暴走した結果なのか？ それとも、とち狂ったテスト生が体当たりごっこでも始めたってのか？

色々な可能性を想像しながら、俺は部屋の中に入った。

そして、見た。見てしまった。その惨状を。

「！」

悲鳴すら発せられないほどの光景が俺の視界を、心を汚す。

恐怖という装飾。それが部屋全体を彩っていた。

床には白衣を着た人間の残骸が幾重にも積み重ねられていて、おびただしい量の血が床一面を汚している。その死体は、ほぼ全て組織の人間の物であり、どれ一つとして人間の原型を留めている物はない。あるものは引き裂かれ、あるものは押し潰され、あるものは叩きつけられ、あるものはへし折られ、あるものは切り刻まれている。

まともな人間の所業ではない。

なるべく死体を踏まないように気をつけつつ部屋の奥へと進んでいくと、突然、死体の山の中から声が聞こえた。

「おい、その変な格好したにいちゃんよ、そんな所に突っ立ってちゃ危ないぜ」

とうとう俺の頭が恐怖の沸点を超えて、幻聴が聞こえるようになってしまったか？

そう思いつつも声の方に目をやる。

すると、折り重なった死体の下からニョキッと腕が伸び出してきた、グツと拳を握り、ビシッと親指を上にした。そして、血やら肉片やらで汚れた顔がニョーツと出てきて、二カツと笑みを浮かべた。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん、てか？ 死体の国から無事生還ってことで、拍手喝采で迎えてくれよ。笑顔はどうした、笑顔は！ くつくつくつ……………まあ、普通は笑えねえよな。笑えないのが正常だ」

「……………」

「おや、呆れて声も出ねえってか？ それとも、冒瀆の極みを目の当たりにして、怒りで声が出ねえのか？ でも、状況が状況だから、大目に見てくれや。それに、死体の海でシンクロナイズドスイミングってのも結構おつなもんだぜ」

そんな場にそぐわないフザケ調子で姿を現したのは、二十代後半と思われる日本人男性だった。しかも、かなりの美男子。血塗れでなけりや、有閑マダムが放っておかない容姿だ。日本有数のホストだと言われても簡単に信じただろう。身に着けている血色のスーツも、相当な代物と見える。

「あんた、そんな所で何してんだ？」

俺は死体に蹴躓かないよう注意して部屋の奥へと進み、優男に声を掛けた。

優男は寝そべったままの姿勢でニヤニヤ笑いを浮かべている。

「何が可らしいんだ？」

「ビクビクしてる割に行動は大胆だなー、とか思っただけで変な意味はないぜ」

そう言うのと、彼は上半身を後ろに反らし、反動をつけて飛び起きた。

俺は思わず、後ずさる。

「おっと、ビビるんじゃないよ、にいちゃん。俺はゾンビじゃない、あの《デスマスク》でもねえ。真つ当な人間だ」

彼は人懐っこそうな笑顔を作って言っただ。

俺の警戒心を解こうとしてるようだが、逆に怪しい。いや、すんげえ怪しい。

「ここで何をしてるのかって言うと、くっくく……気色悪いオブリエのフリをして死なない努力をしてた、って答えるしかねえな」

「死なない努力？　なんだそりゃ？　意味がわかんねえぞ」

「わからないのか？　ふーん、思った以上に呑気な性格だな、にいちゃんは」

彼は俺を小馬鹿にするように、くくくつと喉で笑い、その真つ白い美貌を汚している汁を舌先でペロリと舐めとった。

そして、予想外の答えを返してきた。

「ここは、《デスマスク》の寝所なんだ」

「デスマスク！？」

「おや、あれのことを知ってたんだな。それなのに、何の対処もせず、室内で棒立ちかよ」

「……ここがデスマスクの部屋だと知ってたら、全力で警戒してた」

「知ってたら警戒してた？　あはは！　最高のギャグだぞ、それ！

マーカスやヨッシーに聞かせたら、あの世で大爆笑するぞ、きつと！」

「だから、何が可笑しいんだ！」

馬鹿にするのも大概にしろと、俺は怒鳴りつけた。

が、効果はなかった。

「何度も言わせんなよ、にいちゃん。ここは、デスマスクの寝所な

んだぜ。そんな危険地帯で無防備を晒してる馬鹿を笑わないでどうするよ？ 普通、笑うだろ。ジョーだったら腹を抱えて大爆笑してるところだぞ」

「！」

言われて、自分の犯している過ちに気付いた。

ここがデスマスクの寝所なら、さっき俺を跳ね飛ばした奴がデスマスクその人と断定していい。

そして、奴は確実に戻ってくる。

「どうだ、理解したか？」

「ああ」

納得させられた俺は、その場でしゃがんで体勢を低くした。

「それで、にいちちゃんよ、おまえは何様だ？ その格好からしてKナンバーだろ？」

「ああ。俺は古城篤也。K3029号だ」

「律義に氏名ナンバーを名乗ってくれてありがとさん。じゃあ、礼儀として俺も名乗ろうかね。俺は、SSS5000号（偽）の名取主輔だ。よろしくな、古城君」

突っ込みどころ満載の名乗りだった。

「……SSS？ 偽？ おいおい、Sランクの上はGだろ。トリプルSなんてナンバーは聞いたことねえぞ。それに、（偽）って何だよ？ わけわかんねえぞ、おい！ なんなんだ、あんた！」

「そのままの意味さ。深く考えることはない」

名取は、俺の突っ込みを軽く流しておいて、ごろりと寝転がった。

「俺が何者なのかは、そのうち教えてやる。だから、今はとにかく死体のフリをしろ。デスマスクが戻ってきちまうぞ」

「あ、ああ、わかった……」

俺はなるべく原形をとどめている女の死体を選び、その下に体を沈み込ませた。

【11・古城篇也】

下水管の中や旧式便所の底とかで小一時間もじっとしていた経験のある奴は、世界で何名くらいいるのだろう。

十人くらいか？ いや、戦争をしている国とかでは、敵の目から逃れるために汚物の中に身を隠す者も少なからずいるだろうから、三ケタは確実か？ まあ、何人にせよ、今の俺よりも悲惨な状況に身を落としている奴は、そうそういないはずだ。いたら、俺が表彰してやるし、喜んで立場を入れ替わってやるよ。

だが、意外や意外、俺と全く同じ境遇に陥っている人間がいる。しかも、俺のすぐそばに。

名前は名取圭輔とか名乗ったが、本名かどうかは怪しいところだ。SSSナンバーってのは冗談としても、自ら（偽）を称しているところがおかしい。存在自体がインチキ臭いというか、テスト生っぽくないというか、追い詰められている者の態度じゃないってというか……。そもそも、こいつは何故に率先して死体の山に身を隠してやがるんだろうか。あえてデスマスクの寝所に潜り込んで、危機的状況に身を浸し、死と隣り合わせのスリルによる快感を得て恍惚とする類の変態人間だったら嫌だぞ。自虐嗜好の変人は、他人に迷惑をかけない範囲で趣味に没頭して欲しい。

そうやって心の中で相手を貶めることで、今、俺は何とか正気を保ち続けている。

実際には一時間も経っちゃいないだろう。

せいぜい十五、六分っていうところだ。

しかし、それでも俺たちにとっては長い時間と言ってい。精神的な疲労は既に限界を極めつつあるし、それに呼応するかのよう。肉体も悲鳴を上げ始めている。こんなことなら死体の下なんか。身を隠さないで、さっさと部屋から逃げてりゃ良かった。そうしてれ

ば、千鈴とも再会できてたかもしれないし。

「千鈴、大丈夫かな……」

俺は溜め息混じりに彼女の身を案じた。

デスマスクにブチ殺されたかも、と心配したんじゃない。多少の困難なら、あのデタラメな強さでサクツと切り抜けるだろうし、相手がデスマスクであつても簡単にはくたばらないだろう。それに、あの女は、『デスマスクの弱点』を自称する女なのだ。その能力を存分に発揮すれば、問題なく危機を回避できるに違いない。

問題なのは俺の方だ。響千鈴という女は、強制的に仲間になされた相手だけど、一緒に行動する際のメリツトの大きさを考慮すると、離れてしまうのは惜しい存在だ。できれば、俺が生還条件をクリアするまで一緒にいて欲しい。それなのにこの状況だ……。

連続して溜め息を吐きなくなるつてもんだぞ。

「千鈴つて、さっきにいちちゃんと一緒にいた女か？」

それまで眠るようにジツとしていた名取が、急に食いついてきた。無視しても良かったが、悪臭を我慢しながら死体と睨めっこしているよりは、この優男と馬鹿話をしていた方が精神衛生上、害が少なかったたので、俺は会話に応じた。

「おう。一応、俺の相棒だ」

「へえ、相棒つてか！ 大きく出たねえ。その身の程知らずな戯言、笑い話として地獄まで持つていつてやるぜ、あはは！」

「なんだよ、何が可笑しいんだ？ あの女はマジで俺の相棒だぞ」
ちよつとイラツと来たので、睨んで威嚇してやった。

だが、名取は俺の表情の変化なんか気にした様子もなく、挑発を意図するようなフザケ顔を作る。

「にいちちゃんよ、おまえ、あの女の何を知ってる？ 相棒と言うからにはお互いのことを知りつくしてて当然だよな？」

「それは……」

返答に窮した。

考えるまでもなく、思い出すまでもなく、彼女について知ってい

るのは名前とナンバー、その刺々しい性格くらいだ。

「やっぱ、何も答えらんねえ、ってか？」

「……………」

「良くないな。実に良くない。自分について偽るのは、ある意味、自己防衛に通じるから一概には悪行と言えない。だがな、にいちゃんよ、自分以外の人間について偽るのは良くないぜ。俺自身、仲間について嘘をつき続けて失敗した経験があるから言うんだ」

「千鈴を相棒って言うのが、そんなにマズイのかよ。ちよつとだけ関係を誇張しただけだろ」

「ちよつと？ たかだか一緒に行動しているだけの関係を《相棒》って言つちまうのは、最悪の詐称行為だぜ、にいちゃん。もし俺が同じ立場の女に《相棒》なんて言葉を用いたら、即刻、あの世へ旅立つちまうぞ。冗談じゃなく」

おいおい、ちよつとした言葉の違いで殺されるような関係って、どんなんだよ。

そんな物騒な相方を持っている方が悪いだろ。

「千鈴は乱暴な女だけど、俺が相棒呼ばわりしても大して怒ったりしないと思うぞ」

「そりゃ、彼女は何とも思わないわな。おまえなんか男として眼中にないんだろうし」

「酷えことをズバズバ言うなよ」

こんな状況下じゃなきゃ殴ってるところだぞ。

「事実だからしょうがない」

そう言つて名取はニツと皮肉っぽく笑った。そして、今までのフザケっぷりが嘘のような真面目顔を作り、一言一言を区切るようにして、俺に言い聞かせた。

「この先、おまえが生きていられりゃ、確実に《彼》と会うことになるだろうから、今のうちに忠告しといてやる。もし俺と同じようなスーツを身に着けているインテリっぽい眼鏡を掛けた色男と出会ったら、逃げたり闘ったりしようなんて思うな。質問には正直に答

えて、《彼》の言葉を心に刻み込め。そして、間違っても、響千鈴の相棒なんて口走るなよ。それさえ守っていれば、最悪の存在つてやつを骨の髄まで味わうハメにならなくて済むぜ」

「……………」

何に対する忠告かも判然としなかったが、俺は適当に应じて理解したフリをしておいた。

それを見抜いているとでも言いたげな冷笑。

「まあ、俺が何を言ってるか全然わからなくて当然だ。ちっとだけ記憶に引っかけていてくれりゃ、それでいい。これ以上はグダグダ言わないさ。だが、これだけは覚えておけ。響千鈴の《相棒》と言えるのは、《デスマスク》ただ一人だ。例外は存在しない」

「え？」

千鈴の相棒はデスマスク？

デスマスクが千鈴の相棒？

それは……どういう意味だ？

ロケットのように勢い良く打ち上がった疑問。

しかし、それは、ロケット花火のように一瞬で弾けてなくなった。

この部屋の主が戻ってきたのだ。

ドーンという破壊音が、俺たちの会話を強制終了させた。

その直後に、男性のものと思われる野太い悲鳴が上がり、フロアがしーんと静まりかえる。

そして、遠くから、びちゃびちゃ、びちゃびちゃ、という浅い水溜りを素足で駆け抜けるような音が聞こえ始め、それが物凄い速さでこっちへと近づいてきた。

「おつとやべえ！ 奴が狩りから戻ってきたぜ！」

名取の緊張に満ちた声と表情。それでもまだ余裕があるのは、見つかからない自信があるからだろう。

でも、俺には自信なんかない。心は既にパニック状態だ。《デスマスク》という脅威への恐怖が冷静さを圧して、動揺と狼狽を生み

出していく。悲鳴を上げて部屋から逃げ出さないように自分を律するだけで精一杯だ。

「ほ、ほんとに、ここにいて大丈夫なのか？ このままでいいのか？」

「大丈夫だ」

何の保証もない即答。

しかし、この名取圭輔という男が、一切動揺していないばかりか、慌ててすらおらず、遊び半分としか思えないフザけた笑みを絶やさないことが俺を信用させてくれた。

「死体のフリなんてしなくていい。ただ寝転がって、息を殺して気配を消すんだ。それで十分に奴を欺ける」

「……もし見つかったら、あんたを恨むぞ」

「おうよ。思う存分恨んでくれや」

名取は晴れ晴れとした笑顔で答え、そして視線をドアの方へと向けた。

デスマスクが姿を現したのだ。

びちゃびちゃという足音がドアの前で止み、室内の明かりに照らし出され、その威容が浮かび上がった。

年は二十代前半だろうか。俺とそう変わらない年齢に見える。髪はボサボサで肩くらいまで長く、顔面を覆い隠していて、容姿がわからない。いや、もしかすると、その名が示す通り、仮面をかぶっているのかもしれないが、ここからでは判別できない。背は百七十五センチ前後だろう。どんな凄い化け物かと想像を膨らませて怯えていたが、蓋を開けてみれば意外や意外、見た目はひよろつちい日本人だ。言っちゃなんだが、俺よりも数段弱く見える。しかし、その体から放たれている異様なオーラが、その脆弱な外見を怪物化させていた。

まるで、一般的日本人男性の皮をかぶった死神だ。

俺は息を止めて、奴の動向を見守る。

「ち、千鈴の……こ、声が聞こ……えたと思った……のに……」

のに……のに……」

デスマスクは何やらブツブツと呟きながら室内に入ってきた。
喉に障害があるのか、発せられる言葉がブツ切りで、声も酷くザ
ラザラしていて聞き取りにくい。

「僕の…… きき聞き間違いじゃ…… な、 ない…… ない……… のに
………」

独り言と言うよりも、誰かに対する恨み節という感じた。

デスマスクは床に散らばっている死体を踏みつけても全く気にす
る様子がなく、ぎこちない足取りで部屋の中央まで移動した。

そして、真上に位置する蛍光灯を見上げた。

明るい光に照らされる彼の顔。

それは――

鬼を模した醜い仮面だった。

【12・古城篇也】

鬼の仮面をかぶったパンク野郎、それがデスマスクの正体だった。身に着けている物は、パンクロックのボーカリストかと突っ込みたくなるレザーファッションで、手足に幾重にもチエーンを巻きつけている。それなのに裸足っていうのは……シユールだ。左手に握られている肉切り大包丁が何故に血塗れなのかは、想像するに難くない。

悪く言うと、ホラー映画の主人公って感じた。全身から立ち上る妖気じみたオーラがヤバイ。気安く声を掛けて友達になろうなんて思う奴はいないだろう。というか、目についた人間を虐殺しそうな雰囲気を持っている。いや、事実、殺されている。部屋の中はおびただしい数の死体が転がっているのだから。

俺、こうして同じ部屋にいて大丈夫か？

名取は自信満々で保障していたが、彼の言葉を鵜呑みにして良かったのか？

大船に乗った気持ちで公海に出たら、実は泥船で、しかも公海じゃなく血の海だった……なんてことになって後悔するハメにならないか？ ギャグじゃなく、マジで。彼は俺を道連れにしようとしてるだけ、っていうオチはなしにしてくれよ。

俺は半ば息を止めた状態で、指先まで神経を行き渡らせて一ミリすら動かさないように注意を払いつつ、視線だけを動かして名取の方を見た。

彼は、まるで眠っているかのように目を閉ざしたまま動かない。いや、死体そのもののようだ。呼吸を止めているってことはないだろうが、ピクリとも動かない様子は、もう完全な死体だ。俺の目では、他の死体と区別がつかない。完全に溶け込んでいる。

さすがだ、と思うと同時に、こいつ何者だよ……という疑問が再び蘇ってきた。

外の世界で何を生業としていたか知れないが、絶対にカタギの人間じゃない。しかし、極道者とは少し雰囲気が違う。いわゆるホスト的な商売をして女を食い物にしていた、という感じでもない。もっと異質な何か。しかも、人間の死に関わる仕事に手を染めていたに違いない。例えば、臓器売買の闇ブローカーとか。

いや、今は彼の素性なんて考えている場合じゃないだろう。

今すべきは、全身全霊で死体のフリをし続けることだ。

もっと意識を集中して体を硬化させる。

デスマスクの独り言は、部屋に戻ってきてからずっと続いている。「ぼ、僕が行か……なきや……………ダメなのに……………のに……………のに……………」

日本語を喋っているところから考えて、外国人ではないものの、その口調に変な乱れがある点が気になる。何かしらの障害を抱えているのだろうか？　そう言えば、奴の動作は酔っぱらってる人間のような。フラフラではなく、ヨタヨタしていてバランスがおかしい。もしかすると、脳に障害を持っているのかもしれない。

だが、そうだとしても、俺たちがピンチなのは揺るぎない事実であって、奴が部屋の中央で突っ立っている限り、逃げることはおろか寝返りをうつことすらできない。呼吸も満足にできない状態なのだ。

とにかく、様子を見ながらチャンスを待ち、この部屋から脱出しなければならぬ。そうしないと、ただただ時間だけが無慈悲に経過してしまふ。時間は俺から徐々に体力を奪い去り、注意力を散漫にする。その結果、凡ミスを犯してしまい、奴に発見されてしまふだろう。すなわち、死だ。死にたくなければ、なるべく早く奴の目の届かない場所まで逃げるしかない。

しかし、どうすれば……………？

こっちは強力な武器がない。闘いを挑んでも、虫のように潰されて死ぬだけだろう。いや、武器を持っていてさえ、勝てるかどうかどう

か怪しい。あの千鈴でさえ、俺を見捨てて逃げ出したくらいだ。この死体の山を見てもわかる通り、闘いを挑んでどうにかできる相手じゃないのだろう。

では、どうすればいい？

確実に逃げられる方法がないこともないが……。それは、色々な条件が整わないとダメだ。第一に、この部屋にテスト生がやってくることだ。そうすれば、デスマスクの注意はそっちに向けられる。第二に、そのテスト生の逃げ足が速いことだ。すぐに捕まるくらい鈍足では意味がない。第三に、奴がそのテスト生を追いかけていくこと。奴が一步でも部屋から出てくれれば、逃げ出すチャンスも生まれる。

だけど、肝心の獲物が来なければ、狩人は動かない。

「呼んでるのに……彼女が僕を……呼ん……でる……のに……」
それは百パーセント幻聴だ。

でも、声が聞こえてるなら、さっさと部屋から出ていきやがれ。そんで、そのまま帰ってくるな。いつまでブツブツ呟いてるつもりだ。気色悪くて吐いちゃうぞ。

焦燥が俺を苛立たせる。

あまりの息苦しさに、わーっと叫んで飛び出してしまいそうだ。そんな俺の状態を察したのか、それとも自分の精神力が限界を極めたのか、突然、名取が死体のフリを止めた。

「うえいくあつぷ！ 上行くアップル！ 天井にリングをぶつけるー！ とか意味不明の三段活用で気合い十分だぜっ！ いえい！」

言葉通り、意味不明の台詞を叫んで飛び起きる名取圭輔。

もしかして、拳銃的な火器を持ってたのか？ という期待は彼がズボンのポケットから取り出したモノを見て、脆くも崩れ落ちた。彼が持っていたのは、実につまらない小さなナイフだったのだ。切れ味は良さそうだが、いかんせん刀身が小さすぎる。

そんなモノで奴に勝てたら、あんたの崇拜者になってやるよ。そんな皮肉を胸に、俺は彼の行動を見守る。

「和成君、いつちよ勝負と洒落込もうぜ」

和成とはデスマスクの本名なのだろう。千鈴もそう呼んでいたから、間違いない。

名取は本気で闘いを挑むつもりらしい。

「……おまえは……あいつらの……おまえも、か、彼女を……狙ってる……のか……のか？」

天井を見上げていたデスマスクが全身を揺らすようにしながら名取の方を向き、前傾姿勢になって右肩を下に傾けるヘンテコなポーズをとって、左手に持つ肉切り大包丁を彼に向ける。

「俺は千鈴ちゃんなんかには興味ねえよ。おまえさんにも興味はねえ。でも——」

名取が喋っているにもかかわらず、デスマスクは獣じみた声を発して床を蹴り、飛びかかりざまに彼の胸を突いた。

ビュンという風を切る音。

それに続く、ガシユというコンクリートが砕ける音。

デスマスクの攻撃は、名取の体を掠めただけで傷を負わせられず、その勢いのまま壁を抉った。

そのスピードたるや、目で捉えるのもやっというレベルだ。

その攻撃をかわした彼の反射神経も普通じゃない。

「俺は、ガキの頃から純正の殺人鬼とマジの殺し合いをしてきたんだぜ。その程度のスピードなら鼻唄混じりで避けれる。って言うても、逃げ回るのが精一杯だけだな」

そう言いながらも名取はニヤリと笑って余裕を見せた。

しかし、デスマスクは彼の言葉など耳に入っていない様子で、壁にめり込んだ包丁を引き抜き、水平に構える。

「……おまえらが……か、彼女を苦し……める……から……だ、だから……」

その声は、まるで泣き声のような悲壮感に満ち満ちていて、聞く者の胸を苦しくする。

「だから……僕が……僕が……おまえらを殺し……して彼女を

……守るんだ！」

叫びざまの一閃も、名取はひらりと避けて距離をとった。
そして、油断なく身構えつつ俺の方をチラッと見た。

「おい、こら、にいちゃん、何ボケつと見物してんだ！俺が命懸けで隙を作ってやったんだ、さっさと逃げろよ！」

怒鳴りつけられて、チャンスに気付いた。

彼は、なす術ない俺のために、自分をエサにして奴の目を引きつけてくれていたのだ。

しかも、俺とドアとを結ぶ直線上から、奴を遠ざけてくれている。まさに至れり尽くせりのお膳立て。

「お、おう！」

俺は死体をはねのけて身を起こし、脇目も振らずに全力でドアへと走った。

とにかく足を左右交互に素早く動かした。

前に進むことだけを考えた。

第三章 あの時を鳴らすのは貴方? 【1・西園エリカ】

私たちが今いるのは、小汚くて狭い倉庫みたいな部屋だ。

室内には地下へと通じる階段と二つのドアがあり、階段から見て右の壁にあるドアは大きく開け放たれている。

そのドアと階段を結ぶ直線上だけホコリが綺麗に払われているのは、人間が行き来したからだろう。室内が物色された形跡もあるので、結構たくさんのテスト生がこの部屋を出入りしたに違いない。

ただ、ここが本当に地上なのかは不明だ。窓から陽光が差し込んでいれば、疑う余地はなかっただろうし、《F1》とか《一階》という標識を立てていてくれたら、すんなり信じられたのに……。もしかしたら黒澤たちに騙されてるだけで、実はまだ地下にいるんじゃないだろうか、という不安が心の一部を支配している。この部屋には窓すらないのだ。

でも、肌にまとわりつくジメジメ感がなくなったことは嬉しかった。

「階段でテスト生と遭遇しなかったのは幸いだな。あのような狭い空間では、重火器などの飛び道具を用いられると、さすがの我でも対処しにくい」

風守は私の頭に手を乗つけて、同意を求めるように言った。

気のせいかもしれないけど、安堵の表情を浮かべているように見える。

私は彼の顔を仰ぎ見て、首を傾げた。

「そうですか? 喧嘩っばいテスト生じゃなければ、何の問題もないんじゃないですか? 狭い階段でも、お互いに道を譲り合えば、すんなりとやりすごせるでしょ?」

「小娘よ、このサバイバルテストにて、譲り合いの精神ほど無縁のものはないぞ。譲るということは、その分だけ相手を生還に近づけ、自分は生還から遠ざかるということだ。何の打算もなくライバルを

先に行かせるのは愚行の極みと思わねばならぬ。特に、Kナンバーの生還競争は熾烈を極めるゆえ、道を譲るなど言語道断と言わねばならぬぞ」

「あー、そうですね」

Kナンバーは一名しか生還が許されていないんだから、道を譲ってちゃダメだ。たった一步の差が生死を分ける状況が来るかもしれないのだ。むしろ逆に、相手を押しのけてでも先に行くことを心掛けるべきだろう。

「それじゃあ、テスト生と出会ったら、挨拶とかなしに、正面衝突で喧嘩上等ですか？」

「いや、そのテスト生が同じナンバーでなければ、大抵の場合、無視して良い。相手がこちらに対して害意をいだいておらぬ限り、争い事は起こらぬからな」

「同じナンバー同士だったら、闘うべき？」

「うむ。それが最も的確に生還へと近づく一步となるゆえ」

「邪魔者は邪魔になる前に始末しちゃえ、っていう論理ですね」

「うむ。その通りだ」

大きく頷いた風守は、そこでなぜかヒョウキンとも言える表情を浮かべた。

「我が言っておるのは、あくまでも私の目線での話ゆえ、小娘がマネをするとう痛い目を見るぞ」

「え？」

「万が一、我らと別行動になった時には、弱者に相応しい手段を用いて生還を目指すべきだろう。間違っても、数多くいるライバルと銅メダルの奪い合いをしようなどと思わぬことだ。その点は理解しておるな？」

「はい」

黒澤や風守と離れ離れになったら、私は通路の端っこをコソコソと歩いて、みんなの邪魔にならないように銅メダルを探すしかない。もしも他のKナンバーのテスト生が先に生還しそうになったら、正

面から鬨いを挑んで邪魔をしたりせず、後ろからそーっと近づいて足を引っ張るしかないのだ。

Kナンバーが一名しか生還できない点から考えると、私みたいな何の取り柄もない女の子は、お先真つ暗としか言えない。たとえ一対一であっても、相手が男性だと勝ち目が無いし、女性でも勝てるかどうか怪しいし……。

どこかで強力な武器を手に入れられれば良いんだけど、そんな幸運とは無縁のような気がする。

それらの不安が表情に出ていたようだ。

風守はW型のヒゲの両端を吊り上げて笑い、目尻にシワを寄せた。「余程の事態に陥らぬ限り、我らが離れ離れになることなどない。

そして、我は可憐なる女子を見捨てたりせぬ。安心するが良い、小娘よ」

「うん。ありがとう、風守さん」

「感謝の言葉など要らぬぞ。我は我の流儀でこの茶番を楽しむだけだ。義務や責任に駆られておるわけではない」

楽しむため……。

この人はきつとサバイバルテストに対する意識が私たちと違うんだな、と思った。

黒澤は私たちの会話に参加せず、他の物に一切の興味を示さず、スタスタと右の壁にあるドアへと歩いて行く。

室内を調べないのだろうか？

それとも、《掲示板》のことで頭が一杯になって、部屋を探索することを失念しちゃってる？

私は慌てて彼を呼びとめた。

「恭司さん、部屋の中を調べたりしないの？ 机とかタンスとか、怪しい物が目白押しですよ。ゴミ箱の中に頭を突っ込んで調べればカエルの鍵が発見できるかも、っていうコトワザがあるくらいですし」

「……そんな諺はない。しかも、カエルの鍵を発見したのは俺で、ゴミ箱に頭を突っ込んではいない。どういう記憶力をしているんだ、おまえは……」

「うー。ちよつとした言い間違えじゃないですか。そんなに怒んないで下さいよ」

「怒ってはいないが……おまえの言うコトワザとやらは何を基にした知識だ？ 記憶を故意に改竄して俺を貶めているとしか思えないぞ」

私が披露するコトワザに不満があるのか、黒澤は不本意そうな顔で文句を零した。

でも、意味不明である。

記憶を恋に解散して俺を落としている……ってどういう意味？ 日本語としておかしくないですか？

「もしかして、恭司さん、難しい言葉で照れ隠し？ ほんとに室内を調べ忘れてただけで、それを認めたくないから誤魔化そうしてる？」

「……………」

黒澤はウンザリ顔を作り、眉間を手で押さえた。

「俺の言動をどう解釈しようとおまえの勝手だが……。一応、質問には答えておこう。俺は一度この部屋を通っているのだ。だから、室内は調べつくしている。机やタンスの中身は当然として、天井から床まで、全てだ」

「へえ、さすがですねー」

「……………」

笑顔で誉めてあげたのに、彼はニコリともせず背を向けて、右にあるドアから部屋を出ていった。

ほんと、無愛想ですね、彼は。感情を全く出さないなんて、つまらないです。毎日楽しく過ごせるのかな、とか心配になっちゃいますよ。まあ、サバイバルテストを楽しむことができる人なんているわけないけど……。でも、ちよつとくらい仲間の発言にはリアク

シヨンして欲しいです。

そう心の中で文句を言つて、私も彼の後を追つて部屋を出た。

部屋の外は石畳の通路だった。

心なしか地下よりも横幅が広くて天井が高い。これなら三人並んでも悠々と歩けるだろう。床に柔らかい絨毯が敷いてあれば最高だったけど、それは望みすぎというものだ。等間隔に蛍光灯が備わっているお陰もあり、地下ほどの不気味さは感じなかった。

通路自体は一本道で、左右のどちらにも突きあたりにドアがある。

「左を行くと、この建物の正面玄関がすぐだ。玄関ホールには《揭示板》あり、そこには多くのテスト生がたむろしているだろう。右には《食堂》や《貴賓室》などの部屋があるが……極めて危険な罠が多く仕掛けられている」

黒澤は左右のドアを指差しながら解説してくれた。

私たちの目的は《揭示板》を見ることだから、左のドアへと進むべきなのだろう。だけど、《食堂》という言葉の響きが私の心の琴線をすこぶる刺激して、本来の目的をあつさりとは忘却させた。

「食堂つて、ご飯が食べれるところですか?！」

「ああ。《食堂》は、その名の示す通り食事をする場所というだけでなく、このサバイバルテストで唯一の安全地帯となっている。トイレやシャワーも完備されているから、女性のテスト生には重宝するだろうな」

その情報は前もって遠藤教授から聞いている。

食堂での戦闘行為は死罪レベルのタブーであり、その罪を犯した者は一人の例外を除いて全員が処刑されたという。だから、もし人的な危険が迫っていたら迷わずに《食堂》へ逃げ込め、と忠告されているのだ。

「私、お腹空いてます! シャワーも浴びたいです! おトイレもしたい!」

私は手を上げて欲求を訴えた。

組織に誘拐されてから今日まで、満足な食事はおろか、ろくに体を洗えていないし、髪も洗えていない。よく考えると、ボディメンテナンスが完全に疎かになってしまっている。それって乙女的に終わっているも同然だろう。ここは、自分を救済する意味で、『食堂』へと向かうべきである。

だが、黒澤は無情にも首を横に振った。

「今はまだ食堂へ行くべきではない」

「なんですか？ タダだし、安全だし、お風呂だつて入れるんですよ！」

私が全力で食つてかかると、彼は苦笑を浮かべて私を指差した。

「監禁生活によって衣食住を制限されていたのだから、真つ先にその欲求を満たしたい気持ちはわかる、が……。その格好で多くのテスト生の前に出るのはマズイと思わないか？」

「あー……」

指摘されて気付いた。つていうか、自分が全裸同然のエロエロスタイ尔だったのをすっかり忘れてました。

黒澤や風守は、私が服を着ていなかろうが、パンツを穿いてなかろうが、全然気にしないけど、他のテスト生は気にするだろう。いや、気にするどころか、男性本能を剥き出しにして襲いかかってくることもない。

「地下では他のテスト生と遭遇する機会が少なかったが、この階は違う。嫌でも多くのテスト生と顔を合わせることになるだろう。だから、無用なトラブルを避けるためにも、おまえは服を着る必要がある。そうすれば、俺も上着を取り戻すことができるしな」

そう、彼の上着は私が着用していて、今の彼は上半身裸状態なのだ。

いつまでも借りたままつてわけにもいかない。

「でも、服なんて簡単に見つかる物なんですか？」

「たしか、『貴賓室』の隣に『衣装部屋』があったはずだ。そこへ行けば、エリカ用の服など幾らでも見繕える。多少の寄り道になっ

てしまいますが、よろしいですね、風守さん？」

「うむ、構わぬぞ。年端もいかぬ小娘が尻丸出しで歩くのは、精神面、衛生面から考えても良くない。その点を改善するのであれば、寄り道もいたしかたないだろうて」

風守は鷹揚に応えた。

結局というか偶然というか、私たちは《食堂》にも通じている右のドアを選択した。

黒澤が先行してドアを開き、私、風守の順でドアをくぐる。

ドアの向こうは結構な広さのある洋間になっていて、暖炉やソファ、オーディオ機器などが室内を飾り立てていた。カーテンの柄といい絨毯の模様といい、派手さはなく、落ち着いた雰囲気醸し出している。リクライニングチェアに腰かけて読書したりすると、様になりそうだ。

だけど、私たち以外にもテスト生がいたことで、室内の雰囲気は台無しになった。

三人組のテスト生が室内を物色していたのだ。

「やはり一階ともなれば、誰とも会わずに済ませるのは無理か……」
黒澤は舌打ち混じりに呟き、素早くスタンガンを装備する。

風守は私の視界を遮るように前に進み出て、刀の柄に手を掛けた。
しかし――

「おいおい、いきなり戦闘態勢とは物騒だなー。一本腕のにいさんはともかく、そっちの侍さんは目がヤバいでしょ。僕ら、超ド素人の下位ナンバーなんで、そうそう怖い顔して警戒しなさんなって。リラックス、リラックス！」

お調子者風の垂れ目男が、頭のとっぺんから声が出ているかのようなハイトーンで無害をアピールした。

リーダーとしては貫録がゼロなので、この男は交渉役なのかもしれない。

「そうだ。俺たちや仲間を捜しに下の階に行きたいだけだ。争う意

思はない」

私よりも背が低いのに物凄い筋肉をしたズングリムツクリの男が、肩に担ぐようにして持っていた大きな斧を下に向けて、戦意がないことをアピールしながら言った。

もう一人の男は事の成り行きを見守るかのようにジッと立ったまま何も喋らない。

黒澤は数秒間、無言で三人を睨んでいたが、彼らの言葉を信じたのか、スタンガンをポケットに戻して、横目で風守に合図を送った。風守はふふんと鼻を鳴らし、刀の柄から手を離した。

首を回して私の方を見た彼の表情には、三人を斬れなくて面白くない……という残念さが如実に表れていた。

【2・西園エリカ】

部屋で遭遇した三人組とは、何のいざこざもなく、挨拶すら交わさずに別れた。

向こうは私たちから何かの情報を引き出したかったようだが、黒澤も風守も会話拒否のオーラを全開にしていたので、お調子者の一人喋りだけがむなしく響いただけで終わった。

私は、余計なことをしないように風守の後ろで大人しくしていた。斧を持っていた小柄のマツチヨが明確なエロエロビームを目に宿して投げかけてきていたが、風守が盾になってくれていたお陰で心身ともに傷つかずに済んだ。もし今のシチュエーションで私一人だったら、と思うと背筋が凍る。殺されないまでも、絶対にレイプされていただろう。そういう邪気を隠しもしない連中だったのだ。もう二度と顔を合わせたくないものである。

「あやつら、下の階で出会ったダンという男の仲間であろうな」

彼らが部屋から出ていったのを確認してから、風守は皮肉っぽい口調で断定した。

黒澤は小さく頷いて背後の扉に目をやる。

「そうでしょうね。彼らが捜している仲間とやらは、ダンで間違いないでしょう」

「どうして言い切れちゃうの？」

私が訊くと、黒澤は確信を込めて答えた。

「同じ臭いがしたからだ」

なるほど、わからなくはない。

においと言っても、嗅覚で感じるものではなく、相手から発せられる雰囲気のことだろう。黒澤は、彼らとダンから同質の人間性を感じ取った、と言っているのだ。

「戦場であれば何をしても咎められぬ。そう勝手に定義して、群れを成して愚行する馬鹿者ども。そういう輩は特別な異臭を放ってお

るものよな」

風守は鼻面にシワを刻んで嫌そうに言い放ち、刀の柄に手を掛けた。

「あんなものは早々に斬っておくに限る。野放しにしておけば、後々に面倒を巻き起こす原因となりかねない。黒澤よ、それを承知しているよう？」

「勿論、承知していますよ。二年前のテストでは、一人の美少女をめぐって色々起こりましたからね……。しかし、ああいう悲劇に巻き込まれないためにも、その原因となりうるテスト生とは極力、関わり合いを持ちたくないんです」

昔の出来事を思い出しているのか、黒澤はちよつと遠い目をして言った。

「彼らをテストから排除して危険の芽を摘んだとしても、今度は、仲間の仇打ちという形で、ダンが俺たちの危険因子になる可能性があります。テスト生全員に対する危険因子ならまだしも、俺たち限定の危険因子にならねば厄介極まりない」

「うむ、確かに……」

私には何の話が全然ちんぷんかんぷんだ。

でも、彼が言うのだから、二年前のテストで相当に悲惨な出来事があったのだろう。

しかも、風守には理解できる話のようだ。

「二年前の悲劇とやらは、野々村沙耶とかいう女子が馬鹿者どもに凌辱されたことが、悲劇の発端だったか？ 《食堂》での虐殺といい、姫城の手の者がサバイバルフィールドに侵入してきたことといい、Gナンバーが全滅したことといい、全てが異例づくめだったそうだな。その話はロシア支部にまで達しておったぞ」

「あの事件のせいで、日本支部のテスト生は半減したそうです。生き残ったのは、俺を含め、ほんの数名です」

「あの《拳銃男》も、その時のテストで命を落としたのだったな？」

「はい。例の男に首を落とされて……」

「デスマスク、恐るべき鬼よな。この我ですら、全力を出さねば一瞬で屠られてしまう。アレに勝る存在は、姫城の総大将か……もしくは鬼の極みだけであろうな」

拳銃男の話はちよつと興味を引かれたけど、それは兄の消息を知るための情報じゃなかったから、適当に聞き流すことにした。でも、一点だけ、デスマスクが兄の仇であることだけは覚えておく必要があるだろう。もしかすると、どこかで出会えるかもしれないし。

「今回が異例でないことを願いたいですね」

「うむ」

私にとってはサバイバルテストに参加させられていること自体が異例なのだけど、それを言っても仕方がないので、黙ったまま二人の会話に耳を傾けていた。

この部屋は今まで往来したテスト生たちに調べ尽くされているので、改めて私たちが調べる意味なんてない。

というか、何時間も前に黒澤が調べたらしい。

だから、私たちは素通りした。

私たちは向かいの壁にあるドアから部屋を出た。

部屋の外は左右に伸びる短い通路になっていた。右側の突きあたりには向かい合うドアがあり、そのどちらからかはわからないけど、テスト生同士の会話と思しき賑やかな声が聞こえてくる。左側には、通路の途中に青いドアがあり、そのちよつと先に木目調のドアがある。そして、更に奥の突きあたりにも古びたドアがある。

怪しいのは断然、青いドアだろう。

なんだかアイテムが隠されてるっぽい感じがする。でも、畏も仕掛けてありそうだ。

青いドアの手前に置かれている銅像も、触っちゃいけない感じがする。

「どのドアが《衣装室》に繋がってるんですか？」

「あの青いドアの先にある茶色いドアが《衣装室》だ」

黒澤は他のテスト生に聞かれるのを憚ってか、若干声を低くして答えた。

木目調のドアが衣装室ということは、青いドアは《貴賓室》だろう。

「じゃあ、ちゃっちゃと服を手に入れちゃいましょうー！」

私は元氣よく号令をかけて、我先にと、彼の横を駆け抜けた。いや、そうしようとして、止められた。

「待て、エリカ。ここから先は、まだ俺も探索していない場所だ。一步一步慎重に進む必要がある。俺が先頭で歩くから、おまえはなるべく俺が歩いた所を通るようにしろ。そうすれば、落とし穴や虎挟みの罠に掛かることはない。いいな？」

「はいはい、わかってますよー」

慎重すぎるんじゃないかなあ、と思いつつも、私の安全を第一に考えてくれたの注意喚起なので、適当に頷きながら返事をしておい

た。

でも、内心を見抜かれてしまったようだ。

黒澤が冷徹な目で睨んできた。

「本当にわかってるのか？」

「わかってますよ、ちゃんど」

「ならばいいが……。間違っても、壁にかかっている絵画や肖像画の類には勝手に触れるな。いいか？」

「はい」

ようやく乙女な部分をきっちり隠せると思えば、急ぎたくなるのも仕方ないだろう。

男として、そういう心理を察して欲しいものである。いや、察するべきだ。

「風守さんは背後からの襲撃を警戒しておいて下さい」

「うむ、承知した」

万全を期した黒澤は、先の宣言通り、石橋を叩いて渡る慎重さを

もって一歩ずつどころか半歩ずつというドン亀ペースで、たった数メートルしかない廊下を進んでいった。

そこまで石橋を叩いたら、逆に橋が壊れて渡れなくなるんじゃないかと思うのだけど……。私は守ってもらっている立場なので、彼のやり方に異を唱えることなんてできない。きつと、ここは時間を掛けて進むべき場所なのだろう。そう思うことで自分のうちにある苛々を抑え込んで、彼の後について行く。

風守は何も言わない。黒澤みたいに緊張感を持っているわけでもなく、私みたくジリジリ焦れてるわけでもない。我無関心の様子で飄々としているのだ。背後の警戒も、おざなりな感じである。

通路の途中にオブジェとして置かれている彫刻（銅像？）は、私でも触っちゃダメだと感じるくらいに怪しさ万点だったが、黒澤はちょこつと調べる程度で興味をなくし、さらつと素通りしてしまっただ。

これに触るな、という注意もなかったので、見たまんまの単なるオブジェだったのだろう。

五、六メートルを進むのに十分近く費やしたことについては、もう何も言わないでおこう。

石橋を叩いて壊して新しい橋を建造するくらいの慎重さでもって前進していくのが黒澤恭司というテスト生のやり方なのだろうし、それが今まで功を奏してきたからこそ彼はVナンバーにまで昇格したのだろうから。

だけど、その慎重すぎる行動が彼をVナンバー止まりにしているんじゃないかなあ……。とか思ったり思わなかったり。

時には、サクサクつと進んだ方が色々な意味で効率良く展開するような気がする。

いわゆる、行動のメリハリだ。

その点、風守はメリハリが利いていえると言える。普段は変なヒゲなのに、ここぞという時には格好良いヒゲに変身するのだから。

とにもかくにも、青いドアの前までは何の問題もなく進むことができた。

「俺たちの目的は《衣装室》でエリカの服を見繕うことだが、衣装室の特性上、《貴賓室》を調べないわけにはいかない。だから、この部屋に入る。いいな？」

黒澤は私を見て確認するように言った。

私に否やはない。

っていうか、彼の言葉は一応私の意思を確認してきているのだけど、私が「やだ」と言っても強引に自分の意見を通すのだろうから、訊く意味はないと思う。

だから、私は必要以上の笑顔で答えた。

「おっけーです！」

「……では、ドアを調べるから二人とも下がっている」

「はい！」

言われるまでもなく、私は罾の暴発から身を守るべく、風守と一緒に三步下がった位置でドアが開くのを待った。

【3・古城篇也】

俺は猛然と走った。

化け物の寝所を飛び出し、来た道を引き返して螺旋階段を駆け下り、行く当てもないままに廊下をめちやくちやに走り回る。真っ直ぐ走るのは危険だから、適当に廊下を曲がり、追手の目を欺く。それだけではダメかもしれないので、偶然発見した階段を一番下まで駆け下り、最初に目についたドアを蹴り開けて部屋の中に駆け込んだ。

「ふう、ふう、ふう……これだけ逃げ回りや、いくらあの化け物だって追いかけてこないだろ……」

奥の壁まで走ったところで力尽き、俺は両手と膝を床について土下座ポーズをした。

久しぶりに全力疾走したせいか心臓が痛い。

体が内側から爆発してしまいそうだ。

吐き気すらする。

「ふう……ふう……ふう……くそつたれが……」

呪いの文句を立て続けに吐き出したいのだけど、荒れ狂う呼吸がそれを許してくれない。

汗がぼつぼつと滴り落ちて床を汚していく。

喉の渇きが尋常じゃない。今ほどコップ一杯の水を欲しいと願ったことはないんじゃないだろうか。

「ふう……ふう……こんなマラソンさせるなら、給水場所を用意しとけよ……クソ組織め……」

それでも、しばらく蹲ったまま呼吸を整えることに専念していると、狂乱する心臓が落ち着きを取り戻し、邪口をひねったように流れ出ていた汗の量も少なくなっていた。

俺はみっともない土下座ポーズを改め、その場で胡坐を掻いた。そして、室内を見回す。

いや、見回すまでもなく、いかにも怪しげなモノを発見した。

「……………なんだ、これ？」

すぐ目の前にあるモノを見て、俺は思わず素っ頓狂な声を発してしまった。

見た目は、美術館に飾ってありそうな青銅製の裸婦像だ。大きさは俺の背丈と同じくらいで、三十歳前後の美人さんが全裸で万歳ポーズをしている。自由とか解放を表現しているのだろうか？ 官能を表現している像じゃないのは確かだろう。だが、まあ、そんなことはどうでもいい。問題は、これが何を意味しているのか、である。ここにある以上、鑑賞用ではあり得ない。

もし、これに何かしらの仕掛けが施されてなかったら、俺はデスマスクとキスしてもいい。

それくらい怪しい。

「奴隷のねえちゃんが、自由ばんざーい、って叫んでる感じの像だが……………」

それは作品の制作者が込めた情念であって、これをここに設置した組織の人間の意図とは別物だろう。

この銅像は何かのクエストに関係しているはずだ。

それが何なのか……………。

「まあ、とにかく体を休めながら考えるとするか」

俺は壁際まで移動して壁にもたれかかった。

実際のな肉体の疲労は、さしたるものでもない。あと三十分も休んでいれば回復するだろう。

問題は精神的なダメージである。

デスマスクという存在が俺の心に与えた衝撃は、組織に誘拐された時の比じゃないくらいデカかった。

あのデタラメさは、思わず笑ってしまうほどに異常なレベルだった。おまえはオリンピック選手か！？ とか疑う段階じゃない。疑問を挟む余地もないくらいに化け物だ。

「あんなの、どうすりゃいいんだよ……………くそつたれが……………」

俺は諦めにも似た負の感情を噛み潰して、天井を見上げた。

ここでデスマスクに襲われたらアウトだ。いや、ここ以外でも、俺一人の時に襲われたら対処のしようがない。ただアッサリと殺されるだけ。何も成さないままに、一人寂しく死ぬだけだ。

しかし、この部屋に逃げ入るまでの道程で、何名かのテスト生とすれ違ったような気がする。そいつらがデスマスクの足止めをしてくれていれば、ここでゲームオーバーを迎えることもないだろう。

名取も俺を逃がすために奮戦していたようだし。

「あいつ、無事かな……」

別に仲間でも何でもない、偶然出会っただけの、死んでようが生きていようが知ったこっちゃない、どうでもいい男なのだけど、なぜか俺は彼の無事を祈っていた。

すると、このタイミングを待っていたかのように、記憶に新しい声がドアの方から聞こえてきた。

「おやおや、こりや嬉しいねえ。俺のことを心配してくれてたんかよ。一人でスタコラサッサーって感じで逃げていっちまうから、てつきり俺のことを見殺しにしたのかと思っただぜ」

「！」

驚きのあまり悲鳴も上げられなかった。

だが、その驚きには喜びと安堵の成分が大きく含まれていた。

「あんた……よくあの化け物から逃げ切れたな……」

「おう。逃げるだけなら楽勝だぜ」

「楽勝って……ほんとかよ。瞬間移動みてえな動きをする化け物を相手にして、普通は楽勝なんて言えねえぞ」

それこそ、化け物と同じレベルの運動能力を持ってなきゃ話にならない。

ってことは、この名取とかいうフザケた男も、アレと同類ってことか？

そう結論付けようと思ったのだけど、彼は俺の内心を見透かしたように否定した。

「言つとくが、俺は結構なスーパーアスリートだが、化け物レベルじゃねえよ。ギリギリ人間の域だ。だから、そんなに警戒すんなよ、にいちゃん。それに、デスマスクは戦闘能力こそ殺人鬼並みだけど、走力は大したことねえんだ。持久力なんかゼロに近いと思うぜ。つてことで、追い駆けっこに関しちゃ、俺の方に一日の長があつたのさ」

「……………」

必死になつて逃げ回る必要なんてなかったつてことらしい。

そういう重要な情報は前もって教えておいてほしいものである。

そうすれば、もっと冷静に対処できていただろうに。

「んで、おまえさん、ここで何してんだ？ 隠れんぼか？」

名取は一度だけ室内をぐるりと見回してから、俺の前まで歩み寄つてきて、可笑しそうに訊いた。

そのフザケ調子がカチンと来た。

この男、俺を完全に小馬鹿にしている。

「見てわかんねえのかよ」

「いやいや、わかるよ、にいちゃん。その格好を見りゃ、誰でも想像がつくつてもんだ」

そう言つて彼は、にやにや笑いながら裸婦像を指差した。

「この素っ裸のねえちゃんで一発抜こうとしてたんだろ？」

「……………」

誤解もいいところだった。

この状況で自慰なんてするわけない。

「こんな作りもんで抜けるかよ！」

「じゃあ、何で素っ裸なんだ？ あのローブみたいなヘンテコな服はどうした？」

「え？」

指摘されて初めて気付いた。

俺、全裸じゃん。

どこかでカーテンを落としちまったのか、それとも走りづらいか

ら無意識に脱ぎ捨てちまったのか、どっちかだろう。でも、まあ、どっちでもいい。今は命さえあれば十分だ。格好なんて二の次。目の前にいるのが千鈴だったら最低限のマナーとして股間を手で隠しただろうが、男だから剥き出しでオツケーである。

「あの服はデスマスクとここで死体のフリをしてる時に血とか汁で汚くなっちまったから、逃げてる途中で捨てたんだよ」

「ああ、そうだな。腐臭百パーセントの汁で汚染された服なんざ、着てると気持ち悪いよな」

名取は、俺のデタラメな理由に同意し、自分の身に着けているスーツを見て苦笑した。

そして、便所で連れションしようぜ、とでも言うような調子で俺を促した。

「んじゃ、この部屋のアイテムをサクッとゲットしてから、新しい服を調達しに行こうぜ」

「……お、おう」

この部屋にアイテムなんかねえだろ、という突っ込みをグッと我慢して、俺は小さく頷いておいた。

【4・ジェシカ・ウェイン（1／5）】（前書き）

このジェシカ（レディJ）が語り部を務める節は、物語には直接関係ありません。

今回のサバイバルテストの裏で起こっていた逸話なので、とばして呼んでも支障はないと思います。

ただ、本編にも登場するキャラが何名かいるので、その人となりを知る上で、読む価値があるかもしれません。

《色付き》や《完成品》などの意味については、某サイトで連載している本編の第二部を呼んでいただければとわかると思います。

ジェシカの節は、（1／5）が示している通り、全五回です。

【4・ジェシカ・ウェイン（1/5）】

秘密結社オズの崩壊から既に五年もの月日が流れた。

しかし、姫城市の市街戦で失った戦力を回復するには至っていない。いや、回復など不可能なのかもしれない。なぜなら、最大の資金源であった人材派遣会社オズが姫城グループに吸収合併されてしまい、多くの優秀な人材が監視下もしくは行方不明となってしまうからだ。そして最大の要因は、オズネットの崩壊と彩羽色無の死である。それらがもたらした虚無感は絶望的なまでに大きい。その恩恵なくして組織の再建など夢のまた夢だろう。

オズがかつての栄光を取り戻すのは無理なのだ。

失われた日々を取り戻すのではなく、新たなオズとして再出発する……それが大事である。

それなのに――

今、私の目の前に立っている優男は、《姫城グループ第十三セクター総主任、藤森真悟》という肩書を名刺で示しながら、爽やかですらある笑顔を作って、私たち秘密結社オズの幹部を脅していた。

「確認のためにテストを調査する……と言ったはずですが、もうお忘れですか？」

「今更、何を確認するというのが、貴様は！」

彩羽色無の後継者として殺人兵器の開発を担当しているブラウン博士が、禿げ上がった頭を真っ赤に染めて、唾を飛ばしながら食ってかかった。

「秘密結社オズが姫城グループに敵対しうる戦力を有しているか否か、ですよ」

藤森は穏やかな笑みを浮かべて、小さな子供を諭すような優しいげな口調で言う。

「何度も言うようですが、もはや我々は秘密結社オズを排除しよう

とは思っていません。今後、オズが姫城に敵対する意思を明確化しない限りにおいて、戦闘行為による殲滅作戦は実行されないでしょう。これは姫城家当主である姫城友広と、姫城グループ総裁である貴道寺北斗、その両名の連名による決定事項なので信用していいと思いますよ。あの二人は約束を絶対に破りませんからね」

「貴様ら姫城の犬など信用できるか！」

ブラウン博士に聞く耳はない。相手の言葉をはねのけて喚き散らすだけだ。

しかし、それでは話が纏まらないどころか、不用意に話をこじらせてしまいそうだ。藤森という優男、一見物わりのよさそうな顔をしているが、その甘いマスクに隠されている顔は一辺の容赦も知らない鬼である。しかも、秘密結社オズの最強兵器と称えられていた《金糸雀》を一太刀で破壊した化け物なのだ。そんな存在を相手に、対抗手段を講じぬまま怒らせるのはマズイ。

「本来なら、凶悪テロリストの所有施設を調査するに際して、こうして礼を尽くしてまで承諾を得る必要などないのですよ。サイバートを壊滅させたときにように、有無を言わずに乗り込んで、施設内に存在する戦力を無害化してもいいのです。その点を考慮して、もう少し柔軟な思考を働かせていただきたい」

藤森は、会話を拒否して喚き続ける老人を見限るように目を逸らし、私の方を見て言った。

「貴様らにサイバールテストを蹂躪されては、結果に支障がでる！」
会話の対象から外されたブラウン博士は、しかしそれでも彼の肘を掴んで自分を意識させ、唾を飛ばす。

そんな同僚に多少の苛立ちと鬱陶しさを覚えつつ、私は藤森との対話役を引き受けた。

このままこの老人に任せておくと、この場にいるオズの幹部たちに無用な犠牲が出かねない。

「テストに干渉しない範囲でなら調査を許可しましょう」

私は簡潔に条件を述べた。

それが大前提である。

テストの結果が《デビルプロジェクト》に反映されなければ、莫大な運営費を負担してまでサバイバルテストを行う理由がない。

藤森は口元に浮かべている笑みを僅かに深め、小さく頷いた。

「善処しましょう」

善処……。それはつまり、テストに干渉する気満々という意味の回答である。

「善処ではなく、確約して欲しいものですね。貴方は以前、野々村沙耶というテスト生を救出するにあたって、無用の戦闘をし、多くのテスト生を殺害していますから」

「申し訳なく思いますが、確約はできません」

「なぜですか？」

「ボクたちは平和志向者ですが、無抵抗主義者ではありません。攻撃を仕掛けられた時、防衛行為を選択肢から放棄することなどできませんよ」

「……それならば、貴方たちの方から攻撃を仕掛けないと約束して欲しいですね」

「それは幾らでも。ボクたちは弱者と遊ぶ意思など欠片も持っていません」

オズの復権を掛けて選別した有能なテスト生が弱者呼ばわりされるとは……。

およそ、それが彼の本音なのだろう。かつて彼に斬られたモーガンは、歴代のGナンバーの中でも極めて優秀な部類であったが、一秒として抗うことができずに死んだ。あの宇治川蘭子ですら太刀打ちできたかどうか怪しいものである。

しかし、今は違う。

我々には《デスマスク》という新兵器があるのだ。

遠藤教授は我関せずという態度で、藤森を無視している。

というよりも、彼は藤森が引き連れてきた元オズの殺人兵器に興

味津々のようだ。

「おい、真悟！　まだ行っちゃダメなりか？　吾輩、待ちくたびれて眠くなってきたなりよー」

痺れを切らしたのか、胡桃香が駄々を捏ねた。

彩羽研究所に在籍している頃から彼女は我慢弱かった。心身共に打たれ弱いことが欠点なのだ。それは、その子供っぽい性格に繋がっている。しかし、それが彼女の魅力でもあるのだらう。ロングコートで全身をすっぽり覆い隠しているスタイルも相変わらずである。昔と殆ど変化のない彼女の姿に、私はえも言えぬ懐かしさを覚えた。

その隣で仁王立ちしている黄莓は、ちょっと老けたように見える。三十歳後半という年齢が彼女の容姿に反映しているのだらうが、元々の造型が若づくりなので実年齢ほど劣化した様子はない。名前付きの体操服にブルマという格好も、それなりに効果を發揮しているようだ。

二人は緊張感の欠片もない顔で大欠伸などしている。

それに比べ、茜は真面目な顔で静かに待機している。今も昔も、変わらず生真面目なのだらう。それほど彼女について知っているわけではないが、資料には私生活においても遊びを排するストイックな性格と記載されていたように思う。プロトタイプ色無として開発された《真紅》の後継機なので、色無所長の性格がより濃く反映されているのだらう。私に言わせれば、橙子や赤梨などよりも遥かに優秀な兵器だ。なぜ《完成品》に加えられなかったのか不思議でならない。純粋な戦闘能力が《色付き》の中でも最低レベルだからなのかかもしれないが……。

「胡桃香、もう少し待っていなさい」

「うー、さっきからずっと待ってばっかなり……。久しぶりに大暴れできるって聞かされて、吾輩、やるき満々なりよ。もうちょっとで暴発しそうなり」

あり余る血の気を制御できず、胡桃香はうずうずと体を揺さぶる。

それを横目で見て皮肉る黄莓。

「あたしや、ハンマーをぶち落とせる標的が用意されてりや、それで十分だよ。時間なんか気にしないねえ」

「呑気な年増は嫌われるなりよー」

「あたしや、年増じゃない！ 熟女だつ！ 表現を改めなよ、露出狂！」

「吾輩、露出狂じゃないもんねー。ちゃーんと服を着てるなりよー」

「そのコートの下はパンツとブラだけだろっ」

「でも、街中を歩いても恥ずかしくない格好なりよ。それに引きかえ、黄莓姉ちゃんの変態確定のコスプレ状態なりね。一般道を歩いたら、すぐ逮捕されるなりよー。そんな巨大なハンマーなんか持ち歩いてたら、問答無用で射殺されても文句言えないなり」

「あたしや、銃なんかで壊されやしない」

「吾輩だつて銃なんかものもしないなりよ」

話の論点が徐々にズレていっていることに二人は気づいていないようだ。いや、気付いていて、わざと会話を続けているのかもしれない。無駄口によって暇を潰している可能性もある。

二人のお馬鹿な漫才を見ながら私は小さく溜め息を吐いた。

藤森は調査などと言っているが、秘密結社オズの切り札とも言つべき《色付き》の《完成品》を従えて乗り込んできている以上、全面戦争も視野に入れているに違いない。

藤森は廃城に乗り込む前に、もう一つ要求してきた。

「ボクたちが調査している間だけでも、サバイバルテストを放送するのを控えてもらえませんか？」

放送の中断。

それは論外である。

サバイバルテストは、殺人兵器の開発に関するデータ収集と人材育成という要素だけでなく、オズを支持する富裕層に向けた娯楽を提供するための素材でもあるのだ。そして既にライブで放送されて

いる。それを止められると、今回のテストに掛けた莫大な運営費を回収できないばかりか、今後の資金調達に著しい悪影響を及ぼすだろう。

「何を言っておるのじゃ、貴様は！ そんなことできるわけないじやろ！」

私が答えるより早く、ブラウン博士が噛みつかん勢いで拒否した。藤森は穏やかな笑みを崩さない。

「そうですか。それならそれで構いませんよ」

彼はなぜか簡単に要求を引っ込めた。

「……なんじゃ、貴様、何か企んでおるのか！？」

「いえ、企んではいません。しかし、万が一、ボクの部下たちとテスト生が要らぬ戦鬭を起こした場合、それを放送することは即ちオズの無能を公表することと同義でしょう。そう思いませんか？」

「！」

ブラウン博士は憤然として何かを叫ぼうとしたが、顔面を紅潮させて口を大きく開いただけで、何の言葉も発しなかった。否、怒りのあまり声すら出せなかったようだ。もう、憤死寸前という様子である。

しかし、遠藤教授が彼の耳元で何かを囁くと、急に落ち着きを取り戻した。

「貴様らが無事に調査から戻ってくることを祈っておるよ」

「ありがとうございます。今日中には戻ると思いますが、戻ってこなくても放置してくれて構いませんよ」

「無論、そのつもりじゃて」

ブラウン博士は人の悪い笑みを浮かべて藤森たち一行を送り出すと共に、私にある指示を出した。

【5・古城篇也】

この部屋のアイテムをゲットする。

名取は確かにそう言った。

その言葉が空耳じゃなければ、彼が対象としているアイテムとやらは、あの重そうなブロンズ像だ。それ以外にアイテムと呼べるものは存在しない。ってことは、あれを二人で持ち上げて運び出そうって言うのか？ どう見ても、俺の体重の十倍以上あるぞ。五、六人で掛ければ持ち運べないこともないと思うが、二人じゃ絶対に無理だ。そんなの、三歳児でもわかることだろうに……。

「あんな重そうな銅像を持ち運ぶっていうのか、あんた？」

「へ？」

冗談であつて欲しいという思いを込めて確認すると、彼は不思議そうな顔をして首を傾げた。そして、その端正な顔を俺にぐっと近づけて、睨めっこでもするかのように視線を固定する。

「あの銅像を運ぶ？ おいおい、にいちちゃんよ……正気でほざいてんのか？ まさか、素っ裸のせいで風邪ひいて、熱で脳味噌をやられちまったんか？ ちつとは常識つてもんを考慮しろよ、なあ？」

「……あんた、この部屋のアイテムをゲットするって言ったじゃねえかよ」

「おう、言った」

大きく頷いておいて、彼はハツと表情を変化させ、次に爆笑した。「あは、あははは！ そうか、おまえ、アイテムって聞いて、あの素っ裸でバンザイしてる女の像のことだと思ったのか！ あはははは！ こりゃ傑作だ！ ナイス！ ナイスギャグ！ すげーセンスだぞ、そりゃ！」

腹を抱えて笑い転げてるし……。

笑い死にしそうな勢いだ。

でも、笑われている俺は面白くない。

「じゃあ、聞くんが、このガラーンとした部屋の、どこにアイテムがあるって言うんだ？　ここ、あの銅像の他には何にもねえだろ」

ここで怒りを露わにして怒鳴りつけるのは格好悪すぎなので、俺は腹の中で煮えくり返る負の感情を圧殺し、ポリウム最大になりそんな声を絞りに絞って訊いた。

名取はわざとらしく溜め息を吐き、怒らせる意図が満ち溢れている憐れみの目を向けてきた。

「にいちゃんよ、おまえさんの目は節穴か？　その目ん玉はガラス玉か？　ちゃんと室内を探したのか？」

「……………」

その挑発に乗って殴りかかったらダメだ。回避されるのは目に見えているし、確実に反撃を受けるだろう。こいつは、あのデスマスクに引けを取らない動きができる人間なのだ。糞ム力つくが、それだけは念頭に置いておかなきゃならない。

だから俺は、小馬鹿にするのも大概にしろと叫んで、顔面に肘打ちを食らわせ、蹲ったところへ膝を叩き込み、最後の仕上げとしてPKを突き刺す……という三連コンボを心の中できめて、なんとか溜飲を下げた。

そして、もう一度、今度は隅から隅までじつくりと室内を見回した。

「ん？」

よく見ると、天井の一部が四角く切り取られたみたいに、ポツカリと穴が開いているではないか。

しかも、銅像の真上の位置だ。

「なんだ、ありや……。なんで天井に穴なんかが？　通気口じゃないよな？」

「おう、気付いたか。でも、通気口じゃない」

「じゃあ、何の穴だ？」

「その意味がわかれば、もうアイテムをゲットしたも同然だぜ、にいちゃん。頑張って脳味噌を捏ねな」

アイテムの取り方がわかったってんなら、とつととゲットしてくれりゃいいのに、なんで俺にやらせようとするかな……。

こんな所で油を売ってちゃ、賢いライバルたちにどんどん先を越されちまうぞ。

こいつはテスト生じゃないみたいだから、何時間無駄に浪費しようがお構いなしなのだろうが……。

「……上の階にある落とし穴と繋がってる、とかか？」

それっぽい解答を試してみた。

「ハズレ！ あの穴は大して深くないぜ。およそ、銅像の身長と同じくらいの深さだろ。真下から見てもよ」

名取はへらへらと笑って舌を出し、銅像と天井の穴を交互に指さした。

俺は銅像の下まで行って、真上の穴を見上げてみた。

蛍光灯の明かりが影響して穴の奥がよく見通せないが、確かに、穴は上の階まで貫通していないようだ。

こいつ、さつき適当に部屋を見回してただけのように見えたが、実際には細部まで確認していたっていうのか。

ちゃらんぽらんなホストにしか見えないのに、ほんと結構な切れ者なのかもしれない。

「穴の深さと銅像の大きさが同じだとしたら……何だっていうんだ？　どんな意味があるんだよ？」

「そんな簡単な想像すらできないってか、にいちゃんよ……。言っちゃ悪いが、おまえ、テスト生としての才能ないな」

「そんなことあ、この建物で目覚めた瞬間に自覚してるんだよ！　いちいち指摘すんな！」

「おうおう、わかってんのか。そりゃ結構なことだぜ。己を知り、敵を知り、状況を知る。その三つが均衡してりゃ、悔し涙の海で溺れ死ぬ心配はないと思うぜ」

「三つともゼロだったら、どうすんだ？」

「そっというカス野郎は、あのスイッチを押すしかねえな」

名取はそう言つて、ぶらぶらとだらしない歩き方で部屋のドアまで行き、侮蔑とは無縁の表情で俺を呼び寄せ、ドアの横にあるスイッチを指し示した。

それは誰が見ても蛍光灯のスイッチだ。

でも、彼が意味ありげな表情で促しているのであれば、それは見た通りの役割を果たすモノではないのだろう。きっと、何か別のモノを作動させるスイッチなのだ。そして、スイッチを押した者に良くないことが起こる。そう予感せざるを得なかった。

俺は嫌な予感を覚えつつもドアの横に行き、人差し指を伸ばしてスイッチを押そうとした。

その寸前で止められた。

「にいちちゃん、スイッチをオンする前に忠告しておくが、押す時は手だけ部屋に差し込んで、体は廊下に出しといた方が利口だぜ。そうしないと、小人レベルまで身長が縮んじまう」

「どういうことだよ？」

嫌な予感が益々強くなり、俺はスイッチを押すのを躊躇った。

「押してみりゃわかる。そんな疑惑の目で俺を見てないで、さっさと部屋から出るよ。そんで一、二の三でスイッチをオンだ」

「……………」

俺は忠告された通りに廊下まで出て、手だけ伸ばしてスイッチに触れた。

「押すぞ？」

「おう、さっさと押せ」

ぽちっとな。

俺は、そう心の中で呟いてスイッチを押した。

次の瞬間、ドカーン！ という地獄まで反響しそうな轟音が鳴り、それと同時に凄まじい衝撃波が室内から放たれた。

何が起こるかわからなかったので一応、身構えておいたのだが、その圧倒的な衝撃波の前には俺の踏ん張りなど全く効果がなく、気持ち良いくらいの勢いで吹っ飛ばされた。

名取が咄嗟に腕を掴んでくれなければ、俺はみつともない格好で廊下をごろごろと転がっていったらう。

「にいちちゃんよ、おまえは紙じゃねえんだから、ちつとは耐えろよ」

「わ、悪いな……」

俺は腕を掴んでいる彼の手を振り払って体勢を整え、もうもうと立ち上る土埃を手で払いのける。

「いったい何が起こりやがったんだ？ 部屋の中で爆弾でも爆発したってのか？」

「爆弾？ そんなもんが爆発してたら俺ら、とつにくたばってるぞ」

名取はフンと鼻で笑い、アゴをしゃくって部屋の方を示した。

「おら、部屋ん中を見てみるよ。何が起こったのか一目瞭然だぜ」

こいつの指示にしたがうのは嫌だったが、俺はスイッチを押したことによる変化を知りたくて、室内を見ようとした。

見ようとしたのだけど……俺の視線の先にはコンクリートの壁しかなかった。

ドアはあるのに、その向こうには壁しかない。部屋が一瞬で壁の中に埋まってしまったみたいだ。

「……どういうことだよ、こりゃ？ 部屋が消えちまってるぞいや、そうじゃない。」

そうではなくて。

これは……。

「まさか、天井が落ちてきやがったのか？！」

それを理解したのは、落下したと思われる天井が徐々に上昇し始めたのを見てからである。それまでは奥の壁が物凄い速さでこっち側にぶつかっただのかと思っていた。

しかし、なるほど。壁を移動させるよりも、天井を落下させる方が罠として凶悪だし、仕掛けも簡単だ。度が過ぎるくらい大仕掛けだが、テスト生をビビらせる効果は高いだらう。俺みたいに、何も考えずに罠を発動させて即死しまう間抜けなテスト生もいるだろ

うし……。

「ふーん……なるほどねえ。蛍光灯が割れないように、天井は床上数センチで停止するようになってるんだな」

名取は、自分の頭より上まで天井が戻ったの確認してから室内へと戻り、しげしげと見上げながら言った。

そこに驚きの表情はない。

自分の想像していた通りに罾が発動し、想定内の結果に収まった……という顔をしている。

こいつ、どういう肝っ玉の持ち主だよ。

俺なんか、死の罾を目の当たりにして、すんげービビっちゃまって、足が震えてるっていうのに。

完全に天井が戻るのを待つて俺たちはアイテムの回収にかかった。とはいっても、俺は名取の指示に従うだけである。

情けない話だが、持っている能力が天地の差なのでしょうがない。「にいちちゃんよ、今を見ておおよその察しはついただろ？」

察しなんかついてないことくらい俺の顔を見ればわかるだろうに、名取は嫌みの欠片もない顔でイエスありきの質問をしてきやがった。

「お、おう……余裕で楽勝だぜ」

変なプライドが邪魔をしてノーと言いたくなかったから、適当に頷いておいた。

彼はにんまりと笑い、裸婦像を指差した。

「オーケー。それじゃ作業に取り掛かるうぜ」

「おう」

「俺はこのエロくない裸のねえちゃんを押し倒すから、にいちちゃんはドアん所に行ってスイッチを押す準備をしといてくれ」

「お、おう……？」

彼が何をしようとしているのか全く理解できていなかったが、俺は指示に従って部屋を出た。

そして、スイッチに手を掛ける。

「おっと！ にいちゃん、まだ押すなよ。今それを押されたら、俺が気持ちよく逝っちまう」

名取は緊張感のない顔で念を押してから、裸婦像の胸に手を掛けニタリと気色悪い笑みを浮かべた。

「揉みごたえのない乳だぜ。どうせ押し倒すんだから、擬似スキン使用の極上ダッチワイフを用意しとけて言うんだ。そうすりゃ、ちつとは重労働も楽しめるのによ。なあ？ そう思わねえか？」

「……………」

当然、無視である。

同じ穴のむじなではあるが、あそこまで堂々と下品な発言はできない。

「なんだよ、にいちゃん。ノリが悪いな。こういう作業は楽しみながらやらなきゃ損だぜ」

彼は無駄口を叩きながらも、腰を落として重心を下げ、体ごと像にぶつける勢いで銅像を突き倒した。

ゴトン、と音を立てて横倒しになる裸婦像。

「頭の悪いテスト生は、この銅像で天井を支えようとするんだろうな。くつくつく」

意味不明の独り言。

そして名取は、裸婦像が置かれていた場所に真っ直ぐ立ち、像のポーズを真似るようにバンザイした。

「よし、準備完了だぜ」

そう言っただけにウインクする。

なんだか胸糞悪いときめきを感じたが、気付かないフリをしていた。

「……………押していいのか？」

あそこに立っていれば天井に潰されないのは、傷一つない裸婦像を見てもわかる。

でも、なぜか躊躇ってしまう。

どうして彼が平然として立っているのかわからない。俺には

到底無理だ。ビビって逃げ出さないまでも、足が震えて真っ直ぐ立ってられないだろう。

「はよ押せ」

名取が急かすように言った。

「……押すぞ」

俺は人差し指に必要な以上の力を込め、スイッチをオンにした。

【6・古城篇也】

スイッチを押して即、手を引つ込めた。

そして、ドアノブを驚掴みにし、両足を踏ん張って衝撃に備える。次の瞬間、見えていた室内が一瞬で壁に閉ざされ、ドカーンという爆発音と共に衝撃波が放たれた。

「くっ！」

凄まじい風圧によってバランスを崩されたが、今度はしっかりと対策ができていたので無様にすっ転ぶことはなかった。

「ふう……」

名取が言っていたように、天井は完全には落ち切っていない。

天井と床の間には、ほんの数センチだけ空間がある。

じゃあ、あのドカーンというドでかい音は何なんだろう？

天井の落下音じゃないとすると……わざとテスト生をビビらせるために激突音を鳴らしてるっていうのか？ それとも、別の場所では何か壊れてるっていうのか？

俺は色々想像しながら、落ちた天井が徐々に元の位置へと戻っていくのを見守る。

名取が無事なのは、天井が落下した直後から聞こえている彼の笑い声でわかっているの、心配はしていない。

しかし、何となく安否が気になったので、腰丈くらいまで天井が上昇するのを待って、しゃがんで室内を覗き込んでみた。

「え？」

室内には誰もいなかった。

あるのは天井の落下によって胸のサイズがAカップまでダウンした裸婦像と、それによって壊れた天井と床の破片だけだ。

彼も彼の死体もない。

笑い声は聞こえるのに……。

「おい、あんた、どこに居やがるんだ？」

俺は完全に天井が上がりきるのを待つて室内に飛び込み、彼の姿を搜した。

「ここだ」

彼の声は天井に開いている穴の中から聞こえてきた。

もしかして、穴に体が挟まって身動きが取れないとかか？

もし、そうだったら大笑いしてやるのだが……。

そんな想像をしながら、穴に向かって声を掛ける。

「どうした？　もしかして穴にスッポリと体のはまっちゃったのか？」

「いや、そうじゃねえよ」

否定と共に、彼の足が天井からぶらりと垂れ下がった。

そして、そのまま体をストンと垂直に落とし、綺麗に着地した。

「天井の穴の中にや、いい感じに掴める凹みがあつてな、そこに指を掛けてぶら下がつてたんだ」

乱れてもない髪の毛を撫でつけながらニヤリと笑う名取。

いやいや、そういう答えが聞きたいんじゃないやなくて。

「なんで天井と一緒に上にあがつていったんだ？　体育の授業じゃねえんだから、腕力自慢するみたたく天井にぶら下がる必要はないだろ」

「ああ、そりゃ、あれだよ。天井が落ちた状態だと、穴の中が暗すぎて何も見えなかったんだ。だから、蛍光灯の明かりが差し込むくらいまで天井が戻るのを待たなきゃ、アイテムをゲットできなかったってわけだぜ」

「ああ、そういうことか」

そんな大きな穴じゃないから、彼の体のサイズだと、上手く穴に入れても暗くて中の様子がわからないのか。

だから、ずっと天井にぶら下がってたわけだ。

「ご苦労様としか言いようがない。」

「しかし……こりゃ、意外と怖ええアトラクションだな……。ほんの少しでも穴と体の位置がズレてたら、即死してたぞ。さすがの

俺もちつとばかり肝を冷やしちまったぜ。くつくつく……」

怖いとか言いながらも笑えているところがすごい。感情のネジがゆるんでるのか、感情の制御装置が壊れてやがるのか、元々そういう機能が備わってない欠陥人間なのか、俺にはわからねえが、こいつがマトモな人間じゃないのはわかる。命懸けであることを理解できていないのではなく、命懸けで行動することが日常的な環境に身を置いているのだろう。だから、死を身近に感じて感情に作用されない。平然として感想を述べていられる。

俺だったら、恐怖と安堵でへたり込んでいるか、その場で失禁してるところだぞ。

でも、まあ、こいつの精神構造について考えるのは、俺が無事に生還してからでいいだろう。

今、大切なのは、天井に隠されていたアイテムである。

「で、ゲットしたアイテムってのは何なんだ？」

「おう、こいつだぜ」

名取は赤黒く汚れたスーツのポケットから何かを取り出して、俺の鼻先に突き付けた。

それを受け取って、何なのかを確認する。

「……何だよ、これ？」

一見するとブリキのオモチャのゼンマイを巻く《ネジ回し》だが……駅前のロッカーなどで用いられるような小さな鍵に見えなくもない。わかるのは、何かの穴に突っ込んで回すモノだ、ということくらいだ。

「にいちちゃんよ、そいつをどう使用すりゃいいか、わかんねえのか？」

くつくつくと可笑しそうに笑いながら名取が言った。

彼にはこれの用途がわかるらしい。

「……………」

俺は手の平の上に乗っているアイテムを凝視して脳味噌をフル回転させたが、残念ながら何も閃かなかった。

悔しいが、俺のしょぼい頭じゃ解決不可能である。

「マジでわかんねえってか……。こりゃダメだな」

名取は体内の空気を全部搾り出すようなワザとらしい溜め息を吐いた。

「にいちちゃんよ、そのアイテムばかり睨んでないで、ちつとは周囲に目をやれよ。アイテムは単体で完結してるんじゃないだろ。それを突っ込む穴がなけりゃ成り立たない。違うか？」

「そりゃそうだが……」

「じゃあ、この室内で、それを突っ込みそうなモノは何だ？ 目ん玉ひん剥いて見回してみろよ」

「……………」

このネジ回しを差し込める穴？

そんなもん、あるのか？

この室内には、天井と壁と床、そしてドア。その他には青銅製の裸婦像だけしかない。

もし天井の穴の中にその対象があるのであれば、名取も冷笑混じりに言ったりはしないだろうし。

わかんねえぞ……。

俺は室内をのたのたと歩き回り、ネジ回しを差し込む場所を探した。

でも、幾ら探しても発見できない。

そんな俺を見て憐れんだのだろう。名取が助け舟を出してくれた。しかも、戦艦級の救助舟を。

「おいおい、にいちちゃんよ……おまえ、さっきから部屋の中をぐるぐる歩き回ってるけど、何してんだ？ 目に見えない干し藁でも踏みつけて発酵を促してるってか？ そんなで、脳味噌まで一緒に腐っちゃったってか？ 無駄時間の大吃い大会を開催してるんじゃないから、ちゃっちゃとアイテムをゲットしてくれよ。そうしないと、この部屋でノタレ死んじまうぞ、おい！ もういい加減、裸のねえちゃんを舐めまわす勢いで愛撫しまくれよ。頼むから！」

「……………」

表現はアレだが、彼が何をアドバイスしているのかは理解できた。俺は足元に転がっている裸婦像に飛び付き、抱きつくようにしながら全身を隈なく観察した。

ちよっとした凹みも見逃さないよう目を皿のようにして調べ、表面を撫で擦る。

そうして調べているうちに、この銅像の表面塗装が剥がれることに気付いた。

青銅製だと思っていたが、どうやら黄土色の金属に銅のメッキを施したものだっらしい。

そして、ヘソの上を覆っていたメッキを剥がすと、鍵穴のようなものが姿を現した。

どうやら、それがネジ回しを差し込む穴なのだろう。

「おう！ やっぱりあったか！」

思った通りの結果を得て、したり顔を浮かべる名取。

憎たらしいが返す言葉がない。

でも、そんな感情も二秒で払拭した。

アイテムさえゲットできりゃ、その過程なんか気にしない。

俺は裸婦像のヘソにネジ回しを差し込み、時計回りに回した。

ギチギチ、ギチギチ、という金属音。

想像していたように、これは鍵ではなくてネジ回し……否、ゼンマイ回しだったようだ。

十回ほど回して手を離すと、ジジジジ……というゼンマイ音と共に仕掛けが作動し始めた。

裸婦像がゆっくりと口を開く。

俺は口が開ききるのを待てず、手を突っ込んで口内をまさぐった。「おいおい、そこで慌ててどうする？ 秘密結社オズの工作班が手に塩をかけて作ったカラクリ人形なんだぜ？ せつかなんだから、そういう仕掛けは作動し終わるまでじっくりと観察しようや」

そんな名取の苦笑も、右の耳から左の耳へ抜けていく。

「！」

指先が何かに触れた。

それを鷲掴みにして引つ張り出す。

「さしずめ、《1》と《7》の鍵か？」

俺が確認するより先に、名取が予想を立てた。

俺は取り出した物を目の前に持つてきて確認した。

「……鍵だ」

確かに、二つの鍵だった。

しかも、それぞれに《1》と《7》という数字が刻まれている。

彼がどうしてそれを予想できたのか、それはわからない。

だけど、そんなことはどうでもよかった。

俺が手に入れたのは、単なる鍵ではなかったのだ。

「金色の鍵……？」

それは、二つとも、金ぴかに輝く超豪華な鍵だった。

【7・古城篇也】

手に入れたのは金色の鍵だった。

しかも、二つも。

純金製ってわけじゃないだろうから、ディスカウントショップでは高く売れないだろう。だが、サバイバルテストのアイテムとしてはレア度が高いんじゃないだろうか。なにせ金色なのだ。超レアアイテムが納められている宝箱とかを開く鍵に違いない。そうでなきゃ、あれほどの罫を仕掛ける意味がないではないか。

そう思うと、ついニヤニヤしてしまう。

さーて、この鍵で開けることのできる宝箱は、どこにあるのかな？
すぐ近くの部屋か？ それとも別の階にある部屋か？

どこであろうと、今すぐ探し出して、この鍵をブツ刺してやるよ。

俺は鍵を握りしめたまま部屋を出ようとした。

すると、名取が出鼻を挫くように待ったをかけてきやがった。

「ちよーっと待った！」

「ん？ 何だよ。宝箱を探しに行くんじゃないのか？」

「……おいおい、にいちちゃんよ、おまえさん、真正のアホか？ その両耳はチクワみたいに貫通してて、俺の言葉は脳に響かないってか？ それとも、脳味噌が発酵しすぎて、単なる腐ったプリンになっちまってるのか？ 頼むから常識を弁えて行動してくれや」

「どつという意味だよ……」

まさか、服を調達する方が先だとか言わないよな？

どう考えても優先順位が高いのは、このレア鍵で開けることのできる宝箱だ。服なんか、その気になればいつでもゲットできるだろ。それこそ、その辺を歩いているテスト生から奪えばいいのだから。だが、宝箱の方は後回しにできない。その中に入っているアイテムが、生還に直通しているかもしれないのだ。もし《銅メダル》が入っていたりして、俺以外のKナンバーに先を越されたりしたら、も

う泣くに泣けない。

「この鍵でアイテムをゲットするのが最優先だろ？」

「あいたーっ！ その鍵で？ アイテムの方が優先？ このにちやん、完全に脳味噌が逝っちまつてるよ……」

名取はウンザリした顔を天井に向け、片手で顔を覆った。

俺の意見は聞くに堪えない、という表情だ。

「いいか、にいちやん。この世には許されるレベルのバカと、死んだ方がマシなバカが存在してやがる。前者は可愛げのあるバカだ。外見にしろ、言動にしろ、それがマイナスの結果を招いたとしても見る者を笑かしてくれる。後者は憎たらしいだけのバカだ。その一挙手一投足の全てが見る者を不愉快にし、挙句に最大級の不幸を招く。俺は今まで、おまえさんのことを前者だと思ってた。今もまだ前者だと思っている。だけど、次は認識を改めるかもしれんぜ」

「なんだよ、そりや。酷えこと言うなよ」

「おまえが素っ裸で寝言をほざいてるからだろ」

「俺の何が間違ってるって言うんだ？」

「……………」

名取は一瞬、目を細めて冷たく睨んだが、何も言わずにすぐに表情を消し、つかつかと歩み寄ってきて俺の手から金の鍵をもぎ取った。

「おい、なんだよ！ それ、俺にくれるんじゃないのか？！」

「いつ、誰がくれてやるって言ったよ？ これは俺がゲットしたアイテムなんだぜ？ おまえが所有権を主張する余地なんざあぜ口だろ」

「……………」

返す言葉もなかった。

あの鍵をゲットする過程で活躍したのは彼だ。俺はただ罠のスイッチを押しただけ。どちらに所有権があるのかを考えるまでもない。名取は二つの鍵を俺にチラつかせながら、嫌味っぽい笑みを浮かべた。

「まあ、これが単なる鍵だったら、おまえにくれてやっても良かったんだけどな。《金色》だってんなら話は別だ」

「金色だと何か違うのかよ？」

「ああ、違うぜ。金色の鍵は、他の鍵と違って、使用回数の制限が設けられていないんだ」

「！」

それは初耳である。

使用回数が制限されてないってことは、その鍵は使い放題ってことだ。つまり、逆に言うと、金色以外の鍵は、一度使用して終わり。使い回せないってことだ。そんな便利なアイテムが一瞬だけ俺の手の平の上に乗っていたなんて……。彼をぶち殺してでも欲しいアイテムだ。だが、奪おうとしたところで手も足もでないだろう。

「もし俺がおまえを生還させるために送り込まれたエージェントだったら、こいつを笑顔でプレゼントしただらうけどな。残念ながら、俺は、おまえさんなんか死のうが生きようが知ったこっちゃない立場なんだよ。っていうか、極力、サバイバルテストに干渉しないようにと言い含められてるんだ」

「じゃあ……なんでデスマスクン所で俺を助けてくれたんだ？　なんで今もまだ俺に付き纏ってんだ？」

俺に何の関心もないのであれば、なぜ彼は俺を追いかけて来ているのだろう？

理由がわからない。

そんな俺を笑う名取。

「俺とおまえの間には、《デスマスク》、《寝所》、《死体のフリ》、《自称響千鈴の相棒》っていうキーワードが転がってるだろ。そこから察しろよ。難しい問題じゃねえだろ」

「……………」

確かに考えるまでもなかった。

彼がデスマスクの寝所で死体のフリをしてまで待っていた者。

俺と彼の間に成り立った最初の会話。その話題の主。

何よりも、彼はデスマスクの情報に詳しい。

それらが導き出す答えは――

「千鈴を捜してるのか？」

「ビンゴっ！」

名取は大袈裟な音を立てて拍手した。そして、親指を立てて自分の顔を指した。

「俺は、響千鈴っていう女がどの程度の兵器になり得るのかを調査しに来たんだ」

何だそりゃ。

千鈴の能力調査をするためにサバイバルテストに潜入している？でも、どの程度の兵器って、どういう意味だ？

兵器？ 兵士じゃなく？

そもそも、こいつは誰に命令されているんだ？

様々な疑問が脳内を乱舞する。

しかし、最大の疑問は、彼自身に関するものだった。

「……あなた、いったい何者なんだ？」

「俺か？ 俺はSSSS000号（偽）の名取圭輔だよ。そう名乗っただろ」

ニヤリと笑う名取。

この男はテスト生じゃない。それは出会った時から確定的だ。

勿論、組織の人間でもない。完全なる部外者だ。

確実に外の人間だろう。

しかも、カタギじゃない。

もっと別のヤバイ何かを生業にしている裏社会の人間だ。

名取圭輔という姓名も本物かどうかも怪しい。

「……………」

俺が無言で睨んでいると、名取は一転して表情を明るくし、声のトーンを高めた。

「おいおい、素っ裸で睨めっこの練習か？ 止めとけよ、威勢を張るのは。俺に凄んでみせても何も利は得られないぜ。逆に、不利益

を被つちまうぞ。せめて服をゲットするまで仲良しのフリをしとけよ。それが何の力も持たない弱者の賢い生き抜き方だぜ」

酷い言われようだった。

しかし、彼の言葉は正しい。

何の能力も持たない俺がサバイバルテストを生き抜くには、彼のような強者の慈悲にすがって、そのおこぼれを拾いながら逆転の機会を狙うしかないのだ。

「理解したんなら、とつとと先に進むぞ」

「おう」

「まず《衣装室》に行つて服を着替える。それが大前提だ。とにかく、この臭え服はダメだ。着てるだけでムカついてきやがる。幸い、ここは一階だ。バカなテスト生と遭遇しなければ、サクッとゲットできるだろ」

この男、色々な情報に精通してやがるが、この建物の構造も頭の中に入っているらしい。

できることなら、俺の役立たずな脳味噌とその脳味噌を交換して欲しい。今すぐ。

そうすりゃ、この惨めな境遇からも脱出できるに違いない。

「服の次は《掲示板》だ。玄関ホールに行つて、おまえさんが無事であることを《掲示板》に書き込んでおけば、響千鈴が捜しにくるかもしれない。そうなれば、俺の任務は完了したも同然だが……」

まあ、そんなに上手くは行かないだろうな」

名取はへらへらと軽薄な笑いを浮かべ、手の中にある二つの鍵を上着のポケットに落としこんだ。

そして、やる気のない足取りで部屋を出ていく。

「……………」

掲示板に俺が無事だつてことを書いても、千鈴はわざわざ確かめに来ないだろう。俺と彼女の間には何のキズナもないのだ。相棒どころか、仲間ですらない。ただ一緒に行動していただけ。それだけの関係。彼女は、俺が生きていようが死んでいようが、一切気にせ

ず、自分の生還を目指すだろう。

そんなことはわかりきっている。

だけど、俺は無言で彼の後を追った。

【8・ジェシカ・ウェイン（2/5）】

高速船の上で潮風に吹かれながらサバイバルテストの経過をモニターするのは、一部の悪趣味な成金たちを除いて、楽しい行為とは言えない。自分が担当しているテスト生の行動を随時フォローしながら、その行動に対する解説を加えたレポートを書き、定期的に本部へ報告しなければならないので、遊んでいる時間などないし、ゆつくりと休息をとることもできない。対象のテスト生が惰眠を貪る馬鹿者であれば、モニターせずに怠けていられたのだろうが、残念ながら私の受け持っている古城篤也は、予想していたよりも生に執着しているようで、彼なりに一生懸命テストを生き抜こうとしている。あの調子だと、今日明日にゲームオーバーという事態にはならないだろう。彼と行動を共にしている姫城グループの作業員もなかなか優秀な人材のようだ。あのデスマスクと対峙して無傷でいられるのだから、Sナンバー以上の評価を与えても誰からも文句は出ないに違いない。本人は、SSSとかフザけたナンバーを名乗っているが……。まあ、お調子者という点では古城篤也と良いコンビだ。私としては、このまま二人の様子を見守っていたいのに……。

ブラウン博士の命令により、私は藤森真悟の監視役としてサバイバルテストの地に踏み込むこととなった。

本来なら持ち場を離れて他事に専念することは禁止されているのだけど、響千鈴と古城篤也そして《G男爵》のモニター作業についてはバーバラと小石川博士にバトンタッチし、下船の準備に取り掛かる。

私は自分に与えられている個室に戻ると、IDカードと携帯電話をロッカーの中に放り込み、その代わりに黒革の旅行カバンを取り出した。

カバンの中には、私がテスト生時代に愛用していた装備が一式そ

のまま納められている。

まずは身に着けている服を全て脱ぎ去り、全裸になって、姿見に自分の肉体を映して数秒間観察した。

「衰えてはいないと思うけれど……」

肌の艶とかハリ、シミや胸の形など、女としての見栄えではなくて、テスト生としての能力を言っているのだ。

三年近いブランクが、どれほど自分からテスト生時代の能力を奪い取っているのかは考えたくない。安穩と暮らしていたわけではないので、意識の面では問題ないと思うのだけど、筋力については多少不安だ。

私はカバンの中から旧サイバート製の女性兵士用下着を取り出して身に着けた。これは通気性が高く、衛生面に優れているので、Sナンバー時代から愛用していたものである。

更にノースリーブのシャツとレザーパンツを着て、防弾効果のあるジャケットを羽織る。

「窮屈ではないわね……」

適当にストレッチをして着心地を確かめてみたが、手足の動きはスムーズであり、運動を妨げる要素は皆無だった。どうやら無駄な贅肉はついていなかったようだ。色々な意味でホッと一安心である。私は脱ぎ捨てた服を綺麗に畳んでロッカーの中に納め、ブーツを取り出して足を通した。

そして、一つ一つ装備を確認しながら、身体をサバイバルモードへと切り替え、気持ちを引き締めた。

担当しているテスト生の動向をライブで観賞できないのは非常に心残りだ。

だが、今はもう他人の心配をしている状況ではない。私自身がサバイバルテストの極地へ踏み込まなければならぬのだから。

彼らの早期生還を祈っておこう。

私は最後に、カバンの底からマシンピistolを探り出し、その感触を確かめた。

久しぶりに手にした愛用の武器が妙に重い。

「狙った的にちゃんと当たるかしら？」

鏡に映るレディ」に向けて皮肉っぽく訊ねる。

「私は最高のGナンバーだったのよ。安心なさい」

彼女はそう答えて笑みを浮かべた。

高速船が島に接岸された。

二十名の黒服たちが、テスト生の強襲に備えて搭乗タラップを駆け下り、扇状に展開して銃を構える。

廃城だけでなく、島全域がテストフィールドであるため、その気になればテスト生が徒党を組んで高速船を乗っ取ることも可能なのだ。それを含めた万が一の事態に備えて、船底には強力な爆薬が仕掛けられている。テストの失敗は、私たち全員の死を意味するのだ。

しかし、どうやらテスト生たちは、テストを攻略することに夢中で、こちらに気づいていないようだ。この船の上からでも数名のテスト生を肉眼で見ることができたが、彼らは吃驚眼で棒立ちになっているだけであり、あわよくば船に乗り込んで死地から逃れようと企む者はいなかった。

私は船尾の甲板に立つと、肺一杯に空気を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「期待しておるぞ、レディ。オズの未来は君の行動にかかっておる」
ブラウン博士は黄ばんだ歯を剥いて笑顔を作り、馴れ馴れしく私の肩を叩きながら言った。

保身志向の強い下司男の作り笑いは、猛烈な吐き気を催させるだけで、一服の清涼剤にすらならなかったが、無視はできないし反吐を返すことも躊躇われたので、適当に頷いて答えておいた。

「レディ」、お体に気をつけていつてらっしゃーい！」

小石川博士は、死に別れ確定とでもいうような悲壮な顔をして、ぶんぶん和大袈裟に手を振っている。

縁起でもない話だが、危険度から言えば、彼女の認識こそ正しい

のかもしれない。ブラウン博士や遠藤教授は所詮、研究所上がりのデスクワーク組である。サバイバルテストの実態を身をもって知っているわけではないのだ。南アジア支部のテストから成り上がってきた小石川博士には、今回の使命の重さ、難しさがわかるのだろう。私は彼女に向けて軽く手を振り返し、搭乗タラップを降りた。藤森真悟とその仲間たちもそろそろと船を降りてくる。

そして、予定していた者が全員降りきったところで、黒服たちが搭乗タラップを駆け上がり、物凄い速さで高速船が離岸していった。「あそこまで慌てる必要はないと思うのですが、何を恐れているのでしょうか？ テスト生の襲撃に対する備えは、我々の存在だけで十分でしょうに」

船着き場の様子を見回しながら藤森真悟は朗らかな口調で言った。この男は手荷物を何も持っていない。重火器どころか武器すら帯びていないようだ。およそ例のペーパーナイフしか武器になるものを持っていないのだろう。常識的に考えれば、自殺しに来たようなものである。しかし、そのナイフが生み出す死は、並みの重火器よりも酷い。姫城市の市街戦で彼のナイフに斃れたものは、その全員が《鬼》と呼ばれていたつわものだったのだ。

「貴方を恐れているのよ。わからないかしら？」

「ほう、ボクを恐れて？ それは申し訳ないことをしましたね。一応、紳士的な対応を心掛けていたのですが」

「行動は紳士的でも、貴方という存在が恐怖を撒き散らしてしまうのよ。その点、自分の過去を省みて、よく考えてみなさい」

「耳に痛いご忠告、感謝します」

少しキツイ発言をしたつもりだったが、彼は優しげに微笑んで一礼し、私をエスコートするように船着き場から出て行った。

船着き場を出た先には、朽ち果てた倉庫らしき小屋と小汚い売店が並んで建っている。

そのどちらもテスト用の仕掛けが施されているので、踏み入るの

は止めた方がいい。

それを藤森に告げると、彼は秀麗な顔に微かな毒を宿した。

「余計な忠告は不要ですよ、レディ」。ボクたちは一般のテスト生と同じ条件の下でサバイバルテストを調査したいのです。あの建物に死の罠が仕掛けてあると知ってしまったては、何の面白味もなくなってしまう。それでは、ボクはともかくとして、彼女たちが楽しめないでしょう」

彼の視線の先にはオズの殺人兵器の三名がいる。

胡桃香と黄蓊と茜だ。

三人とも優秀な作業員なので、テスト生のように罠に掛かって死ぬようなことはあり得ない。デビルプラントの出身者は、最高レベルのテスト生であっても到達できない超戦士の素養を、生まれながらにして持っているのだ。そして、その中から能力選別された天才たちの総称を《色付き》といい、更にそれらの中でもズバ抜けた殺人能力を持つ兵器たちを《完成品》と呼ぶのである。だから、テスト生用に配置されている罠ごときに彼女たちが引っ掛かるわけがない。

私が対象にしているのは、彼女たちではなく彼だ。

「貴方の身を案じる必要はないと？」

彼の殺人能力は世界でも三本指に入るだろう。それは姫城市の市街戦のデータを見れば明らかだ。その能力に対抗し得る存在は、現在のオズにはいない。しかし、だからと言って、洞察力や推理力が優れているとは限らないだろう。無敵だからこそ、下らない不注意を犯して死の罠にはまる可能性だってあるのだ。

そう思ったのだけど、彼は首を横に振った。

「攻略本を見ながらゲームをやるのは、ボクのプレイスタイルではないのです」

自宅でTVゲームをやっているのではないのだから……という突っ込みをグツと飲み込む。

勝手にすればいい。

遊び半分でフィールドを歩き回り、その結果として罠に掛かり、彼が命を落としたとしても私たちに非はない。それによる害もない。姫城グループが報復してくることもないだろう。

私は、売店の前で立ち止まり遠くに見える廃城へと目を向けた藤森に、行動プランを尋ねた。

「それで、我々はどう行動するのかしら？」

「そうですね……」

彼は視線を廃城から私へと移動させ、アゴ先を摘んで考えるような仕種をする。

そんな姿が絵になる男だ。

「ボクとレディ」は、あの古びた城の中を重点的に調査しましょう。茜と胡桃香は島の外周を人通り見て回ってから城に来なさい。黄莓さんは自由に行動して構いませんので、《例の件》の処理を優先させて下さい。不測の事態に陥った場合は、各自で判断して行動すること」

「わかったなり！」

「承知しました」

彼に指示を受けた胡桃香と茜は、従順な態度で承諾した。

完全に手なずけられてしまっている。もはやオズのエリート工作員であった頃の記憶など捨て去ってしまったのかもしれない。それはそれで羨ましくあるが……。

「もし敵対する者が現れた場合はどうするんだい？ あたしや、弱い者イジメは嫌いだけど、弱いくせに強いフリをしてギャンギャン吠えたてるクズ野郎を放っておけるほど温和な性格じゃないんでね。そういう馬鹿が襲いかかってきたら、ハンマーでブツ潰してもいいんだろ？」

黄莓が嫌そうな顔で、物騒な質問した。

藤森はニツコリと笑って頷く。

「こちらから積極的に攻撃するのは禁止しますが、攻撃された場合、もしくは攻撃してくると思われる敵に対しては、反撃および先制攻

撃の許可を出しておきます」

「よっし！ 俄然やる気が湧いてきたよ！」

意気込む黄莓。

しかし、攻撃してくると思われる敵に対する先制攻撃とは……。

それは、主観に基づく判断というニュアンスではなくて、完全に無差別虐殺を容認する意味での攻撃許可である。

私は思わず声を荒らげて非難しそうになった。

それを視線だけで止める藤森。

彼らの作戦に口出しすることは許さない、と言いたいらしい。

それでも私は一言釘を刺しておいた。

「不用意なテストへの介入は控えてもらいたいわね」

「善処しますよ」

藤森はさつきと同じく穏やかな調子で答えた。

「善処するなりー！」

胡桃香は相変わらぬハイテンションだ。でも、たぶん私の忠告など耳に入っていないだろう。

「私は友広さんが支持する真悟さんの命令に従うだけです」

茜は、口調こそ硬いが、随分とリラックスしているようだ。今どのような環境に身を置いて、どのような生活を営んでいるのかは知れないけれど、戦場こそが彼女という存在を解放してくれるのだろう。

しかし、黄莓は面倒臭そうに顔をしかめて、愛用の巨大ハンマーを肩に担ぎあげた。

「あたしゃ、このハンマーを振り下ろす対象が欲しいんだ。目についた奴は片っ端から潰させてもらっつよ」

そう言っただけを剥く。

「黄莓さんのお眼鏡にかなうテスト生がいれば良いのですがね」

「……………」

藤森が可笑しそうに言うと、彼女は口先を尖らせてむっつりと黙った。

【9・西園エリカ】

貴賓室は、その名が示す通り、貴族様が優雅な生活を営んでいそうな豪華な部屋だった。

広々としたリビングを挟むように二つの寝室が備わっている。

その三つの部屋のどれもが綺麗な調度品で飾り立てられていて、訪れる者の目と心を惑わす。もし自分が旅行者で、ここがホテルの部屋なら、もろ手を上げてベッドに駆け寄り、ダイビングしてそのクッション性を確かめただろう。でも、私たちは旅行者じゃないし、ここは豪華ホテルでもない。童心に帰ってベッドにダイブしたりなんかしたら、死の罨に掛かって天国へゴー、である。

「エリカは罨を発動させないためにも、なるべく俺の歩いた跡をたどってついてくるようにしろ。絶対に勝手な行動はするな。間違っても、調度品の類には手を出さないように心掛ける。いいな？」

黒澤は重々しい口調で言った。

そろそろ、その台詞も耳にタコである。そんなの、言われなくてもわかってる。彼と一緒に行動している時は、私の判断は心の中にしまっておいて、命令にだけ従っていればいい。そうすれば死なずに済むし、生還にも近づいていける。自主性がむしろ邪魔。そういう立ち位置なのだ。

でも、何回も同じことを言われると、ムカツと来て反抗したくなるのも人間というものだろう。ついつい悪フザケをして、奇声を発しながらベッドにダイブしてしまうかもしれない。私は、そういう衝動に身を任せるようなお馬鹿さんじゃないけど、言われっぱなしのまま我慢できるほど従順な性格でもないのだ。

っていうか、そろそろ私を信用してくれてもいいと思う。

それでも、従順に返事をしておいた。

「はい」

しかし、煌びやかな調度品に対する興味が私から失われることは

ない。

白いスラッとした脚のテーブルに乗ってる細工時計は、本物っぽい宝石が幾つもついていて綺麗だし、その上の壁に掛けられている楕円形の鏡もさり気ない装飾が可愛かったりする。まるで映画とかに登場する、高級ホテルのスイートルームみたいだ。パンツも穿かないで入ってきた自分が酷く滑稽に思える。完全な場違い。でも、それは風守にも言えることだろう。彼の和装も、ここでは浮いて見える。上半身裸の黒澤は論外だし。

私は黒澤が室内の調査を終えるまで、彼の邪魔にならないように部屋の隅っこに身を寄せ、ぶらぶらと歩きながら小物の値踏みをして時間を潰すことにした。

裸足の私にとって大理石の床は素晴らしく歩きやすかった。所々ごつごつしていて、しかもジメツとしていた地下の床とは大違いである。ピタピタと足の裏に吸いつく感覚が気持ち良い。このツルツルの床は、もし靴下があったら、スケートみたいに滑れるだろう。ちょっと試してみたい気もするが、そんなことしようものなら黒澤に叱られてしまう。

私はペタペタと足音を鳴らしながら部屋の奥にある食器棚の前まで行き、そこに陳列されている小さなコップを覗き込んだ。

「これ、可愛いなあ……。一つ欲しいなあ……」

千円じゃ絶対に買えなさそうな瀟洒なコップを前に、私は願望を零した。

でも、指を咥えて観賞することしかできない。

「おい、エリカ。ウロウロしてないで俺の目の届く場所で大人しくしている」

黒澤に叱られたけど、私は舌を出した。

ちゃんと注意事項を守って行動してるんだから、ちょっとくらい離れた場所にいてもいいと思うのだ。雛鳥みたいに、いつもいつも彼の背中にくっついて歩き回るわけにもいかないだろう。

そう思いつつも、私は彼の近くまで戻った。

よく考えてみると、二つの寝室に不審者が潜んでいないとは言いい切れない。もしかすると、物陰から私たちの隙を窺っているかもしれないのだ。私が、うかと単独行動したところを、これ幸いと襲いかかってきたら……。ん？ 襲いかかれても平気？ 風守がすぐに助けてくれるだろうから、問題ない？ じゃあ、一人で寝室の方を見てきても大丈夫かな。

そんな自分に都合の良い想像を働かせていると、黒澤が低い声で言った。

「罾であれ襲撃であれ、大抵の場合、テスト生が死ぬ時は悲鳴すら上げられないことが多い。俺や風守さんが気づいた時には、既におまえが死んでいた、ということにならないよう気をつけるのだな」それに同意するように頷く風守。

「うむ。我が一呼吸で移動できる範囲に身を置いていれば、万が一の危険もあり得ぬが、それより外に身を遠ざけていた場合は小娘の安全は保障できぬぞ。それを頭に入れてウロウロするのだな」

私の思考なんてお見通しですね、お二人とも。

「わかってますよ！ ちゃんとな頭に叩き込んであります」

私が少し怒りを込めて言い返すと、黒澤は横目でこっちを見て呟くように言った。

「念頭に置くか、頭に叩き込むか、どっちかにしろ」

ちよつとした言い間違いを、したり顔で訂正する男。

私は頬を膨らませて睨むくらいしかできない。

そんな私たちを見て、風守はふふんと鼻を鳴らし、W形のヒゲを捻った。

黒澤は室内を一通り調べ終わると、クールな表情で結果報告をした。

「この部屋には何もないようだ」

そんなの調べる前からわかっていたことである。多くのテスト生が行き来する一階は、どこの部屋も完全に調べ尽くされていて、目

ばしいアイテムは皆無だ。たぶん、彼はそれを承知した上で、ダメ元の調査をしたのだろう。そうでなければ、無駄にした十数分が無意味になってしまう。

それとも、この《貴賓室》に重要なアイテムが残されている、という何かしらの確信があつて調べたのだろうか。そういう情報を、私と出会う前に仕入れていた可能性もある。ただ、その場合は、私たちが地下を歩き回っている間に、そのアイテムを先取りされてしまったことになる……。

「次は、右手に見える寝室を調べる」

黒澤は内心を窺わせない澄まし顔ですたすと右側の寝室に入つて行つてしまった。

私は慌てて後を追ひ、その背中に文句をぶつける。

「離れるなどか言いながら、一人で先に行っちゃダメでしょ！」

「俺は好き好んでおまえを守っているわけじゃない。死にたくないければ、キビキビと行動し、俺のそばから離れないことだ」

「むむむ」

何も言い返せないから悔しい。いちいち確認しなくてもいいだろうに。そんな冷たい態度をとってばかりいると、可愛い女の子にモテませんよ！　そう言つて舌を出してやった。心の中で。

右側の寝室は、殆ど調べなかった。

なぜかというと、部屋の中に隠されていたであろうアイテムが既に持ち去られていたからである。

黒澤の解説によると、化粧台の裏に二重の隠し扉があり、四つの鍵で開く仕掛けになっていたそうだ。しかも、隠し扉が開くと同時に作動する罠のオマケつき。

それがどんな隠し扉なのか、どんな罠だったのか、興味が湧いたけど、見るのを黒澤に止められた。罠に掛かつて死んでしまったテスト生の死体がたくさん転がっているので室内を見ない方がいい、と言われたからである。子供扱いしてるな、と不本意になつたが、

その気遣いが嬉しくもあつた。

右側の寢室で何の収穫も得られなかった私たちは、すぐに左側の寢室に踏み込んだ。

入ってすぐ、目に映った光景。

それは――

「あ！ こっちの寢室から、隣の部屋に行けるみたいですよ」

寢室の奥に見えるドア。それが開け放たれており、隣の部屋の中が露わにされている。

そこは、まさに《衣装室》だった。

想像していた通り、いや、それよりも多くの服がずらりと並んでいる。

それを見て我を失わない方がおかしい。

「あつちは衣装室です！」

私は報告しながら寢室を駆け抜け、衣装室に飛び込んだ。

「待て、エリカ！」

黒澤の怒鳴り声も耳に入らなかった。

いや、聞こえていたけど、無視して走った。

今の私の目には、そこに立ち並ぶ様々な衣装しか映っていなかったのだ。

私は衣装室に入ってすぐ、目についた洋服を手にとろうとしたのだけ――

唐突に、何者かに突き倒された。

【10・古城篇也】

危険地帯のド真ん中を全裸で歩き、尚且つ男のケツを追いかけているという状況は、とても精神衛生に悪い。ほんの一、二時間前が天国のようだ。何かと俺の股間を蹴りたがる鬼畜さだけ目をつむれば、響千鈴は素晴らしい同行者と言えた。なのに、今、俺と一緒に行動している野郎はどうだ？ 血塗れのスーツを着ている点は、まあ、仕方ないとしても、その物腰や態度がいちいち気に障りやがる。最初は気の良い兄貴的なキャラかと思つたが、鍵をゲットした頃から徐々に皮肉屋の本性が現れ始め、今や口を開けば俺のダメさを指摘して嘲笑う鬼姑キャラだ。服の件がなければ、マジでとんずらしてるぞ。でも、あのアイテム屋の力エル男よりはマシか。

俺は長い廊下をぶらぶらと歩きながら、前に行く名取に声を掛けた。

「なあ、まだ《衣装室》に着かないのか？」

天井が落ちてくる部屋を出てから結構歩いた気がする。時間的距離にして約十分。同じ場所をグルグル回ってるってわけじゃないだろうから、そろそろ到着しても良さそうなんだ。

「もう目と鼻の先だ」

名取は振り向きもせずに短く答えた。

俺はぶちぶちと文句を零す。

「目と鼻の先つてどこだよ？ 同じ一階なのに、なんでこんなに遠いんだ？」

「なんで？ 可笑しな質問するなよ。見てわかんねえのか？ ここは民家じゃなくて、どデカイ城だ。そうホイホイと目的地にたどり着けるわきゃねえだろ」

「……それにしたって限度があるぞ」

「馬鹿なテスト生やクソな罫を避けるには、慎重に通路を選んで進まにゃならねえんだ。ちよつとの遠回りでギャーギャー喚くな」

なんだ、余計なトラブルを避けるために、わざと遠回りしてたのか。

それならそうと言ってくれりゃいいのに……。

「近道すると、ヤバイ罠とかがあるのか？」

「罠はない。だけど、『食堂』があるからな。素っ裸のおまえさんを連れて歩くわけにやいかん」

「……………」

全裸で『食堂』は、さすがにマズイ。

男のテスト生ばっかだったら問題はないが、そこには当然のように女性テスト生もいるわけで、こんな俺がヘコヘコしながら入ってこういうものなら、爆笑の渦に包まれるか、もしくは顰蹙を買うこと請け合いだ。前者ならいいが、後者だった場合は、食堂から追い出されかねない。最悪の場合は、去勢の刑に処されるかもしれないし。

「あのドアの向こうにある廊下から『衣装室』に入れるはずだ」

名取は通路の奥に見えるドアを指差して言った。

本当に目と鼻の先だったらしい。

俺は猛ダッシュで目的地を目指したいのだけど、彼は何かを探るような慎重さで足音を忍ばせながら、ゆっくりとドアに近づいて行く。

「どうしたんだよ？ さっきまでドカドカ歩いてたのに、急にコソコソ歩きだしたりして。この辺の床に罠が仕掛けられてるとかか？ それとも、ドアにヤバ目の罠が仕掛けられてるのか？」

「そうじゃない。このドアの向こうに誰かいるみたいなんだ。騒がしい気配がしやがる」

名取は唇の先に人差し指を当てて、静かにしろというジェスチャーをし、ドアにそっと耳を押しつけた。

俺には彼のいう気配なんて欠片も感じ取れなかったが、彼がそういうのだから実際に誰かがドアの向こう側にいるのだろう。草食動物系のテスト生ならいいが、無差別に捕食するハンターだったら危険だ。ここで声を発して彼の邪魔をするのは馬鹿だ。指示された通

り、静かに待機するのが正解である。

「男二人に女一人……合わせて三人もいやがるな……。しかも、そのうちの一人は結構やばい気配を放ってやがる」

名取は舌打ち混じりに呟き、一度ドアから離れ、数歩距離をとった。

そして、腕組みをして難し顔をする。

「今、出ていけば確実に顔を合わせることになるな」

「どうすんだ？ そいつらがいなくなるまで少し待つか？」

何十分も待つわけじゃないから、他のKナンバーに大きく差を開けられる心配はないし、サバイバルテスト自体にも影響しないはずだ。時間よりも安全第一である。

しかし、俺の提案は即、却下された。

「待ってどうするよ、にいちちゃん。奴らがこっちに來たら、否が応でも鉢合わせしちゃうんだぜ。ここは攻めの一手だろ」

「相手が上位ランクのテスト生だったらどうすんだ？ 身ぐるみ剥がされるならまだしも、命まで取られたら洒落にならねえよ」

「おまえさんは剥がす服がないし、むさくるしい男だから、相手が気性の荒い連中だった場合は確実に殺されるだろうな。保障してやるぜ」

「……………」

そんな保証は必要ない。

俺が必要なのは安全だという確信。それだけだ。

そして、一番の安全策は、回れ右をして來た道を引き返すことだろう。

しかし……手の届く所に服があるというのに背を向けるのは、あまりに悔しすぎる。

「どうにかならないのかよ？」

「奴らが《衣装室》じゃなくて《貴賓室》に入ってくれりゃ、何とかなるんだけどな」

「貴賓室？ そんなもんもあるのか？」

「二つの部屋は隣り合っていて、中で繋がってるんだ。一応、ドアで隔たれてるけどな」

「へえ……」

俺は疑惑に満ちた内心を押し隠して、感心してみせた。

この男、何でも知ってやがるな。まるで、この建物の構造を熟知しているみたいだ。しかも、テスト生とか組織の人間じゃない。正体不明の存在。いったい何者だ？　っていうか、どこから情報を仕入れてきたのだろうか？

俄然、この男に対する興味が湧いてきた。

でも、今は意識を集中して目の前の危険に備えるべきである。

「俺がドアを開けて向こうの様子を見るから、おまえさんは気配を殺してろ。いいな？」

「おう」

気配の殺し方なんか学校で習わなかったが、息を潜めていれば十分気配を殺せると思ったので、俺は腹に力を入れてなるべく体を動かさないようにしつつ、呼吸を細く絞って体から発せられる音を限りなくゼロにした。

「よしよし、それでいい」

俺の努力に満足したのか、名取はにこやかな顔で数回頷いてドアに手を伸ばした。

ドアノブに彼の右手が掛けられる。

「開けるぞ」

「おう」

ドアノブがゆっくりと回された。

次の瞬間、しゅん！　と風を斬る音が鳴り、目の前に靄が立った。畏？！

一瞬の出来事だったので、それを目視することはできなかったが、どういふ畏かは理解できた。

ドアノブが回転すると同時に、シャッターのようなモノが壁から超高速でスライドしてきて、ドアを覆い隠したのである。いわば、

ギロチンの横向きバージョンだ。死の罨というわけじゃないが、ドアノブを握っていた手は確実に切断される。

だが、名取の右手は無事だった。

なんと、あの超高速でスライドしてきたギロチンを咄嗟に避けたらしい。

どういつ反射神経をしてるのやら……。

「うはー！ 危ない危ない！ 向こうの奴らに気を取られてて、つい罨の確認を怠っちまったぜ！」

表面的には笑っているが、内心は相当に肝を冷やしたはずだ。

よく見ると、唇が震えている。

「俺としたことが、危うくクソ罨で泣きを見て、仲間たちの笑い者になっちまうところだったぞ」

「あんた、仲間がいるのか？」

「そりゃいるに決まってる。こんなクソ溜めのカス置き場に一人で来るわきゃねえだろ」

「じゃあ、なんで単独行動してるんだ？ 仲間と一緒にの方が、人的な危険を回避しやすいだろ」

「俺らには、それぞれに役割つてもんが課せられてるんだ。ちなみに、俺は諜報と偵察が主な仕事だな」

「へえ……」

「同じ諜報系の担当なのに、岳見つてやつは半ば引退宣言した挙句、美人のかみさん貰って、可愛い娘まで生まれてウハウハの新婚生活をしてやがるんだぜ。それなのに、俺ときたら……。何だ、この差は？ なんで化け物の巢の中で死体と添い寝しなきゃなんねーんだ？ 素っ裸の馬鹿野郎とデートしにやらねえんだ？ 美女の誘惑はどうした？ 美少女はどこだよ？ ぷりんぷりんのケツは？ ぽよんぽよんの乳は？ 事前に聞かされてた楽園とはエライ違いじゃねえかよ！ マジで洒落になんねーぞ！」

名取は意味不明の恨み節をぶつぶつと零しながらも、ドアの周辺を手探りで調べ、あっさりと罨を解除した。

そして、躊躇なくドアノブに手を掛けて回す。

カチャツと小さな音を立ててドアが開いた。

「……奴らの気配が遠くなってるな」

頭だけドアから出して、向こうの様子を探る名取。

今この瞬間、罨が作動したら首が切断されてしまうというのに、何という度胸だろう。

俺には絶対に真似できない。

「運よく《食堂》の方に行っちまってくれてりや助かるんだが、気配の方向から察するに、《貴賓室》か《衣装室》のどっちかに入っ
たみたいだ」

「おいおい、どうすんだよ？」

「見てみる、青いドアが開いてやがる。ってことは、奴らは《貴賓室》を先に調べてるんだな」

促されて、俺もドアの隙間から向こうの廊下を覗き見た。

それほど長くない廊下だ。途中に二つのドアがあり、奥にも三つのドアが見える。

そして、確かに青いドアが開いていた。しかも、そこから微かに男女の会話する声が聞こえてくる。

「何を目的にして奴らが《貴賓室》を調べてるのはわからないが、チャンスは今しかねえ。とっとと《衣装室》に踏み込んで着替えさせてもらおうぜ」

「おう」

俺たちは足音を忍ばせながら廊下を進み、こっそりと衣装室に踏み込んだ。

【11・古城篤也】

衣装室は、さながら服の見本市という様相を呈していた。

大小問わず、色とりどりの服がずらーと並んでいる。そこに和洋の区別はない。種類別でもない。ただ雑然と着るものが並んでいるだけ。用意した物を適当に並べておきました、という感じだ。

床に散らばっている汚い服は、たぶん新品の服に着替えたテスト生が、それまで身に着けていた物を放置したのだろう。全裸の俺にとっては、それらも宝の山である。二秒前までは、丸出しの下半身を隠せれば何でも構わなかったのだけど、このお宝を拝んでしまつては謙虚さなど吹き飛んでしまう。

思わず口笛を吹きたくなったが、隣の部屋にテスト生がいるので自重した。

「よし、とつとと着替えるか！」

とにかく、まずは何か服を着よう。そして、改めて感じの良い服を選んで着替えればいい。

そう考えて、手近な衣装に手を伸ばそうとして――
名取に止められた。

「なんだよ、なんで止めるんだよ？」

「念のため、もう一回だけ忠告しとくが、畏の確認もしないで不用意に何かを触ろうとするのは止めとけよ」

「……………」

俺は伸ばしかけていた手を引っ込めた。

それくらい理解している！　そう言い返したかったが、悲しいかな、服を目の当たりにした瞬間に全ての注意事項が俺の頭から抜け落ちて消えちまっていた。頭ではわかっていても、咄嗟の衝動が脳味噌をロックして、機能させなくしちまうらしい。

しかも、せつかくの忠告を鬱陶しく思っている自分がいたりする。
「やれやれだな」

名取はそんな俺の内心を見透かしたかのように冷笑し、床に散乱している服を踏みつけながら部屋の奥へと進んでいく。そして、スーツが並んでいる所まで行って、ネクタイをぐいっと緩めた。その行動に警戒心は皆無だった。完全なる無防備。まるで畏の存在など忘却してしまったかのように振舞っている。

「おい、あんた。言ってるそばから何やってんだよ。畏はどうした？　まず室内を調べるんじゃないのか？」

「ん？　この部屋には畏なんて仕掛けられてねえから、安心していいぜ」
「！」

自分から畏の話題を振っておいて、その答えかよ。クソっ垂れ。あいつの精神、完璧に歪んじまってるぞ。いったい、どういう幼少期を過ごしたんだ？　よっぽど酷い環境にいて、心がねじまがつちまったか？　親が躰を忘れてたのか？　それとも、元から邪悪な人間だったのか？

「おら、俺を睨んでないで、さっさと着替えろよ。隣の部屋にいるテスト生と顔を合わせると厄介だ」

「お、おう」

確かに、この格好でテスト生と相對するのは、色々な意味でマズイ。

服を選んでいる時間はないか……。

こうなりゃ、身の丈に合っていれば何でもいい。急いで服を見繕おう。

俺はぐるりと室内を見回し、自分に合いそうな服が並んでいる場所を選んで、その前まで移動した。

名取はスーツが好みらしいが、俺はゴメンだ。そんな堅苦しい格好で走り回りたくない。ネクタイを締めるなんて以ての外だろう。彼が何を考えてサラリーマンスタイルをしているのか知れないが、常識的にあり得ない。もっと機能的な服を選ぶべきである。

常道で選ぶと……上下ジャージか？　運動するには持って来いの

格好だし。でも、防御面を考慮すると、もう少し生地の厚い服を選ぶべきかもしれない。

とすると……ポケットのついた上着とジーンズの組み合わせがいしか？ 手に入れたアイテムをしまふ場所が確保できるし、運動にも支障が出ない。

こつも色々揃つてると目移りしちまうな。

さて、何を選ぶう？

俺はジャージとジーンズを見比べながら首をひねる。

すると、もう着替え終わつたらしい名取が暗灰色のスーツ姿を近づけて、舌打ちを連続させた。

「おい、にいちちゃんよ、何選んでるんだ？ 俺たちやデートで洋服を買いに来てるんじゃないやねえんだぜ。とつととパンツを穿いて、その汚ねえモノを隠せよ。早くしねえと、隣の部屋にいる奴らが来ちまうだろーが」

「わかつてる。でも、この先ずつと着る服となると、慎重に選ぶたくなるだろ？」

「あのな……どういう思考を働かせたら、そういう選択肢が発生するんだ？ 服が気に入らなきゃ、時間を置いて、また選び直しに来ればいいだろ。それに、この部屋だけでしか着替えが認められてるってわけじゃねえんだぜ。他の部屋にも着る物はあるだろうし、他のテスト生からブン取ってもいいんだ。今はとにかく何でもいいから服を着やがれ！」

鞭のような声が俺を叱りつけた。

「お、おう。そうだな」

俺は慌ててジーンズを穿こうとしたが、片足を通したところで太腿のサイズが合わないことに気付いた。

チクシヨウ！ 一回り小さいサイズかよ！

心の中で罵声を迸らせ、ジーンズを脱ぎ捨てる。

そして、ジャージを穿こうとして、すっ転んだ。

運悪く、足下にスベスベ素材のネグリジェが脱ぎ捨ててあり、そ

れに足を取られてしまったのだ。

「うわああ！」

情けない悲鳴を上げて尻もちをつく俺。

そんな無様を見て額を押さえる名取。

「……何やってんだ、にいちちゃんよ。捨て身のギャグで俺を笑かしたい気持ちはわからないでもないけど、時と場所を選んでくれよなじゃないと、温厚な俺もさすがにブチ切れるぞ」

「お、おう、悪い」

下手に急かすからドジも増す。だから、しばらく黙っててくれ。

心の中で言い返しつつ、俺は新しい衣装を引っ張り出して、素早く身に着けた。

だぼつとしたＴシャツに短パンというラフな格好だ。部屋着として最高に落ち着くファッションだが、サバイバルには不向きだろう。でも、今はこれで十分だ。

名取は床に落ちているジーンズと今、俺が来ている服を見比べて何か言いたそうな顔をした。しかし、口に出したのは、その表情とは無縁の言葉だった。

「よしよし、男前になったな。それじゃ、《掲示板》の所まで急ぐぞ。それで、響千鈴を呼び寄せるんだ」

「どこに呼び寄せるんだ？」

「おまえさんの好きな場所でもいいぜ。でも、二人が認知してる場所じゃなきゃダメだ。それくらいわかるだろ？」

「おう」

頷いておいて、俺は適当な合流場所を考える。

まず最初に挙げられるのが、千鈴が目覚めたという部屋だろう。でも、残念ながら、あの部屋に戻る道を俺は知らない。ここが一階のどの辺りかさえ見当がつかないのだ。デスマスクの寝所まで戻ることができれば、何とかなるかもしれないが……。あそこに近づく勇氣はない。だから、来た道を引き返すのはダメだ。先へ進みながら、彼女とも合流できる方法を考えなければならぬ。

「でも、そんな場所ないな……」

俺は溜め息混じりに呟いて、部屋から出ていく名取の後を追う。彼はドアのノブに手を掛けたまま、こっちを見て眉根を寄せた。

「響千鈴が向かいそうな場所とか知らねえのか？ レアアイテムの場所とか、難解なクエストが用意されている部屋の場所とか、一緒に行動してて、そういう話は出なかったのか？」

言われて、ふっと思い出した。

「そう言えば……《鐘》の話をしたっけ」

「鐘？」

「おう。この建物の天辺についてるデカイ鐘だ。俺と千鈴は、デスマスクの寝所で離れ離れになるまで、その鐘を鳴らすのを目的にして行動してたんだ」

「ほう……」

名取は驚きを表現するかのように目を見開き、ドアノブを握ったまま、何かを考えるように動きを止めた。

そして、俺を見て何か言おうとした。

だが、何も言わなかった。

彼は何を思ったのか、いきなり鋭い舌打ちを響かせると、俺の視界から消えるくらいの瞬発力でダッシュし、部屋の向かいにある《貴賓室》に通じているであろうドアの前まで移動した。

何をしようとしているのだろうか？ 隣の部屋にいる奴らとは関わり合いになりたくない、って言ってたのに。

不信任を胸に、彼の行動を見守る。

すると、彼はゆっくりとドアを開き、自分自身はドアの陰に身を隠した。

俺の位置からだ、と、並んでいる衣装が邪魔で《貴賓室》の様子は窺えない。

でも、そこから聞こえてくる声だけはしっかりと耳に届いた。

「あ！ こっちの寝室から、隣の《衣装室》に行けるみたいですよ」
はしゃぐような女の声が近づいてくる。

「待て、エリカ！」

鋭く制する男の声が響き――

こっちの部屋に飛び込んできた人影に、名取が襲いかかった。

【12・古城篤也】

衣装室に駆け込んだきたのは、見た感じが中学生くらいの、結構可愛い女だった。

遠目なのにかんりの美少女だとわかる。

その容姿でニツコリと笑って手招きでもしれくれりや、「ストライク！」と叫びながらヨダレを撒き散らして食らいついたかもしれないが、床に突っ伏してじたばたと無様にもがいている姿はあまりにも哀れで、今すぐに襲いかかりたいという衝動には駆られなかった。

「何すんですか！ 酷いですよ！」

名取に押し倒され、片腕を背中にねじ上げられて、首根っこを押さえつけられながらも、彼女は気丈に抗議の声を上げた。

かなり気の強い性格らしい。というか、ちゃんと自分の状況を理解していない。

仲間の助けが届かない場所で男に抑え込まれている状況を考えれば、無暗やたらと抵抗するのは相手を刺激するだけの愚行だと気付くはずだ。それなのに、彼女は自由な手足をバタつかせて、無意味な抵抗をしている。

度を越したバカなのか？ それとも単に、俺と同じサバイバルテストの初心者っただけか？

そんなことを思いながら目を凝らして彼女を観察する。

「おいおい、上着は着てるのに、ケツは丸出しかよ……」

思わず声に出してしまった。

あの女、パンツを穿いてない。しかも、それを本人が自覚していないようだ。足をバタバタさせたら、中身が丸見えになるだろうに……。いや、名取に押さえ込まれている現状では、パンツを穿いてないことなんか重要じゃないのか。きつと、死にたくないから、恥も外聞もなく暴れているのだろう。それはそれで、正しい人間の行

動だと言える。

これは俺の予想だが、彼女がケツ丸出しなのは、俺と同じくKナンバーだからだ。

遠目なので、この位置からだとは肝心な部分が全く拝めないが、ケツはケツである。しかも、結構な美少女のケツとくれば、股間が雄叫びを上げるのは当然のことだ。俺が名取だったら、確実にセクハラしてるところだぞ。

本当はもっと近い位置で彼女の恥部をじっくりと観賞したかったが、隣の部屋にいる彼女の仲間と名取が会話を始めたので、俺はすぐに逃げ出せるように廊下側のドアの前まで移動して、そこから彼らのやり取りに耳を傾けた。

「おっと、それ以上近づくなよ！ おまえらの大切な仲間は俺の手の中だ。変な動きを見せたら、この子の首にナイフを突き立てて、その上で盾にして逃げるぞ」

名取がお茶らけ調子の警告を発すると、彼女の仲間は三メートルくらい離れた位置で足を止めた。

どうやら仲間は二人いるらしい。

片方が片腕の色男で、もう片方はヒゲ侍（？）だ。

どっちとも普通人とは程遠い雰囲気醸し出している。特に、ヒゲ侍の方はヤバイ。戦国時代の名武将並みに人を斬ってそうな、物騒なオーラが吹き出している。さっき名取が警戒していた《ヤバイ気配を放っている奴》ってのは、あのヒゲのことだろう。俺が肌で感じるくらい危ない雰囲気なのだから、その危険度は計り知れない。下手をすると、打ち首獄門でゲームオーバーだ。

しかし、意外や意外。まさか、このサバイバルテストにおいて人質が効果を発揮するとは、ちょっと驚いた。

仲間とは言っても所詮は赤の他人。むしろライバルだ。人質に取られようが、目の前で犯されようが、斬り刻まれようが、知ったこっちゃないだろう。もし彼女が重要な戦力であつたなら、多少のマイナス要因になるだろうが、一番大切なのは自分の生還である。人

質を氣遣つて脅迫に屈するよりも、人質を見捨てて攻撃に転じるべきだ。

彼らは、そんな俺の意見とは真つ向から食い違ふ行動をする。

「わかった。これ以上は近づかない。だから、エリカの首にナイフを当てるのは止める。エリカ、大丈夫か？」

片腕の色男が従順な態度を示して、仲間を氣遣つた。

「うー……恭司さん……大丈夫だけど、大丈夫じゃないです……」

彼女はエリカという名前らしい。外国人ばいが、顔立ちは純粋な日本人のものである。

「そっちの侍の方も余計なことはするなよ」

名取はそう釘を刺しておいて、唐突に突拍子もない叫び声を上げた。

「あ？！ あんた、風守んとこの裏切り者じゃねえかよ！」

「ほう……貴様、どこかで見覚えがあると思つたら。《掃除屋》の《当り屋》ではないか。久しいな」

どうやら、二人は既知の間柄らしい。

しかし、お互いに抱き合つて再会を喜ぶような関係じゃないようだ。

「こりやまた、変な場所で会つたな」

「それはこつちの台詞だ。貴様、このような異空間で何をしておる？ オズに拉致されたと言うのではあるまいな？」

ヒゲ侍は静かな声で質問しつつ、刀の柄に手を掛ける。

名取はフンと鼻を鳴らした。

「拉致なんてされるわきゃねえだろ。自分の足でここまで入ってきたんだよ。姫城の報復にビビって、こんなクソ溜めに隠れ潜んでるあんたとは違う」

「酷い言われようだが、我も人の子ゆえ、生に対する執着はあるのだ。しかし、《当り屋》などという二つ名で呼ばれ、蔑まれている貴様よりはマシと言えよう。恥を知るものであれば、自ら腹を斬つて然るべき屈辱だ」

「けっ！ 任務に失敗して逃げ出したカスに言われたくねえんだよ」
「ふむ」

ヒゲ侍は一度、刀の柄から手を離して、ヒゲの形を整えるように摘んでひねった。

「貴様、仲間と一緒になのか？」

「当たり前だろ。俺が単独で危険地帯に送り込まれるわきやねえよ」
「そうだろうな。貴様が有するのは抜群の逃げ足だけ。相手の弱味を握って脅すだけの《当り屋》だ。このサバイバルテストに潜入するには役者不足と言えよう。それでは、《道化屋》や《拝み屋》が一緒なのか？」

「あいつらは……あんたが逃げ出した直後に死んじゃったよ。っていうか、みんな死んじまったよ。姫城市の市街戦で生き残ったのは、俺と真悟くらいさ。岳見は、その前の任務で負傷して病院送りだったから、市街戦に参加せずにすんだけどな……。ってことで、《掃除屋》自体が崩壊しちまったってわけだ。今、俺たちは姫城グループの第十三セクターに所属してる」

「そうか、あ奴らは逝ったか。もう一度、手合わせ願いたいツワモノであつたが……惜しいな」

ヒゲ侍は天井を見上げて残念そうに呟き、冥福を祈るように瞼を閉ざした。

二人の間には何かしら、大きな因縁でもあったのだろう。でも、俺にはチンプンカンプンな会話だ。

「それで貴様は、今、ここで何を成そうとしておるのだ？ 姫城の犬となってオズを滅ぼしに来たか？」

ヒゲ侍が話を戻した。

名取は美少女を押さえ込んだままの体勢で首を横に振った。

「オズは姫城にとつちや必要悪だから、完全には滅ぼさないんだそうだ。生かさず殺さず半殺し状態を保たせて、世界の敵としての役目を負わせるって話だぜ」

「むっふー！ オズを必要悪とほざくか。あの傲慢極まりない貴道

寺北斗が考えそうなことだな」

憤りを宿した声で吐き捨てるヒゲ侍。TVでも有名な、姫城グループの総裁である貴道寺北斗のことを、物凄く嫌っているようだ。

俺は、あの日本人形みたいな無機質の美貌は嫌いじゃない。むしろ好みだ。彼女が出演しているTV番組に自然とチャンネルを合わせてしまっくらいである。それは大抵の場合、お堅い国営放送なのだけだ。

「俺たちの任務は、秘密結社オズが姫城の脅威にならない程度に力を維持するようにバランスを保たせることだ。今回は、そのための潜入調査ってわけだな」

「ふむ……よくわかった」

ヒゲ侍は小さく頷くと、先ほどの警告を無視してスタスタと名取に近づき、真上から彼を見下ろした。

「貴様は貴様の任務を果たすが良い。我は我の道を行く。ゆえに、その小娘を解放して、我の前から去れ」

尊大な物言い。完全な上から目線。人質を取られてるくせに、なんとも偉そうな態度である。

それに、言うに事欠いて、人質を解放しろなどと……。そんな提案が通るわけない。

そう思ったのだけど、名取はワザとらしい溜め息を吐いただけで、アッサリと美少女から手を離れた。

「へいへい。わかりましたよ、涼貴さん」

「うむ」

「このお嬢ちゃんの命が、そんなに大事なのか？」

「……………」

「まさか、西園寺童子の娘を守り切れなかったことへの罪滅ぼしとか思ってたええよな？ 心なしか、このお嬢ちゃん、あの子に似てるし」

「……………」

「けっ、図星ってか?! 辛気臭い顔しやがってよ! まあ、あん

たの内心なんか知ったこつちやないけどな」

何なんだ、こりゃ……。どういう展開だ？

俺は目を丸くして見ていることしかできない。

エリカという美少女は、名取の魔の手から逃れるや、幼児みたいに泣きじゃくりながらヒゲ侍に駆け寄って抱きついた。片腕の色男に何か話しかけられて小さく頷き、照れ笑いを浮かべて頭を掻いている。

その様子は、俺の腹の底にドス黒いモヤモヤを発生させた。

何て言うか、あの三人が、このサバイバルテストには相応しくない仲間関係に思えたのだ。

上辺だけの仲間ではなく、心底から結びついた仲間。

そんなもの、あつてはならない世界で、それが存在している。

そして、それは、俺が千鈴と築きたかった関係でもあつた。

「けっ！ 無駄な時間を大量に消費しちゃったぜ、チクショウめ！」

名取はズボンのポケットに手をつ突っ込むと、ヒゲ侍たちに無防備な背を晒しつつ、不機嫌さを隠しもせずに俺の所まで来て、負の感情を毛穴から放出しながら小声で罵声を零した。

「おら、兄ちゃんよ、何突っ立ってんだ。おまえさんの言う《鐘》の所まで急ぐぞ。とつとと部屋を出やがれ」

「お、おう」

急かされるままに俺は衣装室を出た。

静かに閉まるドア。

片腕の色男とヒゲ侍のことは、その瞬間に俺の頭から蒸発して消えた。

しかし、なぜかエリカという美少女の姿だけは、俺の心に焼き付いていて、しっかりと残っていた。

【13・西園エリカ】

いきなり押し倒されてナイフを押しあてられた時は、もう駄目かなとか思つて自棄になつたけど、風守のお陰で無事に悪者の手から逃れることができた。もし一人で行動してたら確実にレイプされるか殺されてただろう。そう思うと、肝が冷える。無警戒の行動は良くないと身をもつて知つたし、今後は軽はずみな行動を慎もうと心から思つた。

私が解放されて後、しばらく黒澤はすんごく不機嫌で、小言を一万語くらい聞かせたいような顔をして、じーっと私を睨んでた。風守が笑つて許してくれてなかったら、ガミガミとお説教を聞かされてたと思う。きつと風守も内心では軽率な私のことを罵倒しているのかもしれない。でも、二人ともあまり怒らずに私を気遣つてくれたので嬉しかった。

とにもかくにも、傷一つなく危険から脱して目的地である《衣装室》に到着である。

早速、可愛い服を厳選して着替えちゃおう！

「じゃあ、そういうことで、二人ともちよつと待つてね」

そう声を掛けておいて、私は棚に陳列されているシャツやら、ハンガーに掛けられているドレスやら、マネキンを着飾らせているスーツやら、無造作に脱ぎ捨てられている古着やらを物色し始めた。

胸のところと股の下に穴が開いている嫌らしい水着とか、ヒモと小さな布切れを組み合わせただけのビキニとか、スケスケの全身タイツとかは論外として、ここには結構な種類の服が用意されているので、一つ一つ品定めしながら選んでいっても、かなり時間を費やしてしまうだろう。でも、選ぶのは楽しい。つつい時間を忘れてしまいそうだ。

「エリカ、何でもいいから早く着替えろ。一分一秒の時間の浪費が命取りになるぞ」

「はいはい、わかってまーす」

返事をしておいて目の前のマネキンに手を伸ばす。

どこかの学校の学生服っぽいベージュ色のブレザーとチエックのスカートという組み合わせが私の目を引いたのだ。なかなか可愛いデザイン。こんな学生服なら楽しい学校生活が営めそうである。でも、ここは学校じゃないし、楽しい生活も保障されない地獄だ。丈の短いスカートなんて選ぶのは愚の骨頂だろう。ここは運動に適したズボン系を選択するべきである。そうすれば、貞操を守ることにもなつて、一石二鳥だろうから。

「えつと……デニムのスリムパンツとかは置いてないのかな……」
ぐるーっと室内を回って目当ての品を探したのだけど、残念ながらどこにも見当たらなかった。

一応、デニム地のパンツはあったが、笑えないくらい穴だらけでエロさを排除どころか逆にエロさ倍増の効果が抜群な感じに仕上がっているので、さすがに手に取れなかったのだ。

私はあれこれと服を選びつつ、さっきの悪者と風守の会話を聞いていて思ったことを質問として投げかけた。

「さっきの男の人と風守さんて知り合いなんですか？」

「うむ、既知の間柄だ。我がオズの幽囚となる以前に、何度か顔を合わせている」

「怖い人ですか？」

「小娘にとつては怖い存在なのだろうが、我にとつては愚かしい未熟者にすぎぬ。所詮は鬼の威を借るネズミだ」

「もしかして仲良し？」

「断じて仲良くはない。あ奴は裏社会に巣食う犯罪者集団の末席で悪鬼のおこぼれを食らう餓鬼だ。その集団と姫城一族が手を組んで巨悪と闘うことになったゆえ、我と顔を合わせることとなったのだ」

風守は嫌そうに否定した。そして、むふーっと鼻から息を吹く。

「本家当主からの命令がなければ、我はあのような餓鬼などと手を携えたりはしなかった」

「ふーん……。そんなに嫌いな奴なら、さっき倒しちゃえばよかったのに」

押し倒されてナイフで脅された恨みがあるので、彼が殺されちゃっても私は全然おっけーだったのだ。

「ふむ、そうも行かぬ。あ奴を斬れば、必然的に我は死んだも同然だ」

「え？ それ、どういう意味？」

「あ奴は姫城本家の現当主と旧知の仲なのだ」

「へえ……」

姫城一族なんて雲の上の存在だから、あまりピンと来ない。

でも、私を押し倒した男がすごい権力者とお友達だったことはわかった。

「あの人、風守さんのこと、裏切り者って言っていましたよね？」

「裏切りという表現は正しくない。ただ……」

何か答えようとして風守は苦々しい笑みで表情を彩った。

「小娘よ、無駄話に精を出さず、さっさと服を見繕え」

「はい」

きつと答えたくないのだろう。誰にだって聞かれたくないことの
一つや二つある。

だから、私は服選びに専念することにした。

することにしたのだけど……。

「むむむー」

これだけ服が用意されているのに、七割近くの品はサイズが合わず、二割はサバイバルテストに不向きであり、残りの一割は論外という使えなさ。

何のための衣装室なのやら。

「小娘よ、とにかく尻を隠すべきではないのか？ もしこの部屋に他のテスト生が多数乱入してきた場合、結局そのままの格好で逃げ出すはめになるぞ」

「あ、そうですね。わかりました」

風守の忠告を受け、私はまずパンツを探すことにした。

だが、おかしなことに、この部屋にはパンツはおるかブラ一枚、下着と名のつく物が置いてなかった。ストッキングやら網タイツは目立つところに展示されているというのに、肝心の下着がない。これって、どういうこと？ スカートの下はノーパンで過ごさせてこと？ エロエロな主催者の陰謀？ それとも、下着だけ全部持ち逃げされたとか？

もうこうなったら男物のパンツでもいいや、と割り切って探したのだけど、トランクスもボクサーパンツもブリーフも何もない。

「んー……これは困っちゃったぞ……」

途方に暮れながら、ふっと一体のマネキンに目をやる。

「！」

そこには、パレオ付きのビキニ水着が奇跡的に残されていた。

目標捕捉で全力ゲット！

私は飛び付くようにそれを手に取って品物の状態を確認した。

ブラのサイズは全く合わないけれど、それについては問題ない。

必要なのはパンツであって、ブラじゃないのだ。パレオも不必要。

股間部分の面積の少なさが若干の不安を覚えさせるが、断然、今よりはマシである。無駄毛処理もしなくていい。しかもスカートを穿いてしまえば幾らでも誤魔化しは効くのだから。

とすると、もう選ぶのは簡単だ。

私はズボン系を諦め、これ見よがしに用意されているブレザーの制服を手にとった。そして、男性二人に声を掛けた。

「サクツと着替えてくるので、もう少しだけ待っていてくださいね」

着替えを持って試着室つばい個室に入ろうとすると、風守がそれに待ったを掛けた。

「小娘よ、そこには入らない方が身のためだぞ。どのような罠が仕掛けてあるとも限らないゆえ」

「あー……そうですね。そうですね」

でも、彼らの前で裸になるのは、今更とは言え、相当に恥ずかし

い。

「えっと……着替えるから、二人ともちよつとだけ向こうを向いてください」

「よかるう。女子の着替えを覗くのは切腹必然の蛮行ゆえ、我らは見ていないフリをしておこう」

「ありがと！ んじゃ、サクッと着替えちゃいますね」

私は試着室の姿見の前に立って、服を着替え始めた。

黒澤から借りていた白の学生服を脱いで全裸になり、ビキニの水着に足を通す。

そこでチラッと二人の方に注意を向けてみると……。

「見ていないフリということは、覗き見ていることになってしまいますよ、風守さん」

「うむ、覗かないのは建て前だ。我とて男子ゆえ、久しく美少女の裸身を愛でてみたい」

「……切腹前提の覗きですか」

「それも建て前だ」

「……………」

風守と黒澤が向こうの方でコソコソと何か良からぬ会話を交わしている。だけど、まあ、聞こえていないことにしておいてあげよう。あれくらい遠くからなら、着替えてるのを見られても恥ずかしくない。黒澤にはスッポンポンで寝てるのを見られちゃってるわけだし。私はちゃっちゃと着替えを済ませ、現役女子中学生の正しい姿になった。

「うむうむ、なかなか似合っておるぞ。小さい頃の義妹にそっくりだ」

風守は目を細めて誉めてくれた。

「照れるなあ」

私は黒澤にも感想を求めた。

だが、彼は一度私の全身を上から下まで見ると、何も言わずに私の手から白の学生服を取り上げて腕を通した。

「目的を果たしたのだ、先を急ごう。まずは《食堂》だ」
そう言って貴賓室の方へと行ってしまふ。

私の服装になんて興味ない、という態度にちよこつとムカつて来た。

「気にするな、小娘よ」

「う、うん……」

風守は優しい。

でも……。

服を返してしまったせいで、黒澤との繋がりが薄く儚いものになってしまったような気がして、私は少し不安になった。

第四章 食堂は天国、屋上は地獄 【1・西園エリカ】

私たちは、わざわざ貴賓室に戻ってから通路に出た。黒澤が何も言わないので本当の理由はわからないが、たぶん貴賓室のドアから衣装室ドアにかけて、通路に危険な罠が仕掛けてあると見破ったのだと思う。私の目だと単なる通路でも、彼の目から見ると通ってはいけない危険地帯だと映ったのだろう。でなきゃ、衣装室のドアから出てる。どう考えても、そっちの方が早いし。

通路に出て左へと進み、その突き当たりにある向い合せのドアの前まで行くと、さっきと同様に賑やかな話し声が聞こえてきた。《食堂》が目と鼻の先で通じているようである。声が聞こえる方向から察するに、左のドアが《食堂》に通じているようだ。

しかし、黒澤は右のドアノブに手を掛けた。

声のする方を避けるらしい。

私は彼の後について右のドアから出つつも、その意図を聞いてみた。

「左のドアから声が聞こえてくるのに、なんで右に行くんですか？ 食堂は左のドアから行くんじゃないんですか？ わざわざ遠回りするのは時間の無駄のような気がしますよ」

「左は罠だ。ドアを開いた瞬間、罠に飲まれて即死する」

こつちを振り向きもせず、黒澤はぼそつと呟くように答えた。

罠だから、という返答であることは予想できていたので、私は四割の演技を驚きに乗せて声を上げてみせた。

「え?! マジで?」

「迂闊なテスト生が死ぬのを見て確認したわけではないから断言はできないが……常識的に考えてみる。この建造物は基本的に石材とコンクリートによって成っている。当然、部屋と部屋を隔てる壁も厚く、防音効果も高いはずだ。このドアの向こうが《食堂》であれば、客の声が聞こえてきても不思議ではないが、食堂はもう少し先

なのだ。それなのに食堂内の会話が聞こえてくるとなると、畏の可能性が非常に高い」

彼は急に素っ気なくなつた態度を改めて、ゆっくりとした口調で丁寧に説明してくれた。

ちよつと嬉しくなつて、更に突っ込んでみた。

「食堂の裏口かもしれないですよ」

「そうかもしれないが、死の危険を冒して確かめるほど俺は無謀になれない」

「そうですね。死んじゃつたらご飯もお風呂もトイレも意味ないです。急ぐ人はむしろ道草を食べて時間を無駄遣いした方がお得ですよ、というコトワザもあるくらいですもんね」

「それを言うなら、急がばまわれ、だ……」

黒澤はじろつと私を睨んで訂正しておいて、諦め顔でふうつと小さく溜め息を吐いた。

「本当なら空腹が限界に達するまで『食堂』は利用したくなかつたのだが……」

おやおや、黒澤さん、その目は何ですか？ すんごい嫌味な視線が心に痛いですよ。食堂が遠藤教授の言っていた通りの場所なら、ご飯をタダで食べることができて、お風呂もトイレも使いたい放題の楽園なのだ。心置きなくリラックスできて、しかも心もお腹も満たされる。そこへ行きたくない、みたいな感じに見えるのは私の目の錯覚？ それとも彼は、食堂に良くない思い出でもあつて、できれば近づきたくないとか？

そういう不満と疑問をぐつと飲み込んで、空腹のデメリットを訴えてみる。

「お腹が空いたら戦争反対、っていうコトワザがあるくらいですよ。サバイバルテストを頑張るためにも、ご飯を食べなきゃ。満腹は戦争の始まりです」

「それを言うなら、腹が減つては戦は出来ぬ、だ。それに、満腹になつて好戦的になられては困る」

「好戦的っていうか、満腹になると眠くなっちゃいますよね」

「……食堂へ行くとマイナス要素ばかり増える気がするのは俺の考え違いか？」

黒澤は眉間に指を当てて深刻そうに呟いた。

不思議と落ち込んでいる風に見える。

「恭司さんは悪く考えすぎですよ」

私は伸び上がって顔を近づけて、元気づけるようと意識して陽気な声を掛けた。

「おまえが樂觀的すぎるんだ」

おでこをペチツと叩かれた。でも、彼に怒っている様子はない。ちよつと苦笑したようだ。

「俺としては生還を第一に考えたいのだが……」

「そりゃ、私も生還を目指すのが一番だと思いますよ。でも、やっぱ、ご飯は食べたいし、お風呂にも入りたいです。そうすれば、気分が上昇気流に乗って、アイテム探しも調子づいちゃうと思ったり思わなかったり」

「……エリ力を調子づかせることに多少の不安を覚えるが、まあいい、とにかく行動あるのみだ。《食堂》へ急ごう」

「れつつらごー！」

私が拳を突き上げて号令を掛けると、二つの苦笑が同時に上がった。

畏じゃない方のドアを出ると、石畳みのＬ字通路になっていて、突き当たりに鉄製のドアがあった。

「このドアの向こうに《食堂》がある。当然、俺たち以外にもテスト生がいるだろう。それを踏まえて行動するように。いいな、エリカ？」

黒澤は重々しい口調で前置きをした。

そんなこと、言われなくてもちゃんとかってますよー、と言いつ返したかったけど、食堂に入ったら思わずはしゃいでしまいそう

な自分を自覚している。こうして彼に釘を刺されていても、美味しい料理を前にしたらバンザイしながら歓声を上げてしまう自信が满满的なのだ。でも、ここで自分の弱さをアピールしても彼を困惑させるだけだから、神妙な顔をして頷いておいた。

「風守さんも、食堂内だけでは刀は抜かないでください」

「うむ、わかっておる」

風守は愛刀の柄に手を掛けてニヤリと笑った。黒澤にではなく、私に向かって。

どういう意味の笑みだろう？ 私を守るためなら食堂であろうと刀を抜く用意がある、っていう意味だったら嬉しいんだけど……。きつと違う意味だろう。

黒澤が鉄製のドアを開いた。

ギギギツという耳障りな音が大きく反響する。

そして、私たちの前に少し広めのホールが姿を現した。

「わあっ、ここ、広いですねー！」

組織の人間に誘拐されてから狭い場所に押し込められていた私には、目の前に現れた空間がとても広く感じられて、思わず感嘆の声を発してしまった。

先にドアをくぐった黒澤が警告するように、鋭い視線を向けてきたけど、出してしまった声は戻せない。

私は拝むマネをして、声を出さずに「ごめんなさい」と口を動かした。

「まったく……」

彼は冷たい目で何か言おうと口を開きかけ――

ハッとしたような表情を作って、背後を見た。

後ろに嫌な気配を感じたらしい。

私は黒澤の背中から伸びあがるようにして、彼が警戒する対象を覗き見る。

そこには、ニット帽を目深にかぶった痩身の男が楽しげな笑みを浮かべて立っていた。

【2・西園エリカ】

大きな柱にもたれかかっていたニット帽の男がゆらりと身を揺らしてその場を離れ、真っ直ぐにこっちへ歩いてきた。

それを警戒するように風守が私の前に進み出て刀に手を掛けたが、黒澤が無言で彼を制してニット帽の男と向かい合った。

ニット帽の男は肩にかけていた大きめのバッグを降ろし、片手をポケットに差し込んでから、ちよつと馴れ馴れしい口調で黒澤に話しかけた。

「初日に食堂を訪れるとは珍しいな」

優しい感じの声だ。でも、不思議と怒りを誘う口調である。

どうやら二人は顔見知りらしいが、仲良しってわけでもなさそうだ。彼を睨む黒澤の顔は怖いくらいマイナスの感情が込められている。

「スペルビア……おまえが食堂内にいないのも珍しいと思うが」

黒澤は苦い口調で呟き、唇を噛んだ。

スペルビアっていうのが、あのひよろひよろした人の名前のようにだ。

「ふふ、俺とて出遅れることはあるさ。だが、おまえさんのようにお友達を引き連れて呑気に食事しに来たんじゃないのはわかるだろう？」

「既に生還条件をクリアしたのか……」

「ああ」

スペルビアはニッコリと無邪気な笑みを浮かべて肯定した。

事もなげな感じだけど、まだスタートしたばかりのサバイバルテストで生還条件を満たしているのだから、相当な実力者と言えるだろう。いったい何ナンバーなのだろうか。少なくとも、Kナンバーではあり得ない。っていうか、Kナンバーだと困る。

そんな私の思考を読んだのか、彼は笑みを刻んだ童顔をこっちに

向けて、ポケットに差し込んでいた手を出した。

その手の平の上には、小さな《ガラス製の鈴》が乗っていた。

「これが俺の生還条件さ」

「綺麗な鈴ですね」

思わず感想を漏らすと、彼は目を細めて笑みを深めた。

「俺にとってアイテムの醜美に意味はない。いや、俺だけではなく、テスト生全員に言えることだろう」

「そ、そうですね」

「アイテムの外見に意識が行っている間は、テスト生として心が定まっていないことを意味する」

そう言って彼は黒澤へと視線を向けた。

「この女、Kナンバーだな」

「ああ」

黒澤は短く答えただけで、それ以上、会話をしようとしなない。

私たちの間に生じる気まずい沈黙。

うつん、気まずいと感じてるのは私だけで、彼らは別に何も感じていないのかもしれない。

それを打破するべく、私の方から質問を切り出した。

「スペルビアさんは何ナンバーなんですか？」

「Jだ」

これまた短く答え、そして黒澤を見てニンマリと笑う。

「良くも悪くも、響さんと同じJナンバーなのさ」

「……………」

響さんて誰だろう？ 二人の共通した知人なのは確かだけど、仲良しグループを結成しているわけじゃなさそうだ。黒澤は苦々しい顔をしている。響って人がスペルビアと同じナンバーだと困ることもあるのだろうか？

「この鈴が何個用意されているのかは不明だが、俺が一つ手に入れている現状では、彼女に安穩たる未来はない。より困難で難解なクエストを解く必要が生じるだろうな」

彼女ってことは、響って人は女性らしい。

もしかして、二人の共通の思い人だったり？

そんな疑問が湧いた。でも、それを聞きたい衝動をぐっと抑えて、アイテムに関する質問をする。

「その鈴、ゲットするの大変でしたか？」

「ん？ 何か？ それ相応の難儀を背負ったが……まあ、俺にとつては戦場で人殺しをするくらい造作もない作業だったな」

「戦場で人殺しって……」

比喻として間違ってるような気がする。

「戦場という表現に不満があるのであれば、野で草を掴み取る程度と訂正しておこう」

「楽勝ってことですか？」

「野を発見できた時点で勝利は約束されたようなもの」

「……意味わかんないし」

「おまえが馬鹿なだけさ」

「あー……」

直球で馬鹿呼ばわりされました。この人、黒澤より口が悪いです。「生物であれ鉱物であれ汚物であれ、生還条件として提示されたモノであれば、俺は三時間以内に発見して手に入れる。それだけさ」スperlビアは事もなげに言い切った。

目覚めてから、たった三時間でクリアする才能の持ち主……。こんな人がKナンバーだったら死は約束されていただろうなと思い、彼がKナンバーであった当時のライバルたちに同情した。

「さて、俺はこれから食堂に入って最終トラップが稼働するのを待つが、おまえたちはどうする？ 一緒にタダ飯を貪りながら有限の時間を浪費するか？ それとも予定を変更して生還条件を満たすべく食堂に背を向けるか？」

満面の笑みに不似合いな皮肉混じりの口調。勝者の余裕ってやつだろう。

羨ましいけど、彼の持つ《ガラス製の鈴》を奪っても私の生還に

は結びつかない。

「……行くぞ、エリカ、風守さん」

黒澤はスペルビアの問いに答えず、私たちを促して食堂の入口へと向かった。

「ふふ、相変わらず馴れ合いはしないんだな」

スペルビアは無視されても怒った様子を見せず、可笑しそうに呟いて鈴をポケットにしまい、荷物を背負いなおした。そして、黒澤の背に向け、陽気な声を発した。

「黒澤、響さんは最上階を目指していたぞ」

「……余計な情報だな。だが、感謝する」

一瞬、歩みを止めて応じる黒澤。

それを受け、スペルビアの笑顔に初めて毒が混じった。

「ふふ、彼女はデスマスクを引きつけてくれる最高のエサだからな。その行動を把握しておくに越したことはないのさ。同じ」ナンバーとしては非常にありがたい存在と言えるよ」

「……………」

黒澤は何も答えずに食堂のドアに手を掛けた。

【3・西園エリカ】

私たちが食堂に入るのを手を振って見送っていたスペルビアだが、ドアが閉まる寸前、何を思ったのか小走りに駆け寄ってきた。ホルの奥の方をチラッと見て、首を傾げてからの行動なので、何か予感めいたものを察知して食堂内に逃げ込もうと思ったのかもしれない。私たちと仲良くしたいわけじゃないのは、陣取った席の位置でもわかる。私たちは店の入り口に近いテーブルを選び、彼は店の奥に位置する薄暗い席を選んだのだから。

「こちらからアプローチしない限り、奴は何もしてこない。その点は安心していい。性格の悪さはテスト生の中でもトップレベルだが、攻撃性はゼロに等しい。生還条件をクリアしているのであれば、尚更だ」

黒澤はスペルビアというテスト生の安全性について断言してみせた。

彼について色々知っているようだ。

「でも、あの人、ランクの昇格条件を満たしてるわけじゃないですよ。その条件次第では闘いになるかもしれないじゃないですか」

私が軽い突っ込みを入れると、黒澤は僅かに口の端を歪め、横目で彼を見て肩をすくめた。

「奴には昇格する意思がないんだ。だから、テストに参加させられても常に生還条件だけを満たして、ああして食堂で時間を潰している」

「え？ 昇格する気がないって……どうして？ 昇格しないと、ずっとテスト生のまま監禁生活なんですよ？」

驚きのあまり、ちよつと声を高めてしまった。

黒澤が鋭い眼光で咎めてくる。でも、質問には答えてくれた。

「詳しい理由は知らないが、人伝えに聞いた話だと、奴は何者かに命を狙われているらしい。およそ、外の世界で相当の悪事を働いて

いたのだろうな。だから、Gナンバーから組織の幹部へと昇格して自由を得ようとはしないのだろう。だが……それは奴の個人的な問題だ。俺たちの知ったことではない」

そりゃそうだけど、そういう事情を聞かされたら、彼に対する興味が俄然増すつてもんである。

疑問を直接ぶつけて、胸の内に生じたモヤモヤを解消したい。でも、怒鳴られたり暴力を振るわれたら嫌だから黒澤に疑問を投げかけてみた。

「でも、それじゃあ、さつさと生還しちゃった方が無難なんじゃないですか？　いくら食堂が安全地帯だと言っても、絶対とは言い切れないんですよ？」

「ああ。過去に食堂が戦場と化した例がある」

「そのことを知らないとか？」

「いや、それはない。《女夜叉》の件はテスト生の間でも有名な話だ」

女夜叉の件……。聞いただけでゾツとする響きだ。詳しい話を聞かなくても、血塗れの薙刀を振り回している鬼女の画がやすやすと思ひ浮かぶ。戦場というくらいだから、相当の殺戮が行われたのだろう。でも、それを知っているなら、尚更、食堂に留まるべきじゃない。

「じゃあ、なんで？」

「ファイナルトラップの起動によってテスト生が右往左往する様子を見て悦に入るためだ。本人がそう言っていた」

遠藤教授から聞いた話だと、バイバルフィールドには《ファイナルトラップ》と呼ばれる大掛かりな罠が仕掛けられていて、ある条件を満たすと発動し、フィールドに致命的なダメージを与えるという。トラップの種類にもよるが、大抵の場合、罠が発動すると同時にフィールドに残されているテスト生は例外なく死んでしまうらしい。

それなのに、その罠が起動するのを待つばかりか、その後もフィ

ールドに残ってテスト生の狼狽する様を観賞するというのは……。悪趣味だが、それ以上に、どう考えても自殺行為である。愚行の極みと言うしかない。

「それ、自分が死んじゃわないですか？ 他のテスト生が逃げ惑う姿を観賞してるヒマなんてないと思う」

「あの男の逃げ足は、脱兎を凌駕する。その気になれば、五分と掛けずに生還できるのだろう」

「五分で……」

「ってことは、どうすれば（どこに行けば）生還できるのか、を彼はもう知り得ていることになる。それを聞き出せば、後の苦労は大幅に軽減されるのだろうけど、きつと彼は教えてくれないだろう。」

「事実、奴は今まで全てのファイナルトラップを体験して尚、怪我一つ負わずに生きているのだ。すなわち、それが奴の実力を示していると言える」

「あとは、のんびり待つだけの身分？」

「ああ」

「いいなあ……。でも、私だったら、すぐに生還しちゃうだろうけどね」

他人の行動を観察して楽しむ趣味などない。狂態や狼狽する姿を見ても面白いとは感じない。逆に、胸が痛くなりそうな気がする。きつと、あの人はすごく性格が歪んでいるのだろう。仲間にはしたくないテスト生だ。

「エリカ、あの男のことは考えなくていい。俺たちとは縁のないテスト生だ。おまえは自分の心配だけをしていればいい」

「はい」

黒澤の言う通りだ。私は自分の生還だけを第一に考えるべきだろう。自分の生還条件に関わるテスト生でもない限り、放っておくべきなのだ。

風守がトイレに立っている間に、店の人が注文を取りに来た。

お店を切り盛りしているのは、四十歳くらいのでっぷりとした女性だ。みんなから《ローズおばちゃん》と呼ばれているが、本名じゃないそう。彼女が一人で食堂を維持しているらしい。その体型にそぐわない機敏な動きで、お客さんの注文をテキパキとこなしていく姿は、なんとも微笑ましかった。

「エリカ、おまえは何を頼む？」

「んーと……」

私はローズおばちゃんから受け取ったメニューに目を落とす。

サバイバルテストのフィールド内にある食堂だから在庫の関係もあって大したメニューはないだろうと予想していたのだけど、実際には驚くほど多種にわたる料理名がずらーと並んでいた。それこそ、和食、中華、洋食、軽いものから凝ったものまで、下手なレストランよりも豊富だったりする。

でも、重要なのは味である。禁生活で悲惨な食事を満喫させられていたので、せめて不味くない料理を食べたいのだ。まあ、ちよつとくらい不味い料理でも絶品の太鼓判を捺してしまうくらい舌が衰えちゃってるだろうけど……。

凝った料理は地雷っぽいので、私は無難にクリームパスタを注文した。勿論、デザートとして紅茶とケーキも頼むことを忘れない。黒澤はお腹が空いていたのか、イタリア風ハンバーグステーキのセットをご飯大盛りで頼んだ。

風守は卵サンドとサラダをトイレに行く前に頼んでいた。黒澤がそれを伝える。

「了解。じゃあ、しばらく待つておくれよ」

「おばちゃん！ 私、あと十分くらいで餓死しちやいそうだから、できるだけ早くお願いしますね！」

私は、きゅーきゅー鳴いているお腹を押さえながら、切実に訴えた。

「はいよ、お嬢ちゃん。美味しいのを手早く作ってあげるからね、楽しみにして待つてな」

ローズおばちゃんはにこやかな微笑み顔を上下させ、カウンターの中へ戻ろうとした。

それへ、黒澤が声を掛ける。

「今、風呂は使えるのか？」

「勿論、使えるよ」

「そうか。では、勝手に使わせてもらうぞ」

「好きにしまよ。でも、チームで独占するのはご法度だ。それだけは頭に入れときな」

そう言い残してローズおばちゃんはカウンターのの中に戻り、料理をし始めた。

ローズおばちゃんが用意してくれたオシボリと冷や水は、サバイバルテストで疲労した私の心身を優しく解きほぐす良薬になった。ちよこつと熱めのオシボリを手の上で広げ、まず顔を拭いてほーっと思を吐き、ホコリやら泥やら何やらで汚れた手を拭き清めてから、冷たい水に手を伸ばす。きゅーっとおっぱい半分くらいを一気に飲む。体内に染みわたる冷水。不思議と、疲れが緩和された気がした。

「ふう……。生き返ったよー」

「冷たい水をはぐ飲みすると腹を下すぞ。気をつけることだ」

オシボリで顔を拭きながら、黒澤が母親みたいなことを言った。

「はい」

それへ適当に頷いておいて、私は残りの水を飲み干した。

呆れ顔を作る黒澤。でも、それ以上お小言を連ねず、お店の奥を指差して私の視線を誘導した。

「エリカ、おまえが先に風呂を使え。風呂は店の奥にある扉の右手だそうだ」

「え？ 先に入っちゃっていいの？」

「いいぞ。風呂は逃げないんだ。誰が先だろうが関係ない。それに、どうせ料理はまだ来ないんだ。待ち時間を利用して風呂に入っておけば、それだけ時間を節約できる」

「そうですね。そんじゃ、お先に失礼しますねー」

「ああ」

黒澤はやりわりと微笑み、すつと目を閉ざした。

料理が来るまで仮眠でもするつもりなのだろうか？ その辺はわからない。でも、いちいち質問するのも野暮だし、お風呂が私の心をぐいぐいと引きつけるので、彼に向けてひらひらと手を振ってみせてから私は店の奥へと向かった。

お風呂は、店の奥にある扉を入れて、すぐ右にあった。

男湯と女湯の区別はなく、敷居とか衝立とかもない。ただ、引き戸に《湯》と漢字で書き殴られたプレートが貼り付けられていて、取っ手の部分に《空き》という看板が立てかけられているだけだ。きつと、ドアを開けたら中が丸見えになってしまっただろう。

でも、様式なんか関係ない。体を清めれるだけで十分である。

私は引き戸をそつと開け、看板をひっくり返して《使用中》にしておいてから、お風呂に入った。

入ると同時に、もわつと立ち上る湯気。肌をなぶる熱気。心に湧く歓喜。いったい何日ぶりの入浴だろうか……。数えようとしたりけど、すぐに諦めた。今はお風呂を十二分に楽しむべきである。

私は手早く着ている物を脱ぎ捨て、全裸になって奥へと進んだ。

お風呂の造りは至ってシンプルで、手前に狭い脱衣スペースがあり、奥には湯船があるようだ。一応、ビニールカーテンで湯船が直接見えないようにしてあるが、あまり意味があるとは思えなかった。「お風呂ーお風呂ーふふふふん」

思わず鼻唄を歌ってしまうくらいテンションが上がっていく。

だが、口ずさんだ瞬間、湯船の方から鋭い声が発せられ、私の心臓を硬化させた。

「誰だい！」

警戒心剥き出しの声が私を慌てさせる。

どうやら先客がお風呂を使っていたらしい。

よく見ると、脱衣スペースに設置してあるカゴには、私の物じゃない服が入れられているではないか。完全に浮かれていたせいで見過ごしていたようだ。でも、私に非はないと思う。出入り口に立っかけられていた看板は、『空き』になっていたのだから。

そう思いつつも、私は逃げ出した。

「わあっ！ ごめんなさい！」

一応、謝っておく。

しかし、止められた。

「待ちな！ 逃げようとしたら殺すよ」

「え？！ えっと……でも、私……」

「あんたが誰だかは知らないけどさ、間違って入ってきたフリをして、あたいの装備を根こそぎ持ち逃げされちゃ敵わないんだよ。わかるだろ？」

相手の言っていることは理解できる。テスト生の中には、そうやって上位テスト生からアイテムを盗む者もいるのだろう。安全地帯での入浴は、どんなツワモノでも気を緩めてしまっただろうから、成功する確率も高いのかもしれない。

だけど、私はそういうズルをするようなテスト生じゃない。同類として扱われるのは心外だ。

「あ、え……でも、私、そんなことしませんから」

「口だけなら何とでも言えるさ」

当然の勘繰りだった。

「動くんじゃないよ？」

「は、はい……」

言われるまでもなく私はその場に留まった。否、体が意思に反して動かなかったのだ。まるで、見えない手で両足を掴まれているような感じだ。声から察するに、相手は女性だが、その威圧感は半端じゃなかった。

すーっとビニールカーテンが引かれ、湯船が露わになった。そこにいたのは金髪の美女だった。

真っ白い肌に緑の目。艶やかな金髪がポニーテールに纏め上げられている。どう見ても日本人じゃない。そう言えば、心なしか言葉が訛っているように聞こえる。

彼女は豊満な全裸姿を惜しげもなく晒しつつ、右手をビニールカーテンに掛け、左手をぐいっと前に突き出した。その左手には、ナイフよりも少し長めの刃物が握られている。

でも、私の姿を見た途端、彼女から発せられていた殺気は綺麗サッパリ霧散した。

「……なんだい、小娘か」
拍子抜けしたような声。

「てつきり手癖の悪いクソ女が、あたいのレアアイテムを盗みに入ったのかと思っただけど、どうやら勘違いだったようだね」

「そ、そうですね！ 私、ただお風呂に入りたくて来たんです！ それなのに……。ビククリするじゃないですか！」

「どうやら誤解が解けたようだ。それに、それほど怖そうな人じゃなさそうなので、私は脅かされたことへの文句を言った。」

彼女は苦笑したようだ。

「そうみたいだね。スッポンポンで盗みを働く馬鹿はいないよね、さすがに」

「！」

私は慌てて手を伸ばし、手近にあったバスタオルで体を隠した。

「お互い女なんだから、隠す意味はないわよ」

「でも、恥ずかしいですよ」

「恥ずかしい？ 恥ずかしいの？ へえ……なるほどね……」

彼女は何が可笑しいのかクスクスと笑いながら何度か頷き、湯船から出てこつちに歩み寄ってきた。

「嬢ちゃん、あんた、Kナンバーだろ？」

「え？ うん……」

私が頷いて肯定すると、彼女は手にしていた刃物を降ろし、身を反らせて大笑いした。

「あははは、素直に答えちゃうところが、まさにKナンバーだねえ！ 初々しいことだよ！」

彼女は手を叩いて笑う。

なんか、ちよつとムツとした。

「あたいはソフィア。H0029号のソフィアだ。嬢ちゃんは？」

「K3001号の西園エリカです」

私が名乗ると、ソフィアは凍りついたように笑いを止め、カッと目を開いて私の顔をまじまじと見た。

「西園……エリカ？ ファミリーネームが西園？」

「そうですね、何か？」

「……………」

ソフィアは完全な無表情を作り、私の目を見据えたまま、ゆっくりと刃物を胸元まで持ち上げた。

刃先がくりと返り、私へと向けられる。

「あの……ソフィアさん？」

「確認するが、嬢ちゃん、あんたまさか……あの拳銃おと——」

ソフィアが何か質問したようだが、私の耳には最後まで届かなかった。

店の方から物凄い悲鳴が聞こえてきたからだ。

【4・古城篇也】

俺は今、名取という部外者と一緒に、屋上にある鐘楼を目指している。

途中、何組かのテスト生たちとすれ違ったが、一階で服をゲットしたお陰もあり、変な目で見られずに済んだ。

それに、名取の巧みな話術によって、揉め事もなくスルーすることができた。

もし俺が素っ裸だったり、単独行動だったりしたら、笑いにされるのは当然として、確実に襲われて殺されちまっていただろう。持つべきものは、優秀な仲間につきる。それもサバイバルテストと一切無関係の仲間だ。お互いが信頼し合い、同じ目的に向かって協力し合っているわけじゃないけど、仲間割れを起こす要因が極めて少ない点から考えれば、理想のパートナーと言えなくもない。アイテムをゲットした際に裏切りを心配しなくてもいい、という点だけでも最高の相棒だと言えよう。

問題は、いつまでこの関係を続けていられるか、だ。

名取は頼れる仲間であり、優秀な人間であるが、所詮は部外者である。彼は生還条件を満たさずともサバイバルテストから離脱できるのだ。それゆえ、いつ何時、俺を見捨てて立ち去ってしまうかわからない。そして、俺はそれを止めることもできないのだ。

さしたるサバイバルの実力もなく、人間としての能力も平均以下の俺が、単独でサバイバルテストから生還できる確率は五パーセントにも満たないだろう。鬼畜な上位テスト生になぶり殺しにされるか、下らない罠にかかって即死するか、何もできずに野垂れ死にするか……そんな惨めな最期を遂げるに違いないのだ。

だけど、名取が戦線から離脱した後、どうするかは未定だ。まだ何も考えていない。千鈴と離れ離れになった時は、上手い具合に名取と出会えたから何も考えずに済んだが、次も同じように新しい仲

間を見つけれられるとは限らないのだ。弱者に好意的な上位テスト生と出会える可能性などゼロに近い。むしろ、鬼畜なテスト生に出くわして、人生にサヨナラするのがオチである。

それらの不安要素を払拭するには、強力なアイテムを手に入れるしかない。

そう、誰もが俺に平伏して従属してしまうくらいの、凶悪なアイテムを……。

「おい、にいちちゃんよ。考え事をしながら歩いてると、足を滑らせて転倒死しちまうぞ」

名取の緊張感のない声が、物思いに耽っていた俺を引き戻した。

「無駄に脳味噌を働かせてないで、足下に目を光らせとけよ」

「おう、わかつてる」

俺は適当に返事をしておいて、意識のチャンネルを切り替えた。

鐘楼へ行くには、まず三階まで戻り、デスマスクの寝所に通じる螺旋階段ではなく、《大広間》を通り抜けた先の廊下の奥に位置する階段を利用する必要があるらしい。

ただ、来た道に戻るのには、すなわちデスマスクと遭遇する危険を冒すことである。それは、ちょっとした自殺行為と言えなくもない。俺たちがあの地獄部屋から脱出して、もう結構な時間が経つてるので、あの化け物がウロウロしているとは思えないが、油断は禁物だなまじ、名取が酷く挑発しているだけに、しつこく俺たちを捜し回っている可能性もあるのだ。

その危険を考慮しているためか、名取は、すれ違うテスト生たちからデスマスクに関する情報をいちいち聞き出していた。結果としては、芳しい情報は皆無に等しかったようだが……。まあ、デスマスクに遭遇して生きていられるテスト生などそうそういないだろうし、情報がないということは、奴が俺たちの行く先に立ち塞がっていないことの証明でもあるだろう。そう思えば、足取りも軽くなるっつもんだ。

そんな俺の思いを見透かしてか、名取は冗談にならないギャグを言い放った。

「それによ、もし情報を得られてても、それが《奴が鐘楼に通じる道を占拠してる》っていう最悪のものだったら、どうしようもないんだぜ。どうせ俺らは、当たって砕ける勢いで猪突猛進するんだからな」

陽気な口調で断言してるが、目の真剣さが怖い。言葉通り、デスマスクと鉢合わせする可能性が高くとも、笑いながら突撃するつもりなのだろう。その暴挙に俺も付き合わなきゃならないのだから堪らない。

わかつちゃいるが、《鐘》を鳴らすことで得られるであろうアイテムを諦めてしまえば、彼に随行する必要もない。でも、《鐘》は俺に与えられた唯一の希望だ。それを失ったら、俺は生還への道標を見失ってしまい、精神的にゲームオーバーである。だから、仕方なく彼についていくのだ。

しかし……、こいつ、よくも地図なしで歩き回れるもんだな。どういう記憶力だ？ この建物に潜入する前に、しっかりと構造を頭に叩き込んだのだろうが、それにしても迷わなすぎる。地図を取り出して確認することさえしない。まるで勝手知ったる我が家だ。俺にはマネできない。紙切れでもあればマッピングできるのに……とか思ってる自分が情けないぞ、ほんと。

そうだ！ どこかにマップとか置いてなにのか？ TVゲームとかだと、ダンジョンのマップはゲームの序盤でゲットできるってのがセオリーだろ。組織の奴ら、それを踏まえて、ちゃんと置いてあるんだろ？ あ、いや……これはサバイバルテストであって、サバイバルゲームじゃなかったっけ……。という悲しい一人ボケ一人突っ込みで落ち込んでいると、名取が急に足を止めた。

「どうしたんだ？」

様子が変なので訊いてみると、彼は廊下の突き当たりにある三階への階段を指差して、囁くように答えた。

「変な奴が階段を下りてきやがる」

「変な奴？　どんな奴だ？」

「そんなに背は高くねえようだが……気配がヤバイ」

俺の視力じゃ見えないが、名取には見えるのだろう。いや、人間が階段を下りてくる足音が聞こえているのだろうか？　それとも、不審者っぽい気配を感じ取っているのか？　俺はそれを確認しようと、意識を階段に集中する。

名取はズボンのポケットからナイフを取り出して、逆手に持った。「一気に殺しちまってもいいが……相手がどんな得物を装備してるか視認できないからな。下手に攻めて、手痛いしつぺ返しを食らいでもしたら洒落になんねえ。しかし、ここでジッとしてるってのも性に合わねえし……」

「そいつが来るのを待って、不意打ちするってのはどうだ？」

「ナイスアイデア！　って言ってやりたいが、そりゃ無理だぜ。なにせ、にいちちゃんが気配を消せないもんだから、相手にこっちの存在を知られちまってるんだよ」

「……………」

悪かったな、チクショウ。俺はごくごく普通の人間なんだぜ。そんな忍者みたいな芸当、できるわきゃねえだろ。ちつとは俺の能力に配慮した展開にもっていけや、こら、なあ、神様よ！　どう考えても、俺を惨めな気持ちにさせようとして、ヤバイ展開にもってつてるとしか思えねえぞ、クソっ垂れ！

力一杯、叫ぶ。心の中で。

しかし、残念ながら、俺の心の罵声は誰にも届かなかった。

代わりに、階段の方から小さな足音が聞こえてくる。俺の耳にも届くくらい相手が近づいてきたのだ。

俺は名取の体を盾にする位置を確保し、ちゃんと身の安全を図りながらも、どんなテスト生が姿を現すのか興味をそそられ、首を伸ばして目を凝らした。

暗がりの中、徐々に大きくなってくる足音。

次第に、その姿がハッキリとしてくる。

だが、相手の容姿が完全に確認できる前に、俺はそいつが誰だかわかってしまった。

「カエル野郎かよ……」

階段を下りてきたのは、《アイテム屋》と呼ばれている鈴元だ。あの特徴豊かなシルエットを見誤ることなどあり得ない。しかし、見た目こそ潰れたカエルだが、名取が警戒するくらいに危険な存在なのだ。前、千鈴が言っていた通り、俺なんかが太刀打ちできない優秀なテスト生なのだろう。それを改めて頭に叩き込んでおく必要がある。

俺の呟きを聞いた名取は、首を捻ってこっちを向き、眉をひそめた。

「あのカエル男、にいちやんの知り合いか？」

「いや、知り合いじゃねえよ。顔を合わせたことはあるけど、文字通り顔を合わせただけで、何か関係がある間柄じゃない。あいつは《アイテム屋》って呼ばれる変なテスト生だ」

「へえ……アイテム屋か。そりゃ面白え存在だな」

名取は可笑しそうにくくくつと喉で笑い、武器をポケットに戻して、揚々とカエル男に歩み寄った。

そして、気さくに挨拶した。

「よう、カエルさん、良いアイテムは揃ってるかい？」

「？」

不思議そうな顔をして名取を見返すカエル男。

「失礼ながら、どちら様ですかねえ？ 初対面だと思うのですが……」

「俺は知らなくても、俺の後ろに隠れてる奴は知ってんだろ？」

名取は親切にも、死角に身を潜め得ていた俺を親指で指し示して下さった。

カエル男の視線が俺に向けられる。

その黄色がかった目がランと輝いた。

「キヒヒ、これはこれは、あの時の……。確か、デスマスクの花嫁さんの新しい下僕さんでしたか？」

酷い覚え方だった。でも、あながち的外れな名称じゃない。なけなしのプライドが更に傷つく程度のものだ。

本心からすれば、不気味な危険人物とは関わり合いたくないので、カエル男がいなくなるまで身を隠していたかったが、見つかってしまつては逃げる意味がなかった。

「二度とその面を拝みたくなかつただけだな」

「おやおや、それは酷い言い種ですねえ。イヒヒヒッ。同じテスト生として、お互いを尊重し合うべきなのではないですかねえ？ それとも、敵対がお望みですか？」

「赤の他人として無視してくれよ」

俺は心からの願いを言葉に変えた。

膝を叩いて笑うカエル男。

「フヒヒヒッ！ それは出来ない相談ですねえ。貴方という存在は、もう僕の頭にしっかりと刻まれてしまっていますからねえ。死者となつてテストから除外されるまで消えることはないでしょう。キヒヒヒヒッ……そうそう、デスマスクの花嫁さんはどうしました？

一緒にやらないようですが。案の定、見捨てられてしまいましたか？」

「デスマスクの所為で離れ離れになつちまつただよ！」

俺が吐き捨てると、彼は目を丸く見開いて驚きを表現した。

「ほう……デスマスクがいよいよ本格的に動き出しましたか。これは早めに《大広間》を攻略しておかなければなりませんねえ。そうしなければ……。ウヒヒヒヒッ。貴重な情報をありがとうございます。感謝しますよ」

「感謝だけかよ。おまえはアイテム屋なんだから、お礼として何かアイテムをくれよ」

ついペラペラと喋つちまつたが、デスマスクの情報はテスト生にとってレアアイテムと同等の価値を持っているのだから、カエル男の持つアイテムと交換するべきだったのだ。そう今更ながらに気づ

く馬鹿な俺。情けなくて涙が出る。

手を差し出した俺を見て、カエル男はギリリと目を輝かせた。

「お礼ですか？ クヒヒヒッ、そうですね……。こんなものはいかがですか？」

彼が言うと同時に、俺の耳元でびゅんと風が鳴いた。

鋭いものが高速で飛んできて、俺の頬をかすめたのだ。

「何だ？！ 仲間がいやがったのか！」

名取が驚きの声を放つ。

カエル男はニヤニヤと笑った。

「さすがの僕も、デスマスクと遭遇する危険性が高いエリアでは単独行動なんてしませんよ。ちゃんとボディガードを雇っているのです。しかも、とびっきりの、ね。イヒヒヒッ」

いつの間にかカエル男の背後に真黒い影がそびえ立っていた。背丈は二メートルくらいあるだろうか。RPGに出てくるような黒魔術師みたいに頭からすっぽりと黒いローブで身を包んでいるために、どんな容姿かはわからない。ただ、その闇色の姿からは人間とは思えない邪悪な波動が放たれていて、直視すると心が犯されそうな気がした。

「安心してください。彼は僕に危険が及ばない限り、攻撃をしません」

たぶんね、と含みを持たせておいて、カエル男は不気味な声で笑う。

名取はチラッと俺の方を見て、ぎりつと奥歯を噛み鳴らし、黒い影へと視線を向けた。

「あいつに何を投げやがった？ 俺の目でも見えなかったぞ、おい」

「……………」
黒い影は答えない。ただ、形のない幻影のような姿を微妙に上下させただけだ。

次の瞬間、びゅんという音が名取を薙いだ。

鋭い何かを彼を切り裂いた？

いや、彼はブリッジの姿勢をとり、ギリギリで飛来物をかわしたようだ。切れ飛んだのはネクタイだけで、彼が怪我を負った様子はない。

「……見事ダ。ヨク避ケタ」

片言の日本語が黒い影から零れ落ちた。

一応、感情のある人間だと知れて、俺はちよつとだけホツとした。名取は半分になったネクタイを抜き取って放り捨て、怒鳴るような声で誰何した。

「てめえ、何者だ？」

「……G」

彼は短く名乗り、腰を屈めるようにして小さくお辞儀をした。

【5・古城篤也】

最初、この男はGナンバーだから《G》と名乗ったのだと思った。しかし、それは俺の勘違いだったらしい。

カエル男は気味の悪い笑顔を浮かべて、情報の捕捉と訂正を自分の想像を交えて言った。

「彼は《G男爵》と呼ばれるテスト生です。本名は捨てたそうですよ。きつと、外の世界で悪いことをしすぎて指名手配されているんでしょうねえ、あの姫城グループに。それでもなければ、名を偽る意味がありませんよ。ねえ、G男爵？」

「――」
G男爵は何か答えたようだが、あまりにも声が小さかったので俺の耳には届かなかった。

「クヒヒヒ、可笑いですねえ。秘密結社オズの虜となってテスト生に身を堕してまで逃げなければならいなんて、外にいるどんな存在が貴方をそうさせたのか……ちよつと興味が湧きます。イヒヒヒ！」

「――」
ボソボソした小声で喋るのでG男爵の声は聞こえない。日本語で喋っているのかも怪しい。

「いったい、どんな面をしているのだろうか？ フードを目深に被っているところから想像するに、結構な不細工なのではないだろうか。どれだけ外の世界で凶悪な蛮行を働いていたとしても、ここで顔を隠す意味はない。堂々と顔を晒しても、何のペナルティも課せられない。むしろ凶悪犯である自分をアピールできて、テスト生としての箔がつくように思える。いや……そう考えると、逆に、彼は美丈夫という可能性もでてくるか。軟弱な美男子だから、顔を隠して好色なテスト生とのトラブルを意図的に避けていると考えられなくもない。」

まあ、顔の醜美はどうでもいいか。

今、重要なのは、奴らと俺たちの間に険悪な空気が漂っているということである。

しかも、名取がその空気を悪化させる発言をした。

「G男爵だと？ さしずめGはゴキブリのGだろ。なあ、ゴキブリ男爵様よ？」

あまりに想定外の角度からザックリと斬り込んだ名取のセンスに、俺は思わず笑っちまうところだった。きっと、声を出して笑ったら、さっきの目に見えない武器で俺の首は体からおさらばしていただろう。G男爵の放つ怒気が、そう物語っている。

カエル男も笑い声が漏れないように、小さな手でデカイ口を押さえてやがる。

しかし、それでもG男爵は声を荒らげて怒鳴ったり、反射的な攻撃に出たりしなかった。無言のまま僅かに肩をすくめて見せただけである。

きっと、彼は日本人ではないから、ゴキブリがGという解釈が理解できなかったのだろう。英語でゴキブリは……コックローチのCか？ 俺の知識じゃわからねえ。

「おうおう、スカしたふりしてっけど、ホントはブチ切れてんだろ？ 脳味噌が茹で上がっちまうくらい怒ってるんだろ？ なあ、G様よ？ 感情ゼロの虫野郎かと思ったが、ちつとは人間ばいじゃねえか」

嫌らしい表情で嘲笑う名取。

頭の悪い中学生のような安い挑発だが、自尊心の強い奴には効果的だ。俺なら確実に暴発して殴りかかっていただろう。

でも、G男爵は全身を包む憤怒のオーラを爆発させようとはしなかった。鋼のような心を持っているのか、元々人間としての器がデカイのか、相当な我慢強さである。その精神力を少しだけ分けて欲しいものだ。

「なんだよ、これだけ馬鹿にされても、言い返しすらしねえのか…

…。けつ！　たいした器量だな、おい！　それとも、もしかして、G様よ、てめーはDMか？　罵られて恍惚としてんのか？　怒りじやなくて、歓喜に身悶えてるのか？」

「――」

DM呼ばわりされたG男爵が動いた。

いや、動いたとわかったのは、奴の姿がそこになく、名取の真ん前に移動していたからであり、その一連の動作を見切ったからではなかった。俺が捉えたのは、黒い残像と、バサバサというローブがたなびく音、そしてガギンという金属と金属が噛み合う音だけだ。

G男爵は真黒いローブから黒いタイツ状の生地に覆われた右腕を伸ばし、名取の顔面にこれまた真黒い手刀を突きつけている。

そして、その手刀の手首に名取のナイフがあてがわれていた。

瞬間移動並みの速さで間合いを詰めて攻撃したG男爵も凄いが、それを防いだ名取も凄い。

「あと少し突っ込んできてたら、てめーの手を切断してたところだぜ。優しい俺に感謝するんだな」

「……切断？　フム……切断デキルカナ？」

「ああ？！　マジで斬るぞ、こら！」

睨み合う二人。

それをカエル男が駆け寄って止めに入った。

「お二人とも、子供じみた理由で殺し合うのは止めて下さいよ。特にG男爵、貴方は僕に雇われている身でしょう。契約にない戦闘行為は慎んでもらいたいものですねえ」

「……コノ男ヲ非難スルベキダ」

G男爵は呟くように弁解し、身を引いた。そして、恥じ入るようにフードを更に深く被った。

それへ尚も名取が噛みつく。

「何言つてんだ、G様よ！　先に仕掛けてきたのはてめーだろ！」

「まあまあ、そう昂奮しなくても」

カエル男は小さい体ながら、G男爵に掴みかかる気満々の名取を

押し返そうと必死だ。

「邪魔すんじゃないよ、カエル！ 男はなあ、殴られそうになったら、その相手よりも速く殴り返さにやらねえんだよ！ それに、俺は、売られた喧嘩を超高値で買い取って、その三倍で押し売りするってのをモットーにしてんだ！」

「喧嘩なんて売られていないでしょうに……」

「こらカエル、何を見てたんだ！ あいつ、俺のネクタイを斬りやがっただろ！ だったら俺は、あいつの首をぶった斬ってやらにや気が済まん！」

「あのですね……」

呆れるカエル。

彼は俺の方を見て、この狂犬をどうにか止めてくれ、という表情を作った。

俺は、名取を冷静にさせるべく、カエル男たちと少し距離を置いて宥めにかかった。

「おい、何ムキになってんだよ。あんたらしくないじゃないか」

肩を抱くようにして、今にもG男爵に飛びかからんと目をギラつかせる名取に声を掛ける。

今まで一緒に行動してきた印象から考え、今の彼の状態は解せない。こんなに沸点が低いはずはない。ふざけ調子と見せかけて、冷静沈着に相手の弱点をつき、結果としての勝利を収める男……のはずだ。

「ネクタイ切られたくらいでカッかすんなって」

「怒ってねえよ、俺は。ブチ切れたフリをしてるだけだ」

彼の口から出たのは、意外にも冷静な声だった。

「え？」

驚きのあまり、思わず彼を解放してしまいそうになった。

名取が鋭い視線を俺に射込んで囁く。

「おっと、手を離すんじゃないえ。俺は暴れ続けるから、おまえも俺

を宥めるフリを続けるんだ。ここは俺が狂犬ちつくに噛みついて見せて、G様の目を俺に向けさせにやマズイ。おら、しっかり抱き着いとけよ」

言うが早い、彼は身を振ってもがき、俺の手を振り払おうとした。

俺は必死に押さえるフリ……ではなく、全力で押さえ込みながら、その意図を訊ねた。

「どういうことだよ？ マジで切れたんじゃないのか？」

「切れるかよ、あんな些細なことで。俺がゴキブリ男爵に突つかかっていたのは、おまえさんから奴の目を引き離すためなんだよ。奴を怒らせて俺に意識を向けさせなきゃ、にいちゃん、おまえさんは今頃あの世に旅立ってたぜ」

「マジかよ……」

「マジだ。あのG様、かなりヤベエぞ。あの力エルに敵対する可能性のあるテスト生と見なせば、容赦なく攻撃してきやがる。アイテム当たの客というスタンスをとってれば、警戒されなかっただろうが、おまえさんは客でもなく敵でもなく友好関係にもない曖昧な存在として接しただろ。だから、後々に敵として迎えることになるかもしれないなら、強力なアイテムで武装する前に殺しちまえてこった」

「最初の攻撃で殺されなかっただけマシってことか？」

「おうよ。あの時は俺の体が邪魔になつて、おまえさんを直接狙えなかったから良かったものの、もし一步でも前に出てきてたら死んでたぞ」

「おいおい……」

「俺の予想だと、あの野郎、細くて短いワイヤーみたいなもんを指弾の要領で飛ばしてやがる。俺の目にも見えねえんだ、おまえさんじゃ対処のしようがねえよ」

何をどうやって攻撃しているのかも理解できない、不可視の飛び道具が相手じゃ、俺みたいなのがどうしようもない。ただ殺され

るだけ。敵対することが死を意味する。しかも、相手側が俺を、敵になる可能性がある判断しているのだ。過大評価もいいところである。

俺なんか、放っておけば勝手に自滅すること間違いなしなのに。

「冗談じゃねえぞ、まったく……」

「冗談なら良かったんだろうが、超マジだ」

名取はニカツと笑い。暴れるのを止めて俺から離れ、肩を大きく上下させて深呼吸した。

俺もそれに倣って息を整える。

「G様が冷静になる前に、とつと逃げ出すぞ。いいな？」

「いいけどよ、あんたでも太刀打ちできないのか？」

「できねえよ。おまえさんを見捨てていいなら、どうとでもできるけどな、底いながら闘うのは無理だ」

嫌な仮定である。でも、本当なのだろう。

彼は、デスマスクと闘って殺されなかった男なのだ。口では弱気な発言をしているが、俺が足を引っ張っていないければ、勝てないまでも負けない自信があるに違いない。

「……なんで、あんたは俺を助けてくれるんだ？」

組織を調査していると言っていたが、サバイバルテストに参加することで何が調査できるのだろうか？ その点において、彼は、俺と一緒に行動しなければならぬ理由があるのだろうか……。

名取はフンと鼻を鳴らして眉間にシワを寄せた。

「俺が単独で響千鈴と接して、《身体検査したいから一緒にいてきてくれ》ってお願いして、OKって返事がもらえと思うか？」

無理に決まってる。断られるのは当然として、ボコボコに蹴られかねない……股間を。

俺が表情で答えると、彼は肩をすくめて見せた。

「首尾よく彼女を発見できても、会話にならない可能性の方が高いだろ？ 俺みたいな色男でも、このサバイバルテスト会場の中じゃ、ナンパの成功率は低くなっちゃうのさ。ってことで、響千鈴と面識

があつて、尚且つ、敵対関係にないテスト生と一緒に連れていく必要があるってわけだ」

「……そのために、危険を冒してまで、デスマスクの寝所で待ってたのか？」

「おいおい、にいやんよ、そんなわきゃねえだろ。あの地獄部屋に俺が隠れてたのは、最初に出会ったテスト生が糞ム力つく女忍者だったからだ。そいつに騙されて、地獄部屋に入っちゃったんだよ。その時はデスマスクが不在だったから、おまえさんみたく不意打ちを食わずに済んだけどな」

名取は自嘲気味に笑つて言う。

「でも、すぐにデスマスクが戻つてきちゃったから、闘つて要らぬ体力を消耗しないように、死体の下に身を隠してたんだ。半日も待ってりゃ、仲間が助けに来てくれてただろうからな」

それなのに俺と千鈴が部屋に入ってきて、その計画を台無しにした、と彼は言うのだ。千鈴の存在を身近に感じ取ったデスマスクは、彼女を見つけ出そうと躍起になる。その結果、彼女がどうなるか……。

「お手手繋いでダンスでもしてくれりゃ万々歳だが、思い余ったデスマスクが彼女を殺しちゃったら目も当てられねえ。だから、奴より先に彼女と接触して、その能力を検査する必要があるんだよ」

「何を検査しようってんだ？」

「新しい《殺人兵器》を生み出す母体になるか否か、その検査さ」
名取は自分の腹部をポンポンと叩いて、卑猥な笑みを浮かべた。

【6・古城篇也】

まあ、実際のところ、名取が何を目的にしていようと、千鈴が何をされようと、俺には無関係だ。

俺は《鐘》を鳴らさなきゃならないし、名取は千鈴と会わなきゃならない。そして、千鈴はこの建物の屋上にある鐘楼を目指している可能性が高い。それだけのことだ。

その後は正直言つて、どうなるのかわからない。千鈴と再度コンビを組めればいいが、どれだけ検査とやらに時間を食われるか知れないので、彼女が解放されるのを待つわけにもいかない。

ハッキリ言つてしまえば、千鈴と会わないように行動しながら、名取の力を借りて《銅メダル》集めに尽力する方が、《鐘》を鳴らしに行くよりも数倍効率が良いと思う。もし鐘を鳴らすことで銅メダルを得られても、その後のプランが白紙では生還など夢のまた夢なのだ。メダル一枚握りしめて途方に暮れる自分が容易に想像できる。

俺に必要なのは、希望と道標であつて、目先の結果じゃない。

「そろそろ落ち着かれましたかねえ？」

カエル男の嫌味つたらしい声が廊下に響く。

名取は小さく舌打ちして、俺に目で合図をしてから奴らの方を見た。

「おうよ。スツカリ冷静だぜ、クソつ垂れ。これでてめーらが消えてくれてりゃ、幸福のあまり昇天してたところだぞ」

「フヒヒヒ、酷いことを仰る……。口の悪さは元々の性格なんですねえ」

「生まれ育つた環境のお陰で、こんなになつちまつたぜ」

どういう環境で育つたら、名取みたいな人間が出来上がるのだろう？ アフリカの内戦地域とかか？ よほど治安の悪い国で育つたのだろうか……。まさか日本生まれ日本育ちじゃないよな？

そんな想像をする俺を無視して会話は進んでいく。

「んで、何だ？ まだ俺らに何か用があるのか？」

「おおありですよ」

「てめーは大アリじゃなくてカエルだろ」

名取がつまらないギャグを吐いた。学校の教室で言ったら、その瞬間に友達全員を失いそうなレベルだ。

カエル男は幾分、気分を害したようだが、感情に任せてG男爵をけしかけたりせず、不気味な半笑いを浮かべて意図を紡いだ。

「……そういう意味でなく、僕は貴方たちに用があると言っているのですよ」

「何の用だ？ 俺らに糞アイテムを高値で売りつけようっていうのか？」

「クヒヒヒ、それも考えましたよ。でも、今は商売をしている場合ではないのです。なにせ、デスマスクの話を聞いてしまいましたからねえ。ウヒヒ！ こんな通路の真ん中で棒立ちになっていては、危険ですよ。格好的ですよ。今、アレが現れたら、全員ミンチにされてしまいます。そうでしょう？」

「……俺とG様が組めば、デスマスクにも対抗できるだろ」

それは確かに対抗できるだろう。名取が牽制し、G男爵が攻撃すれば、あのデスマスクを倒せるかもしれない。

そんな幻想をカエル男は一言で吹き飛ばした。

「無理ですよ」

「なぜ断言できる？ G様レベルなら、隙さえ突けば、アレの首を落とすのも難しくねえだろ」

「無理ですよ、たとえG男爵であってもね。ウヒヒヒ……。デスマスクは《デスマスク》によって視界を限定されています。それによって攻撃力、防御力とも抑えられているのです。あの鬼のマスクは、アレの封印みたいな物なのです」

よくも知っているものである。さすがは情報もアイテムとして扱う《アイテム屋》というところか。

だが、もつとスゴイのは、その情報を、身をもつて体験したテスト生であろう。

「視界を限定か……。確かに、あのマスクじゃ視界は最低限だろう……。ちくしょうめ、視界が解放された時に、どれくらい奴が動けるのか、考えたくないな」

名取はデスマスクとの戦闘を思い返して、マスクなしの奴との戦闘をシュミレートしてみたのか、頭を抱えてくしゃくしゃと髪を掻き毟った。

「ウヒヒ、おわかりいただけましたか？　そこで相談なのですが」
「なんだよ」

「僕たちと行動を共にしてくれませんかねえ？」

「……………」

名取は完全に表情を消して俺の方を見た。その顔は俺の意見を聞くこととするものではなく、勝手に話を進めるけど構わないだろうな、という確認のものだった。

俺に否やはない。

俺の頭じゃ、話の展開が急すぎて対応できないし、的確な判断もできない。G男爵やデスマスクに殺されないようにするためには、彼に全てを一任するしかないだろう。

俺が頷いて見せると、名取はニヤリと笑った。

「行動を共にするって言うても、お手手繋いで生還を目指すってわけじゃねえんだろ？」

「ウヒヒヒ、それは当然ですよ。僕たちが手を繋ぐのは《大広間》を攻略するまでです。その先はお互い自由に行動するということ……構わないでしょう？　イヒヒヒッ」

カエル男がチラッと俺を見た。

生理的にム力つく奴だが……。

俺とカエル男が敵対する意味はない。何の因縁もないし、闘う動機がこれっぽっちもない。皮肉や嫌味を言い合っても、それが引き金となって殴り合いにはならないし、殺し合いになることなどあり

得ない。俺とカエルは、サバイバルテストを攻略するにおいて、お互いに足を引っ張る意味などないのだ。

「ウヒヒヒ、目的が同じなら、行動を共にするのがセオリーでしょうねえ。そう思いませんか？」

「思わねえよ」

俺は口の中で否定した。

それが聞こえたのか、カエル男は不気味な笑い声を響かせ、ちょこちょこと近づいてきて、馴れ馴れしい感じで俺の肩をポンと叩いた。

「上の《大広間》には大掛かりな罠が仕掛けられています。それを解除するには、暗号を解かなければならないのですが、この僕の知能では無理でした。きっと貴方でも無理でしょう。しかし、四人の知恵が合わされば、解くことができるかもしれません」

なるほど、奴らも上の階を目指してゐるってわけか。そして、《大広間》を抜けた先に、デスマスクの寝所に通じていない階段がある。すなわち、それが《鐘》にも通じているってことだ。

見事に利害が一致する。

カエルとゴキブリのコンビと手を組むのは、悪い案じゃないのかもしれない。

だが……。

「G様よ、ためーは絶対に仲間割れを起こさないと誓え。そうじゃなきゃ、話はなしだ」

名取が俺の不安を見事にくみ取って、釘を刺しておいてくれた。

カエル男が、G男爵へと目を向ける。

G男爵は真黒い置物のように直立不動で、ぴくりとも動かず、しかしフードの中でボソボソと答えた。

「イイダロウ、約束シヨウ」

あっさり承諾したので驚いた。

名取は警戒心を剥き出しにした表情を改め、いつもの陽気を取り

戻した。

「そんじゃ、今から俺らは仲良しこよしってこった」

「話が上手く纏まってホッとしていますよ、キヒヒヒ」

カエル男は自分の顔面と同じくらい大きなハンカチを取り出して、出てもない汗を拭きながら嫌らしく笑った。

それを冷たい目で見ている名取。

「んで、カエル、おまえは何て名前だ？　いつまでもカエル呼ばわりじゃ嫌だろ？　名乗れよ」

「僕は、L4640号の鈴元平次という者です。主に情報とアイテムを売買して、他のテスト生の生還に貢献しているんですよ。よろしく記憶しておいてくださいね。ウヒヒヒヒ」

「俺はSSS5000号（偽）の名取つてもんだ。どうせ明日には消えちまってるから、俺のことは覚えなくていい」

「ほほう……貴方は部外者なのですね？」

部外者と知ったカエル男の目が、八虫類のようにギラリとかぎろいだ。俺が昆虫なら、間違いなく失神してただろう。それくらい強烈な眼光だった。

それを平然と受け止める名取。

「その辺は想像にお任せするぜ。それで、G様、てめーは？」

「――」

G男爵はボソボソと小声で何かを言い、ばさつとローブを広げた。中身は真黒なスーツ。同色のシャツ。同じくネクタイ。色が黒じやないのは、彼の首から上だけだ。

でも、フードが邪魔をしていて、どんな容姿なのかわからない。なんとも、じれったい奴だ。そのフードを引っぺがして面を拝んでやりたいぞ、マジで。

そんな俺の思いは半瞬として形にならなかった。G男爵の広げたローブから黒い系のようなものが無数に伸び、名取へと襲いかかったのだ。

「な?!」

名取は驚きながらも、瞬時に身を反らせて数本の黒糸ををかわし、更に伸びてくる無数の糸を反復横跳びの要領で避け、大きく後退して相手との間合いをとった。

とんでもなくアクロバティックな回避行動である。どういう身体能力をしているのやら。俺だったら、ブリッジした途端に腰を痛めて、その上で不可視の攻撃を食らって体をスタスタに切り刻まれていただろう。

っていうか、G男爵はどうやって黒い糸を制御しているのだろうか？ 指で操っているようには見えないが……。

「やってくれるじゃねえか、ゴキブリ野郎！ 俺になんか恨みでもあるのか？ え？」

名取は片膝を床についた状態でキツと顔を上げ、怒声を放った。それに答えるG男爵は冷静そのものだ。

「ゴキブリデハナイ。G3931、Gダ。記憶シテオケ」

「糞ゴキブリが！ てめえをぶちのめした後で記憶してやらあ！」

「まあまあ、お二人とも、喧嘩は止めてくださいよ」

「……………」

新しい仲間が増えたと言っているのかどうか、はなはだ疑問だが、話が拗れずに済んで助かった。

名取は故意か否かは別として、引き続きG男爵の目を俺から逸らしてくれているようだ。

カエル男はNナンバーだから、放っておいても俺の邪魔にはならないだろう。

できることなら、もうちょっとだけ仲良く接してほしいが……。

高望みしちゃダメだよな、きつと。

【7・ジェシカ・ウェイン（3/5）】

廃城の正面玄関までは何の妨害も受けずに来ることができた。

Gランクを超えて組織のメンバーに入った私は、テスト生たちにとって憧れの対象であると同時に復讐の対象でもあり、鬱屈した感情をぶつけるに最も易い対象でもあるから、徒党を組んだテスト生の襲撃を覚悟していたのに、少し拍子抜けである。私という存在を認識しても、遠巻きに眺めているだけで、敵意の視線も打ちこんでこない。むしろ、テストフィールドで何をしているのだろう、という疑問の表情を浮かべていたりする。所詮は囚われの獣ということか。彼らは組織の職員としての潜在能力を十分に秘めているが、組織の恐ろしさを身に染みて理解しているので、ルールに反する行動をとったりはしないのだ。

リックやソフィアのようなベランテスト生にもなれば、組織の意図を知るべく私に接触を図ってくるのだろうが……。まあ、彼らは生還を第一と考える現実主義者なので、私と会話をして貴重な時間を無駄にするようなマネはしないだろう。もし襲いかかってくるテスト生がいるとすれば、頭の悪いKナンバーくらいである。

勿論、襲われた時の対処は万全だ。愛用のマシンピストルとナイフ五本を装備し、ショルダーバッグには予備のマガジンが六つ納められている。万が一のために無線機も用意してあるが、使う予定はない。もし使用するような状況に陥ったら、私は秘密結社オズに必要な人材のレッテルを貼られてしまうだろう。そうなったら何もかもお終いだ。ただ、最悪の場合を想定し、命を守るための最後の手段として所持しているのである。

「この扉には何の仕掛けも施されていないようですね。少し残念ですよ」

正面玄関の巨大な鉄扉の前で屈みこんで罫の有無を確認していた藤森が、穏やかな笑みを湛えて言った。その端正な顔に若干の期待

外れ感をにじませている。解除困難な罠が仕掛けられていた方が良かったとも言っのだろうか。

「……」

この男は、危険を楽しむタイプというわけではない。むしろ、逆だ。秘密結社オズの資料によると、危険の芽を摘むためには一切の手段を選ばない現実主義者である。しかも、どれだけの犠牲を払ってでも。知人隣人を皆殺しにすることさえ厭わない。彼にとって大切なのは、家族の安全だけらしい。

しかし、自分自身を対象とした危機管理ではないようだ。自分の命を危険に晒すことに関しては、さして躊躇しない。無頓着と言えるほど、簡単に死地へと向かう。それは姫城市での市街戦でも言えることだろう。多くの命が失われたあの闘いの中で、彼は数少ない生存者であり、そして唯一、その状況を楽しんでいたという。

およそ、彼にとっては、鬼や殺人兵器が入り乱れ殺し合う地獄でさえ、身の危険を感じなかったのだろう。

であれば、このサバイバルテストのフィールドを歩むくらい鼻唄混じり、遊び半分のレクリエーションに違いない。

「万が一を考慮して、レディ」は少し離れていて下さい」

「きちんと調べたのでしょうか？」

私の記憶だと、廃城の大扉に罠は仕掛けられていなかったはずである。

「ええ、それはもう微に入り細に入り。しかし、罠だけが危険因子ではありませんからね。扉を開けた瞬間、中から攻撃される可能性もあります」

「……」

確かに、その可能性はある。実際、扉の向こうに人間の気配がある。しかも複数人。扉を開けたのが私と知れば、その中の誰かが攻撃を仕掛けてくるかもしれない。

だが、その程度の危険など、過去のテストにおいて何度も切り抜けてきた。多人数が相手だろうと、打ち破る自信はある。藤森の助

けは不必要だ。

……と思ったが、私は彼の指示に従って、一步下がった。
「わかったわ」

なにも、私がムキになって危険と対峙する意味はない。彼が率先して危険管理してくれると言っただから、その自己犠牲の姿勢に感謝して私は楽をするべきである。

「それでは開けますよ」

藤森は危機感のない穏やかな声で言い、鉄の大扉を片手で押し開けた。

ギギギツという鉄同士が擦り合わさる不快音が響き渡る。

ここから先は気を引き締めて進まねばならない。何しろ、《食堂》を除く廃城の全てがデスマスクの行動範囲なのだ。彼との遭遇は、死を意味する。それがたとえ私であっても、だ。既に彼は十名を超える組織のエージェントを殺害しているのだから。

思った通り、エントランスホールには数名のテスト生がたむろしていた。

その全員がチームを組んでいるわけではないだろうが、こつちを見る彼らの目は険しい。組織の人間が何をしにテストフィールドに入ってきたんだ……という疑問よりも、監禁生活での不自由やサバイバルテストにおける死の恐怖から生じた怒りが、瞬間的に彼らを支配しているようだ。その視線は私に集中しており、藤森は完全に無視されている。

負の感情が私への殺意に変じているのだろう。

それは正しい感情だ。

しかし、彼らは何の行動も起こさず、遠巻きにこつちを見ているだけだった。

そんな視線など気にする様子もなく、藤森はエントランスホールの中央まで進み、周囲をぐるりと見回してから、テスト生たちに声を掛けた。

「少し聞きたいことがあるので、質問しても構いませんか？」

殺気立っているテスト生を相手に、よくも微笑みながら話しかけられるものだ。この私でさえ警戒を忘れないというのに……。どんな精神構造をしているのか興味が湧く。一度、本部のラボに連れて行って、詳細なデータを取ってみたいものだ。

「なんだ、てめえは？ 俺らに用でもあるっていうのか？」

テスト生の中でも取り分け攻撃色の強そうな黒人が苛立ちを隠さずに藤森に近づき、威嚇するように顔を寄せて、拳で胸を小突いた。あの黒人、ウェイドという名のZナンバーだったはず。素行の悪さに問題はあるが、テスト生としての才能は低くなかったように思う。確か……元プロのボクサーだ。

私は記憶している情報を藤森に教えようかどうか一瞬迷った。彼がいかに殺人の天才であっても、ボクサーと接近戦をするのは無謀だろう。それに、こんな場所で揉め事を起こすのも良くない。下手をすると、近くににいるテスト生たちが騒ぎを聞いて集まってきてしまう。

しかし、藤森は笑みを絶やさず、頭一つ分ほど高い相手の顔を見て問い返した。

「用があるので声を掛けたのですよ。聞きたいことがある、と前置きしたでしょう？ 聞こえなかったのですか？」

「あ？ 何ぐちゃぐちゃ言ってたんだ？ 俺は、てめえが何者か訊いてるんだ！ レディ」と一緒にいるってことは、組織の人間か？」

ウェイドは最初から喧嘩だ。会話をする意思を感じられない。

それを察したのだろう。藤森は小さく溜め息を吐いて彼から視線を外した。

「……貴方では話になりません。誰か、日本語を正しく理解できる方で、尚且つ冷静に話し合いができる方はいませんか？」

「無視すんじゃないえ！」

ウェイドが暴発した。怒りに任せて殴りかかる。しかし、それはボクサーのパンチではなく、ただ力任せに腕を振っただけの攻撃だ

った。

そんなものが藤森に当たるはずもない。彼はひらりと蝶のように舞い、ウェイドの繰り出した拳の下をくぐり抜けるようにして攻撃を避け、同時に背後を取った。

見惚れてしまいそうなくらい綺麗な動きである。しかも、彼はいつの間にか、その手に短刀つばい武器を握っているではないか。

「なっ！ 避けただど?!」

「何を怒っているのか知りませんが、ボクの邪魔をしないでいただきたいですね」

「こ、この野郎！ ぶちのめして——」

ウェイドが右の肘打ちで牽制しつつ体を反転させ、左のフックを叩き込んだ。

いや、そうしようとした左の拳が飛んだ。

文字通り、左手首から先がロケットパンチのように切り離され、宙を飛んでいったのだ。

「その程度のスピードでボクを捉えるのは無理ですよ」

藤森は穏やかに微笑んで言い、半歩前に進み出てウェイドとの間合いを縮めた。

左拳を失ったウェイドに最早、戦意はない。ただ恐るべき敵から身を遠ざけようと後ずさる。

「てめえ……何者だ……」

「もう、それを知る意味はありません」

藤森の身体から爆発的な殺意が放たれた。

ウェイドを殺す気だ。それがわかった。

でも、止める間はなかった。

藤森は最初の一閃でウェイドの右腕を肘から斬り飛ばし、ボクサーとしての能力を殺しておいてから、延髄に凶器を突き立てた。

当然の即死。

ウェイドはその場に崩れ落ちる。

「ボクサーとしては優秀なのかもしれませんが、殺人兵器としては

話にならないレベルでしたね。この先、いかに努力しようとも、彼がテスト生として上位に立つのは無理でしょう。ここで彼を失ってもオズの不利益にはなりません」

藤森は何の感情もない目で死体を見下ろしながら、淡々と述べた。

「……………」

私に返す言葉はない。

他のテスト生たちも何も言えないでいる。

「さて、改めて尋ねたいのですが、誰か答えていただけませんか？」
藤森は凶器についた汚れをハンカチで拭き取りつつ、誰ともなしに声を掛けた。

それに応じたのは、新米サラリーマンっぽい風貌の青年だった。

「ぼ、僕が答えます」

素肌にボロ切れを巻きつけただけの格好は、彼がKナンバーであることを示している。名は……覚えていない。私が受け持っている古城篤也もそうだが、彼もあまり期待されていないテスト生の一人だろう。その顔には緊張感がにじみ出ている。

藤森は笑みを深め、彼に歩み寄った。

「ありがとう。一応、名を聞いておこうか」

「K3030号の工藤です」

記憶にない名前だ。

記憶する意味もない男だろう。

「ボクは藤森真悟。姫城グループに勤めるサラリーマンだ」

「……テスト生じゃないんですね」

「ああ、ボクは部外者だからね。テストとは無関係だよ」

「何を知りたいんですか？」

「キミは話が早くて助かる。この建物の中に《食堂》と呼ばれている場所が——」

藤森が工藤と話をしているのへ聞き耳を立てていると、エントランスホールの奥から一人の男が進み出てきて、私を睨んだ。身に着けている装備からしてKナンバーではないようだが、パツと見て名

前を思い出せないの、優秀なテスト生ではないだろう。

彼は被っていた野球帽を取って、坊主頭をガリガリと掻き毟りながら唐突に切り出した。

「レディ」さんよ、あんたに聞きたいことがある」

「何かしら？」

本当は、藤森たちが何を話しているか聞いていたかったが、話しかけてきたテスト生を無視するわけにもいかない。存在の無視は敵意をいだかせる最悪の行為だ。私のような組織の人間が取るべき態度ではない。

「わかっているとは思っけれど、テストに関する情報は一切話せないわよ。それでもいいなら言ってみなさい」

友好的な表情を見せつつ質問を促す。

すると、彼は意外なテスト生の名前を口にした。

「じゃあ、聞くが、G男爵とかいう糞野郎はいったい何者だ？」

「ああ、彼のことね……」

G男爵はフランス支部で悪名を轟かせていた要注意テスト生だ。

その実力は他のテスト生の比ではないが、協調性がなく、弱者に対する慈悲もない。勝つための手段を選ばない……のではなく、皆殺しをした結果としてのGランク入りであり、組織への恭順意思も皆無なため、昇格すらできない存在なのだ。意識改革さえできれば、優秀なエージェントになるのだけど、本人にその意志はないらしい。「あいつ、俺の仲間を一瞬でズタズタに引き裂きやがったんだ。この右腕の先と一緒にな」

彼は右腕を上げて、顔をしかめた。

その腕は肘の辺りで切断されていた。きちんと包帯が巻かれているのは、《食堂》で治療を受けたからだろう。

「G男爵に復讐しようというの？ それなら止めておきなさい」

一応の忠告を試みる。

しかし、当然のように彼は聞く耳を持っていなかった。

「止める？ 冗談じゃないぞ！」

「彼を殺すにはデスマスク並みの戦闘力が必要なのよ」

「……デスマスクが最強ってか？ んじゃ、あの化け物をおびき出して、G男爵にぶつけてやりやいいってわけだな」

彼は暗い笑みを浮かべて言った。

私は冷笑で応じる。

「どうやって？ 並みのテスト生じゃ彼に近づくことすらできないわよ」

「デスマスクの花嫁をエサにすりや簡単だろ。あの響千鈴とかいう女を手に入れさえすれば、デスマスクなんざあ、意のままに操れるだろ？ エディンさんよ？」

「……そうね。それができるなら、その通りね」

あえて私は肯定してみせた。彼の言う簡単な手法を実践してもらえば、それは結果に関わらず組織にとつての利になるだろうし、上手く歯車が噛み合えばデスマスクのレベルをもう一段階アップさせることができる。

だが……。

一つ不安要素があるとすれば、それは藤森真悟という存在だろう。万が一、彼の主目的が響千鈴とデスマスクに関係することであれば――

「聞き捨てならない人名が出てきましたね。今、貴方は響千鈴といいましたか？」

案の定、彼が話に食いついてきた。

その端正な顔を彩る穏やかな微笑み。

しかし、その目は正気を逸したかのごとくランと輝いていた。

【8・西園エリカ】

店内で騒ぎが起こったようだ。今はしんと静まりかえっているけど、さつき聞こえてきた悲鳴は本物だった。女の子が痴漢に遭ったとか、ひったくりに遭ってバッグを盗られたとか、唐突に殴られたとかいうレベルの悲鳴じゃない。いかにも変質者という顔をしたブ男が、ニヤニヤ笑いながら凶器を振り翳して、美少女をドタドタと追いかけてまわしている……そんな際に発せられるであろう悲鳴だ。もしかすると、『食堂』に頭のおかしな変質者が乱入してきて女のテスト生を襲っているのかもしれない。

ソフィアはすっぱんぼんのまま、開いたドアの隙間から店内の様子を窺っている。

「どうしたんですか？ 誰かが変質者に襲われてるんですか？」

彼女の目に見えているものを共有したくて、私はヒソヒソ声で訊いてみた。

すると、彼女は私の質問に対して何を思ったのか、プツッと吹き出して笑いそうになり、慌てて口を押さえた。そのまま目をカマボコ型にして上下に肩を揺する。

「何ですか？ どうしたんですか？ 私、変なこと言いました？」
ちよつとムカツとしたので、つつけんどんな声で訊いてみると、

彼女は涙目になりながら小声で謝罪した。

「悪い悪い、嬢ちゃんを馬鹿にして笑ったんじゃないんだ。ただ、変質者っていう言い方が可笑しくてね」

そう答えてクスクスと笑うソフィア。

「変質者じゃなくて変態ですか？」

「いいや、そういう類の奴じゃないよ。単なる変態野郎が大暴れしてるだけなら、さしたる問題はない。店内にいるテスト生の誰かにブン殴られて終了だよ。けど、今、店内にいる野郎は……」

途中で言いよどんで、彼女は目を細めた。

「複数人か……。しかも、強力な武器を装備してやがるよ。こりや、なかなか厄介だね」

どんな騒ぎが起こっているのかは窺い知れないが、彼女の言葉から想像するに、悪者が武器を持つて店内を制圧しているようだ。しかも、複数人で。上位テスト生が反撃できないような状況なのだから、私じやどうにも打開できないだろう。っていうか、店内にいる黒澤や風守たちが手をこまねいているのであれば、完全にどうしようもない。そして、何よりも今、私たちがいる場所が完全な袋小路という事実を忘れてはいけないだろう。お風呂の出入り口を塞がれたら万事休す。死神さんの引率で地獄へGOってことになってしまふ。いや、その前に、私たちは全裸なのだから、死にたくなくなるくらいこの恥辱的暴行を受ける可能性が高い。

「えっと、私たち、大丈夫なんですか？ こんな格好で隠れてて、もし見つかったらヤバイんじゃないですか？」

不安な点について訊いてみると、ソフィアは意地の悪そうな笑みを顔の下半分に湛えて、クククツと喉を鳴らした。

「ここなら問題はないよ。このバスルームは狭い出入り口が一つしかないんだ。広範囲に効果のある爆発物でも投げ込まれない限り、幾らでも対処のしようはある。その気になれば、野郎どもの注意をこつちに向けて、ワザと呼び寄せて、皆殺しにしちまってもいいんだからね」

皆殺しって……物騒ですよ、ソフィアさん。綺麗な女の人が、そういう言葉を平然と口にするのは良くないと思います。っていうか……何というか、あの風守が手をこまねいている相手に対して、その言葉を言えるということは、この人、相当な実力を持っているのだろう。Hナンバーであるなら、そんな下らない嘘は吐かないだろうし。

それなら、彼女と一緒にいさえすれば、私も安全？

そんなことを考えていると、ソフィアが店内の様子見を止めて、顔を上げた。

「嬢ちゃん、いつまでスッポンポンでいる気だい？ 奴らは店の客を威嚇することに夢中で、こっちにや気づいてないみたいだ。しばらくは安全だろうから、適当にシャワーでも浴びて、ちゃっちゃと服を着なよ。そうやって突っ立ってちゃ、無意味に時間が過ぎてくだけだよ。このサバイバルテストでは、どれだけ時間を有効に使うかが重要なんだ。それを失念する奴は死ぬ。たとえ、それがどれほど優秀なテスト生だとしてもね……」

ソフィアは僅かに表情を翳らせて言った。

過去のテストで親しい仲間、もしくは恋人を失ったのかもしれない。

「ほら、さつさとしな！」

「はい！」

私は慌てて湯船に駆け込み、シャワーでサツと全身に湯を浴びせてから、ソフィアが使っていたであろうスポンジを手にとってボディソープを塗り、全速力で体中をこすり回した。

「この状況で体を洗おうなんて思うとはねえ……。嬢ちゃんは結構、豪胆なんだね」

からかい混じりの言葉を聞き流しながら全身を隈なく洗っていく。幸いにも、私が髪を洗い終わってバスタオルで全身の水気を拭うまで、外の状況は悪化しなかったし、悪者がお風呂に入ってくることもなかった。

私がシャワーを使っている間に、ソフィアは服を身に着けていた。その格好は……ズバリ言うところ《忍者》だ。しかも、全体的に体を覆っている布が少ない。動きやすさを重視した作りと言えなくもないけれど、その姿は男の下心をくすぐること間違いなしのエロエロであり、性欲を持て余したテスト生に襲ってくださいと言わんばかりの格好に見える。腰帯を引っ張ったら服が肌蹴て、全裸に逆戻りしそうだ。まあ、一応、下着らしきものは着用しているみたいだから、角度によって中身が見えてしまう心配はない。大問題なのは、

胸元の緩さである。特盛りサイズの双丘に薄っぺらくて小さな布を被せました……という感じの忍者装束は、ちょっとした運動によってズレかねない頼りないものであり、全力疾走したら絶対に胸がばいんばいんと揺れてぶるんと布からこぼれ出てしまうこと間違いなしだろう。動きやすいけど、動くとき恥ずかしいことになる服って……。

でも、まあ、私も十数分前まではエロエロな変態スタイルでサバルフィールドをのし歩いていたわけだから、他人の格好をあーだこーだと批判することはできない。

そんな思いを胸に秘めつつ、私は声をかけた。

「ソフィアさん、忍者っぽいコスプレですね」

「コスプレじゃない。あたいはれっきとした忍者さ。いいや、女だから《くのいち》だね」

彼女はちよつと不愉快そうな表情を作って訂正した。

忍者という表現が好きじゃないらしい。

女だからクノイチっていう言葉は意味不明だったけど、私の語彙力が低いだけなのだろうから、その辺は理解したふりをして頷いておいた。

「嬢ちゃんはコスプレって言うより本業の制服だね」

私の格好をじろじろと見ながら批評するソフィア。口調がちよつと嫌らしい。いわゆる男目線っていうやつだ。

「ええ、まあ……。ちよつとエッチな感じですけど」

「エロくても大事な部分が隠されてりや十分だよ。Kナンバーなんだから贅沢は言えない。身の丈に合ってるや十分さ。穴開きパンツでも、フンドシー丁でも、エロ制服でも我慢して着るしかない。そうして何回かテストをクリアしていくうちに、自分好みのコスチュームを手に入れられるよ」

「それ以前に、テストから生還できるかが心配なんですけど……」
もつともだね、とソフィアは笑った。

「それは嬢ちゃんの頑張り次第さ」

「頑張りが結果に結びついてくれればいいんですけどね」

「まあね。でも、もしも頑張りが報われずに途中でおっ死んじまっても、それが嬢ちゃんの全力だったら、後悔はしないと思うよ。自分の非力に対する悔しさはあっても、自分への憎悪にはならない。悔しがりながらも納得して死ねるってわけだね」

「私は笑顔で生還したいです」

「笑顔で？ そりゃ絶対無理だ」

ソフィアはにっこりと笑って言った。でも、その目は笑ってなかった。

「百名以上のテスト生を蹴落として殺しておいて純粋な笑顔を作れる奴なんていないよ。もし存在するとしたら、そいつはもう人間として終わっちまってる」

「……………」

Kナンバーは一名しか生還できない。そういうルール。それを私はちゃんと理解できていない。頭ではわかっていても、それが自分に何をもたらすか、自分をどう変えてしまうのかわかっていない。たぶん、他のKナンバーもわかっていないのだろう。そう思う。

「お嬢ちゃん、服を着な。奴らが店内を物色し始めた。じきに、ここにも来る」

ソフィアは武器を逆手に握って構えつつ私に行動を促した。

「はい」

私は手早く服を身につけ、敵の襲撃に備えた。

敵への応対は全部ソフィア任せだけど……。

【9・西園エリカ】

食堂が安全地帯だというルールは、何年か前のサバイバルテストでテスト生たちが独自に話し合いを持って決定したものであり、組織が公式に認めた絶対的ルールではない。ゆえに、ルールを破った者に対する処置も定められてはいなかったそうだ。組織はテスト会場を用意し、テスト生のナンバーに応じた生還条件を設定するが、テストが始まってしまえば完全にノータッチ。テストフィールドで何が起ころうとも一切、関与しない。誰が死のうと救いの手を差し伸べない。どのような惨劇が起ころうとも傍観を決め込む。それが組織の運営方法だ。だから、フィールド内には殺伐とした雰囲気、満ち、眠る場も休む暇も確保できない。ちよつと気を抜けば死。小用で一息吐いた瞬間、死。疲労で集中力を殺がれた途端、死。それがごくごく普通であつたのだそうだ。

しかし、数年前のテストにおいて、上位ナンバーによる闇討ちが横行し、下位ナンバーがほぼ皆殺し状態にされるという事件が起つたことをきっかけに、一部の理性的なテスト生たちが話し合いを持ち、当時のGナンバーに《食堂ルール》を持ちかけた。その当時のGナンバーは、優秀であると同時に賢明でもあり、幾つかの訂正事項を付加してルールを公開したそうだ。

だが、良識あるテスト生はいざ知らず、効率と暴力でテストを乗り切ってきたテスト生たちが、そんな経緯で作られたローカルルールを積極的に守ろうとするはずもなく、故意に食堂で略奪を行い、多くのテスト生を殺害した。

それは、ルールを制定したGナンバーを愚弄する行為である。

当然のごとく、ルールを破ったテスト生は極刑に処された。

その前例を基として、それ以後、違反者には死が相当とされてきたらしい。そして、違反者を罰した者には、それ相応のレアアイテムが贈呈されたと言う。その話は、実際に違反者を始末して生還条

件を満たすアイテムを貰った黒澤から聞いたものだから間違いないだろう。

違反者を罰すればレアアイテムを得られる、という情報がもたらす効果は計り知れない。犯罪であれ、冤罪であれ、違反者のレッテルを貼られたテスト生は、サバイバルテストに参加しているテスト生全員から狙われることとなるのだ。そして、それから逃れられたテスト生はたった一人しかいないらしい。

それなのに、今、私は《食堂》で命の危険に晒されている……。

急いで服を身に着けた私は、襲撃に備えるソフィアの背後に移動して、ドアの向こうの動きに全神経を集中した。

私の能力では外の様子を視覚抜きで確認するのは無理だ。でも、さつき女性の声で悲鳴が上がったあと、ざわざわしていた店内が今はシンと静まり返っている。これは、もう、賊によって店内が完全に制圧されてしまったと思うていいだろう。黒澤も風守も存外に不甲斐ないものである。

そんな愚痴を心の中で零しつつ、武器になりそうな物がないかお風呂の中を見回す。

「私がお手軽に扱えそうな武器とか置いてないですかね。私も自分を守る武器がほしいですよ」

そうソフィアに囁きかけると、彼女は小馬鹿にする感じでフツと鼻を鳴らし、横目で私を睨んだ。

「嬢ちゃんが武器を必要とする時は、もう完全にお手上げ状態さ。そうになったら、もう、悲惨な末路を覚悟して、自害する心の準備をするべきだよ」

「武器さえあれば、私だってちょっとは戦力になると思いますよ…… たぶん」

熱湯シャワーは結構な武器になるんじゃないか、とか思いながら言い返す。

すると、ソフィアは心底嫌そうな顔をして眼光を鋭くした。

「素人が何をほざいてるんだい。敵を知るどころか己すら知らない小娘が、武器を装備してもロクな結果にならないよ。よくて瞬殺、悪けりや拷問と陵辱の二重責めで縞り殺しにされる。逆に、武器を持つてなきや、輪姦は免れなくても、命だけは助けてもらえるかもしれないよ。相手も《食堂ルール》を意味なく犯すメリットはないんだからね」

「でも、全部ソフィアさん任せつてのは……ちょっと気が引けるといつか、申し訳ないといつか……」

「申し訳ない？　むしろ、嬢ちゃんには何もせずにてほしいよ。そうすれば、あたかも闘いやすい」

そう言つて彼女は小刀をかざした。

「もし相手が強すぎて、あたいがやられたら、嬢ちゃんは全力で無抵抗をアピールするんだよ。間違つても抵抗しようなんて思わないことだ。いいね？」

「……はい」

「まあ、あたより強いテスト生なんてリックがG男爵くらいだろうけど」

ソフィアは可笑しそうに目元を和ませてクククツと笑った。

笑つて余裕を見せられるほど自分の戦闘力に自信があるようだ。

この状況を口ほどには危険と捉えていない。きっと、どれほど際どい状況に陥つても、彼女は自力で危機を脱出できると確信しているのだろう。

何回もサバイバルテストをクリアしてきている上位テスト生だからこそ余裕である。初心者の中には、この状況で笑つていられる余裕なんかない。逃げ道のない場所で、丸腰で敵を迎え入れる勇気もない。

「じゃあ、せめて、お守り代わりに武器とかほしかったりしますよ

……」

「武器を持つてる奴は闘う意思があると見なされて攻撃されるよ。それでもいいの？」

「うー……良くないです」

「じゃあ、隅っこで大人しく震えてなよ。むつきむきのハゲ野郎が入ってきそつだ」

「うん」

もう何もかもソフィアに丸投げで自分は無抵抗主義者だ、と腹をくくり、私はバスタブに寄りかかるようにして賊の侵入に備えた。

まず聞こえてきたのは、ふーふーという荒い鼻息だった。ドア越しなのに酷く大きく聞こえる。賊は、マタドールに挑発された暴れ牛のように興奮しているようだ。お風呂に隠れている私たちをみたら、どうなってしまうやら。よだれを垂らしながら野獣のごとく突進してくるのだろうか。そう想像すると、かなり怖い。

遠くの方から「便所には誰も入ってなかったぞ！」という野太い叫び声が聞こえてきた。

それへ返すようにお風呂のドアの前にいる賊が大声を発した。

「俺はこれから風呂を調べる！ いい女が入ってやがったら少し時間がかかっちゃうかもしれないねえぜ、うへへ」

酷く下品な声だ。この男は殺されてもいい。っていうか、とつとと殺しちゃってください、ソフィアさん。

「さーで、誰がいるかなー？ ブ男が入ってやがったら、ケツにシヤワーノズル突っ込んで熱湯全開にするぞー！」

嫌な前置きと共にドアが開けられた。

入ってきたのは、ソフィアが言った通り、ごつつい体格のツルツル頭だ。二十歳後半くらいの堀が深い顔立ちで、眉毛がない。ぴちぴちのビキニパンツに救命胴衣みたいなジャケットを着ているので、その風貌からライフセイバーを思わせたが、私たちにとってはライフステイラーであり、問答無用の敵である。その手に握っている肉厚のナイフが彼の狂気を如実に表していた。

一瞬、彼と私の視線が絡み合う。

私は棒立ち。

相手は、にんまりと顔の下半分で笑みを作った。強姦魔の笑顔だ
としか思えない表情だった。

「おうおう、いるじゃないか女がよお！　しかも結構な美少女とき
たまんだ！　こりや役得ですかあ？　うひよひよひよ！」

脂ぎった顔をぎらぎらと輝かせ、真ん丸に目を見開き、よだれを
垂らさんばかりにだらしない口を開いて、私をロックオンする変態
ハゲ。犯す気まんまん。食欲……否、色欲しかない。食堂ルールな
んか考慮する気ゼロ。

「しょ、食堂ルールを守らないテスト生は死刑なんですよ」

「俺ら別の支部からの編入組だから、そんなルール関係ねえよ」

ヤバイ、完全な馬鹿だ。自分がこのテストに参加させられてい
るか理解していない。環境適応能力が皆無。違う国に来てるのに、
その国の法律を遵守できなくて逮捕される馬鹿者と同じだ。

「え、えつと……私は現役中学生だから、襲うと幼女強姦罪で死刑
ですよ」

今にも飛び掛ってきそうなので、注意を喚起してみた。

でも、エロで脳を埋め尽くされた馬鹿男には通じるわけもなく。

「うへへ、そりや凄い。是非とも受刑したいもんだぜ。うひひひ！
むしろ鬼畜魂に火をともしってしまった感がある。

ハゲマツチヨはだらしのない笑みを浮かべながらナイフを振り上げ
て、私との距離感を楽しむようにちよつとずつ近づいてきた。

絶体絶命な私の貞操。

つていうか、ソフィアさん助けてください。

そんな私の心の悲鳴に呼応して、引き戸の影に身を潜めていたら
しいソフィアが飛び出した。今にも私に抱きつかんとしているハゲ
男に駆け寄り、そのごつつい背中に蹴りを叩き込むと同時に、前屈
みになった彼の背に小刀を突き立て、背骨に沿うように小刀の刃を
走らせつつ、馬跳びをするような格好でむきむきの巨体を飛び越え、
私の前に音もなく着地する。その間、約三秒。

無言のまま背中から血を噴いて倒れるハゲ。

それへ更なる追い討ちをかけ、延髄にナイフを突き立てて完全に息の根を止めるソフィア。

瞬きを許さない速さと目と心を引きつける華麗な殺人技は、拍手喝采で大賞賛されるべきレベルであり、だからこそ女性の身で何回もサバイバルテストをクリアしてこれたのだと理解させるに十分な能力だった。

私が殺人の光景を目の当たりにして吐き気を催さなかったのは、彼女があまりに人間離れしていたからか、もしくは圧倒的な惨劇を目の当たりにして心が活動停止してしまったかのどちらかだろう。常識的に考えて、貞操を守ってくれたことに対する感謝の心は別として、人殺しをした彼女に大なり小なり嫌悪感をいだかないわけがないのだ。

「嬢ちゃん、こっちにおいで。そいつのド腐れた血で足を汚すのは、レイプされるのと同じくらいの屈辱だよ」

「あ、はい」

息一つ乱さず表情も変化させずに賊を倒したソフィアは、ハゲ男の死体を一瞥してフツと鼻を鳴らすと、もう見る価値もないというように目を逸らし、私に手をさし伸ばして風呂場に横倒しになって移動の妨げになっているハゲ男の体を飛び越えさせてくれた。

「ソフィアさん、すごく強いですね」

「まあね、弱くはないよ」

彼女は謙遜気味にに応じて目じりにシワを刻んだ。小刀の刃に付着した血と油をバスタオルで拭い、ひゅんと一振りしてから鞘に収める。そんな動作が格好良い。

「風守さんと同じくらい強いんじゃないですか？」

「ああん？ 風守？」

ソフィアは一瞬、眉間にシワを寄せて首をかしげた。そして、すぐに小さく頷いた。

「ああ、あのクソ侍か……。嬢ちゃん、あいつを知ってるのかい？」
「今、一緒に行動してるんですよ」

「……ほう、そりや珍しいこともあるもんだ。あのヒゲがチームを組むなんてね……ん？　ちょっと待ちなよ。ってことは、今、食堂内にあのヒゲもいるってことかい？」

「はい、いますよ」

「へえ、そりや頼もしい。ってこたあ、あたいが多少の無茶をやらかしても、あいつがフォローしてくれるってわけだね」

にやりと悪そうな笑みを浮かべて言うソフィア。

「んじゃ、手っ取り早く食堂を解放しますかね」

「え？」

ハガキをポストに投函しに行ってくる、みたいな彼女のノリに、さしもの私も不安を覚えた。

店内には、まだ賊が何人かいるはずなのに……。それに賊が危険な武器を装備してる、とか言ってたような気もする。

だが、それ以上に不安なのは、食堂ルールのことだ。

店内で騒ぎを起こしたらアウトなんじゃなかったっけ？

悪者を退治する分にはお咎めはナシなのだろうか？

それとも喧嘩両成敗？

もし両成敗だったら、騒動に巻き込まれた私もアウト？

そういう多くの不安が胸の内であらうと沸き立っていたけど、状況が状況だけにソフィアの行動を支持するしかない。

「嬢ちゃんはどこで大人しく待ってな。騒ぎが収まるまでは間違っても店内に戻ろうなんて思わないことだ。いいね？」

「はい」

私が頷くと、彼女はタートルネック状にわだかまっている首巻き部分を引っ張り上げて、マスクみたいに顔の下半分を覆った。そして、待ち伏せを警戒するように開かれたドアから顔だけ出して外を確認し、足音を立てずに駆け出した。

「……………」

私は三十秒ほどお風呂の中でじっとしていた。だけど、店内の様子が物凄く気になる。

気になつて仕方がない。

「……ちよつと覗くくらいなら危なくないよね？」

囁き声で自問してみた。

うん、遠くから見るといなら大丈夫だと思うよ。そう自答する。
私は足音を忍ばせてお風呂場を出て、店内へと向かおうとして――

毛むくじやらの熊男とばったり遭遇してしまった。

「あ……」

「へ？」

私の視線と熊男の視線が衝突して、一瞬の空白が生じる。

えっと、これって状況的に最悪なんじゃ……。自分の後ろには逃げ道がない。守ってくれる仲間もない。唯一の頼みの綱だったソフィアもいなくなつてしまった。そんなところに賊がお出ましとは、もう運命の女神様の悪意としか言いようがない。

熊男は一瞬の戸惑いに表情を硬直させたが、私の動揺する様を見て状況を理解したようで、角ばった顔に残忍な笑みを刻んで、繋ぎの服のポケットから丁形のものを取り出した。

それは見まごう事なきトンカチ。釘を打つ道具。

もしかして、この人、お風呂を修理しにきた業者さん？ と現実逃避してみたけど、二秒も自分を騙せなかった。

「ジャックはどうした？ こつちを調べに来たはずだぞ」

「あ……えっと……」

ジャックとは、あのハゲ男のことだろう。でも、彼はソフィアに殺されてしまっている。どう返事をしたものか。さすがに、もう死んじやってまーす、とは言えない。

「おめえがジャックに犯られたってわけじゃなさそうだ。ってことは、おめえがジャックを殺つたってわけか？」

「えっと……その、あの……」

「まあ、どっちにしろ、おめえはここで終わりだ」

熊男はそう言つてトンカチを振りかざした。

「ぐちゃぐちゃに殴り殺してからたーっぷり可愛がつてやるよ」
「！」

死姦嗜好者ですか?! この人はハゲ男よりも性質の悪い変態だ!
どうする私?

【10・西園エリカ】

駆け寄ってくるトンカチ熊男から身を守るには、どう行動すればいいのか？

……などと考えている場合じゃなくて、ここはもう、一か八かの抵抗をするか、逃げ場がないのを承知でお風呂場へ引き返すかの二択しかない。その二択から色々と選択肢を派生させて、より実際の行動を模索すれば、この危機を回避する方法が見つかるかもしれないのだけど、そんな冷静な思考を働かせる余裕が私にあるわけもなく……。目に見える二択に身を任せるしかないわけで。しかも、どっちを選んでも同じ結果が待っているような予感がする。つまりは、トンカチで殴り殺されて、更に死姦されるという悲惨な末路だ。私が咄嗟に選んだ選択肢は、《逃げる》である。

武器を所持している熊男に可憐な乙女が挑んでも結果は目に見えているし、その選択肢の先に派生する未来は皆無と言っていいだろう。逆に、逃げ道がある限り、私には身の安全が保障されていると言えるのだ。

とは言え、お風呂場に入ってしまったえば、もう、そこは逃げ場のない完全な袋小路である。

お風呂場に駆け込んだ私は、どうにか敵の襲撃に対処できないものかと見回したが、何かしらの解決策が浮かぶ前に熊男に追いつかれてしまった。

「こんな所に俺を誘い込んでどうしようってんだ、うさぎちゃんよ？ うさぎは大人しくキツネに狩られるのが正しい食物連鎖だろーがよ。それとも、ここでエロ気持ち良いことしてくれるってか？」

自称キツネこと熊男は、ニヤニヤ顔で言いながらお風呂場に入ってきたが、足下に倒れている血塗れのハゲ男を見るや、小さく舌打ちした。顔から笑みが消え去り、素の表情を見せる。

「ジャック……」

彼は仲間の名を呟くと、ゆっくりと視線を私へと移動させ、寧猛に齒を剥いた。しかし、不思議とその目には、さつきまで宿っていた野獣のようなギラギラさが失われていた。仲間の死を目の当たりにして性欲が消滅したのではなく、別の思考によって性欲が抑制されたようだ。この熊男、見た目よりもマトモなテスト生らしい。

「ジャックを殺ったのは、おめえか？」

仲間を殺されているのに酷く冷静な問いかけだった。

「ち、ちがいますよ」

私が即答すると、彼は額とこめかみに青筋を走らせて、ずいっと手を伸ばした。トンカチを持っていない方の手だ。その巨大な手が私の首を鷲掴みにした。

「じゃあ、誰だ？ 答えろ、女！」

押し殺した怒声と血走った目。じわじわと力が加えられていく手。答えなければ、首の骨を圧し折られるか、絞め殺される……。

一瞬、ソフィアの笑顔が脳裏に浮かんだけど、ここで彼女を庇って私が死ぬ意味なんてないので、私はすぐに答えた。

「……ソフィアさん」

「ソフィア？ あの忍者女か？」

「うん」

私が首を上下に振ると、熊男は不味い物を誤って口に入れてしまった時のように、ぐしゃつと顔を歪めた。

「あの女、ことごとく俺らの邪魔をしゃがるな……。忌々しいぜ、まったく……」

溜息混じりの呟き。

よほど痛い目を見せられているのだろう。ソフィアに対する怒りが熊男の全身からオーラとなって放出されているようだ。その激情が彼女に向けられれば良かったのだけど、この場にいるのは熊男と私だけ。彼の怒りの矛先は当然のことながら私へと向けられる。そして、それを甘んじて受けざるを得ない状況に私は陥っていた。

彼はスイッチを切り替えたかのように鬼畜ちつくな笑みを浮かべ

た。

「何にせよ、おめえはここでおしまいだ。たつぷり俺を楽しませてくれや」

「嫌ですよっ！」

拒否したが、それに対する返答は容赦のないパンチ。

頭が激しく揺さぶられ頬が熱く煮えた。

トンカチで殴られなかっただけマシなのかもしれないけど、顔面を殴られるなんて今までの人生であり得なかっただけに、そのショックは痛みを凌駕した。ここが生死を賭けた戦場であることは重々承知しているのに、それを全く理解していなかったせいもある。理解しているつもりになっていただけ。なぜ私は殴られているのだろう、という疑問が浮かぶ始末。衝撃と現実が重なり合っても、まるで他人事のように感じている。これは何かの間違いじゃないのか、何かの冗談じゃないのか、と……。しかし、現実には現実である。殴られれば痛いし、血も出る。どうやら口の中を切ってしまったらしい。口内に広がる血の味がゆっくりと私に現実を知らしめる。

黒澤と出会って以降、自分は守られる立場だと樂觀し、何の覚悟もしていなかった……。

首を鷲掴みにされた状態で二発目三発目と連続で殴られ、意識が飛びそうになった。もしかすると気絶した方が楽なのかもしれない。しかし、私の精神が強固なのか、相手がワザと手加減しているのか、意識のスイッチが切れる心配はなさそうだ。

「くつくつく……。一気に殺しちゃ面白くないからな。じわじわと蹴り殺しにしてから思う存分に犯してやるよ」

「ああ……。う……。う……」

声を出そうとしたけど、喉が震えて上手く言葉が出てこない。殴られたショックで声帯が機能していないようだ。

「おっと、まずいまずい。その顔をぐちゃぐちゃに潰すのは後の楽しみだ。まずは乳を抉って遊ぶか」

常識外れの台詞を笑顔で吐くと、彼は私の首を掴んでいる腕に力

を込めてググツと吊り上げた。ちょうど私の胸が彼の顔の高さに来るくらいに。

「ションベン臭いガキの貧相な乳なんざ興味ないが、嫌がる女の乳首を噛み切るつてのが俺の趣味でね。くくくつ」

熊男は自由な方の手を私の胸元に伸ばし、襟元に指を差し込んで服を引き裂こうとした。

やめて！ そう叫びたかった。

でも、声が出ない。

両腕を伸ばして彼の顔を掴み、ぐいつと押し下げて何とか暴虐から逃れようとした。でも、殴られたせいで頭がクラクラし、手足が思うように動かない。

「無駄な抵抗をして俺を怒らせない方がいいぜ。痛い思いをしてから殴り殺されると、痛い思いをしながら殴り殺されるのじゃ、随分と違うからな」

何を言っているか意味がわからない。でも、この男が本気なのはわかる。年下の女性に対する劣りの心や同情など欠片もない。あるのは破壊意思。暴虐嗜好。結局は殺すこと前提なのだ。

どうしよう。

その時、ピンと閃いた。目を潰せば、その痛みで首を掴んでいる手を離すかもしれない！ いや、離すに決まってる！

その願いを右手の人差し指に込めて熊男の顔面をまさぐり、目を探り当てて指先をそえた。

えいつ！ つと目潰ししようとして――

相手に対する申し訳なさが行動を妨げた。

躊躇が死に直結するこのサバイバルテストで、私は最悪の愚を犯してしまったのだ。

自分がやられて嫌なことは、相手にもしちゃいけない。そんな思いが私を止めたのだけど、それは単なる弱さであって、優しさとか正しさとは遠くかけ離れていた。

「何だ、おめえ？ 俺の目を抉るんじゃないのか？ くつくつく」

悦に入った笑いが響く。

「ぶっすり刺してみろよ、なあ？　そうすりゃ、さすがの俺も隙を見せるかもしれないぜ」

ぎろつと目を剥いて、さも目を抉ってくださいと言わんばかりの熊男。いや、現にそう言っている。やってみると私を煽っている。

「……………」

私は彼の顔に当てていた手を下ろした。

抵抗を止めたのではない。この男の目を潰しても逃走の可能性を高める結果には結びつかないことがわかったからだ。そして、私が目潰しをできる人間じゃないことを完全に見切られているのだとわかったからである。

「くくつ。理解したようだな。おめえは、甘っちょろい馬鹿ガキだ。何をしようが俺からは逃げられない。ここで死に物狂いで抵抗することもできないようじゃ、たとえ奇跡的に俺から逃げれても先は知れてるぞ」

そう、彼の言う通りだ。

もし、これが学校の帰り道とかで突然襲われたというのであれば、私も必死になって抵抗し、何をしてでも、相手を殺してでも助かろうとしただろう。だけど、非日常の連続に心が対応していない状況では、必死になり得ない。今、この最悪を体験していながら、これが悪い夢なんじゃないか……とと思っている自分がいるのだ。目覚めれば、自分の家において暖かい布団にくるまっている。まだ、それを期待してしまっている状態。

「ふん、抵抗しないってのはつまねえが、じっくりと鬬り殺させてくれるってのは悪くない。よし、降ろしてやるから、大人しくしてろよ」

熊男は満足そうに笑み、吊り上げていた私から手を離れた。

私は重力に引かれて床に落ちた。ちゃんと足から降りただけど、足に踏ん張りが利かず、体を支えられなかったので、その場で尻餅をついてしまった。痛いという感覚がお尻から脳に伝わる。それと

同期するように殴られた顔の部分からも痛みが伝わってきた。

そつと頬を押さえてみる。

頬からこめかみにかけてズキズキと痛む。奥歯がぐらぐらだ。口の中の傷も深いようだ。

今更ながらに涙が出てきた。相手に対する恐怖や自分への悲観ではない。純粹な痛みによる涙だ。

「さーで、まずはおめえの可愛らしい乳首をがちゃんと噛み切って――」

――
彼が凌辱計画を発表しようとして口を開くのに合わせるように、店の方から大きな声が聞こえてきた。

「ジャック！ バーンズ！ 戻って来い！ 厄介なことになりやがった！」

高圧的な怒鳴り声。男性のものだ。

その声に気をとられたらしい。熊男は私から視線を移動させ、店内の方を向いた。

「ダンが呼んでやがる……」

忌々しげな呟き。

完全に私から意識がそれている。

でも、逃げ道を彼が塞いでいる現状では何も期待できない。

完全なる諦観に包まれている私は、痛む頬をさすりながら何となしにハゲ男の死体へと目をやった。

「――」

視線の先に、あるモノが存在感を誇示していた。

それは肉厚のナイフ。

ハゲ男が持っていたナイフだ！

しかも、手を伸ばせば届く範囲にある。

「ちつ……いいところを邪魔されちゃったぜ……くそっ！ しょーがねえか……。おら、女、こっちへこい。店に戻るぞ」

そう言っただけで彼の腕を引っ掴んだ。そして、引っ張り起こそうとする。

凄い力だったので肩の関節が外れるかと思ったけど、文句を言っている場合じゃない。肩の関節なんか外れてもいい。今、私の前には逆転の可能性を秘めたアイテムが転がっているのだ。ちよっと手を伸ばせば希望の光をゲットできるのだ。手を伸ばし、掴み取って、刃を相手に向けて突き刺す。それだけで状況が改善されるかもしれないのだ。

でも、もし失敗したら……。という不安要素は一切頭に浮かばなかった。もしかすると、これが死に物狂いつてやつなのかもしれない。純粹なる自己防衛。本能に突き動かされるままに体を動かす。
「?!」

私がナイフに手を伸ばすや否や、熊男もその存在に気づいたようだ。鬼のような顔をして私の手を押さえにかかる。

純粹なスピードの勝負だった。手の長さは彼の方が上で、ナイフとの距離は私の方が近い。だから、速さが勝ち負けを決する。

たぶん、彼がもう少し冷静で状況判断できる知能の持ち主であつたら私は負けていただろう。その腕力に任せて私の足を引っ張っていれば、私がナイフをゲットすることはなかったはずだ。しかし、彼は私の行動を妨げるという選択肢に思い至らなかった。

先にナイフを掴んだのは私だ。

必死の思いが私の瞬発力を限界まで引き出させてくれたのかもしれない。

私はナイフを拾い上げざま、熊男に向けて突き出した。

どこかを狙ったのではなく、刃を垂直に立てて思いっきり体当たりしたただけだ。

熊男はナイフをよけようとしたようだが、私に掴みかかろうとして勢いをつけていたので刃先から身を遠ざけることはできなかった。ドン、という衝撃。

お互いが前のめりだったので、ナイフは柄の部分まで深々と見事に突き刺さった。

「この……くそ女がぁ……」

熊男が唸った。角顔に血管を浮き上がらせ、齒を剥き出しにして私を睨みつける。

ナイフが刺さったのは、ちょうどお腹の真ん中辺りだった。どうやら急所を外したようだ。しかも、怒りを誘っただけで、ダメージを与えていないように見える。

私はもつと深く決るように、ナイフを持つ手に力を込めた。ぐぐぐつとナイフが上に動き、彼の腹部が切り裂かれる。

「ああががぐあ！」

獣じみた叫びが熊男の口から迸った。

どばつと溢れる血。私の手を汚す赤黒い血。普通なら腹を押さえのたうちまわるくらい痛いはずだ。それなのに、彼は攻撃意思を失わなかった。

熊男は私の肩を掴んで刺さっているナイフごと強引に引き離すと、そのまま私の背中を壁に叩きつけて、首を後ろに仰け反らせた。そして、反動をつけて頭を振り戻す。

勢いをつけた頭突きが私の額を打ち据えた。

何かがパンと弾けるような感覚が伝わり、目の前が真っ赤に染まった。

ぐにやりと歪む視界。手から零れ落ちるナイフ。

「や、やってくれるぜ、くそ女あ……。まさかナイフを刺しやがるとはよ……。予想だにしてなかったぜ。くくくつ。お陰で腹が裂けちまったぞ。くそ！ どうすんだ、これ？ このまま内臓晒して生き続けて言うのか？ くつくつく……。いや、この《食堂》には手術用の道具が揃えてあるっていう話だから、俺の腹もきっちり縫合できるか。まあ……。どうであれ、おめえは死ねよ！」

熊男は片手で私を壁に押さえつけながら、反対の手に持っているトンカチを振り上げた。

「……………」

こんなアッサリと死んじゃうのか……。

このテストって女の子に不利だよね。それに、Kナンバーに優し

くないし。二重の意味で厳しすぎるよ。

ああ……結局、お兄ちゃんを殺したデスマスクって人に会えなかったなあ……。

でも、しょうがないかな。私がテスト生として実力不足だったのがいけないんだし。

様々な思いが私の胸の底へ流れ落ちていく。

ぶんとトンカチが振り下ろされた。

「ぐちゃぐちゃに叩き潰してやあれおおぶくう?!」

その刹那、熊男の体が頭の天辺から腰の辺りまで真つ二つに割れた。振り下ろされたトンカチは握り手を失って飛んでいき、音高く壁にぶつかって床に落ちた。

「小娘、もう大丈夫だ」

その声。何の感情も浮かんていないけど、優しそうな笑み。変な形のヒゲ。

それらが私に与えてくれた安堵感は、あらゆる不の感情を駆逐するに十分だった。

全身から力が抜けて頭の中が真つ白になった。

その場に崩れ落ちるより速く、彼は私を抱きとめてくれた。

頭がクラクラして上手く思考が働かない。

助けられた安堵感は、なぜか表現できず、涙は大量に溢れるんだけど感情を爆発させて心の中に蓄積されている熱いものを発散することができなかった。ただ風守にしがみついて、その優しい顔を見ながら涙をだらだら流しているだけ。彼に言われた「まだ賊は食堂にいるゆえ、大きな声を上げてはならぬぞ」という静かな忠告が私の体を制御したのかもしれない。今の私は、痛みと思いがぐちゃぐちゃに混ざって、わけがわからなくなっている。それだけはわかった。

風守は優しい感じに抱きしめてくれているが、その目は酷く冷静で口調もいつも通りだ。私の顔に指を這わせて殴られた部分を診ながら、淡々と告げる。

「この傷は深くないようだ。きちんと手当てさえすれば、痕も残らず綺麗に消えるだろう」

私が望んでいるのは、そういう言葉じゃなくて、私の無事を喜び、これ以後の安全を約束する頼もしい台詞だ。その上で思う存分に甘えさせてくれたら負の感情なんか三分で吹き飛ばせるだろうに。それに類する言動が全くなかった。まあ、彼は古風っぽい性格だから故意に優しさを表現することをよしとしないのかもしれない。

彼は冷たい濡れタオルを私の頬に押し当てつつ、僅かに目を細めて呟く。

「しかし、よくも上位テスト生の蛮行に耐えられたものだ。小娘の実力を鑑みても、こやつらの攻撃を受けきれるとは到底思えぬが……。どうやら多少なりとテスト生としての素養があったようだな。五体満足どころか、深いダメージを全く負っていないのが不思議だ。それとも偶然が不自然に連続して、こやつらに絶大な不運をもたらしたか……」

きつと偶然と奇跡のコラボが私の頭上で幸運の星を輝かせてくれたに違いない。そうでなければ、ごつい男に掴みかかられて無事で済むわけないのだ。

「立てるか、小娘よ？」

「う、うん……」

本当のところはもつと甘えていたかったけど、状況が状況だけに、ここで座り込んで泣いてはいられない。

風守は優しい言葉とは裏腹に、酷く事務的な感じで私の腰に片手を沿え、もう片方の手で肘を掴んで強引に引き起こした。

無理矢理に起こされたので、ちよつとムカツとしたけど、私は膝関節に気合を流し込んで下半身を固定させた。膝が震えてバランスよく立ってられない。でも、それは仕方ないか。心も体もダメージを負ったばかりなのだ。回復するには多少の時間が必要である。

「こんな被害を受けたら、普通は保健室とかで優しい先生にカウンセリングとか受けなきゃ駄目なんですよ。友達が自殺しちゃった子とかレイプ被害に遭った子とか、心のケアが必要なんです。私なんか、それ以上の経験を積んじゃってるんだから、そこそこ、風守さん、よろしくお願いします」

ほんの少しだけ心に余裕が生まれたせいか、自然と口から冗談がこぼれ出た。

「カウンセリング？ それは自分の弱さを認めた者のみが受けるべきものであって、テスト生が受けて良いものではないぞ、小娘よ。それは即ち、自分の無能を認め、テスト生としての価値が皆無だと決定付けることでもあるのだ」

「……………」

テスト生として無価値ってことは、生きている意味がないってこと。

も、勿論、そんなの認められませんよ、絶対に！

「カウンセリングなんて全然いらないですよ！ な、何を隠そう、私にはテスト生としての隠された才能が山盛りのてんこ盛りで舟盛

りの女体盛りですからっ！」

「ふむ、そのような軽口が叩けるのであれば、精神面での問題はないな。一般的な小娘というものは、容赦の無い暴力に晒されると、心折られて自棄になる例が多いと言っから、その気丈さは称えられて良い」

風守は可笑しそうに目じりにシワを寄せてW型のヒゲを吊り上げた。

口では色々言っていたけど、風守はなんだかんだと意味の無い会話で数分の時間を潰して私に心の安定を図る猶予を与えてくれた。きつと、まだ店の方に状況の変化がないか、もしくは店の騒動に介入するつもりがないから、私のために心配りしてくれたのだろう。そういう目に見えない優しさは、黒澤からも感じられた。なぜか風守と黒澤は、何のメリットもないはずなのに、私という無能なテスト生を助けてくれている。その理由はわからない。そう言えば、前に出会った悪者が、風守に「西園寺竜子の娘を守り切れなかったことへの罪滅ぼし」とか言って嘲笑ってたっけ……。その子の代わりが私ってことなのだろうか？ まあ、理由なんてどうでもいいかな。今は、心強い味方がいるというだけで十分だ。

額の傷は、彼が言った通り、それほど深くないようで、用意してもらった冷水に浸したタオルを顔に当てて腫れ上がった部分の鎮静化を図ると、二分ほどで血は止まり痛みも和らいだ。その間、ずっと彼に抱きついていたので、心の安定も図れた。ただ、それでも今さっき自分の身に起きたことが現実として受け入れられない。全身が悲鳴を上げているのに、まるで認識できていない。なんだか心だけが遠い空に浮遊していて、ふわふわな雲と戯れている感じがする。そして、このまま遠くに心を置いておけば辛い気持ちにならなくて済むような気がした。

風守が新しい冷水タオルを用意してくれた。
それを受け取って顔に当てる。

「あ、えつと……助けてくれてありがと、風守さん」

表情を変化させると顔面に痛みが走るが、無理に笑顔を浮かべて見せて、お礼を述べた。

彼はW型のヒゲをくいつと斜め上に吊り上げて深い笑みを作り、一度私の顔を覗き込んでから、むっふーつと鼻息を吹いた。

「だいぶ落ち着いたようだな」

「うん」

それは落ち着いたのではなく、死ななかつただけマシかな……という諦めにも似た感情が私の涙を止めただけであり、まだ心臓はドキドキと高鳴っていた。でも、痛みが引いた分だけ冷静になれたような気もする。風守が不必要に優しく接してくれなかったことが、逆に混乱を収縮させる効果があったのかもしれない。もし私が一ヶ月前の私だったら、今頃、バスタブの隅っこに座り込んで、「お家に帰りたいよお」とか「もう、こんなの嫌だよお」と泣き叫んでいただろう。

「よかろう。それでは『食堂』へ戻るとしようか」

体を私から離し、気安い感じに述べた。

その言葉に、緊張感や危機感はない。危険地帯であるはずの食堂へ戻るのに、平然としている。

当然、私には危機感と不安感と恐怖感がド力盛りである。思わず声を上げてしまった。

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ。食堂つて今、危ないんですよ？ 悪者が危険な武器でお客さんを脅してるんですよ？ そんなところに戻っちゃって大丈夫なんですか？」

「食堂ルールを犯した者は総じて死すべき存在だ。たとえ食堂内で斬ってしまったても罪にはならぬ」

なるほど、悪者を罰するためなら食堂ルールは適用されないのか。また一つ勉強になったなあ。

……っていうことを聞きたかったんじゃないくて！

「風守さん一人じゃ逆に返り討ちに遭っちゃうかも、とか心配しち

やうんですよ」

「返り討ち？ ふむ、可笑しな心配をする。ここに無様な死体を晒しているテスト生は武器も持たぬ小娘すら秒殺できぬ弱者だ。そんな輩が幾人束になると、我を討ち取ることなどできぬぞ。まして食堂内には多くのテスト生が反撃のチャンスを虎視眈々と窺っているだろう。我がきっかけを作れば、状況は一瞬で好転する」

「そ、そうですかね？ そんな楽観視しちゃって良いんですかね？」

「うむ、かまわぬぞ」

ヒゲ侍は頼もしく頷いてみせ、横目で二体の死体を見た。

「それに、ここは小娘が心の休息を図る場所に相応しくはない」

「そうですね」

確かに、言われるまでもなく、状況が許してくれるのであれば、一刻も早く死体のそばから離れたかった。

風守の背中にくつついてお風呂から出た。

右手にはトイレのドアがあり、左へ進むと食堂だ。

じゃあ、目の前のドアはどこに通じているのだろうか？ 来る時はお風呂のことで頭が桜色だったので全く気にしなかったけど、物凄く気になる。

食堂の方からは何の物音も聞こえてこないが、それが逆に状況の悪さを示しているような気がする。つまり、悪者に脅されて誰も声が出せないのだろう。店内のテスト生が皆殺しにされたってことはないと思いたい……。

先行したソフィアは無事だろうか？ この静けさからして、食堂で大暴れしてるってことはなさそうだ。あれだけ強いんだから、食堂に突入してもあっさり殺されてしまうっていうことはないだろう。自信満々だったし。でも、そうすると彼女はどこへ行ったのだろうか？ トイレか？ それとも、もう一つのドアの中に入ったのだろうか？

そこで小さな疑問が浮かんだ。

「風守さんはトイレに行つてたから悪者の襲撃を逃れたんですよ？」

「うむ、そういうことだ」

「でも、トイレは悪者が調べに来ませんでしたか？」

「ふむ、調べに来た者がいたようだ。そんな気配はあつた」

「見つからなかったんですか？」

「うむ。我は個室に入つておつたゆえ」

「あ……」

大きい方をしてたんですか、風守さん。だから、運良く悪者に見つからなかったんですね。

ウンがついてたから……というお寒いオヤジギャグが思い浮かんだけど、即座に心のゴミ箱へ放り込んで口から出るのを未然に防いだ。まあ、そんな言葉を口にできるような状態じゃないから、意識して封じる必要はなかったか。

「どうした小娘よ？」

私の微妙なりアクションに何かを感じたようで、風守がヒゲをいじりながら顔を覗き込んできた。

それへ曖昧な作り笑いを向ける。

「あはは、何でもないです。えっと……悪者がちゃんと調べなくて良かったですよ」

「ふむ、確かに。個室では刀を抜くことすら困難ゆえに、もし用を足している際にドアを蹴破られでもしたら厄介なことになっていたかもしれぬ」

おしつこであれ、大であれ、してる最中に襲われるとか想像したくない。

そんな状況で殺されでもしたら最悪の死に様を晒すことになる。

「調べにきた奴が注意力の乏しい愚者で助かったのかもしれない。そうでなければ、素手で闘うという無様を演じる場所であつた」

ふんと鼻息を吹いて嫌そうに言う風守。

「素手で闘うのは好きじゃないんですか？」

「風守の家に生まれた男子にとって、素の拳を振るって闘うのは言い知れぬ恥なのだ」

「へえ、変な家ですね。一般的に、男は拳で語り合っていて言いますよ」

「風守の場合、拳で語るのは女子だ」

苦笑いを見せて言い、風守は腰の刀に手を掛けて食堂の方を向いた。

「さて、状況を打開するでしょう」

「一気に突入して悪者を全員みだれ斬りですか？」

「うむ。そうする予定であったが、ちと考えなおした。食堂の主が巻き添えになって命を落とすと、後々の食糧確保が難しくなるゆえな。敵の正確な数がわからぬ以上、むやみに飛び込むことはできぬ。しかし……この狭い空間に留まるのも得策ではない。もし火力の高い重火器で広範囲にわたる同時攻撃をしかけられたら、さすがの我でも対処できずに死ぬ」

確かに、ローズおばちゃんが死んじやったら、せつかくの食堂の意義が半分くらい失われてしまう。

安全なトイレと美味しい食事は何としても守ってほしい。

「じゃあ、どうします？」

「むっふーっ……」

ヒゲ侍は盛大な鼻息を吹いて真上を見た。

私も釣られて上を見る。

「！」

正直、声を上げなかったのが奇跡ってほど驚いた。

そこには両手両足を左右の壁に伸ばして突っ張りながら天井に張り付いているソフィアの姿があったのだ。

まさに忍者。

でも、どこかしら滑稽に見えるのはなぜだろう。彼女が外国人だからだろうか？ すんごく変だ。

っていうか、風守はよくも彼女に気づいたものである。まるで気

配が感じられなかったのに。

「ソフィアよ、遺憾ながら貴様に頼らざるを得ぬようだ」

「あたいに偵察してこいつて言うのかい？」

「うむ。頼めるだろうか？」

「ヤダと言いたいところだけどねえ……あんたに貸しができるんだ、やってやるよ」

ソフィアはにやりと笑って承諾した。

【12・西園エリカ】

ソフィアを食堂へ送り出した私たちは、この待機時間を利用してトイレを済ましておくことにした。

とは言っても済ませるのは私だけで、風守は単なる付き添いである。しかも、悪者はもうトイレにもお風呂場にもいないので、実際には何の危険もないはずだから、私一人でも無事に行って来れるのだけど、傷心の身では単独行動などできなかった。

食堂のトイレは男女兼用だった。でも、多人数の同時使用を意識しての造りになっていて、男子小用の便器が三つに個室が二箇所と結構な広さがあった。しかも入り口から個室は死角になっているから、もし男子用小用便器を誰も使用しておらずトイレ内がしんと静まり返っていたら、そそっかしい人はいつい誰もないと思いつ込んでしまうかもしれない。いや……そんなわけないか。あの熊男は、きっと奥の個室が掃除道具入れたと勘違いして、手前の個室を確認しただけで済ませてしまったに違いない。

「ソフィアはすぐに偵察から戻ってくるだろう。さっさと済ませるがいい」

風守は洗面台に腰掛けるような体勢で腕組みをし、半目を閉ざして私を促した。

私は頷いて奥の個室に入る。

個室の中は学校のトイレよりも心持ち広い造りで、こんな廃墟同然の建物には似つかわしくなくくらい綺麗に掃除が行き届いていた。それは食堂を管理しているローズおばちゃんのお陰なのだろう。汚物が散乱してるところか、使用者を不快にする要素がどこにも見当たらなかった。食堂内もそうだけど、お風呂もトイレも、外とは大違いの別世界である。まさにオアシス。ここを利用するテスト生は全員おばちゃんに感謝するべきだ。

私は心の中で感謝の意を示しておいて、それでも何となく便座を

トイレットペーパーで拭いた。生理的な意味で拭きたくなったのだ。いくら見た目が綺麗でも、誰が座ったかも知れない便座に生身のお尻を下ろす気にはなれない。便座力バーとかがあれば良かったんだけど、この地獄のオアシスでそこまで望むのは罪だろう。

可笑しかったのは、個室の壁に『トイレットペーパーの持ち出しは自重すること』という注意書きが日本語と英語ともう一つの言語で書かれていたことだ。トイレットペーパーみたいな多様性のある日用品は、テスト生として持ち出したいアイテムであり、実際にそこそつと持ち去る者がいるのだろう。でも、こんな張り紙をする、と、ひねくれ者の窃盗意欲を逆に刺激してしまうんじゃないかと思う。まあ、私は自分が使う分だけトイレットペーパーが残ってればいいし、盗み出すつもりもない。

「よいしょつと……」

パンツを下ろして便座に腰掛けてホツと息を吐く。

何という安堵感だろう。おしっこをするだけで、これほど落ち着くことができるなんて、ちょっと可笑しい。それはたぶん、風守が守ってくれているという信頼と安心感が土台になった感情である。彼ではなくソフィアだったら、こんなに気を抜いて放尿できるわけがないのだ。

一分ほど心と体を完全解放して憂いを払う。

そして、ごそごそと後始末をする。外国人の使用にも配慮した結果なのか、便器は洋式であり、しかもウォシュレット機能までついていたので、清潔な心持ちでトイレを終えることができた。

「終えたか？」

個室から出た私を見て風守は腕組みをといった。

私は笑顔で返す。

「うん、ばつちり！ 完全にすつきりしました！」

不思議なもので、数分前の死闘から五割くらい回復していた。痛みは残っているけど、恐怖と絶望だけは忘れたフリができている感じだ。きっとサバイバルテストを完全にクリアするまで、あの記憶

を払拭するのは不可能だろう。いや、死ぬまで忘れられないかもしれない。でも、この地獄から生還するためには、負の感情を押し殺してでも一歩一歩進んでいく必要がある。

「ちゃんと手を洗うのだぞ」

「はい」

父親みたいな台詞を風守が言ったので思わず笑いそうになった。

ソフィアは既に偵察から戻ってきていた。

言うまでもなく彼女は天井に張り付いている。っていうか、逆さにぶら下がっている。足の裏に吸盤でも仕込んでいるのだろうか？ 私なら五秒で頭に血が上って、地面に落下してしまうだろう。

そんな状態で彼女は怒っていた。

「あたいにタダ働きさせておいて仲良く連れションとはねえ。悠長なもんだよ。そんなに溜まってたのかい？」

「あ、ごめんなさい……」

私が謝ると、彼女はひらひらと手を振って意地悪そうな笑みを見せた。

「嬢ちゃんはいいのさ。下司どもに襲われて失禁しなかっただけお利口さんだよ。頭を撫で撫でしてあげたいくらいさ。でも、風守までついて行くこたあないだろ？ あたいが窮地に陥って助けを求めたらどうすんだい？」

ソフィアに睨まれた風守は平気な顔で言い切った。

「助けを求めなければならぬ状況にまで追い詰められるような弱者は死んで当然」

「そりゃ随分な言い草だねえ。嬢ちゃんは助けるけど、あたいは見捨ててるってかい？」

「貴様を助ける意義などない」

「意義ってかい。まったく……このクソ侍は、ほんとに……。こんな状況じゃなけりゃ、そのそつ首に小刀を突き立ててるとこだよ」

彼女は相当にイラッとしたようで、歯を剥いて風守を威嚇した。

何気なく、その手が小刀の柄にかけられているのが怖い。

しかし、風守は怒れる女忍者など意に介さず、食堂内へ目を向けて状況の説明を求めた。

「店内はどうなっておるのだ？」

「……………」

ソフィアは怒鳴りつけたという表情を一瞬だけ浮かべたが、苦笑を挟んで表情を改め、食堂内の様子を語った。

「あれこれと複雑な要素はないよ。賊が水鉄砲みたいな小銃を構えて店内のテスト生を威嚇してる、ってだけのシンプルなものさ。問題は、その賊が人質を取ってるってことだね」

「ふむ、人質か……。して、店内のテスト生は誰も抵抗しておらぬのか？」

「そりゃね、人質が人質だから、誰も手が出せないんだよ」

テスト生が手をこまねいてしまうくらいの人質って、どんな人？

Gナンバーとか？ でも、Gナンバーの人が人質になったりするわけないし……。まさか、黒澤が人質になってるとか？

私の予想は、しかし全くの的外れだった。

「ローズが人質というわけか」

「ご名答」

風守があっさりと見抜き、ソフィアが手を叩く。

「もし食堂の主を殺されてもしたら、何年か前のサバイバルテストみたいに食料争奪戦が起こっちゃう。テストなんてそっちのけさ」

「うむ。食料を確保しても、それを奪うために徒党を組んだテスト生に襲われ、それを奪った者たちも独り占めをするために仲間割れをする。そういう悲惨な展開が目に見えちゃう」

「水と食料は有限のアイテムだからね。弱者の口に消えて減らされるくらいなら、その口を一つでも減らしていく……。そんな暴挙に出る奴もいるだろう。前の時は、蘭子がその筆頭だったっけな」

何年か前のテストを思い返しているのだろう。若干の懐かしさを込めた口調でソフィアは言った。

「その時の教訓が今、店内の状況を滞らせておるのだな」

「黒澤さんも？」

私が口を挟むと、ソフィアは表情を意地悪い笑顔に戻した。

「黒澤はその右腕にかけて下手な動きはできないよ。たとえ宇治川蘭子がもう死んじまつてるって言っても、あの時の地獄をフルコースで味わったテスト生の一人だからね。他の誰を犠牲にしても、ローズを死なせるような展開には絶対に持ち込まないはずさ」

ローズおばちゃん、何気にすごい存在だったんだね。できれば死なずに生き残ってほしい人だ。

そこで、ふと思いついたように風守が聞いた。

「拳銃男が命を散らした回のサバイバルテストにおいても食堂の主が殺害されたと聞いたが、その時は食料の奪い合いにはならなかったそうだな？」

「あの時は食料云々よりも拳銃男の脅威が勝ったからね。それに、食堂の機能が失われたことが伝わるより、ファイナルトラップが発動したことが知れる方が早かったんだよ。何より、あの回は、三日目の訪れを待たずにテストが終了しちゃった」

「ふむ、参考にはならぬか……」

何の参考だろう、という疑問よりも、拳銃男というワードの方が私を惹きつけた。その拳銃男って人は私の兄なのかもしれないのだ。でも、それについて質問している余裕はない。今はローズおばちゃんを無事に助けて、悪者を退治することが先決である。

「とにかく、ローズを傷つけずに賊の手から解放するのが第一だね。彼女さえ無事だったら、後のことはどうとでもなる。問題は、いかにして賊の銃口をローズの背中から外させるか、だよ」

「その賊は一人なのか？」

「いや、二人いる。奴ら、四人組だったらしいね。でも、その内の二人をあたいとあんだとで殺っちまったから、今は二人だよ」

「確実に二名か？ 客のフリをして店内に紛れている賊の仲間がいるかもしれぬぞ？」

「そりゃ可能性はあるけどねえ。ボスっぽい奴、偵察に出した仲間の二人が帰ってこなくて相当にてんぱってるみたいだから、もし他に仲間がいるなら、こっちの偵察に来させてるんじゃないかな」

「ふむむ、それほどの小物が賊を率いているのか」

「ああ。ダンとかいう名前だったかな、確か……。まあ、覚える必要もないザコだよ」

「ダン？ はて……。不思議と聞いた名だな……。どこで耳にしたものか」

風守は首をひねる。どうやら思い出せないようだ。

私はちゃんと覚えていた。ダンっていう人は、下の階で出会った死んだフリの名人である。私が初めて遭遇した悪意満々のテスト生だし、結構印象深いテスト生だったのだけど、彼にとっては記憶する価値もないどうでもいい存在だったのだろう。

「もう忘れちゃったの、風守さん？ 死んだフリをして私たちに襲いかかってきたテスト生だよ」

私が教えると、風守は少し目を大きく開いてほんと手を打った。

「おうおう、そうであつたな。うむ、確かにあ奴はダンと名乗ってあつた。しかし、すると奴め、自らの無能を省みずに再び愚行に走つたということか。なんとも進歩のない男よな」

「仲間が一緒なら大丈夫だと思つたんじゃないかな？」

「実際にどうであれば、実にあさはかな男だと言わねばならぬな。テスト生として死んで当然。もはや生かす意味もない。今度こそ我が手で首を落とし、仲間共々三途の川で溺死させてくれよう」

風守がヒゲをひねりながら、冗談ばくない物騒な提案をした。

私としては、今更話し合いは不可能だとしても、何とか穏便に済ませる方策を考えてほしい。ダンは風守の強さを身にしみて理解しているはずなので、交渉次第では血を流さずに済むんじゃないかと思うのだ。彼の仲間を殺してしまっている時点で血は流れてるのだけど……。まあ、どんな手を使うにしても私の出番は皆無だ。

好戦的なソフィアは即賛成しちゃうんだろうなあ、と思つて見て

いると、意外にも難しい顔をして渋った。

「強硬手段か……。そりゃ悪くない。あんたほどの腕があれば、奴が引き金を引く前に首を落とせるだろうし……。でも、万が一ってことがあるだろ？ ローズを助けるってのが大前提なんだ。一万分の一でも彼女が死ぬ可能性があっちゃ駄目だよ。自棄になった賊がローズを道連れにしないと言い切れないよ」

「では、貴様がそ奴を暗殺するか？」

「ああ、そうだね。あんたが店内に駆け込むよりは、あたいが上からこそつと近づいて一気に攻撃した方が、ローズを確実に助けることができる。あんたは、あたいのバックアップに専念してくれ」

「うむ、承知した」

話はあっさりと纏まった。

作戦は実にシンプルだ。ソフィアが天井を這って移動し、ダンを真上から強襲してローズおばちゃんを助けると同時に、風守が店内へと駆け込んで状況の変化に対処する。それだけだ。ローズおばちゃんさえ無事なら他のテスト生はどうなっても知ったこっちゃない、っていう作戦なので、彼女の身の安全を確保した後のことなどノープランである。

いいのだろうか、それで……。

私の役目はない。店の隅から事態の行く末を傍観するだけである。

「では、参るか」

「ああ」

風守が刀を抜いて促すと、ソフィアは逆スクワットするみたいに膝をたたんで天井でしゃがみ、腰の小刀を抜いて口にくわえた。そして、両手両足を左右の壁に突っ張らせ、天井に背を預ける格好で店の方へと進み始めた。

ソフィアが店内に入るのを確認してから私と風守も足音を忍ばせて店の中へと進んだ。

開け放たれているドアをちょこつと閉めて影を作り、こそつと店

の様子を窺う。

「ふむ、ソフィアの情報どおり賊は二名か。ここからではカウンタ―内が見えぬゆえ断定はできんが、客どもの視線からしてカウンタ―内にダンとローズがいるのだらうな。もう一人の賊は、黒澤の横か。ダンとやら、先の失敗から少しは学んでいるようだ。黒澤を相応の危険人物と見なしている」

風守が嘲笑うように言った。

確かに、黒澤の隣りにキツネ顔の男が立っていて、彼に銃を突きつけている。ダンの方はというと、ここからだカウンタ―席の方は死角になっていて見えない。でも、声は聞こえてきた。

「ジャーク！ バーンズっ！ 聞こえねえのか？ 便所に罠でも仕掛けられておっ死んじまったってか？ おい！ 返事をしやがれ、クソつたれが！ こっちは洒落にならねえ状況できゅうきゅうとしてんだぞ！」

聞き覚えのある声だ。うる覚えだけど、死体のフリの名人のものと同じだらう、きっと。

「てめー、黒澤とか言ったな？ あの糞ヒゲ野郎とは地下で別れたとか言いやがったが、ほんとは一緒に行動してやがったんじゃねえのか？ 実はあのヒゲ、俺らが来た時は偶然に便所だか風呂だかに入ってて、たまたま席を外したとかじゃねえのか？ じゃねえとジャックとバーンズが戻ってこないことの説明がつかねえぞ、おい！ 正直に答えやがれ！」

「……さて、どうだらうな」

聞かれた黒澤は、キツネっばい顔の男に一本しかない腕を掴まれ、頭に銃口を突きつけられている状態なのに、平然とした顔でとぼけてみせた。

「そんなに仲間の安否が気になるなら自分の目で確認しに行けばいいだらう。ローズを人質に取っているんだ、一応、身の安全は保障されている。それとも何か？ 風守さんが怖くて動けないのか？」

「くっ……」

「まさかとは思うが、今更ながらに食堂ルールを犯したことを悔いているのではあるまいな？」

「……………」

「どうであれ、今ここにいる者を一人でも生かして食堂から出せば、おまえは今後ずっとテスト生の標的として狙われ続けることとなる。その点はきちんと理解しているのだろうな？」

あくまでも冷静な黒澤。

逆にダンは怒鳴りっぱなしだ。顔を真っ赤にしてるんじゃないだろうか。そんな様子が思い浮かぶ。

「冗談じゃねえぞ、クソツタレが！　じゃあ、皆殺しにしろってか、ああ？！　俺様は善人じゃねえんだ、殺るときや殺るぞ、こら！」

「喚いておらず、やればいいだろう。やれるのであれば、な」

「そんじゃ、まず、てめーからぶち殺すぞ、このクソ虫！」

「……と叫んではいるが、威嚇するばかりで実行に移さない。おまえは口だけの臆病者か？」

なんだか、黒澤らしくない台詞だ。わざと挑発的な言葉を使ってダンの暴発を煽ってるように見える。

と思ったのだけど、そうではなかったらしい。

「黒澤、我々の行動に気づいたようだな」

風守の呟き。

どうやら黒澤は私たちが事態の打開を図ろうとしていることに気づき、ダンが暴発しない人間だと判断した上で、わざと怒らせるような言葉を投げかけて、風守たちから注意を逸らそうとしているらしい。

二人の賊の視線が黒澤に固定されていれば、天井を移動しているソフィアが見つかる心配はしなくていいのだ。

「ソフィアめ、くのいちとは言え、よくもホコリ塗れの天井を歩き回れるものだな。相当に修練を積んだのだろうが……常人のわざではないぞ」

ちらっと天井を見上げた風守が呆れ口調で零した。

そう言えば、この店内には体を固定する壁が遠い。通路にいる時は壁に両手両足を突っ張らせて体を支えていたけど、ここでは無理だ。今はどうやって天井に掴まっているのだろう？ やっぱ、手と足の裏に吸盤を装着してるのかな？ 落ちちゃわないか、と見ててハラハラする光景だ。

ソフィアは一度、黒澤の真上まで移動して店の出入り口になるドアの方を見てから、カウンター席の方へ向かった。

「さて、そろそろ行くか」

風守は抜き身の刀を肩に乗せ、滑るような足取りで店内へと歩き出した。

「小娘はここで待機しているがよい。どのような展開になろうとも決して手を出そうなどとは思うな」

「了解です！」

私はびしつと敬礼して見せる。

すると、思いもよらぬ方向から話しかけられた。

「ふふ……それじゃ俺は、おいとましようかな」

一瞬、ビクツとして悲鳴を上げそうになった。が、ぐつと我慢。

こんな時に話しかけてくるなんて非常識な！ と憤慨しつつ声の主を睨む。

そこにはニット帽を目深に被った痩身の男が、ビールっぽい液体の入ったジョッキを片手に、にやにや笑いを浮かべている姿があった。食堂に入る前に出会ったテスト生だ。名前は確か……すべるばん？ じゃなくて、すびるばー……だっけ。テスト生の中でも結構な変人だと評判の人だ。

「何ですか急に！ ビックリするじゃないですか！」

声を殺しつつ苦情を申し立てる。

彼はビールジョッキをテーブルに置いて、横目でカウンター席の方を見た。

「黒澤が注意を引きつけて、ソフィアと風守の二人で強行解決を図るのだろう？」

「そうですけど……」

「とすれば、これ以上ここに留まっていると、巻き添えを食らって想定外の被害を負う危険がある。とは思わないか？」

「そりゃ、ちよつとは危険な目に遭うかも、って思ったりもしますよ」

さつき実際に酷い目に遭ったし。

「顔の痣が痛々しいな。ダンの手下どもと遭遇して、多少なりとサバイバルテストを実感する機会を得たようだ。ふふ……。しかし、それでもテスト生として成長したとは言えないな。まだまだ狩られる側だ」

嘲りと蔑みが混ざり合った口調が心に痛い。

「……………」

「俺としては、もう少しこの無様な喜劇を楽しんでいたかったが、おまえたちが力押しで解決しようと言うのなら逃げざるを得ない。おまえは無力な最下位テスト生という自分の立場をわきまえて、せいぜい流れ弾に当たって死なないよう逃げ惑うんだな」

そう言うのと、彼は音もなく席を立った。

それとほぼ同時に響くダンの悲鳴。

ソフィアが攻撃を仕掛けたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0769h/>

ぎすきすサバイバルゲーム

2011年1月20日11時55分発行